

# 絵解き法 (TAT) のすすめ

## - 新たな分析・解釈法の導入

鈴木 睦夫

### はじめに

本書は筆者のこれまでのTAT経験・研究の集大成をなすものであると同時に、新機軸を打ち出して、初心者への便宜を図った入門書でもあります。

筆者はこれまでTAT(主題統覚検査)——わたしは、その本質をもっともわかりやすく、また正しさを保ちつつ伝える名称として、「絵解き試し」ないし「絵解き法」ということばをよく使うようになっていますが、これについてはあとでもう少し詳しく説明します——に関する著書を3冊公刊しています。最初の著書(『TATの世界物語分析の実際』1997年)を公にしたのは13年前です。以来、事例集(『TATパーソナリティ 26事例の分析と解釈の例示』2000年)および入門書風の小著(『TAT 絵解き試しの人間関係論』2002年)を上梓してきて、TATについて語るべきことは、ほぼ語り尽くしたというような気がしていました。

しかし事例の分析・解釈の経験をさらに積み、また、TATについて人に話したり書いたりしているうちに、TATについて根本的なことを明らかにすることにおいても、人々に利用の便を図ることにおいても、まだまだやるべきことはあると思うようになりました。まだこれでよしというところには達したとはいえないものの、年齢的にもここで区切りをつけて世に問うべきだと判断し、上述の2点をも考慮に入れた集大成的かつ入門的なものとして本書を出版する決意をした次第です。冒頭で述べた「新機軸」については、本論のなかで詳しく述べてありますが、端的に言うなら、物語の分析・解釈に「構造的」要素を持ち込んだということです。それがないとどうしてもとっつきにくいという印象を与えます。それで、その点を解決すべく、筆者なりの工夫を試みてみました。やってみると、これは筆者自身にも得るところが少なからずありました。1つのプロトコルの特徴がこれまでよりいっそう明確に心に刻まれるようになったといえます。被検者間の比較も容易になったと思います。したがって、TATを用いての研究にも資するところがあると信ぜられます。

TATは、実際に使ってみると、被検者(語り手)の心の働きようがありありと伝わってきて、その魅力にとりつかれるのですが、そのことを教えられる熟練者も少なく、したがって修行中にTATのことをほとんど知らないで臨床の現場に出て行く人が大多数だと思います。わが国の臨床では、投映法といえばロールシャッハ・テストで、その有用性や奥深さは今さらいうまでもないことですが、TATも、劣らず奥深い有益な技法で、もっともっと使われてよいのではないかと考えています。本書が、そういう機運の一助になれば幸いです。

本書の構成について触れておきます。

本書は3部からなります。

第1部は筆者の従来持論や最初の著書から13年の間に蓄積した経験を簡略に示そうとしたものです。この第1部を読むことだけでも、絵解きはかなりできるようになるとは思いますが、より詳しい分析・解釈には、『TATの世界 物語分析の実際』他を参照していただきたいと思います。

第2部は、すでに触れた新機軸に関する部分です。「関係相」という新概念を提唱し、それらを具体的に提示するとともに、その実際の活用法についても述べました。これによって、被検者の物語の特徴を相当わかりやすく示せるようになったと思います。

しかしTATの分析・解釈はこれで十分かというところ、そうではありません。第1部で述べた、各絵カードで産出

される物語の多様性も考慮にいれる必要があります。そしてこの点をさらに詳しく知るには、『TATの世界 物語分析の実際』を参考にさせていただかなければなりません。

第3部は、実例の分析・解釈です。第1部と第2部の両方を考慮に入れた分析・解釈を示そうと思います。事例の選択は、形式、内容の両面で、偏らず、変異の幅を示すのによいと判断されることを基準に行いました。しかし、4例<sup>[註1]</sup>では、その基準を十分満たすには到底足りないことを了解していただけるでしょう。

3つの部は一応独立していますが、相互に補いあっています。まったく新しくTATに取り組む人には、まず第2部の方法で、被検者のパーソナリティの概観を得て、つぎに第1部を参照して、より詳細な分析・解釈にはいつてゆくのがいいかなと思います。しかし、順序は逆でもまったく問題はありません。また実際には、両方を往復するものでしょう。

## 構成の一覧 <sup>[註2]</sup>

はじめに

### 第1部 TATの基本

#### 第1章 TATとはどのような心理テストか

- 1) TATは「絵解き」である
- 2) 実施法
- 3) 使用カード
- 4) 教示
- 5) 質問の仕方
- 6) 記録の取り方
- 7) 1つの絵にかかる時間

#### 第2章 物語作りは「絵解き」である

##### 第1節 絵解きについて

##### 第2節 絵解きはどのようにして行われるか

##### 第3節 絵解きの過程で生じる種々の問題——主に形式面について

#### 第3章 物語作りの形式面

##### 第1節 形式面の諸特徴

##### 第2節 形式面の解釈

- 1 課題の確認のための質問について
- 2 絵の印象・叙述・批判について
- 3 絵のなかのものの列挙について
- 4 人物の性格描写や評価について
- 5 過去の自己経験や小説・映画などへの言及について
- 6 2つ以上の物語ないし筋を言うことについて
- 7 初発時間や反応時間の長短について
- 8 自発性に欠けることについて
- 9 細部の具体性が乏しいことについて
- 10 物語のディテールが欠けていたり過剰であったりすることについて
- 11 笑いが多いことについて
- 12 「……ではないですね」とはじめから否定形で語ることについて
- 13 話のどの部分が絵と対応するかわかりにくいことについて
- 14 「ほんとはそうみえないけど、そうしておきます」とすることについて
- 15 時代、場所、時間などへの言及が多く、肝心の状況把握がおろそかになることについて

- 16 人物に名前をつけることについて
- 17 会話体や独白体で演技的に物語作りを進めることについて
- 18 独り言が多いことについて
- 19 突然、「もう続けられません」と言ってテストを打ち切ろうとすることについて
- 20 絵を絵画 (写真) 作品とすることについて

#### 第4章 作られた物語の分析・解釈

##### 第1節 何を明らかにしようとするのか

##### 第2節 分析・解釈の手順

- 1 物語中の人物への共感を通しての語り手理解
- 2 分析を通しての解釈作業
  - a 物語を要約してみる
  - b 物語の分析

##### 第3節 解釈の一般的前提

- 1 物語の人物に託された思い、感情、態度、行動などはすべて語り手自身のもの
- 2 能動的に～したいという意味・願望と受動的に～されたいという期待・不安の同居および互換性
- 3 物語中の男性、女性、父親、母親、息子、娘、少年、少女、老人の表すもの
- 4 かかわり方 (関係様態、関係性) のポテンシャルについて

##### 第4節 解釈上の留意点と総合解釈

- 1 語り手が1つの絵に対して作りうる物語は1つとは限らない
- 2 十分条件としての物語
- 3 表出されなかった物語 (negative content) の考慮
- 4 総合解釈

#### 第5章 各カードで産出される物語の概観

- 第1節 カード1
- 第2節 カード2
- 第3節 カード3BM
- 第4節 カード4
- 第5節 カード5
- 第6節 カード6BM
- 第7節 カード6GF
- 第8節 カード7BM
- 第9節 カード7GF
- 第10節 カード8BM
- 第11節 カード8GF
- 第12節 カード9BM
- 第13節 カード9GF
- 第14節 カード10
- 第15節 カード11
- 第16節 カード12M
- 第17節 カード12F
- 第18節 カード13MF
- 第19節 カード14
- 第20節 カード15
- 第21節 カード17BM
- 第22節 カード17GF

第23節 カード 18BM

第24節 カード 18GF

第25節 カード 19

第26節 カード 20

第27節 カード 12BG

第28節 その他のカード

1 カード 3GF

2 カード 13B

3 カード 13G

4 カード 16

第6章 TATの意義と効用

第1節 他のパーソナリティ・テストとの比較

1 ロールシャッハ・テスト

2 ハンドテスト

3 PFスタディ

4 SCT

5 質問紙法一般

第2節 TATに固有の意義と効用

1 TATの特色

2 事例の事実の理解を深める

3 パーソナリティ・テストとしての絵解き法の臨床的意義

第2部 物語の分解と量化の試み

第7章 関係相の種類

第8章 関係相のカテゴリー

第1節 大カテゴリー

第2節 下位カテゴリー

1 カテゴリー

a Expl (Pas-F)

b Expo (Conc)

2 カテゴリー — Con/Coer (Ask/Req) および Dec (Gui)

3 カテゴリー — Spo/Sav および Prov/Ser (Harm・Dep)

4 カテゴリー — Like (Hos/Disg) および Love (LoL)

5 カテゴリー — Uni (Sep/Los)

6 カテゴリー — Pos-F (Neg-F)

7 カテゴリー — 関係性が不明, あるいは欠如, あるいは全体的な反応失敗とみなされるもの

第9章 下位カテゴリーの詳細

第1節 Expl

第2節 Pas-F

第3節 Expo

第4節 Con/Coer

第5節 Dec

第6節 Ask/Req

第7節 Gui

第8節 Spo/Sav

第9節 Prov/Ser

- 1 相手のためを思ってする行動や態度
- 2 人への配慮が認められるもの

第10節 Love

第11節 Uni

第12節 破壊・損傷が問題になっているもの

- 1 Harm (破壊・損傷する - 破壊・損傷される関係)
- 2 Dep

第13節 Sep/Los

- 1 大切な人の喪失
- 2 見捨て・見捨てられ
- 3 Sep/Los の意味

第14節 関係性が不明、あるいは欠如、あるいは全体的な反応失敗とみなされるもの

第3部 実例の分析・解釈

第10章 事例 A

第11章 事例 B

第12章 事例 C

第13章 事例 D

## 第1部 TATの基本

第1部では、まずTATとはどのような心理テストであるか、どのように実施するのかなど、初歩的なことを述べ、つづいて物語作りは絵解きであることを主張し、絵解きのプロセスについて説明を加えます。

### 第1章 TATとはどのような心理テストか

#### 1) TATは「絵解き」である

TATには、「主題統覚検査」といういかめしい、イメージを喚起しにくい漢字ばかりの訳語がついていますが、実際はもっとわかりやすいものです。要するに、絵が描かれた一連のカードを見せて、それぞれに簡単な話を作ってもらっただけです。文学的な長大な物語を作る必要はありません。1つの話は日本語を手書きにして、せいぜいB5版の半分、あるいは全部という分量で十分です。被検者は、以下のような教示を与えられますが、本来詳しい教示がいらぬくらい被検者はただちに、絵の状況を判断し、絵のなかの人物が考え、感じていることを述べ始めます。要するに「絵解き」をしてもらうわけです。同じ絵にも、ひとそれぞれ異なった絵解きをします。そこにTATの心理テストとしての存立の基盤があるのです。

#### 2) 実施法

TATを実施する際の使用カードの選択、被検者に与える教示、質問の仕方、記録の取り方などについては、前二著に書いてあるので、それを読んでいただければよいのですが、便宜のために、ここに要点を反復しておきます。それらを心得ていれば、TATを支障なく実施できると信じます。

#### 3) 使用カード

TATは、31枚の絵カードからなります。TAT作成者のマレー (Murray, 1943) は、被検者の性別、年齢によって20枚のカードを選び出し、実施しました。筆者もほぼそれに従っていますが、9GFを男性にも使用すること、3BM、8BMを女性にも使用し、3GFを使用しないこと、子ども用とされている12BGをすべての被検者に使用する

ること、16は必ずしも使用せず、使用する場合には、シリーズの最後にもってくる、などの変更を加えています。それで、男女の被検者に使用するカードは以下ようになります。それらすべてを1セッションで実施するのです。

男性被検者：1, 2, 3BM, 4, 5, 6BM, 7BM, 8BM, 9BM, 9GF, 10, 11, 12M, 13MF, 14, 15, 17BM, 18BM, 19, 20, 12BG, (16)

女性被検者：1, 2, 3BM, 4, 5, 6GF, 7GF, 8GF, 8BM, 9GF, 10, 11, 12F, 13MF, 14, 15, 17GF, 18GF, 19, 20, 12BG, (16)

上記の使用カードが最良のものというわけではありません。筆者は、マレーの男性用、女性用というカードの指定にとらわれずにシリーズを構成するのも面白いのではないかと考えているのですが、それは今後の課題です。

TATを実施することが可能な、あるいは実施して意味のある被検者の年齢に関しては、明確なことは言えませんが、中学生以上だったら十分に実施が可能で、また、意味があると思います。小学生も実施の対象になりうると思いますが、適切な分析・解釈のためには多くのデータの蓄積が必要でしょう。

#### 4) 教示

ここでは、筆者が基本的に依拠しているマレーの教示とラパポートら (Rapaport et al., 1968) の教示を示しておきます。マレーは、「平均的な知能と知的洗練をそなえた青年と成人向け」のもの、「子ども、教育または知能水準の低い成人、および精神病患者向け」のものと2種類の教示を用意していますが、後者の方がエッセンスだけを残している感じがしますので、そちらを掲載してみます。「これはお話作りのテストです。ここに数枚の絵があり、今からそれらをお見せしていきます。あなたには1つひとつの絵に対して、お話を作ってほしいのです。まえにどんなことがあって、今何が起きているのかを話してください。人々は何を感じ考えているのか、これからどういうふうになっていくかを教えてください。どんな話でもかまいません、好きなように作ってください。わかりますか。では、これが最初の絵です。話を作るのに5分かかります。さあ、どれくらいうまくやれるかやってみてください。」

ラパポートの教示はつぎのようなものです。「これから一連の絵をお見せしてゆきますので、それぞれについて1つの物語を作ってください。絵のなかの状況はどのようなものか、どのような出来事があったか、その状況に至ったのか、結末はどうなるのかを、人物の感情や思いを述べながら、話してほしいのです。あなたにしてほしいことは、あら筋を言うことであって、手の込んだ、文学的な物語を作ることはありません。私はあなたが言うことができるだけ一語一語忠実に書き留めたいので、あまり早口にならないでください。」

どちらの教示も、まず各々の絵に1つの物語を作ってほしいことを言い、つぎに物語を作るとはどういうことかを噛み砕いて丁寧に説明していると言えます。要するに、それは、今何が起きており、まえに何があってそうだったのか、これからはどうなるかを言うことであり、人物の感情や思いに言及することなのです。これらのことを確実に伝えられれば、ことばは多少変わっても問題はありません。ただ、「過去」とか「未来」ということばは使わない方がよいでしょう。たしかにこれまでのこととこれからのことは、それぞれ過去、未来には違いありませんが、「過去」や「未来」を教示のなかで直接的に使うと不必要に被検者を惑わせてしまう可能性があります。

時間制限に関しても、あとで述べるような理由で、マレーのように、5分かかれるなどと言わないほうがよいと思います。

#### 5) 質問の仕方

物語の内容が十分に理解できないときのみ、自発的な反応が終わったあとで、不明な部分について質問します。誘導的にならないことはもちろん、質問を急ぎすぎないこと、深追いはしないことなどが大切です。

## 6) 記録の取り方

被検者の発することばを筆記しつつ、同時に録音装置で録音することを奨めます。書き取れるようにゆっくり話してほしいと頼んでも、一貫してそうしてくれる人は少ないものです。筆者は、テスト実施中に被検者が言ったことのすべてを書き取ることは困難であるという前提で録音する許可を求めることにしています。しかしそれでも実施中に筆記するのは、その方が被検者も物語作りに専念しやすいだろうと考えるからです。また、発声が聞き取りにくい被検者の場合、録音装置からの再生だともっと聞き取りにくいので、実施中に聞き取れたことばを記録しておくという意味もあります。実施後、実施中の記録と録音装置による再生から、完全な逐語記録を作ります。

ロールシャッハ・テストの場合と同様、カードを手渡してから語り始めるまでの時間、つまり初発時間 (reaction time) と語り終えるまでの時間、つまり反応時間 (response time) を計ります。あとで集計したり、平均値を出したりはしませんが、個人間のおよび個人内に比較をすることにより、解釈の重要な手がかりを得ることができることがあります。

なお、実施中に目立った行動があれば、それも記録しておきます。たとえば、笑いが目立った場合には、「(笑)」などとしします。

## 7) 1つの絵にかける時間

マレーは、最初の教示のなかで、1つの絵の物語作りに5分かかれると言っていますが、5分かかることはまれで、ふつう2, 3分です。そのぐらいの時間で必要にして十分な物語を作ることができるのです。だからマレーのように言うことは、かえって被検者に負担となるのではないかとされます。しかし他方、数十秒では、細部まで具体的な物語を作ることは不可能です。それなのにその段階で反応を終えようとする人がいます。そのような人の場合には、1つの絵に少なくとも1分はとどまるようにもってゆくことが必要です。逆に5分を越えるような場合には、もっと簡単な物語でよいのだということを伝えます。

## 第2章 物語作りは「絵解き」である

### 第1節 絵解きについて

絵を見て物語を作ることのエッセンスは、ラパポートの教示のなかの「絵のなかの状況はどのようなものか」ということばに端的に示されています。本当はこの一文だけで教示として十分なのです。なぜなら、絵はある一瞬の状況を表しているのですが、それだけが突然に現出したのではなく、前に何事かがあって今の状況に至ったのであり、このあとにはまた何事かが生ずるのは言うまでもないことですから、これまでのこととこれからのことに触れてくださいという要請は、本来不要なのです。少なくとも前にあったことを顧慮せずに今の状況を理解するのは不可能です。また、「状況」は、人々の感情や思いを含むものであり、それらを離れては「状況」などはないとも言えるわけで、わざわざこれらを述べることを要求することも、これまた本来不要なのです。

すでに述べましたように、絵が示す状況を語ることは「絵解き」にほかなりません。古来あることば「絵解き」には、絵が表しているものを解説するということと、絵を使ってあることを説明するということとの、二様の意味がありますが、結局これらは同じことを指しています。要するに、絵には意味があるということです。私たちは、このことをほとんど自明のこととしています。絵を見て、何が描いてあるのだろう、描き手は何を表現したかったのだろうと思わない人はいないでしょう。もちろん個人差はあります。音楽に強く反応する人もいれば、そうでない人もいるようなものです。そうした人による程度の差はあるものの、絵を見たら、それが何を表しているかを納得したいのは、人間のごく自然な本来的性向であると言っていいでしょう。TATは、そういう自然な性向にわずかばかりはずみを与えるだけなのです。ついでながら、同じことはロールシャッハ・テストにも言えます。自然にできたしみや模様を見て、それが何に似ているか連想するのは、これまた人間に備わった性向です。

### 第2節 絵解きはどのようにして行われるか

さて、物語作りは絵解きであるとして、では、絵解きとはどのようにして生ずるのか、もっと具体的に問うてみましょう。TATでは、絵解きを自分の心内で行うばかりでなく、外に向かって、つまり検査者という1人の他者に向かって表現しなければなりません。それはおのずから紙芝居の演者を連想させます。紙芝居の演者は、絵のな

かの人物の行為を解説するばかりでなく、人物の思っていることや感じていることを人物になりきって生き生きと表現します。まさに演者は、人物を演じるのです。絵のなかの複数の人物を次々と演じていって、全体の状況を伝えるわけです。紙芝居は、動作こそ伴いませんが、1人全役のロールプレイと言えます。TATでも、語り手である被検者は、紙芝居の演者ほど流暢ではありませんが、絵のなかの人物になって、その感情や思いを語るのです。

筆者は、現実の状況がわかるには、そこにいる人物に「なる」——自分なりに、という条件が付きませんが——ことをおいてほかにないと思っているのですが（『TAT 絵解き試しの人間関係論』）、現実——あるいは超現実——の写しである絵のなかの状況をわかろうとする際にも、同じように、描かれた人物に「なる」しかないと言えるでしょう。もちろん現実の状況のなかで他者に「なる」プロセスと、絵の中の人物になるプロセスとを単純に同じとしてしまうわけにもいきません。現実の状況では、生きている他者は、彼（彼女）を理解するための手がかりをことばや実際の行為によって豊かに提供してくれるのに対し、絵のなかの人物が与える手がかりはせいぜい姿勢や表情でしかありません。それでも、それらの乏しい手がかりをもとに、語り手は彼（彼女）になろうとします。しかし翻ってみれば、ここにこそTATが心理テストたりうる根拠があるのです。乏しい手がかりをもとに絵のなかの人物に「なる」ときは、そうでないときよりも、自分に潜在するものを多く持ち込まざるをえません。これはいわゆる投影のプロセスが強く働くということで、人物に付与された感情や思いは、手がかりが乏しいだけ語り手のなかに潜在していたものを強く反映していると解することができるわけです。

このことは、TAT以外の絵についてもいわれることです。TATの絵は、受け取り方の幅が広くなるように工夫されていると思いますが、そうでなく、画家が、万人にある共通の具体的なイメージを与えようと描いた絵すらも、受け取り方は皆同じというわけにはゆかないものです。1つの絵はそれほど多義的なわけです。

さて、紙芝居の演者と同様、TATの語り手も、絵に複数の人物が描かれている場合には、また、1人しか描かれていなくても、他の人物を導入して物語を作る場合には、ある瞬間にはある人物になり、次の瞬間には別の人物になりすまして、それぞれの感情や思いを語ってゆくこととなります。そして、人物のものとして語られた感情や思いは、すべて語り手に可能態として存在する感情や思いであるということです。たとえば、2人の人物の一方が攻撃し、他方が攻撃されていたら、攻撃する側の怒りや憎しみも、攻撃される側の恐怖や苦痛も語り手のものであるということです。また、一方が他方の秘密を暴こうとし、他方がそれに恐れおののいているとしたら、暴露の欲求も、暴露される不安ないし隠蔽欲求も語り手に強く存在しているということです。

以上のことはあたりまえのことのようですが、マレー流の主人公仮説や同一化の概念にとらわれると見逃される可能性もあると思われます。筆者はこれまで、語り手は絵のなかの人物に「なる」と言って、「同一化」ということばを避けてきました。心理学的用語としての「同一化」には、対象が肯定的ないし理想的であることと、それゆえの積極的な志向性が含意されているように思われます。そしてマレーのいう「主人公」は、そういう意味での同一化の対象を指すと言ってよいでしょう。他の人物への同一化は問題にならないかのようです。しかし本来「なる」とは対象と同一になるということであり、絵のなかの人物になることを、人物への同一化と言ってもいいはずですが。そして語り手は否定的な人物にもなるわけですから、同一化の概念に、否定的な対象へ消極的に、あるいは不本意に「なる」ことをも含ませた方がよいのではないのでしょうか。人と人とのかわりの根幹に同一化の概念を置き、その強弱、積極的・消極的の区別を設けるとするのが筆者の意見です。しかし、これについては別の機会に論ずることにします。ともかく、絵解きにおいては、語り手は好ましくない、あるいは憎むべき人物にも「なる」のであり、その人物の特徴は語り手自身のものでもあるという見方をするのが妥当であろうということをおきます。

もっとも単純には、それは、絵のなかの人物は何をやっているのかがわかるということです。彼（彼女）が、馴染みの物（道具）を使って馴染みの行為をしていることが理解をもっとも容易にしてくれます。扱っている物が無い場合やはっきりしない場合、扱う物はあるが、絵の場面では扱っていない場合（カード1）には理解は難しくなります。TATの絵は主にそういう絵からなるといっていいでしょう。人物の行為は馴染みのものとみなせる場合はあっても、少なくとも“ある人がある物を使ってあることをしている”ですませられるような絵は1つも含まれていません。絵のなかの複数の人物の1, 2人についてはそうできても、それだけでは課題を果たせたことにはなりません。場面全体の統合的把握が要求されているからです。



### 第3節 絵解きの過程で生ずる種々の問題——主に形式面について

上述のような絵解きはいつでもうまくいくとは限りません。絵解きに失敗したり、不十分にしか成し遂げられなかったり、最終的に成功してもスムーズに進行しなかったりすることがあります。以下では、いかに物語をつくるかといった形式面について具体的にその様相を見ていきます。

各絵について物語を作してほしいという要請とそのあとの補足説明からなる教示によって検査の課題が了解されることが期待され、実際ほとんどの場合、期待どおりに進むのですが、なかには

- (1) 最初のカードを前にしてどうすればよいか戸惑い、教示を確認する人があります。そういう人も、たいていは、あらためて簡単に教示を繰り返されれば、課題を理解して反応を与え、第2カード以降には、確認してきません。

さて、課題を理解したということは、それが

- (2) 絵を見ての個人的な印象や感想を言うことではないこと、
- (3) 絵に描かれているものを列挙したり、純客観的に記述したりするのではないこと、
- (4) 絵のなかの人物についての性格描写や評価をするのではないこと、および
- (5) 絵から連想される自分の過去の経験や既存の小説や映画について語るのではないことを理解したことを含みます。これらのことは、教示に謳われた課題からの逸脱とおのずから感じとられるものといえるでしょう。

ところで、上掲のマレーの教示には、1つの物語作りに5分かかれることが謳われています。さらに、マレーにおいてもラポートにおいても、とくに強調されているわけではありませんが、「お話」ないし「物語」が a story と単数形になっていて、各々の絵に対し1つの物語を作るのだということも謳われていると言えます。筆者自身は、時間制限については何も言いませんし、各絵に1つの物語を作るのだということも、言ったり、言わなかったりで一定していません。言ったとしても、それを強調することはありません(鈴木, 1997)。しかし、たとえ教示に明白に謳われてはいなくても、

- (6) 各絵に対し1つの物語を作るのであること、および
- (7) 課題は限られた時間内に終えるもので、あまりに長引かせられないということ、はおのずと了解されることでしょう。これらのほかにも、同じように暗黙に要請されているものがあります。それらは、
- (8) 検査者の助けを借りず自発的に物語を作り上げてゆくこと、
- (9) 適度の詳しさ、具体性を備えた、相手にわかる内容の物語を作ること、
- (10) それを簡潔にまとめられた形で提示すること、などです。

多くの人は、以上のような、教示の含意するものの理解あるいは教示外の暗黙の要請に従って課題に取りかかるはずですが。しかし実際には、(1)から(5)に示されたような逸脱反応が生じたり、(6)から(10)の要請からの逸脱が生じたりします。これらはすべて形式面の問題とみなすことができます。これらに、その他の形式面の特徴を加えたものを、第3章の第1節でまとめて示し、さらに第2節で、これらの意味づけを行うとともに、チェックリストを提示し、TATの実際の使用の便宜を図ろうと思います。

## 第3章 物語作りの形式面<sup>[註1]</sup>

### 第1節 形式面の諸特徴<sup>[註2]</sup>

第2章第3節で列挙した形式面の10の逸脱的特徴をまとめれば以下のようになります(( )内の数字も、そのままです)。

- (1) 教示の確認をたびたび行う。
- (2) 絵を見ての個人的印象や感情を表現する。
- (3) 絵に描かれているものを列挙したり、純客観的に記述したりする。
- (4) 絵のなかの人物についての性格描写や評価・批判をする。
- (5) 絵から連想される自分の過去の経験や既存の小説や映画の内容について語る。
- (6) 1つの絵に対し、2つ以上の絵解きの可能性を示すが、どれも十分に展開させない。
- (7) 時間制限はないが、初発時間や反応時間が並外れて長い。

- (8) 自発的に物語を作り上げるのが困難で、検査者の質疑などの助けを借りなければならない。
- (9) 物語が適度の詳しさと具体性を備えておらず、観念的・抽象的で内容がわかりにくい。
- (10) 不必要なディテールがあったり、繰り返しがあつたりして、物語が長たらしく、まとまりがない。

これらに次のものも、逸脱的な特徴として加えることができます。

- (11) 笑が多い。
- (12) 「……ではないですね」とはじめてから否定形で語る。
- (13) 物語のどの部分が絵と対応するのかわかりにくい。
- (14) 人物への感情移入が乏しい。
- (15) 場所、時代、時間などへの言及が多い。
- (16) 絵を絵画（写真）作品とする。

問題のある特徴とは言えませんが、次のものも形式的特徴に数えいられます。

- (17) 人物に名前をつける。
- (18) 会話体や独白体で演技的に物語作りを進める。

形式面のチェックリスト

	特 徴	カード番号	計
1	教示の確認をたびたび行う		
2	絵を見ての個人的印象や感情を表現する		
3	絵に描かれているものを列挙したり、純客観的に記述したりする		
4	絵のなかの人物についての性格描写や評価・批判をする		
5	絵から連想される自分の過去や既存の小説や映画の内容について語る		
6	1つの絵に対し、2つ以上の絵解きの可能性を示すが、どれも十分に展開させない		
7	時間制限はないが、初発時間や反応時間が並外れて長い		
8	自発的に物語を作り上げるのが困難で、検査者の質疑などの助けを借りなければならない		
9	物語が適度の詳しさと具体性を備えておらず、観念的・抽象的で内容がわかりにくい		
10	不必要なディテールがあったり、繰り返しがあつたりして、物語が長たらしく、まとまりがない		
11	笑が多い		
12	「……ではないですね」とはじめてから否定形で語る		
13	物語のどの部分が絵と対応するのかわかりにくい		
14	人物への感情移入が乏しい		
15	場所、時代、時間などへの言及が多い		
16	絵を絵画（写真）作品とする		
17	人物に名前をつける		
18	会話体や独白体で演技的に物語作りを進める		

## 第2節 形式面の解釈

### 1 課題の確認のための質問について

課題の内容を確認することは、理解力の不足というより、真面目さや慎重さを表しているとみるべきです。ルールに縛られやすいと言ってもよいでしょう。1度だけの確認ならほとんど問題にならないでしょう。しかしなかには、第2、第3のカードでも、いやシリーズの後半になっても課題について問うてくる人がいて、これは問題視せざるをえません。このような場合には、課題達成の失敗に対する恐れ、正しさに対する強迫的こだわりなどが根底

にあるとみてよいでしょう。

## 2 絵の印象・叙述・批判について

物語を作り始める前や作り終えた後に、絵が与える全体的印象を述べたり、絵について批評的なことばを言ったりする人がいます。すなわち「気持ち悪い」「怖い」などの感情を直接的に露わにしたり、「古すぎる」「暗い」などの感覚的なことばを言ったり、「日本人を描いていない」「ありえない場面」「色がついていたらいいのに」などの批判・評価のことばを言うのです。いずれも、物語作りを促進するというより、その障害となる反応と言えます。あるいは、物語作りが困難なゆえに生じた反応というべきかもしれません。感情・感覚的なことばを言うことには、感性の過敏さと不安定さが推測され、批判・評価のことばを言う人には、そのまま、共感的というよりは批判的な傾向が推測されます。

## 3 絵のなかのものの列挙について

純粋に記述水準のものはめったに見られません。内容貧困な反応を指して、しばしば「絵を客観的に説明しただけ」「状況描写にとどまる」というような評価が下されますが、実際には、それらのものも解釈を含んでいることが多いのです。解釈を交えずに、純粋に客観的に叙述することの方が難しいものであることをわきまえ、そのような評価を下すことに慎重であるべきだと思います。描かれてあるものの単なる列挙は、知能水準の相当な低さを表わし、絵の純粋に客観的な叙述といえるものが認められれば、極端な知性偏重の態度が推測されます。

## 4 人物の性格描写や評価について

物語の内容は多かれ少なかれ、絵のなかの人物の評価と関係していますが、とくに人物の性格が明確に表現されている場合があります。たとえば、カード 8BM で、手前の人物を「冷酷な男性 (女性)」とするが如きです。また、物語の内容とは無関係な人物評価が認められる場合がまれにあります。たとえば、カード 2 で、前景の女性を「教養のあふれた、美貌の女性」としながら、物語を構成せずに終わっている例がそれです。とくに、後者のような場合に、他者に対する評価の態度が、共感的態度をはるかに上回っていることが感じ取られますが、前者の場合にも、概して評価の態度が共感的態度に勝っているといえるのではないかと考えられます。

## 5 過去の自己経験や小説・映画などへの言及について

絵から自分の過去の経験を想起し、それを語ったり、絵のなかの人物を指して、これは自分だと言って、自分にひきつけて物語を作ったりする、いわゆる自己言及的 (self referent) な反応例と、自分がかつて読んだ小説や物語、見た映画作品や芝居を連想し、その内容のあらましを述べることで独自の創作に代える例とが区別されえます。我が身の直接的体験も現実あるいは架空の他者において見聞したことも物語作りの源泉となることは間違いありませんが、それらがその由来を保ったまま、いわば生の形で再生されていることが問題となります。

## 6 2つ以上の物語ないし筋を言うことについて

同じ絵に複数のプロットを思いつき、それぞれについて語るが、どちらが自分にとってピッタリくるか決定できない人がいます。多くの場合、2つ以上のどれも十分に展開されていません。被検者はあたかも自分の能力を誇示したかのようなようです。もう1つの仮説は、被検者はどれにも責任をとりたくなかったということです。1つに決めれば、それについて質問も返ってくることでしょう。それに答える自信がないから、1つに決めなかったのではないかと考えられます。これは、アルコール依存者によく見受けられる反応であり、彼らとのテストの状況のなかで思い巡らした筆者の仮説です。

## 7 初発時間や反応時間の長短について<sup>[註3]</sup>

たいていの人は、カードを手渡されてからしばらく考えて数十秒以内に語り出し、数分で物語作りを終えますが、なかには驚くほど早く、カードを受け取るとほとんど同時に語り出し、ごく短い時間で反応を終えてしまう人がいます。これと反対に、語り出すまでに長い時間 (1分以上) をかけ、語り出してからも、ゆっくりと物語作りを進

める人もいます。さらに、早く語り出し、まるで時間を気にすることなく延々と語り続ける人もいます。語り出すまでの時間、すなわちリアクションタイム（初発時間）と反応を終えるまでの時間、すなわちリスボンタイム（反応時間）の長短は、それ自体ですでに小さからぬ意味をもっています。前者が短い場合には、連想活動の活発さ、あるいは（および）軽率さ、自由奔放さを表わし、長い場合には、連想活動の緩慢さ、あるいは（および）慎重さ、強い自己統制の傾向を表わしているでしょう。極端に短い場合には、病的な機能亢進を思わせます。しかし、早ければ早いほど良いにちがいないという思い込みの可能性も考えられます。それがかなり長くても、やがて自発的に物語を作っていく場合にはなんら問題はありますが、いつまでも沈黙したままの場合には、連想活動の水準低下と次に述べる自発性の減退が疑われます。

#### 8 自発性に欠けることについて<sup>[註4]</sup>

上述のように、いつまでも黙ったままの人がいますし、やっと語り出しても、ごく短く、書けば1行にも満たない分量のことばを言ったあと、口を閉ざしてしまう人もいます。このような場合、反応を引き出すための、検査者から何らかの働きかけが必要になります。

これと逆に、長々としゃべり続け、なかなか反応を終えない人もいます。どちらの場合も、極端になると問題視されえます。開始前の教示にはとくに謳われていませんが、語り手には暗黙に、必要にして十分な内容の物語を作り、しかもそれを、冗長にならず簡潔に語るよう要請されているのです。

#### 9 細部の具体性が乏しいことについて<sup>[註5]</sup>

今、「必要にして十分な内容」といいましたが、それは、端的に言えば、聞き手がわかったといえるだけの詳しくさをもっているということです。そしてこれは、どういうことかとさらに言えば、人物の性別やおよその年恰好、彼（彼女）がとっている（これからとる）態度・行動とその動機・結果、内面的な感情・思考とその原因、人物が複数いる場合には、かれらの間柄などが、具体的に述べられているということです。これらのディテイルが欠けていると、物語は、何かよくわからないという感じを与えるものです。本来語り手自身が、聞き手になって、それらの過不足を判断しながら、物語作りを進めるのですが、この点において著しく欠ける人もいます。あまりにディテイルに欠け、それだけでは到底相手に理解されまいと思われる内容だけを言って済ましてしまうことは、他者とのコミュニケーションにおける障害の表れだといえるでしょう。もし、はなはだ不完全な形で反応を終えようとしたら、もっと反応を続けるように励ましたり、不明な部分を質問したりして、どれだけ「わかる」内容のものにしようかを見てゆく必要があります。自発的に与えられたものは貧弱でも、検査者からの質疑によって、より豊かな、ほぼ必要にして十分な物語にしてゆけたら、少なくとも平均的な潜在能力はあるということであり、もしそうしてゆけないなら、能力が本来乏しいか、自発性の衰退の程度がより高いということになります。

#### 10 物語のディテイルが欠けていたり過剰であったりすることについて<sup>[註6]</sup>

必要なディテイルに欠けるのは、短い物語に限られません。長たらしい、まとまりのない物語においても、肝心なことが欠落していることがあります。というより、えてしてそういう傾向があります。物語を構成する要素を集めて、物語の要約を試みれば、数十行の物語が、たった1行になってしまい、さらに肝心な事柄が含まれていないこともあります。このような場合、必要なことを簡潔に語るべしという暗黙の要請を無視している点で、やはりコミュニケーションの障害が疑われます。

しかし他方、ディテイルが過剰で必要以上に物語が長くなっている場合もあります。物語の詳しくさ、具体性にもおのずから適切な程度というものがあ、それを超えると問題視されえます。作られた物語を読めば、適切・不適切の判断はだいたいできますが、当のカードで作られる物語のおよその傾向を知っていれば、よりよく判断できるのは言うまでもありません。詳しくすぎる物語も、先述の2種類の物語とは違った意味でコミュニケーションの障害を示しています。単にディテイルの過剰からコミュニケーションの問題を指摘するだけでなく、どのような種類のディテイルが過度に言及されているかにも注意を払えば、語り手の関心、あるいはこだわりの領域についての示唆が与えられるでしょう。

11 笑が多いことについて<sup>[註7]</sup>

自分が何か言うたびに笑うひとがいます。照れ笑いもあるかもしれませんが、本来自分は今開陳した自分の言った意見や見方以上の持ち主であることを示すために、今開陳した意見や見方に対する軽蔑を笑いによって表現しているのかもしれませんが。

12 「……ではないですね」とはじめから否定形で語ることについて<sup>[註7]</sup>

自分の前言を翻すというより、はじめから、自分の判断を恐る恐る述べることに、自信のなさや、必要以上の自己抑制が感じ取られます。対人的にもきわめて消極的なのでしょう。

13 話のどの部分が絵と対応するかわかりにくいことについて<sup>[註7]</sup>

ときどき、かなり長い話のなかで、話のどの部分が、絵の状況を表現しているのかわからない場合があります。そういう物語は絵の状況から出発するというより、はじめに絵を見たとき、瞬時に出来合いの物語を思い浮かべ、それを展開してゆくというふうなのです。絵への顧慮はまったくないか、あってもわずかです。話が長くなるのは、絵の現在の状況の前、およびあとの状況への詳しい言及があるからです。全体の物語作りの印象は、非常に観念的というものです。目の前の現実的状況への注意が余りに少ないと感じられるのです。

14 「ほんとはそうみえないけど、そうしておきます」とすることについて<sup>[註7]</sup>

これも 11 で述べたような、「本来の自分」の保留を表わしているといえるでしょう。

15 時代、場所、時間などへの言及が多く、肝心の状況把握がおろそかになることについて<sup>[註7]</sup>

ときは何時代で、場所はどこそこで、いま何時ごろか、などについて迷いながら言及し、絵のなかで何が生じているかの把握がおろそかになることがあります。ここからは本質的なものをわきまえない知力や態度が推測されません。

16 人物に名前をつけることについて<sup>[註7]</sup>

どのカードでも (あるいははじめの多くのカードで)、画中の人物に名前、しかも外国人の名前がつけられることがあります。画中の人物は日本人らしくないから、外国人の名前をつけられるのは当然だとしても、絵の状況は自分とは違う外国人のこととして、深く関与しないですむと考えるのでしょうか。しかし考えてみれば、どの絵でも、そのなかの人物は外国人であるし、問題なく物語は作られるのです。したがって、人物に外国名がつけられるか否かということだけでなく、名前をつけるということの意味が探求されねばなりません。筆者はつぎに述べる演技性と関係あるのではないかと推測しています。

17 会話体や独白体で演技的に物語作りを進めることについて<sup>[註7]</sup>

もう解説するまでもなく、被検者の演技性を推測できます。声音を作って、物語を生き生きとしようとする被検者もいます。こうした態度には自己顕示性も認められますが、感情移入能力がひとより優れているともみなされません。そうでないと物語作りも不十分に終わるでしょう。

18 独り言が多いことについて<sup>[註7]</sup>

テスターに話かけているというより、なにやらひとりごとを言うひとがいます。病理を疑わせますが、もし正常な会話にもどることができれば問題ないでしょう。

19 突然、「もう続けられません」と言ってテストを打ち切ろうとすることについて<sup>[註7]</sup>

まれに、順調に物語作りが進むかに見えたのに、被検者は突然それ以上続けることを拒否することがあります。筆者は、統合失調者において数例経験しました。そういう場合には被検者の要求どおりただちにテストを打ち切ることです。しかし、テストをやりたくないために「まだあるのですか」「疲れるなあ」などとアルコール依存症者

が言う場合にはまた別で、簡単に折れることなく、励まして最後まで続けさせることが必要です。やればできるのです。

## 20 絵を絵画（写真）作品とすることについて<sup>[註7] [註8]</sup>

### 第4章 作られた物語の分析・解釈

本章では、TATは何を明らかにするかという疑問を出発点として、筆者のTAT分析・解釈を支える基盤を述べます。具体的、実地的というより、たぶん理念的にならざるをえませんでした。

#### 第1節 何を明らかにしようとするのか

ある心理テストが明らかにしようとするものは、その課題にすでに示唆されていると言えます。TATの場合には、絵からある状況を連想して、それを表現してゆくことが課題ですから、被検者の状況理解の特徴を明らかにすることを狙いにしているということになります。

ところで状況（situation）とは何かとあらためて問うと、事態とか状態とか情勢とか、いろいろと言い換えることはできるのですが、なかなかうまく説明しえないものです。しかし、人と人、あるいは人とのもの（こと）とのかかわり合いが問題になっていることは間違いありません。そのかかわり合いのあり方を「状況」は指していると言ってよいでしょう。被検者は絵が許す範囲で、自分に納得の行くかかわり合いを読み取るでしょう。そしてそこに彼（彼女）において優勢なかかわり方が示されている可能性があります。もちろん、単に知識として知っているかかわり合いが読み取られる場合もないわけではありません。しかしTATでは、被検者は、人が作った物語を読むのではなく、自分で物語を作り出すのですから、それに含まれたかかわり合いが、彼（彼女）にとってなんらかの重要性をもっているのみならず自然でしょう。筆者は、その重要性を、現実生活において実現する可能性の意味にとって、ポテンシャル（潜勢力）と呼ぼうと思います。そこで、TATは、被検者の状況理解の特徴を表すという先のことを、TATは、被検者の一定水準以上のポテンシャルをもった、人やもの（こと）とのかかわり方を明らかにすることができる、つまり、彼（彼女）のかかわり方、ないし関係性の特徴を明らかにする、と言い換えることができるでしょう。かかわり方の種々の相を筆者は「関係相」と呼ぼうと思いますが、ポテンシャルという考えについても、関係相という概念についても、本章第3節の4でより詳しく触れます。ここでは、人は、日常生活で、そうと意識せずに、ある種のかかわり方をしがちであることを、どの相撲取りも得意技をもっていて、それに頼り、必死の勝負のなかで無意識にそれを繰り出すことをたとえとして理解していただければよいでしょう。興味深いのは、ある力士が、インタビューアーの、自分の決まり手で一番多いのは何かと問われて、「上手投げ」と答えたが、実は「寄り切り」であると知らされ、力士本人が意外だというような顔をしたことです。これは、もっともポテンシャルの高いかかわり方も、必ずしも当人に意識されていないことがありうるということを示唆しているでしょう。

TATが明らかにするものに関しては一応以上のように言えるのですが、すでに述べたように、絵解きは失敗に終わる場合もあるし、失敗とまでゆかなくても不完全にしか成されない場合もあります。このような場合には、物語内容からかかわり方の特徴を知るといふより、物語作りの形式面から、知能や情動、对人的共感性などの資質、能力における問題を明らかにすることに主眼が置かれざるをえません。

#### 第2節 分析・解釈の手順

##### 1 物語中の人物への共感を通しての語り手理解

まず、語り手（被検者）が表現したものを、表現のままになぞって理解することが必要です。単に話の筋や状況を知的に理解するのではなく、語り手の表現をたよりに、彼（彼女）が物語中の人物になったように、こちらその人物になってみて、語り手が抱いた固有の状況のイメージをより鮮明に把握しようとするのです。これは何も特別なことではなく、小説や物語を読むとき誰でも自然にやっていることです。TATの物語もそのように読むことによって、語り手の感じ方や考え方が直接的に伝わってきて、彼（彼女）がどんな人かという感じ、印象が得られま

す。言うなれば、語り手に同一化しつつ、同時に彼(彼女)を対象化して客観的に捉えるという心内作業が自然に行われるのです。この能力に優れた人なら、たとえ TAT に関しては素人であっても、TAT の物語から相当の収穫を得ることができると言えるでしょう。

しかし、こういうアプローチには限界もあります。まず、絵解きに失敗しているもの、不十分にしか絵解きがないされていないものに対しては、このアプローチは通用しません。人物になろうとしても、人物に思いや感情がもたせられていないので、なることができないのです。

次に、このアプローチでは、語り手の一定水準以上のポテンシャルをもったかかわり方、関係性は明らかにされますが、それがどれくらい語り手を特徴づけるものかは必ずしも明らかになりません。そもそも語り手を特徴づけるとは、他の人々との比較を前提としています。他の人々のものから多少とも目立っている、際立っているからこそ、特徴的なのです。語り手にとってある程度のポテンシャルをもったかかわり方が、他の多くの人々にも共有されている可能性があるとしたら、それは当の語り手を特徴づけるものではありません。今問題にしているアプローチでは、この点が不明なままにとどまります。語り手の特異性が直覚される場合もありますが、根拠に基づいて、判断することが要請されます。

1つの絵に対する物語に示された語り手のかかわり方を特徴づけるには、どうしても同じ絵に対して他の人々が作った物語と比較検討することが必要です。当たり前のことでありながら、意外にも考慮の外に置かれがちなのは、TAT の物語は、ある特定の絵に対して作られたもの、絵を離れてはありえないものであるということです。そもそも同じ絵が、異なる人々から異なる理解を誘うという事実に、TAT がパーソナリティ・テストとして成立する根拠があるのですが、それがいつしか忘れられてしまい、絵を考慮に入れず、産物としての物語についてのみ云々するということになりがちなのです。今述べたアプローチも、よく見れば、同じように絵の性質を考慮していないもの、考慮せずともやれるものです。

しかし、あらゆる心理テストと同様、TAT でも、1つの物語を同じ絵に対する他の多くの物語と比較し、それらのなかに位置づけてみるのが必須です。こうして行われる1つの物語の特徴を明らかにすることを筆者は「分析」と呼んでいます。ただ、ここで注意しなければならないのは、先に述べたことと矛盾するようですが、物語を特徴づけるとは、必ずしも特異点を見つけることではないということです。平凡なものであること、つまり多くの人のものと特に変わっているところはないと判断することも、特徴づけることに入ります。要するに、1つの物語を特徴づけるとは、その種類や性質を明らかにすることです。

## 2 分析を通しての解釈作業

### a 物語を要約してみる。

さて、上述のような、1つの物語の分析、すなわち、それを特徴づける第一歩として勧められるのは、物語を要約することです。できるだけ語り手が用いたことばを用いて、物語の内容を要約してみます。その際自発的に語られた部分と問われて出てきたものとを区別し、後者を括弧で括るなどするのがいいでしょう。書いてみるのが一番いいのですが、それが面倒臭ければプロトコル中の肝心な要素にアンダーラインを引きながら心の中でやってみる手もあります。要約の行為によって、たとえば、繰り返しが多く冗長とか、まわりくどくて内容を把握しにくいとかの、物語作りの形式面の特徴が浮かび上がってきますし、要約の産物によって、物語が物語としての必要にして十分な条件を満たしているかどうか—— 教示で求められている、人物の思いや感情への言及はあるか、どうして現在の状況に至ったのかの説明があるか、全体的に了解可能な内容であるか—— が明瞭になります。これらのことは、すでに述べたように、知能や感情の全般的機能水準、对人的共感能力などの、資質、能力面のことを明らかにしてくれます。

次に、この要約の作業によって、同じ絵に対して作られる他の物語との比較が容易になります。「他の物語」という場合、筆者は、類型化された種々の物語を考えています。そういう種々の物語類型と比較対照するには物語のエッセンスを簡潔に記述したものの方が、余分なものを含んだ元の物語より適しているのは説明するまでもない道理でしょう。この比較照合の作業について以下により詳しく述べます。

## b 物語の分析

すめ TAT の各カードについて、多くの被検者から与えられる物語の種類が十分に掌握されていれば、1つの物語に接したとき、それがどういう種類のものに属するかがすぐわかるようになります。言い換えれば、それが、よく見かけるタイプのものか、ときどき見かけるタイプのものか、あるいは非常にまれにしか出会わないものか、ざっと「顔」が判別できるようになるわけです。

しかし、1つの物語がおおまかにある類型に属することはわかって、その類型はさらに下位類型に細分化されますので、どの下位類型に属するかも問題になります。そうやって1つの物語の類型化を追求していったとき、それが、どこまでもありふれた類型に属するものか、それとも、おおまかにはありふれた類型に属しながら、細部の点で、類型を逸脱するものか、それとも、希少類型に属するものか、さらに、そもそも類型化を拒絶するような、全体として特異なものかが判断されます。

上述の最後のものに関しては、絵の基本的な把握がなされているか否かが問われます。1つの絵に対し絵解きが種々異なる、すなわち多種多様な物語が作られると言っても、たいていの場合、絵の基本的把握の仕方には共通性が認められるものです。筆者は、そういう、肉づけされる以前の絵の基本的な把握の仕方を「基本的統覚」と呼ぼうと思います。たとえば、カード4では、男がその場を去ろうとするのを女が止めているとみなすこと、カード6BMでは、年齢差のある男女が何か深刻な事態のうちにあるとみなすこと、7GFでは、大人の女性が少女になんらかの働きかけをしているが、少女はそれに対して応じていないとみなすこと、などがそういう基本的統覚の例です。もっとも1つの絵の基本的な統覚の仕方は1つとは限りません。たとえばカード18BMでは、絵のなかの男性は背後の存在に拘束されているとも、支えられているとも統覚され、それぞれの統覚の上に立って肉づけされ、具体的な物語が生ずるのです。ともかく、たいていの人に共通に認められる絵の基本的統覚は物語作りの前提とも言え、それが欠けている場合には、パーソナリティのなんらかの問題を示唆している可能性が高いとみなせます。

およそ以上のようにして物語の分析を行う、つまり物語を特徴づけるのですが、ここまではあくまでも物語自体に関する作業であり、パーソナリティ理解とは別のもので、特徴づけられた物語からパーソナリティ理解に資する意味を引き出す作業を筆者は「解釈」と呼び、「分析」と区別しています。しかし両者は分かちがたく結びついており、分析なくしては解釈もありえません。

## 第3節 解釈の一般的前提

1 物語の人物に託された思い、感情、態度、行動などは、すべて語り手自身のもの<sup>[註1]</sup>

第2章第2節で述べたように、物語作りに際し、語り手は、紙芝居の演者のように、絵のなかの人物、あるいは絵のなかにはいないが導入された人物に次々となり、その人物の行動や思いや感情や態度を述べてゆくわけです。このようにして各人物に託された、これらの外的行動や内的状態は、単なる絵から自発的、積極的に託されたものである限り、語り手によって過去に経験されたものか、実際に経験されてはいないが、未来に経験される可能性のあるものか、あるいはいつか経験されることを期待ないし恐怖しているものか、要するにその強度は別にして、現実生活において実現化する可能性、すでに触れたポテンシャルをもったものとみなされえます。

## 2 能動的に～したいという意味・願望と受動的に～されたいという期待・不安の同居および互換性

上述のことから自動的に導かれることですが、物語のなかである人物が能動的に働きかけ、他の人物が受動的に働きかけられるとき、語り手はどちらの側にもなって、その行動や内的状態を述べるわけですから、一方の意思や意図、欲求や願望も、他方の喜び、悲しみ、不安、恐怖といった反応も、語り手のものであるということになります。ここでマレーの欲求-圧力分析に触れると、そこでは、物語における主人公を決定し、彼(彼女)が環境に対し抱く意思や願望を語り手の「欲求」とし、環境側から主人公に及ぶ力を、語り手が環境側から感じ取る「圧力」とみなすわけで、欲求は内発的、能動的なもの、圧力は外因的、受動的なものとして区別して扱われ、たとえば n aggression (攻撃の欲求) のなかにすでに p aggression (攻撃という圧力) が含まれていること、あるいは p aggression に n aggression が含まれていること、わかりやすく言えば、攻撃したいという願望や衝動は、攻撃されるのではないかという不安や恐れと同居している、同じく、攻撃される不安や恐れは、攻撃衝動と同居しているという考えは、マレーにはなかったと思います。しかしたとえば、ある語り手が、カード9GFで“一方の女性が、



日頃から他方の女性を敵視し、なにかと意地悪をするので、たまりかねた後者の女性が、前者の女性への仕返しに、彼女を窮地に陥れる一計を案じ、今そのさまをうかがっている”という絵解きをするとき、語り手は、意地悪なために仕返しされる女性にも、いじめられたために仕返す女性にもなっていて、どちらも語り手本人を表わしているとみなせます。もっとも、この場合語り手は、意識的には、仕返す側に身をおいていることが感じ取られ、マレー流に言えば、彼女が「主人公」となり、n aggression も p aggression もともに、チェックされるのですが、だからと言って、前者が後者を、後者が前者を含んでいるという筆者の考えと一致しているわけではありません。

ここで TAT から少し離れますが、現実の 2 人の人物のかかわりにおいても、能動者が即受動者、受動者が即能動者であることは見て取れます。たとえば、一方が他方を可愛がり、なにくれとなく世話を焼いてやるとします。こういう関係において、可愛がる側は、相手が自分の行為によって喜ぶのを自分の喜びとするでしょう。このとき可愛がる側は、可愛がられる相手になっていると言えるでしょう。また、可愛がられる方は、可愛がる人になって、やがて誰かを可愛がる人に成長してゆくでしょう。これらのことは、正常な母子関係におけるプロセスでもありませんし、また、可愛がられることが少なかった人が、可愛がる相手に「同一化」することによって代理的満足を得るというプロセスともなりえます。同一化という概念は、使い手によって多少とも異なる意味で使われる可能性があります。フロイト (Freud, 1915) に、次のような使い方が認められます。「痛みの感覚が一度マゾヒスティックな目標になってしまうと、逆動的に、痛みを加えたいというサディスティックな目標も生じうる。痛みを他者に生じさせつつ、苦しむ対象との同一化のなかで、自らマゾヒスティックにそれを享受するのである。」(筆者訳) 興味深いことに、同一化 (Identifizierung) ということばはフロイト全集の索引に 200 近くも登録されているのですが、この箇所で使用された「同一化」は、そこから洩れているのです。ここでの同一化の使用の仕方は、彼においては特殊といえるのですが、筆者には、それこそがその語の本来的な意味に沿った正しいものに思われ、わが意を得たりと感じた次第です。

少し脇道にそれた感がありますが、要するに、一般的に言って、2 人の関係において、能動的に振舞う側は、自分の言動そのものより、それが相手に及ぼす効果の方に気がいって、受動の側に回る人は、自分の振る舞いより、相手の言動の意図を汲み取ることに注意を引きつけられるものであると考えられます。こういう事態を筆者は、「しつつかれる、されつつする」と言い表してきました。しかし、ある状況において、「する」自分と「される」自分に区別が必要ないかということそうではありません。ある状況においては、どちらかが顕在的 (ポジ) で他方が潜在的 (ネガ) である、しかし別の状況ではこれが逆転することもあり得る、というのが正しいでしょう。それで TAT に話を戻せば、物語中の、語り手が肩入れしている人物 (主人公、中心人物) が、たとえば何か大切な秘密を暴露される不安を抱いているとすれば、その不安が顕在的なもの、つまり語り手の意識を支配しているものですが、他方、他者の秘密を暴露したいという欲求も潜在的に存在し、状況次第で顕在化すると筆者は考えるのです。だから上掲の物語では、いじめられ仕返す側の女性が、語り手の顕在的な自分であり、いじめて仕返しされる方の女性は潜在的自分だということになります。

ついでながら、マレーの欲求 - 圧力分析では、主人公を見定めることがまず必要なのですが、これは必ずしも容易ではありません。もし主人公の決定が 2 人の分析者の間で異なったら、一方の分析者が欲求としたものが、他方の分析者では同名の圧力とされるというようなことになってしまいます。「欲求」と「圧力」がマレーにおいては先述のように区別されるものである限り、これは解釈の混乱を招かざるをえないでしょう。筆者のような考えに立てば、少なくともそういう無用な混乱は避けられると思います。

### 3 物語中の男性、女性、父親、母親、息子、娘、少年、少女、老人の表すもの

これも、本章第 3 節の 1 からおのずと生ずる疑問です。絵のなかの人物は性別や年齢が同定され、さらに父親、母親、息子、娘など家族内の地位・役割、上司、部下などの社会的な身分・地位なども付与されます。すでに述べたように、すべての人物に付与された行動、態度、思い、感情は、その性別、年齢、役割、身分に関係なく、語り手に顕在・潜在するものとみなされるのですが、しかし、これらの同定や役割付与にも大いに意味があります。

TAT の絵においては、人物の性別、年齢の同定に迷わされることは少ないのですが、それでも、いくつかのカードにおいては、それらの判定が分かれ、一方が正しく、他方が誤りと単純に言えません。判定が問題と映ずるかそ

うでないかは頻度によります。大多数の人々が年配の男性と見る人物を、ある人が年若い女性と見たとしたら、そこに個人的要因が強く働いているとみなすことは自然です。少なくとも、その人の心内の男性像、女性像が一般と異なっているらしいとは言えます。年齢の判断についても、大多数の人々が成人の女性と見る人物が幼い子どもと見られた場合には、やはり個人的要因の強い関与を認めざるを得ません。とくに TAT には子どもが描かれている絵は少ない——明らかに子どもと判断されるのは、1, 7GF, 13B の人物のみ——ので、大勢に逆らって人物を幼い子どもとみなす場合には、語り手の自己像の幼さが推測されます。

さて、人物の性別、年齢、役割、地位などの判断が普通であるか、特異であるかに関わりなく、人物の行動の仕方や内的状態のあり方に、語り手の男性像や女性像、父親像や母親像、社会的年長者像などが示唆されています。たとえば語り手が、父親と息子の物語を作る場合、自分が築いてきた父親および息子のイメージに合う行動、態度、内的状態が人物に託されると思われます。すなわち語り手は、父親（息子）だったら、こんなふうに行動し、考えても不思議ではない、と無意識的に判断して、父親（息子）として自然に思われる、あるいは、ありうる言動や内的状態を人物に託するのだと考えられるのです。同じようなことは、物語中の男性と女性、上司と部下などについても言うことができます。

ところで筆者は、物語中の人物に付与された言動、態度、内的状態は、語り手自身のものであると言い、他方、人物の性別や役割は、語り手の抱くそれらについてのイメージを表していると言ってきたわけですが、これらの関係はどうなっているのかと疑問に思う方もあるかもしれません。しかし、人の心の成長のプロセスを考えれば、その疑問は疑問でなくなるでしょう。人は、両親の下で、父親にも母親にも同一化して、彼らを取り入れます。彼らの言動、人や物事に対する反応の仕方をわがものとするのです。ポウルビー流に言えば、世界とかがかわるための作動モデル (working model) を作り上げることなのです。しかしそれは、主にどちらへの同一化によって生じたのかその名残をとどめていることでしょう。それが父親像、母親像の形成に寄与するであろうと思われます。しかし、このことはそれにとどまらず、男性像、女性像、おとな一般のイメージの形成にも通じてゆくと考えられます。要するに、物語中の父親や母親、男や女は、語り手に存在するかかわり方（関係様態、関係性）の由来を示唆してくれるものと言うことができるのです。

なお、言うまでもないことですが、語り手が男性であるか女性であるかによって、男性像、女性像それぞれの意味も異なってきます。それは性的同一性の問題に関わるからです。物語を解釈する際にも、その点を考慮する必要があります。

#### 4 かかわり方（関係様態、関係性）のポテンシャルについて

本章第1節で、すでにかかわり方のポテンシャルという考えを導入し、その後にも触れてきましたが、ここでもう少し詳しく、実際の物語解釈に即して述べてゆきます。

本章第2節2のbで、1つの物語が、頻度の高い物語類型に属しているか、それとも頻度の低いものに属しているか、それともほとんど個人的な物語であるか、などという判断を問題にしたのですが、それに関しては、一般的に次のような意味づけが可能です。

1つの物語が非常に頻度の高い物語類型に属していることは、語り手を個人的に特徴づけるものを表している可能性は低く、しかも、どこまでも典型的で、特異な細部を含まないものほど、その可能性は低い。これに対して、頻度が非常に低い物語類型に属している物語は、語り手を個人的に特徴づけるものを表している可能性が高く、とくに、どの類型にも属させることが困難なほど特異なものは、その可能性が非常に高い。

以上のことは実は、頻度が高い、低いということを言い直した、自明のことに過ぎないとも言えますが、解釈のごく基本的な前提です。

ところで、最もありふれた物語類型を例にとった場合、それが、ありふれているというその理由で、語り手の個人的な特徴を表していないとするのは妥当だとして、では、それは何を表しているのでしょうか。それはロールシャッハ・テストにおける平凡反応に相当するので、それに属する物語をある語り手が作ったということは、彼（彼女）が多くの人と共通のものを見方、考え方ができること、つまり社会適応能力について肯定的なことを意味していることができるでしょう。それはそうでしょう。それも大事な意味づけですが、ここでは、そもそも頻度の高い類型的物語とは何を意味するのかを考えてみましょう。まず、それは、個人的なものでないとしたら、集団的な

ものを表していると言えます。そして集団的なものとは、一群の人々が属する環境的なものと言い換えることができるでしょう。文化的、教養的、経済的に似たような環境にある人々は、ある程度の経験や空想の範囲を共有しているものと思われます。そういう共有された経験や空想の一部が、絵をきっかけに自然に表出されたものが、高頻度の物語類型であると言えるでしょう。

ところで、似たような環境にある大多数の人々が共有する体験や空想は、当然ながら多種多様で、同じ絵に対しても複数個の連想を可能にするでしょう。それらが言わばポテンシャルのヒエラルキーをなして、最も頻度の高い物語類型とは、その頂点にあり、それゆえ最も自然に連想されるとみなせます。他の、頻度がより低い物語類型は、ヒエラルキーのより下層にあると判断されます。しかし、これは非個人的、標準的なヒエラルキーであって、ある人々にとっては、頻度が相対的に低い物語類型の方が、個人の要因の介入によってヒエラルキーの上層に来ていて、それが連想されると考えられます。つまり連想される物語類型の頻度が低いものであればあるほど、個人的な要因が大きく作用して、ポテンシャルのヒエラルキーの頂点に来たとみなせるでしょう。

しかし他方、頻度が低い物語類型は、文化的、教養的、経済的水準が大多数の人々と異なる少数派の人々によって示される可能性もあります。つまり少数派の人々の平凡反応という見方も可能なわけですが、もっとも、環境条件は明確に区別できるわけではないので、1つの頻度の低い物語が、マジョリティに属する人の、個人的要素の介入が強いものか、マイノリティの人のごく自然な反応かを厳密に区別することはできません。ただ筆者は、たとえばカード1に対し、大学生では、男の子のバイオリンの練習上の行き詰まりや嫌気を述べたものがありふれた物語なのに、非行少年など、教育的、情愛的環境に恵まれなかった者では、その種の物語はまれで、バイオリンの所有願望や好奇心を述べた物語がまれでないという経験をしてきたことから、上のような見方も可能であり、解釈に当たっては相応の配慮が必要だと思っているのです。

以上、多少ややこしい記述になりましたが、実際に物語に接するときの暗黙の仮定のようなものを言語化してみました。要するに、筆者は、1つの物語、あるいは、それに示されている人物の人やもの(こと)へのかかわり方——かかわりの様相という意味で、「関係相」と呼ぶことにします——が、語り手のもつポテンシャル——現実生活で実現する可能性のある潜在力——というものを仮定し、語り手を顕著に特徴づけるかかわり方を知るには、主に、頻度が比較的低い物語類型や特異な物語が手がかりになるということをおうとしたのです。

#### 第4節 解釈上の留意点と総合解釈

##### 1 語り手が1つの絵に対して作りうる物語は1つとは限らない

TATでは、被検者は、各絵に対し1つの物語を作ることを要求されていると言えます。英語の教示では a story と、story に不定冠詞がついていますから、それははっきりしています。日本語の教示では、わざわざ「1つの物語」と言う人もいるでしょうが、そう言わない人も少なくないでしょう。しかし言わなくても、課題の性質からして、1つ作れば十分だという感じを抱かせるものと思われます。実際ほとんどすべての被検者は1つの物語を終わったら、その絵での課題を終えたものとみなします。

しかし、教示を通常のものとは変えて、2つ以上の物語を作るように要求すると、少なからぬ被検者が、2つ以上の、しかもそれぞれ必要にして十分な物語を作ることができます。それらは、語り手にとって、第一の物語よりポテンシャルが低い状況を表しているために最初には作られなかったか、あるいは、むしろ第一の物語よりポテンシャルは高いが防衛策によって退けられていたと考えられます。また、通常の教示で実施される場合にも、一部の被検者は、2つ以上の不完全な絵解きを示します。絵の表す状況を、こうもとれるし、ああもとれると言って、どれかに絞って、それを十分に発展させることをしません。これはこれで、彼らのパーソナリティを特徴づけるのですが、ともかくこうした事実から、私たちが心すべきことは、語り手が現に作った物語が、彼(彼女)が作りうる唯一の物語ではなく、異なった種類の物語を作ることができるかもしれないことを念頭に置いておくことです。これによって、物語解釈一般に対する姿勢が慎重になります。また、実際に作られた物語が、多くの人々に期待される物語、あるいは、こちらが望ましいと思っている物語とは異なっている場合、語り手のパーソナリティについてネガティブなことを言ってしまうがちな傾向に歯止めがかかるでしょう。筆者の言わんとしていることが少しわかりにくいかもしれませんが、例を引いて説明します。

たとえば、カード19で“外は吹雪で厳しい寒さだが、家の中は暖かく、人々は楽しく団欒している”という、

よくある物語からは、“守り”“安全基地”となる家のイメージが語り手に形成されていることは確実にいえませんが、作られた物語がこれと同じようでない場合には語り手にそういう家のイメージがないと言い切れないのです。もし物語が、上とは正反対の、家や船の内部の人々の破滅を述べるものであれば、守る機能が脆弱な家のイメージの存在を推測してよいのですが、そのように積極的に家のイメージを伝えていない物語、たとえば、絵を、ある画家が描いた抽象画、あるいは、ある悩める人の心象風景などとするものの場合、語り手に安全基地としての家のイメージがないとはいえません。語り手は、良い家のイメージの存在を証拠立てる上述のような物語を作りえないとは断定できないからです。しかし別の理由もありえます。良い家のイメージがあっても、それは上掲のような物語の形では表されるとは限らないということです。しかしこれについては項を改めて述べましょう。

もう1つ別の例をとみましょう。カード8BMでの“ある青年が、野戦病院で銃弾の摘出手術を受けている戦友の無事を心から祈っている”という物語のように、語り手が“切る”側より“切られる”側に強く同一化し、その人を手前の人物と関係づける場合、共感性の素質的強さが表されていると筆者は思っているのですが、これと逆の、“医者を目指す青年が、父親のする手術場面を思い浮かべて、父親のような名医になろうと思っている”という、これまたよくある物語のように、“切る”側の人への同一化がより強く、その人と手前の人物が関係づけられている物語やその他の種類の物語では、語り手に共感能力が欠けているといっているのかというと、そうではないのです。共感能力は、上掲の物語でのみ示されるわけではなく、同じカードで別の形ででも表されると言うべきでしょう。

## 2 十分条件としての物語

ある絵でのある物語類型から語り手について然々のことが言えるとみなす場合、わたしたちはそれを逆にして、そのことが言えるためには、その絵でその種の物語が作られなければならないと考えがちではないでしょうか。つまり、物語の種類とそれが示唆する意味の一对一の対応を考えてしまうのです。しかしそれは正しくないと思われる。語り手についての同様な特徴は、別の絵で別の形で表される可能性もあると考えるのが正しいでしょう。上掲の物語を例にとれば、それは、言うなれば、良い家のイメージが形成されていることの十分条件ではあるが、その必要条件ではないとみなすべきだと思われるのです。一般的に、私たちは、TATのすべての物語は、それが表す状況と人物のかかわり様式から、語り手のかかわり様式を導き出すことができる十分条件であり、それを言うための必要条件とみなすべきではないと言ってよいのではないのでしょうか。こうした事情は、導き出されたかかわり様式は、普通以上のポテンシャルをもつものであるとみなすことをも可能にしてくれるのではないかと思います。

## 3 表出されなかった物語 (negative content) の考慮

上の1, 2で述べたような考えが正当である一方で、語り手は、なぜ他ならぬこの物語を作って、別のあれこれの物語を作らなかったのかと考えるのは、物語の分析・解釈を行う際には、ごく自然なことです。否、むしろこれは、本章第3節の4ですでに述べたように、物語を特徴づけ、そこに示された語り手の人やもののかかわり方のポテンシャルを明らかにするプロセスの重要な一部なのです。語り手が別種の物語を作れなかったとはみなさないが、また、作らなければならないとも言えないが、なぜそれらでなくてこれなのか、その優先性を問い、ポテンシャルを推測するわけです。

このような態度はとくに、頻度が低い類型的物語や非常に特異な物語が作られるときに際立ちます。解釈をより確実なものにするために、ロールシャッハ・テストにおける限界吟味と同じように、ありふれた絵解きが可能かどうか調べてみるのがよいと思われる場合もあります。

以上に述べてきたように、物語の解釈に当たっては、当の物語が語り手の作りうる唯一の物語とみなさず、別の物語を作りえたかもしれないということ、また、物語の種類とそれが示唆する意味との堅い一对一の対応を仮定しないほうがよいということからは、慎重な姿勢が生まれるのですが、他方、当の物語こそ現に語り手が作ったものであり、別の物語は作られえなかったかもしれないこと、また、物語の種類とそれが示唆する意味との間には、前者が必要条件であるといつてよいほどの関係があることもありえないわけではなく、その方向に力点を置けば、なぜこの物語であって、他の物語でないのかを問い、その意味を模索する解釈態度も生じます。このように一見矛盾した複雑微妙な姿勢によって解釈のプロセスは進行してゆくと筆者は内省しています。

#### 4 総合解釈

カードごとに、それに固有の絵解きが生み出すものを汲み取っていき、その後それらを総合して、被検者のパーソナリティ特徴を叙述するのが最後の仕事です。

筆者はこれまで、「カードごとの物語の分析・解釈」をことさら強調してきませんでした。それは筆者にはあまりにも自明のことに思われたからです。しかし、ここで、それについて一言しておきましょう。

絵や写真は、どんなものでも、意図なくして生ずるものではありません。TATカードの絵や写真も、例外ではありません。それぞれまったく異なる作者の意図によって生じたものです。ですから、各カードは質的に異なっていると云えます。こうした質的に異なるものに、共通に適用可能な分析の枠組みを設けるのはどんなものか疑問に思えます。まずそれは不可能に思えます。

このようなことを、いろいろな論文で書いてきましたが、あまり論理的ではない見解だと思うようになりました。さらに、つぎのようにも書きました。対象が絵解きという、ほとんど分解不能な、全体として把握してのみ意味があるものであるから、絵解きの結果を、無理に相当程度分解して、細かい指標を取り出すことは可能は可能ですが、その時点ですでに絵解きの持ち味は失われています。これ自体は的外れだとは思いませんが、しかしこのような理屈をいう以前に、1つのTATの物語は、語り手理解の多様な手がかりを含んでいて、しかもそれらを予期することは困難であるという実際経験が、記号化の考えを追いやってしまったというのが、実情に近いでしょう。

しかし、絵の作者の意図はそれぞれ異なっても、そこに表出されているのは人間の行動や態度や感情であるし、絵の中の人物に共通のものはとりだせるだろう。関係相というものをカテゴリー化して、少数にしばれば記号化と量的把握も可能であろうと思うようになりました。実際やってみると、それは不可能ではなく、被検者の特徴を概観させてくれるものでした。しかし、これらのことの詳細は第2部にゆずって、これまでの筆者の量的把握の観点にふれておきます。

まず、絵解きの形式面、つまり物語作りの仕方に関してです。第2章第3節ですでに述べたように、物語の作り方は、多くのカードに共通に認められる特徴です。それらの特徴を記号化すれば、集計が可能になり、従って量的分析が可能となるでしょう。筆者は量的分析といえるほどのことはしていませんが、あとの第5章で示すような形式面のチェック表は用意しています。

絵解きの内容面に関して、すでに述べてきたように、カードごとに、多数の物語を類型化(分類)し、それらの出現頻度を把握したうえで、関係相(かかわり様式)のポテンシャルを判断するわけですから、量的なものを考慮しているといえるでしょう。物語の類型化とその頻度は、筆者にとって分析・解釈のエヴィデンスと言えるものだと思っています。

#### 第5章 各カードで産出される物語の概観<sup>[註1]</sup>

以下に各カードで作られた物語を検討する場合に着目すべき点を簡略に述べてゆきます。それは、拙著『TATの世界』に詳しく述べられているのですが、初心者には詳しくすぎるといふ声もあり、そうした声に応え、とっつきやすくするために書いたものです。しかし単に簡略にする目的のためだけではありません。それは経験のろ過の意味をももっています。筆者は、今回拙著『TATの世界』をほとんどまったく参照せずに書き進めました。この過程で、重要なことを書き落としている可能性もありますが、それが却って重要なものとそうでないものの筆者の経験的判断を自然に伝えることになっている可能性もあります。もう1つの利点は、前出の拙著では、物語の分類上、特異なもの、例外的なものから書き進めざるをえなかったのですが、今回は逆に、よく見かける物語から書き始めました。それによって特定のカードで産出される物語の範囲と種類を把握しやすくなるでしょう。

しかし、より厳密に物語の特徴を把握するには、上述の拙著を利用していただければと思います。本稿は、前著への導入的な意味をもつものですが、それに代わりうるものではありません。本稿を読んだ後、前著を読んでくださることをお勧めします。

##### 第1節 カード1

男の子が頬杖をついて机の上のバイオリンを眺めている、というのが、このカードでの物語作りの出発点となる認知と言えます。バイオリンは手に持って弾くものですが、男の子は弾いておらず、手を触れてすらいません。し

かし彼は、バイオリンを目の前にしているわけであり、バイオリンとかかわりがないはずがありません。バイオリンについて何かを思っているはずで、彼にとってバイオリンは何なのか、彼は何を思い、感じているのか、などを具体的に語ることがこのカードでの課題です。

実際にはほとんどすべての人が、男の子はバイオリンのことで悩んでいると見ます。ですから、これが絵の共通認知と言っても差し支えありません。どういう悩みか大別すると、バイオリンをうまく弾きこなせない——技術的に——悩みがもっとも見られやすく、弾きたくないのに強制的に弾かされる悩みとみなせるものがこれに次ぎ、これよりだいぶ頻度は低くなりますが、バイオリンを壊してしまった悩みが3番目に位置します。これよりもさらに頻度はずっと低くなりますが、他にバイオリンの扱い方がまったくわからないという悩みや、バイオリンを弾きたいが弾くことに障害がある悩みや、バイオリンを欲しいが手に入らない悩みや、バイオリンの持ち主の不在ゆえの悲しみが語られます。最後のものは、悩みに含めるのはふさわしくなく、別格に扱った方がよいかもかもしれません。

1人の語り手が、上述の種々の悩みのどれを読みとるかに注目する必要がありますし、また、それぞれの悩みのなかでさらに詳しい種類分けが可能であり、彼（彼女）は、悩みにどのような色合いをもたせているかに注意することが必要です。

上述のような種々の悩みの事態を包括的に理解する1つの観点として、筆者は、男の子とバイオリンとの心理的な距離の考えをもちこんでいます。例として、バイオリンをうまく弾きこなせない悩みとバイオリンをこれまで弾いたことがなく、弾き方がまったくわからない悩みを取り上げてみましょう。前者では、バイオリンはすでに前から男の子が所有し操作する対象であり、彼にとって馴染み深いものですが、後者では、その反対です。両者間の男の子とバイオリンとの心理的距離の違いは明らかでしょう。このカードの絵を見て、バイオリンの稽古とそれにまつわる悩みを連想する人は、自身、親から教育的関心を払われ、バイオリンでなくともなんらかの習い事をさせられてきた人とみなしてよいでしょう。その人の親は、それだけの子どもへの愛情と経済的余裕を持っていたと推測されるのです。他方、男の子がバイオリンの弾き方がまったくわからないという場合には、子どもにバイオリンという物は与えても、先生につけて技術を習わせるという、あとの面倒まで見ることをない親像が背後に推測されます。つまり、物資の面では不自由させなくても、精神的な面でほったらかしにする親像が浮かんでくるのです。

このように、男の子とバイオリンとの心理的距離は一般的に言って、語り手が親から受けた愛情や関心の質と量を示唆していると筆者は考えます。心理的距離がもっとも大きいのは、バイオリンを見ても、それが何だかわからないという事態でしょう。その場合には、悩みより、好奇心が問題になっていることもあります。悩みにしろ、好奇心にしろ、表層的で微弱です。物心両面で恵まれなかったゆえの対象への関心の弱さが推測されます。これよりは心理的距離が小さいと言えるのは、バイオリンが欲しいが手に入らないという事態です。これでは、バイオリンはまだ男の子の所有物になっていませんが、少なくともそれに対する強い関心があります。物資の面での不如意が推測されます。バイオリンの持ち主の不在を悲しんでいるとするものでは、バイオリンは見形として男の子の所有に帰しており、また、彼はもとの持ち主のようなバイオリニストになりたいと思っているとされることが多いので、さらに心理的距離は縮まっているとみなされます。これに近縁で、より頻度が高いものは、自分のものでない——主に父親の——バイオリンを勝手にいじって壊してしまい悩んでいるとするものです。これでは、男の子は、奪うという形でバイオリンを一時的に所有し、さらにまがりなりに操作したわけです。実際に手を出している点で、まえの物語においてより、心理的距離は小さくなっていると言えるでしょう。しかし、これら2種の物語は、バイオリンがまだ十分に自分の所有物になっていない点で似ています。バイオリンの本来の所有者がたいてい父親である点も共通です。ともに、親から与えられるべき愛情を十分に与えられていないという意識を反映している可能性があります。愛情を勝ち得ようという態度に違いが認められるように思われます。言うまでもなく、“奪って壊した”方に積極性が見て取れます。

他方、今問題にしている心理的距離がもっとも小さいのは“バイオリンを習っていて、いくら練習しても上達しないというスランプに陥り、もう習うのをやめようかと思うが、気を取り直して練習に取り組み、再び上達していった”とする物語においてでしょう。これにおいては、バイオリンが男の子自身の所有物（=わがもの）であるのは言うまでもなく、バイオリンという楽器と一生懸命取り組み、一時的に心は離れたものの、最後にはその操作をマスターした（=わがものにした）のであり、二重の意味でバイオリンは「わがもの」なのです。これに比べると、

親に稽古を強制され、いやいや練習しているとするものでは、バイオリンは精神的な意味では男の子のわがものになっていません。

以上、種々の悩みの事態を、男の子とバイオリンとの心理的距離の観点から見てきましたが、このカードでの絵解きからは、語り手における親から受けた愛情や関心の量と質、それと深くかかわる語り手自身の対象への関心の強さについての示唆が与えられると筆者は思っています。

さて以下では、それぞれの悩みのなかでの変異について簡略に述べてゆきます。

\*

まず、バイオリンをうまく弾けない悩みにおいては、上掲のような、上達してゆかないことの悩みと、単に現在の課題曲が弾きこなせない悩みとが識別されえます。当然ながら、前者の方が、悩みは深く、かつ広く浸透しています。自分の能力に疑問を抱き、将来に悲観的にもなるのです。語り手は、内省力に富む人と言えるでしょうが、半面、深刻に悩みすぎるところがあるかもしれません。これに対し、後者は、もっと即物的、現実的に対処する半面、内省力には欠ける人を示唆している可能性があります。

\*

バイオリンを弾かされる悩み、言い換えれば、バイオリンを習うのを強制される悩みにおいても、バイオリンの練習がいやでいやで、どうやってサボろうかということばかり考えているというものと、それなりに練習してきたが、自分の適性や関心の方向を考えて、習うのをやめようかどうしようか思い悩んでいるとするものとは、深刻さに違いが認められます。それぞれイージーゴーイングな性分と真面目に思いつめる性分を示唆しているように思われます。なお、この種の悩みを内容とする物語の解釈において注意すべきは、あらゆる場合に強制的な親像を推測すべきではないということです。子どもに期待をもって習い事を強制するのは親の自然な姿であり、物語のなかで余程強制的な面が強調されていない限り、先述の男の子とバイオリンの心理的距離から考えても、むしろ親の愛情や関心の面で恵まれていたということをもまず読み取るべきだと思います。

\*

バイオリンを壊した悩みの典型的なものは“男の子は、父親の留守中に、父親の大事にしているバイオリンをこっそり持ち出していじっている間に、バイオリンを壊してしまって、父親に叱られまいかと悩んでいる”というものです。個々の物語が、この典型とどの点で違うかを明らかにし、そのことの意味を考える必要があります。たとえば、父親のバイオリンでなく、母親のものだったり、友だちのものだったりする場合があります。また、バイオリンのレッスン中に壊れてしまい、弾けなくて困っているとするものもあります。これなどは、別種の扱いが必要とすら思われます。弾きたくない気持ちの合理化を推測させる場合もあります。ごくまれに“壊れたバイオリンを納屋で見つけた”というような所有主が不明の場合もあります。しかしこの種の物語は、次に述べる物語類型により近いとみなされます。

\*

バイオリンの持ち主の不在の悲しみを内容とする物語の場合にも、先述のようにたいてい持ち主は男の子の父親ですが、そうでないことがあります。すべての場合根底では“父なるもの”の希求が問題になっていると思われるのですが、やはり個々にその意味を考える必要があります。

\*

バイオリンを弾くに弾けない事情があって悩んでいるとする物語類型において、弾くことの障害になる事情は、親の禁止、経済的困窮、身体的故障などです。とくに、親による禁止を述べるものは、すでに論じた、弾きたくないのに弾かせられる悩みを述べるものと正反対と言えます。後者が、むしろ恵まれた家庭状況を示唆するのに対し、前者には、恵まれなさを被害的に呪い、他罰的になっている趣があります。障害を身体的故障とするものでは、自罰傾向も推測されます。

\*

さて、このカードでは、冒頭に述べたように、ふつうバイオリンが認知され、男の子が、バイオリンにまつわる悩みを抱いているとされるものなのですが、まれにこれら2要件のどちらか、あるいは両方が欠けている場合があります。ほとんどすべての場合と言いたいほど、「悩んでいる」ということばが反応のなかで使用されるので、「考えている」と言うばかりで、そのことばが出てこなかったり、物珍しげに眺めているとされたりすると、注意を惹

きます。そのような場合筆者は、「悩む」という情動を伴う強い関与が不可能であること、あるいは、知的にのみ関与し、情動的に巻き込まれるのを回避する姿勢を推測してみます。バイオリンが認知されないことには2つの場合が区別されます。1つは、語り手はバイオリンのゲシュタルトに注意を払うのですが、それがバイオリンと同定できず、バイオリン以外のものとみなしたり、結局わからないと言ったりする場合と、そもそもバイオリンがまったく目に入っていないかのように、男の子は友だち関係で悩んでいるなどとする場合です。後者は、語り手の心を強く占領する関心事が露呈されたという感じを与えるのですが、前者の意味づけは容易ではありません。はじめ何かわからなくても、少し時間が経ってから、ぱっとバイオリンが見えるということもあるので、新奇な状況である種の心理的混乱が原因という見方もできます。また、バイオリンを玩具の鉄砲などと誤認する人もあるので、男の子という性にまつわる固い偏った観念が存在する可能性も考えられます。

## 第2節 カード2

田園風景のなかに本を抱えた若い女性が立っている。その向こう側、少し離れたところの畑には、農作業に携わる人々があり、男性は馬を使って農耕をしており、女性は木にもたれている——これが、このカードの絵の内容の共通認知と言ってよいでしょう。若い女性と畑の人々との間には距離があり、また、視線などによる一方から他方への明らかな関心も見取れません。畑の男女の間にも、明らかな行為を介しての関係はありません。このように絵のなかの3人の間に行動水準でのかかわりは認められないので、物語のなかでかかわらせよう——とくに若い女性と畑の男女とを——とすれば、心理的にかかわらせる他ありません。そしてこれは必ずしも容易ではありません。それで、かかわらせずにすまず物語も生じます。しかし、たとえかかわらせなくても、少なくとも、同一の時空間に3人がいる状況がどのような現実の状況であるかを述べる必要はあります。3人、あるいは若い女性と畑の人々について別々に叙述するだけでは、あるいは、3人を単に家族とするだけでは、このカードでの課題を果たしたことにはならず、失敗反応とみなさざるをえません。それは現実への適応的努力というべきものが欠けていることを思わせます。

上で触れた、三者、あるいは二者をかかわらせてはいないが、絵の状況を統一的に捉えている反応のもっとも素朴な例は“通学の途上の女子学生が農家の人々の前を通りすがっている”とするものです。絵を単にスナップ写真的に捉えただけの、物語性は乏しい反応ですが、失敗反応ではありません。

絵をよく観察すると、若い女性と畑の男女とはいくつかの点で対照的であることがわかります。若い女性が抱えている大きな本は向学心や都会的な知的教養を連想させ、畑の人々がする農業は土にまみれてする肉体労働です。若い女性は清楚な身なりをしているのに、畑の男性は上半身裸で馬を操り、女性は見ようによっては妊婦です。こうしたことから、前景と後景を知的労働と肉体労働、精神性と動物性、都会的洗練と田舎的粗野というふうに対比的に捉えることができます。これらを敷衍（ふえん）した富裕と貧困、支配階級と被支配階級という対比づけも可能です。これらは、前景を肯定的に、後景を否定的に捉える対比づけと言えますが、逆の、都会のせせこましさを、あくせくする生活と牧歌的のどかさ、おおらかさ、あるいは、浮薄さと根源性という、後景を肯定的に捉える対比づけもありえます。ついでながらもう1つ、若い女性と畑の女性に認められる年齢差から、娘世代と母親世代という世代間の対比づけも可能ですが、これはこのカードの絵に固有なものではありません。

さて語り手は程度の差こそあれ、これらの対比を感じ取るでしょう。対比を強く意識すればするほど、相互に異質なものが同一時空間にあることの説明の必要を感じることでしょう。“都会から先生が田舎の学校に赴任してきた”とするものは、その努力の表われです。これだけではまだ人物間のかかわりはありませんが、“田舎の学校に赴任してきた先生が、土地の人々に受け入れてもらえず、悩んでいる”というものでは、心理的な水準でのかかわり合いがもたせられています。“農村に生まれ育った勉学熱心な女性が、都会に出てさらに勉学を続けたいと思っているが、両親に反対されて悩んでいる”とするものも同様です。これらは、前景と後景の異質性を、単に若い女性の都会から田舎への転入ないし田舎から都会への転出という行動の水準で処理するのではなく、異質性を心理的対立という形に高めているところに特色があります。それだけ鋭く意識的に異質性を感じ取ったということでしょう。ここで注意しなければならないのは、若い女性と畑の男女との間に対立関係が想定されているからといって、語り手が、対人関係でうまくゆかないとか、父母との間に葛藤があるとか短絡的に解釈してはいけないということです。これらにおける人物間の対立は、絵のなかに存在する対立的要素に依りかかって想定されたものであること、



および物語全体は、統合度の高い高水準のものであることを考慮し、語り手には、まず観念の発達や知的教養を、さらには対人面での敏感な感受性を推測すべきであると思われます。対人的過敏性や被害感が推測されるのは、絵の対立的要素に託されないで、直接的に人物間の対立や虐待 - 被虐待関係が語られる場合です。その意味で“少女は、農作業している男性に思いを寄せているが、彼の母親が監視していて近づけず、結局彼のことを諦めなければならぬ”とするものでは、上述の2つの物語よりは、対人的過敏性や両親、とくに母親との葛藤の存在などを感じさせます。これに近縁なものとして“畑で使用人の男性が女主人に酷使されているのを見た通りすがりの女性が、男性に同情し、女主人に反発している”というものがあります。これでは、畑の男女の間にも心理的かかわりが見られていて、いっそう語り手の対人的な過敏性が印象づけられます。そしてやはり、母親との葛藤の存在も推察されます。

以上、絵の統一的把握が認められない失敗反応やそれは認められるが人物間のかかわりが認められない反応、および、それらが高度に達せられている物語について述べてきましたが、多くの物語がその中間に位置します。大部分は、若い女性の、農村の暮らしや農村の人々に対する憧憬や親和性、その反対の嫌悪感や違和感を述べたものです。これらにおいては、農村のもつどのような要素ないし側面——すでに見たような肉体労働、動物性、粗野、被支配層、のどかさ、根源性など——に対する肯定的あるいは否定的な反応であるかに注意を払う必要があるでしょう。そこに語り手の志向する価値領域が示されている可能性があります。また、一般的傾向としては、後景の農村に対しては否定的な反応が優勢なので、逆の肯定的な態度が若い女性にもたせられている場合には、そのこと自体の意味も考えてみる必要があるでしょう。ある種の不適応感を示唆しているかもしれません。

しかし他方、若い女性の関心は農村、農業より、畑の男女の夫婦愛や家族愛に向けられていることもあります。このような場合や、先に掲げた、若い女性の後景の男性への思慕を述べた物語においては、語り手の関心が何よりも異性愛にあることを示唆しているでしょう。

＊

さて、これまではあたりまえのように、若い女性を中心に語られる物語だけ念頭において論じてきました。事実、語り手が男性であっても女性であっても、手前にもっとも大きく描かれた若い女性を中心に据えて物語を作ってゆくのがふつうなのですが、中心人物不在と言わざるをえない物語や中心人物が若い女性以外である物語も生じます。

中心人物不在の物語の例として“農家の人たちの働いているそばを、学校帰りの女子学生が通りかかっている”というものが挙げられます。これは、先に掲げた“通学途上の女子学生が……”という物語と内容は同じですが、語り手の立場が微妙に異なります。後者では、弱いながらも語り手は若い女性の側に身を置いていると感じられるのに、前者ではそういう感じが無いのです。誰の側にも身を置いている感じがなく、まさに中心不在です。語り手の他者への同一化能力が乏しいことが察せられます。

中心不在の物語の別の例として、3人の人物それぞれについてかなり詳しい叙述があるものの、主要人物が誰であるか判断しがたい物語が挙げられます。しいて言うならば、3人ともが、それぞれ主人公ということになるでしょう。この種の物語では、3人が同一の時空間にあることの認識があるそかにされ、観念的に各人物の運命を叙述しているという趣があります。この点で、最初の部分で述べたような失敗反応に属するといつて差し支えありません。

中心人物不在のさらなる例として、3人が一括して扱われるのみで、個々への言及はない物語があります。たとえば“一家はこの土地に移住し、開墾している。一家団結して頑張っており、豊かな暮らしができるようになる”というようなものです。3人が全体で主人公と言えるでしょう。この種の物語では、家族の繁栄と幸福という願望の背後にある現実の家族の不幸が推察されます。

さて、若い女性以外の人物が中心人物になっている物語に話を移しましょう。中心人物にされやすいのは馬で農耕する男性であり、そばの女性が中心となることはまれです。男性の家族内での主要な役割や活躍が語られ、女性たちへの否定的な態度が示される場合には、精神的な同性愛傾向が推測されます。木にもたれている女性が中心となっている場合には、必ずや語り手と母親との特殊な関係が示唆されていることでしょう。

＊

このカードの絵における前景と後景の異質性についてはすでに論じてきましたが、これがあまりに強く感じられて、統合的把握が困難になることもあるようです。合成画にしか見えないと言って、物語作りに失敗する場合もあ

れば、後景を美術館の絵、または若い女性の持つ本の内容を表わしたものとて困難を切り抜ける場合もあります。さらに“田舎から都会に出てきている女性が郷里の父母のことを想像している”とするものもありますが、これは、異質性の処理の窮余の策という感じはあまりありません。しかし、後景から現実性を奪うことには、なんらかの現実適応の困難さが示唆されていると見てよいでしょう。

なお、若い女性についてのみ語り、後景の人々にまったく言及しない場合もあります。これが前景と後景の異質性のゆえかどうかは一概には言えませんが、問題とされるべき反応には違いありません。自分勝手に区切り取るところに自己中心性が指摘されえます。

### 第3節 カード3BM

絵のなかの人は床にへたりこみ、ソファに突っ伏しています。そのような身体の力が抜けてしまったような状態は、そうそうあるものではありません。それは何によって招かれたのか。身体自体の変調によるのか、それとも精神的なものによって招来されたのか、それともどちらともがあるのか。身体的原因にしる、精神的原因にしる、さらにそれはどのような性質のもので、なぜ生じたのか。これらの当然湧いてくる疑問に自分なりに具体的な回答をあたえてゆくことがこのカードでの課題です。前の2つのカード、とくにカード2での課題よりずっと明らかでわかりやすいと言えます。

上述の課題をこなすには、人物の性別や年齢の判断が必要だと思われませんが、人物は後姿を見せているので、それらについての明確な判断は困難なはずですが、にもかかわらず、人物はほとんどの場合女性に見られます。人物の身体や服装にそう思わせる特徴があるのでしょうか。スカートや乳房に言及する人もいます。しかし人物の姿態そのものが女性を連想させるとも言えます。人物の膝を崩した横すわりの姿態は、男性のものというより女性のものでしょう。

さて、女性である人物は、身体的変調で倒れているというより精神的なショックを受けて嘆き悲しんでいると見られやすい傾向があります。そして衝撃的なできごととして、しばしば人間関係の破綻や消滅が語られます。この場合消滅とは、主に愛する人との死別を指し、破綻とは、相手との関係の悪化による決別ないしその可能性を指します。とくに異性関係における男性の裏切りや男性との喧嘩別れが問題になりやすいのですが、上司からの叱責などが語られることもあります。物語のなかでのこれらの人間関係の問題は、語り手が現在あるいは過去に経験してきたものと捉えるのは早計です。そういう場合もありはするでしょうが、それより、そこに語り手の価値観や女性観などが示唆されていると考える方がよいでしょう。つまり、女性にとって、あるいは男女を問わず、人間関係、なかでも異性関係の維持はなによりも大切なものであるという考えが語り手にはあるということ、そしてそれは多くの人と共有する価値観であるということですが、

ところで頻度は低いながら、人物の悲嘆の原因は、自分の目標を達成できなかったことや自分自身が悪い行いをしてしまったことである場合があります。これらの場合、語り手の、人間関係の維持よりも仕事上や倫理上の目標達成の方により高い価値を置く態度が表わされていると見ることができます。そして人物の具体的な目標に、語り手の価値観がより具体的に示されることもあるでしょう。

\*

これまでの叙述からは、嘆きの原因として具体的な衝撃的なできごとが語られるものという印象が伝わったかもしれませんが、あれこれの具体的な事件は語られず、慢性的な精神的疲労感や空虚感が問題になっている場合があります。このような場合こそ注意すべきで、語り手自身の心を占拠する慢性的な悩みや空虚感を推察しなければなりません。語り手自ら、絵の人物を見て、これは自分みたいだということがまれならずあります。

やはり具体的な1回限りの衝撃的な事件を述べてはいない物語として、人物が病気や身体障害や精神障害、あるいは家庭問題のゆえに持続的に苦しんでいるとするものがあります。このように苛酷で悲惨な境遇に人物を置くこと自体に、語り手の苦しみへのマゾヒスト的な親和性が感じ取れなくもありません。

\*

ところで、これまで問題にしてきた物語では、人物は嘆き悲しんだ末に自殺しようとするかとされることまれではありません。これには、絵に描かれたピストル様のものがかなり寄与しています。それは、鍵ともみなされますが、ピストルや銃などの凶器と受け取られやすいのです。自殺願望ないし企図が言及された場合には、その結果に

留意する必要があります。自殺を決行して死んでしまおうとか、すでに死んでいるとかする場合、決行するかしないかは本人次第などと、あいまいにする場合などは要注意で、相応の配慮が必要です。たいていは、死ぬに死ねないで泣き崩れる、などとされます。

\*

さて、次に身体的変調ゆえに倒れ伏しているとするものについて述べます。この種の絵解きは、少数派に属しますが、頻度はそれほど低くないので、問題の絵解きとは言えません。それでも、大勢に反して、人物に激しい情動反応を読み取らなかったことには、語り手に情動に対する抑制傾向が存在する可能性があります。

しかしこれにおいてもやはり身体の不調、変調の原因によって物語が与える印象はずいぶん異なります。たとえば“昨夜の宴会で飲みすぎて二日酔いである”というのと、“夫がいない女性が女手ひとつで子どもを育てるために必死に働いていて、過労で倒れてしまった”というものでは、意味づけもまったく異なります。前者はあまりにも軽い反応で、精神的苦悩に対する防衛が感じ取れますが、後者では、身体的変調の背後に苛酷な生活条件があるわけで、身体の酷使と精神的ストレスとの二重苦を見ることにより、通常以上の悲劇的な物語になっていると言えます。語り手の悲劇嗜好すら感じられます。しかし後者のように、人物の、義務や責任を果たそうと真面目に努力する姿や頼れる人がいない状況に言及する物語は少なくありません。この物語類型の特徴とすら言えます。他者に依存することを潔しとしない、自立心の強い人柄が浮かんできます。

\*

絵の人物が男性と見られる場合には、ほとんどすべての場合幼い男の子です。親に叱られて泣いている、親の帰りを待っている間に待ち疲れて眠ってしまった、などとされます。一般的に人物の年齢設定は重要ですが、この場合にも、人物の幼い年齢と幼い行動から語り手の幼い自己像が見て取れます。

\*

このカードでも、人物は身体障害者とされることがあります。

#### 第4節 カード4

絵の場面は、目をむいた男が女の制止を振り切って、何かに向かって行こうとしている場面と解されます。しかしこれは絵の基本的統覚というべきもので、これを言うだけでは不十分で、失敗反応とみなさざるをえません。男は何の目的で何に向かって出かけようとしているのか、女はなぜ男を引き止めようとしているのか、その結果どうなるのか、などのことを具体的に述べてこそ、課題を果たしたことになるのです。当然のことながら、それは2人がどういう間柄であると解するかということと切り離せません。身体的に接触していることからでしょうか、彼らは性愛関係にある夫婦、恋人同士、愛人同士と見られるのがふつうです。まだそういう関係でない男女で、女性が愛の攻勢をかけて、男性が逃げているというふうには受け取られることもあります。それは例外的で、問題となりさえします。また、兄と妹とみなされることもあります。やほり非常にまれです。このように、絵の男女を夫婦、恋人同士、あるいはこれらに類する性愛関係にある2人とするのは、このカードでの物語作りのほとんど前提とすら言えるのです。

さて、実際の物語を見てゆきますと“男が喧嘩相手をやっつけに行こうとするのを妻が必死で止めている”“男が新しくできた女のところに行こうとするのを、今までの恋人が捨てられまいとして止めている”というような、男の起こした行動に女が反応しているという趣のものと、“男の浮気を勘ぐった妻が男を追及し、男は言い逃れしようとしている”“女が恋人にものをねだっているが、男はうるさそうにしている”というような、女の行動に男が反応しているという趣のものがあることに気づきます。2人間の交渉は一旦始めれば相互的なものであり、どちらが先の行為者かということはたいした問題ではなくなるのですが、TATにおけるような物語作りにおいては、どちらか一方が行動を起こす側、他方がそれに反応ないし対応する側というふうには設定されざるをえないようです。そしてそこに、図らずも語り手のパーソナリティの一端が表わされるということもあると思われます。このカードの物語においても、行動をまず起こすのは男であるか、それとも女であるかということは、語り手の男性観、女性観、男性(女性)としての主体性の在り方などについて示唆を与えてくれるのではないかと筆者は思っています。

\*

絵の場面は一般的傾向として、男性が自分の意志で行動を起こそうとしていて、それを女性が思いとどませようとしているというふうを受け取られることの方が断然多いので、逆の場合は、能動的、侵入的な女性像と受身的な男性像の存在が推測されます。そしてある種の物語では、非常に弱い、無力な男性像の存在が推測されます。たとえば、男は精神を病んでいる、薬物中毒者であるなどとされ、妻ないし看護師がそういう男の世話をしているというものにおいてです。まれですが、女が男をそそのかして、あることをさせようとしているとされる場合もあります。この場合にも、男は自発的な意思をもたないわけで、支配的な女性像と母親像が見て取れます。さらに極端な例として、男を人形や死体であるとする物語があります。このような男の脱生命化——女性の語り手に偏っているという印象があります——には、男性を無力化しようという男性に対する敵意すら感じ取られます。

\*

他方、男が主体的に行動しているとみなせる物語に話を移します。この場合、男の行動は、女への反応としてより、男性に固有の野心や使命感から生じたものか、女とのかかわりのなかで、女への反応として生じた行動なのかという区別が可能です。どちらの場合も男は女を振り切って出て行くものなのですが——それゆえに、女に説得されて男は思いとどまるとする結末は注目に値します——前者では、特定の女性への愛想つかしはなく、男性的な価値志向と女性一般への関心の相対的低さが問題になっているのに対し、後者では特定の女性への否定的感情が問題になっています。そこに、語り手が観念的な思考型の男性像をもっているか、それとも現実的な感情型の男性像をもっているかがおおまかにでも示されているように筆者は思っています。

これとは別に、男は単に荒々しいばかり（喧嘩に行くなど）か、それとも、男性らしい使命感や正義感や倫理観をもっているかという識別も必要です。後者においては、観念的な思考型の男性像を推測することができますが、前者では、あまりそういう要素は感じ取れません。

\*

以上のように、このカードでの物語には、意志的で、精力的で、強い男性から、受身的で、無力で、弱い男性まで、いろいろな水準の男性が登場し、語り手の抱く男性像が示唆されるということが出来ます。他方、それに対応するように、女性像も推察が可能です。侵入的か、支配的か、受身的かなどということばかりでなく、女性についてよく言われる、母親、妻、女という三側面のどれが優位であるかについても示唆が与えられるように思われます。これまでとくには述べてきませんでした。無力な男の世話をする女は母親的、危険なところに行く男の身を案ずる女は妻的、男に捨てられまいとして、別の女性に走る男を引き止める女は女性的な面を表わしていると言えるでしょう。

\*

ところで、冒頭で述べたような基本的統覚を欠いたものは、例外的な特異反応として扱われます。“男女が睦み合っているときに、物音がして、そちらの方を見ている”というものとかが、出勤前の抱擁を見たものとか、その例です。このカードでは、男の意思と女の意思の拮抗が見て取られなければならないのです。それは大袈裟に言えば、男と女の本質的な違い、相容れなさの表現です。もしそれが直感されなければ、男というもの、女というものの基本的な観念が未だ形成されていないということでしょう。

\*

まれながら、男女の行動に演技臭さが読み取られます。俳優と女優がある役を演じていると見たり、男女はそれぞれ、出て行くふり、止めるふりをしている、とされたりするのです。前者は、このカードでは映画の1シーンが連想されやすいということと関係しているでしょう。しかし映画やポスターをまず連想する人も、そのあとそれに囚われず物語作りにかかるものです。すなわち、いちいち俳優の演技臭さなど感じないのです。ですから、単に映画を連想することと俳優の演技にこだわることの間には大きな隔たりがあると言わねばなりません。このカードで映画というフィクションを連想することが何か問題であるかのように言う人がいますが、筆者に言わせれば、それはごく自然なことであり、むしろこのカードで映画におけるような劇的性格を欠いた反応が与えられることこそ問題に映ります。映画にとって男と女の本質的違いは格好のテーマであり、映画の1シーンのこのカードにおいてそのテーマが展開されることにこそ、このカードの意義があると考えればよいのです。俳優の演技や“ふり”を読み取る人は、自身、本心を隠して演技する傾向の強い人であろうと思われる。

\*

最後に、絵のなかに認められる半裸女性のポスターの物語への寄与について述べておきます。端的に言えば、それは寄与することが非常にわずかです。ごくまれに、ポスターの女性を実在の人間とみなして、彼女に物語のなかで大きな役割を与えることがあります。たいいていの語り手は、彼女に言及すらしません。もちろんそうだからといって無意識的に影響を受けていないとは言えません。女性を酒場の女とする場合などにはその影響があるでしょう。しかし概して物語内容にポスター女性の影響は感じ取れません。

#### 第5節 カード5

このカードの絵の内容は、明らかに中年と見える女性が部屋の戸を開けて室内を覗いているのを室内側から見たように描いたものです。絵を見る者は内側にいる格好になるので、意識的無意識的に部屋にいる人と同様、覗かれる側に身を置くことになると言えます。女性は何者で、誰の部屋に何の目的・動機で来たのだろうかという疑問が生じ、これらの疑問に具体的に答えてゆくことが、このカードでの課題であろうと察せられます。その際に、女性の服装が室内着風であること、棚には本が数冊立てられていること、テーブルの上には花を活けた花瓶が置かれ、そばのランプの光を浴びて影を落としていること、などが状況の具体化に寄与するでしょう。

実際には、多くの場合、母親が、ごくふつうの母親らしい動機で子どもの部屋に来たとされます。母親らしい動機とする行為とは、食事の用意ができたことを知らせる、寝ている子を起こす、しっかり勉強しているかどうか確かめる、夜見回って就寝を確認し、もしまだ起きていたら早く寝るように促す、子どものただならぬ様子が心配で声をかける、子どもの姿がどこにも見えないので探す、などです。それぞれ語り手の母親像の特徴的ニュアンス——奉仕的、監視的、配慮的、憂慮的、過干渉的など——を伝えていることでしょう。

絵の人物は、ときには母親でなく、祖母、お手伝い、妻、管理人などと見られます。なぜ母親と見られないのか、そこには相応の理由があると思われる。人物の行為も母親的なものでないとしたら、語り手の母体験が乏しかったことが推測されます。人物の行為は母親的であるのに、彼女が母親とされない場合には、語り手の母親の役割が一般と異なっているのかもしれない。

★

これまでは、絵の女性が、室内にいるはずの人を目当てに部屋に来たと解する物語について述べてきました。それがふつうの解し方なのですが、別様の解し方もあります。すなわち、部屋の主がいらないからこそ来たこととことや、部屋に誰もいないはずなのにいるのではないかと思って来たこととことや、部屋に人がいようがいまいが関係なく、部屋のなかの物を目当てに来たとすることが、多くはありませんが、あるのです。“子どもや夫がいなくて子どもや子どもの部屋や夫の部屋を探りに来た”とするものでは、語り手の、あるいは(および)その母親の、他者に対する暴露欲求と自分が暴露される不安が見て取れます。

絵の女性が“家に独りきりでいたら、誰もいないはずの部屋で物音がしたので、何かと思って見に来た”とするものでは、女性は泥棒などの侵入者がいないかどうか不安を抱きながら来たわけで、語り手の、あるいは(および)母親の、他者の“侵入”に対する警戒心が感じ取れます。たいいていの場合、怪しい侵入者などいなくて、窓が開いて風が吹き込んでいた、猫がいたなどとされるのですが、泥棒に荒らされていたとされることもあります。

部屋に物を取りに来た、部屋がきれいに掃除されているかどうか点検に来た、などとするものでは、人への関心の薄さや強迫性が推測されます。

★

以上に論じたのは、絵の女性の部屋に来る動機や目的が主たる問題になっている物語でしたが、来室の動機や目的はほとんど問題にならず、部屋のなかで生じていた衝撃的な出来事を目撃とそれゆえの驚愕が前面に出た物語も、少ないながら生じます。衝撃的な出来事としては、部屋主の失踪や死や病気、夫や子どもの性的行為、泥棒の侵入、妖精や幽霊の出現といった超常現象などがあげられます。きわめてありふれた家庭内の場面が読み取られやすいこの絵で、正反対の非日常的な出来事の突発を思いつくことには、相応の意味があると思われる。まず、奇を衒う傾向、鬼面人を驚かす傾向、ブラックユーモアを好む傾向などが推測されます。これらは、露出傾向と関係があるでしょう。あるいは平穏な日常性の脆さについての思いがあるのかもしれない。先に、“不審な物音がしたので見に来た”とするものについて、“侵入”に対する警戒心を推測しましたが、その1つの発展型が“泥棒が侵入していて、部屋を荒らしていた”とするものであるとみなせます。しかしまた、母親像が表わされやすいこのカー

ドで、母親との葛藤が露呈するかもしれないことを直覚して、防衛のために別次元の出来事を思いついたという可能性もあります。しかし、結果的に母親の人物に恐怖と驚愕を与えているわけで、母親へのいわゆる受身的攻撃性が読み取れなくもありません。とくに母親が子どもの性行為を目撃したとするものからは、支配的、侵入的な母親に対する反撃的な挑戦の意味を帯びた露出傾向すら感じ取られます。

\*

さて、これまでの叙述からわかるように、部屋の主は、部屋にいる場合もあれば、いない場合もあります。それはどうして決められるのでしょうか。冒頭に述べたように、絵を見る者、すなわち語り手は、絵の女性から覗かれる側に身を置くので、覗かれることを受け入れる場合には、部屋主は在室とされ、覗かれることを拒否する場合、すなわち、干渉から反射的に逃げようとする場合には不在とされるのかもしれませんが。少なくとも、そういう観点が有効な場合もあると筆者は思っています。ついであるが、花と花瓶が不在の人の代理となっていると解される物語がまれに生じます。母親と直接的に対決しえない人の、母親への接近法と解してよい場合もあれば、人間関係で過敏に反応し、被害的になりやすいことを表わしている場合もあります。

## 第6節 カード6BM

帽子のつばを握って俯き加減に立っている青年と彼に背を向けて立つ中年の女性が描かれたこのカードの絵からは、両人物は何か深刻な事態のうちにあることが直覚されます。それはどんな事態かを具体的にするのがこの絵での課題です。その際彼らの年恰好が、母親と息子ぐらいであることが、重要な手がかりになります。これにより、母親と息子の間で生じやすい問題状況がテーマとなります。すなわち、息子が母親のもとを去るとき（親捨ての状況）、あるいは、家出同然に去った息子が母親のもとに戻って許しを求めるとき（和解 rapprochement の状況）、あるいは、母親に結婚の許可を求めるとき（母親から別の女性への鞍替え）など、広い意味で母親からの息子の自立が問題となっている状況での母親の複雑な反応が語られるのです。さらに、すでにひとり立ちしている息子が仕事や結婚生活がうまくゆかず、母親に金銭的援助や助言を求めるとのこと（再依存）も、よくある状況の1つです。しかし他方、母親と息子が身近な人、とくに息子の父親であり、母親の夫である人の死を共に悲しむという状況も息子の青年期にはまれならず生じうる状況であり、そのような状況を語る物語も生じます。このような物語と上述のいくつかの物語類型との違いは、深刻な事態が、前者では母親と息子の対決そのもの、つまり彼ら自身に起因するものなのに、後者では、そうではなく、いわば両者の外で生じた出来事だということです。ここでは彼らの対決はありません。彼らはむしろ、それを機に結合を強めるという見方もできます。とくに“父親との不和から家出していた息子が、父親の死の報を受けて、久しぶりに郷里に帰って来た”というような物語に接すると、母子のエディプス的な再結合が連想されます。しかし、上述の違いは、もっと一般的に、語り手（男性）が、一般には他者との、より狭くは母親の人物との直接的対決を行うか避けるかの姿勢を示唆するものと理解しておこうと思います。

以上、比較的頻度の高い物語類型とそれらのおおまかな意味について言及しました。実際の分析・解釈にあたっては、言うまでもなく、もっと詳しく細部に立ち入る必要があります。とくに母親は息子からの申し出にどう反応しているかが重要な着目点です。彼女ははじめショックを受け、呆然とするが、最後には息子の申し出を受け入れるとするのが、好ましい結末であり、最後まで息子の頼みを拒否するという場合には、否定的な母親像の存在が示唆されています。ただし、息子が結婚の許可を求めるとは、ほぼ例外なく、母親は拒否の姿勢を頑なに貫くとされます。母-息子間のエディプス的な強い結合が、語り手に推察されます。

\*

母親と息子の物語では、上に触れてきた物語に窺われるように、一般に母親と息子はほぼ対等であり、母親は息子に敬われるだけの上位にはあると言えるのですが、ときに、母親の絶対的に優位な立場が窺われる物語や、逆の、息子が母親より優位に立っている内容の物語も生じます。母親が一方向的に息子を叱ったり、息子に無理難題を押しつけたりしている物語が前者に属するのは明らかです。息子が青年期の息子らしからぬ、幼稚な粗相をして母親に叱られているとするものがごくまれに生じますが、このようなものでは、語り手の未成熟さすら直接的に伝わってきます。しかし前者はもっと微妙なものも含まれます。それは息子が本当に対峙・対決しなければならない相手から母親によって守られているという趣の物語です。たとえば“息子が交通事故を起こしたので、被害者が談判に来て、

母親が息子に代わって相手をしている”というようなものです。母親は楯となって息子を庇護しているのです。語り手自身の、母親に庇護を求める幼兒的な態度が窺われます。

他方後者、つまり息子の優位が見て取れる物語の例は“息子が認知症の母親を哀れんでいる”というような物語です。これでは、否定的な母親像が示唆されているにとどまらず、母親へのかなり強い敵意が潜在していることから推察されますが、もっと穏やかな物語として“父親が死んで、息子が老いた母親の面倒を見なければと思っている”というものもあります。これが語り手の成熟を示すものなのか、やはり母親軽視の態度を示唆しているのか、容易には判断しえません。

\*

さて、絵の男女の間柄は、実の母親と息子とされるとは限りません。女性は青年にとっての継母、義母、祖母、乳母ないしお手伝い、などとされることがあります。これらは、いずれも母親ではないが母親的存在 (mother figure) と言え、母親と息子の物語に準じて分析・解釈することができます。ただ、多くの人々のように自然に母親と息子の物語にしないのはなぜかを考えてみる必要はあるでしょう。さらに、女性をもっと遠い母親的存在、つまり男性の友人や恋人の母親とすることもあり、このような場合には、母親との対峙・対決が避けられているという印象をより強くします。とくに“男性が友人の死の報を友人の母親にもたらす”というような物語、また“恋人の母親に結婚の承諾を求める”という物語では、間接的な形の母子対決という感じを受けます。

\*

まれに男女は恋人同士とされます。年齢の誤認が疑われるのですが、年齢差を正しく認知した上で恋人とする事例もありました。母体験が欠乏しているがゆえの母親希求の表われと解されます。

\*

男女がまったく無関係な、見ず知らずの間柄にされることがまれに生じます。たとえば“病院の待合室で、診察に呼ばれるのを待っている”というような場面解釈です。冒頭に述べたように、このカードの絵からはごく自然に、男女が共通の深刻な事態のうちにあると直覚されるものなのですが、そういう直覚が働かないということは、対人的共感性に著しく欠けることを意味しているでしょう。これに加えて、母親像が著しく未形成であることも考慮せざるをえません。

## 第7節 カード6GF

このカードの絵では、ソファに座っている、まだ若いといってよい女性が振り返って、背後の、ソファの背もたれ越しに彼女を覗き込むようにしているパイプをくわえた中年の男性を見えています。これを、中年男性に背後から突然声をかけられた女性がはっと驚いて振り向いた図ととるのがほとんどすべての人の共通認知だと思われれます。こういう認知から出発して、女性はなぜ驚いているのか、単に不意を突かれたがゆえの驚きなのか、それとも、それ以上の、男性の話の内容による驚きなのか、その場合には、男性はどんな意図をもって、どんなことを言っているのか、などのことを具体的にすることがこの絵での課題です。その際男性は中年で、女性はまだ若く、2人は父親と娘という年恰好だということが、物語の内容に大きく寄与するでしょう。

物語を、男性の女性への接近の意図の性質によって分けることが可能であるし、またそうするのがもっともふさわしいことであると思われれます。なぜなら“娘的な女の領分への成熟した男の不意の侵入”を表わすこの絵で、酸いも甘いも噛み分けた大人の男がどのような目的や魂胆で娘のような女性に声をかけていると解するか、また、女性は男性にどのように反応、対応するとみなすかということに、語り手の男性像とそれのもとなる父親像が示される可能性があると考えからです。

実際の物語では、男性はしばしば、女性を食事やダンスに誘ったり、彼女に求婚したりする、広い意味での性的誘惑者として現れます。女性の男性の誘いに対する反応は拒否から応諾までさまざまです。女性の態度にも、語り手の女性としての成熟度が示されると思われれます。無視する、逃げる、などの反応は、少女的な反応と言えるでしょう。しかし、男性を性的誘惑者として捉えることには、少なくとも性的存在としての自分の自覚が語り手にあるということの意味するでしょう。

性的誘惑者としての男性は悪者とは限りませんが、ときどき男性は、女性をもの扱いし利用するだけの悪党ともみなされます。すなわち、女性の秘密を握っていて、それをネタに脅している、などとされるのです。この種の物

語では、男性のネガティブな側面が誇張されているという感じがします。語り手がいつもすべての男性を悪者と見ているわけではないでしょうが、時と場合によっては、男性がどうしようもない悪者に思えてしまうのでしょうか。

\*

上述の2つの物語類型では、女性を“ものにしよう”“かもにしよう”という男性の個人的な魂胆が問題になっています。そして男性の魂胆は、たとえ悪意のない性的な誘惑であっても、女性に脅威を与えることがあります。これらと、男性に個人的な魂胆がない点では異なるが、男性が女性にとって脅威となっている点では共通する物語として、女性が男性に秘密の悪を暴露されているとするものがあります。女性は“ある罪を犯して逃げていたが、刑事に発見され、追及されている”というものがその例です。この種の物語では、“悪い”のは男性でなく、女性です。女性はやましさをもっているので、男性の不意の侵入を悪の発覚の到来と捉えてしまったというわけです。語り手自身に同種の発覚の恐怖が微塵も存在しなければ、この種の物語は生じないでしょう。語り手に、超自我的存在の父親・男性像と自責傾向が推測されえます。なお、男性に暴露の意はまったくないのに、女性が見られたいところを見られてしまって驚いているとするものもあります。“男性とデートしているところを父親に見られた”“秘書が仕事せずにくつろいでいるところを突然帰ってきた社長に見られてしまった”などというものがその例です。程度は弱いですが、やはり超自我的な父親像が見て取れます。

\*

これまで論じた物語とは逆に、男性が女性のために支援的に振舞うとする物語が、少ないながら生じます。女性が何かのことで苦境にあって、父親的な男性が女性を励ましたり、慰めたり、あるいは諫めたりするというものや、女性の優れた点を男性が認めて抜擢するというものなどがこの物語類型に属します。語り手が抱くのは良い、肯定的な男性像と言え言えませんが、あまりに良すぎるといのがちょっと気になります。女性の驚きに言及がない場合もあり、男性に対して本来あってもよい警戒心がなすぎることと思わせます。それは、性的存在としての自分の自覚が欠如した未熟さの表われとも解することができるでしょう。

\*

さて、次に取り上げるのは、男性の接近に特別な魂胆も特別に良い意図も認めがたい、しいて言えば親愛の情からの女性への接近が問題になっている物語です。“女性が外出してホテルのロビー（レストラン）にいるとき、彼女をたまたま見つけた彼女の知人がそばに寄ってきて声をかけた”などとするものです。そのあと2人は世間話をして別れるとされるぐらいで、それ以上の特別なことは起こらないのがふつうです。女性の驚きは、不意を突かれたことによる驚きにすぎず、男性自体の与える脅威は問題になっていません。総じて物語の内容は非常に日常的、实际的、散文的で、語り手が、浅い社会的次元で男性の接近を処理できることを示していると思われる。そういう処理が可能になるのは、主観に歪められることの少ない現実的な男性像をもっているから、あるいは（および）防衛がうまく働いているからでしょう。

\*

これまでに論じた物語類型のどれにも属さない稀少反応として、男性の接近を、用件を伝える、知らせをもたらす、など実務的な性質のものと捉えているものや、女性が男性と議論しているとするものなどがあります。前者では、性的存在としての男性に対する防衛や自分の女性性の非受容が示唆されている可能性があり、後者では、男性に対する対抗心が見て取れます。なお、これらにおいては、女性の驚きへの言及がない場合もあります。女性の驚きを見ることはこのカードでの物語作りの前提とも言え、それが欠けていること自体問題をはらんでいると言わざるをえません

## 第8節 カード7BM

このカードの絵の内容については、誰もが、老年の男が中年ないし青年の男の耳元で何かを話しかけている図と受け取るでしょう。一方から他方への行為は割合はっきりしている点で、カード4、6GFなどと共通しています。しかしそれゆえにもう一步進めて、老年の男はどんな内容の話をしているのか、それに対する他方の反応はどうであるか、などについて具体的に述べなければなりません。そうでないと失敗反応とみなさざるをえません。

男たちはふつう、広い意味での“仕事”の話をしていて受け取られ、また、多くの場合密やかに話し合っていると見られます。ネクタイをつけた大人の男たちが顔を寄せ合って話し合っていれば、単なる四方山話でなく、何



か重要な事柄について真剣に話し合っているとるのが自然でしょう。実際若い方の男性は、口元をへの字に結び、正面を見据えた真剣そのものの表情をしています。物語の内容に大きく寄与する要因として、他に男たちの年齢差があります。これによって、仕事上の上下関係、つまり上司と部下、ボスと手下、教授と助手などの身分・地位の差が読み取られるのです。実際に作られる物語を、老いた方と若い方の力関係の観点から識別してゆくことが可能です。

多くの場合、老いた方は若い方を支配しているとみなせます。上司が部下に何らかの仕事上の指示・命令を与えていると見られやすいのです。若い方は、上司の目論見を実現するために使われる存在であるともみなされます。支配の仕方は、有無を言わせない、一方的押しつけから丁寧な依頼までヴァリエーションが認められますが、老いた方の目論見の実現が問題になっているという点は共通です。若い方に関しては、命令されたり、依頼されたりすることに対する反応、対応が問題になります。彼は老いた方に完全に信服していて、その指示を忠実に実行するという趣のある場合もあれば、本当は命令や依頼を受け入れたくないが、力関係上断れないのでしぶしぶ受け入れるという場合もあります。語り手は、若い方の男により強く同一化するものなので、若い方の反応、対応の仕方に、語り手の権威者に対する態度を窺い知ることができます。

しばしば男たちは悪事を密かに企んでいる悪党とみなされます。これは、彼らが顔を寄せ合っていることに密やかさを強く印象づけられて、人に知られてはならない悪事を連想するからでしょう。そこに暴露の不安や欲求の強さを推察することができます。若い方の男がボスの命令を忠実に実行するとされる場合には、権威に対する無抵抗性を感じ取られます。あるいは、語り手は男たちを一括して悪党としてのみ扱い——つまりどちらの男にも強く同一化しておらず——男たちが企む悪事を、自分とは関わりのない世界で起こっていることと突き放して捉えている趣がある場合もあります。その場合には、男性性が未成熟で男性社会に参画していないところを感じ取れます。若い方が老いた方に悪事を強要されたり、乗せられたりしている場合には、語り手 (男性) の彼への強い同一化が感じられ、男性社会への参画の意識は認められます。

悪事の企みの結果にも注意を払う必要があります。企みは結局失敗に終わり、2人とも破滅するのか、若い方は破滅するが、老いた方はうまく立ち回って生き残るか、それとも企みは成功して、悪は栄えるか、などの区別が可能です。最初の“悪は滅びる”式の結末が穏当でしょう。最後の結末は、虚無的で問題です。真ん中の結末からは、年長者への否定的態度が伝わってきます。

\*

上述の物語類型では、老いた方の男の優位性は明らかですが、同じように、老いた方の優位性は明確であるものの、支配というより攻撃が問題になっているとみなされるもの、つまり、老いた方が若い方を責める、叱る、追及するなどしている物語があります。たとえば“刑事が犯人を追及している”というものや、“上司が血気にはやる若い社員を諷めている”というものです。これらでは、語り手にとっての長上者像は、厳しい超自我的なものと言えるでしょう。しかしまれには悪意のある攻撃が問題になっている場合もあります。加害的とすら言える長上者像が伝わってくるのは否めません。

\*

2人が何か困難な事態を打開するために協議している様を読み取った物語も生じます。この種の物語では、地位・身分の差はあっても、対等な相互交渉が印象づけられます。つまり、若い方の男も、その能力を認められているのです。この種の物語を作る語り手には、現実的で良好な権威者像と自己像が推察されます。ついでながら、男たちの職種がなにであるか、何について協議しているかに、語り手の志向する価値領域が示されていることもあります。

\*

若い方の男が仕事や私生活の問題で困っていて、老いた方が彼を励ましたり、慰めたりして支えていると見られることも少なくありません。ここでは、老いた方は、自分の目論見に若い方を従わせるのではなく、若い方の意思を優先し、彼のために、自分の長年の経験で培われた知恵をもって奉仕しようとしていることが特徴的です。語り手の現実の長上者像が表われている場合も、理想の長上者像が示されている場合もあるでしょう。

この種の物語と似ているが区別が必要なのは、若い方が苦境にはなく、むしろ有能なところを見せて、老いた方に高く評価されているとするものです。ときには、老いた方のへつらいも語られます。この種の物語では、優位な立場にあるのは若い方であると言えます。語り手のナルシシスティックな誇大的自己像を感じ取られます。

同じく若い方の優位を感じさせるものとして、若い方が老いた方を無視したり嫌悪したりする物語がまれに生じます。正常な権威者像の形成を妨げる要因があったのではないかと考えられます。

\*

一般的傾向に反して、2人の男性の間に年齢差、それに伴う身分・地位の差を読み取っていないことや彼らの話がたわいのない雑談であるとするのは問題視されえます。前者は長上者像の形成不全を、後者は、社会的成人の世界からの隔たりを示唆しているでしょう。

### 第9節 カード7GF

画面の手前に、人形のような、赤ん坊のようなものを両手にもった少女が、斜め正面を向いてソファの肘掛に浅く腰をかけ、左方を見えています。彼女の右隣では、大人の女性が少女の方を向き、机の上にかぶさるようにして本を読んでいます。このような画面構成から、大部分の人が、大人の女性が少女に本を読み聞かせているが、少女はまともに聞いていないという状況を読み取ります。こういう状況認知をもとにして、大人の女性はどのような意図で少女に話しかけ、少女はなぜ聞く気がないのかを具体化することが課題です。2人の年恰好は母親と小学生ぐらいの娘といったところであること、少女は人形のような、赤ん坊のようなものを持ってはいるものの、自分の顔から離して持ち、しかもそれに目をやっていないこと、大人の女性の服装がメイド風でもあること、大きなソファなど、家具が豪華であることを思わせること、などが、状況の具体化に寄与します。

大人の女性の働きかけは、広い意味での“教育”であることがふつうです。すなわち、教養をつけさせる目的での知的教育、子育ての仕方を教える育児教育、すねて反抗的になった少女をたしなめる感情教育、悪い行いを戒め説教する道徳教育、さらには心身の障害のある子に対する治療・矯正教育などが読み取られるのです。これらのどれもが読み取られるかに、語り手の、教育者としての母親像、およびそれから派生した大人の女性像が示唆されるでしょう。他方、こういった教育的な働きかけを少女が受け入れないのはなぜなのか、また、具体的にはどのように振舞うのかに注目することが必要です。“教育”のそれぞれについて、もう少し詳しく述べてゆきましょう。

\*

まず知的教育あるいは教養教育から。勉強を教えることはもちろんのこと、単に本を読み聞かせるという場合にも、あるいは楽しませようと思って読み聞かせる場合にも、そこに知識や教養を身につけさせたいという読み手側の願いが込められているものです。母親やメイドや家庭教師のそういう教育的意図に少女は応えず、反抗的にそばを向いているとされたり、我慢して聞いているが、心ここにあらずとされたりするのです。“勉強”は誰にとってもいやなものなので、それを受け入れない特別の理由は語られない場合や単に人形で遊びたいから、とされる場合が少なくありません。少女のわがままに言及する人もいます。おそらくソファなどの家具から、裕福な家、雇われた家庭教師、わがままなお嬢さんが連想されるのでしょう。しかしときには、少女の心がほかの何かに囚われていて、そのためにお話を聞くことに集中できないとされることもあります。あとに述べるような、親の愛情についての不満が比較的多く言及されます。これ以外の特殊要因が言及される場合には、語り手の個人的なものの投入が多いということになります。なお“知的教育”が問題になっている場合には、少女の手にするものは人形であるとされることが、赤ん坊とされることよりずっと多いと言っておきます。この点、すぐあとに論ずる“育児教育”の場合と対照的です。

\*

大人の女性がするのは育児教育ないし子育て教育とみなされてよい場合があります。本格的な育児教育と言ってもよいのは、少女が若くして産んでしまった少女自身の子どもの教育の仕方を母親なり乳母なりが教えているとするものですが、これはまれで、たいていは少女以外の人、彼女の母親や姉の子どもを少女が抱いていて、そばの母親や姉、あるいは乳母が赤ん坊の抱き方などについて教えたり注意したりしているというものです。これらをも育児教育に含めることができると考えたわけですが、ただこの場合、大人の女性の本の読み聞かせは、はっきりしなくなりがちであると言っておかねばなりません。あとに見るように、大人の女性は赤ん坊に読み聞かせているというような不自然さも生じます。しかしもちろん少女に人形を持たせて、育児の本を読み聞かせているという場合もあります。

すでに察せられたように、ここでは、大人の女性は少女に子育て教育をし、少女は少女で赤ん坊を育てており、

“子育て”が入れ子になっています。母性というものが、前面に押し出されており、語り手の、そして母親の母性的側面の優越さが伝わってきます。なお、少女が子育て教育を受け入れていないのは、まだ赤ん坊に関心がないから、赤ん坊は親の自分への愛情を奪った当人だから、などとされます。

\*

感情教育が問題になっているものとして、大人の女性が、すねたり、むくれたりしている少女の機嫌を直そうとなどめたり、すかしたり、ときには強く言い聞かせたりするという物語を考えます。この場合、もちろん少女は大人の女性の働きかけに素直に応じていないのですが、後者の働きかけが少女の反抗や無関心を招いたというより、もとは少女の状態に大人の女性に対応したと言えます。このことから、語り手の要求がまじさや扱いの難しさを感じ取れます。少女の不機嫌の原因は、やはり親の愛情についての不満とされる傾向があります。

\*

少女が何か良くないことをしたために、大人の女性が説教・説諭しているとするを道徳教育とすることにはとくに問題はないと思われます。この場合、大人の女性が広げている本が聖書とされることもまれではありません。誰しも説教・説諭されるのはいやですから、少女の反抗・拒否の理由もとくに問題にしなくてもよいようにと思われませんが、自分の行為や欲求の正当性を少女が譲らないという趣のものもあり、それらでは、語り手の自己主張の明確さや強情さが推察されます。

\*

治療・矯正教育が読み取られる場合には、少女があらぬ方を向いているのは、心理的な拒否とか無関心のせいではなくて、視力障害ないし心の障害のためだと解されているわけです。障害への敏感さは、仕事柄である場合もあれば、語り手自身の自己不全感に起因する場合もあるでしょう。

\*

以上に述べてきたような種類の大人の女性の少女への働きかけ以外の働きかけが問題になっている場合には、教育者としての母親像が著しく乏しいといわざるをえません。

\*

他方、冒頭で述べたような物語作りの基本的前提ともいうべき、大人の女性からの少女への働きかけ、および少女のそれに対する非受容や拒否が認められない場合には、問題の反応とみなされます。前者の例として、大人の女性は本を読み耽っていて、少女の相手をしてやらない、というものがあげられます。これでは、読書は大人の女性自身のためのものになっています。子どもへの関心が非常に薄い母親像が推察されます。さらに、大人の女性の関心は少女でなく赤ん坊に向いているとみなされる場合もあります。後者の例として、少女は話に聞き入っているとすものや、ふたりながらのどかに午後の時間を過ごしているとすものなどがあげられます。これらでは、他者への対抗性一般の抑圧や人間関係一般に対する鈍感さが推察されます。

\*

少女が手に持つものはまれに人形や赤ん坊以外のものとされ、その場合には語り手(女性)の母性や女性性の未発達を示唆されているように思われます。

## 第10節 カード8BM

このカードでは、画面の右手前に、まだ若い1人の男性の上半身が黒々と描かれてあり、左手前には、ライフル様のものが、何かに立てかけてあるように描かれてあります。そしてそれらの間に、上半身裸で横たわる人、その傍らでその人腹にナイフ様のものを突き立てようとしている男、それを見守る第三の男がぼかしたように薄く描かれています。さらに、その右方には、戸あるいは窓のようなものが斜めになっているのも部分的に見えます。上述のような絵の各部分が同一の時空間にあるとは思えないので、見る人は戸惑わされるのですが、大部分の人が、もっとも濃く、大きく描かれた右手前の人物を現実の時空間に置き、薄く描かれた手術場面とも加害場面ともとれる部分を、彼が想像する過去あるいは未来の場面とみなします。ライフル様のものは必ずしも物語に取り込まれず、窓様のものへの直接的な言及もまずありません。この絵での最低限の課題は、上述のような絵の形式的統合を越えて、手前の人物と後ろの場面を内容的に統合することです。

手前の人物と後ろの場面を内容的に統合する仕方として、手前の人物を、“切られる人”——手術または加害

または解剖される人を便宜的にこう呼ぶことにします——と直接または間接的に結びつける，“切る人”——手術または加害または解剖する人をこう呼びます——と直接または間接的に結びつける，“切られる人”の側にも“切る人”の側にも属させず、第三者的に“切る”行為にかかわる、とすることが可能です。と は、語り手のほとんど無意識的な“切る”側と“切られる”側への同一化の相対的強さによって決まり、は、どちらの側に対しても同一化が弱いとき生ずると思われまゝ。は、たとえば、手前の青年の父親が医者によって手術されているというような物語であり、は、医者を目指す青年が父親（後ろの“切る人”）のような名医になろうと思っているというようなものです。それぞれ、攻撃性に関する受身性と能動性、苦痛に対する感受性の強さと弱さを示唆しているとみなされます。は、たとえば“テレビでレポーターが手術の様相を解説している”とするものや“ある青年が映画で見た怖い場面を思い出している”とするもので、攻撃性一般に対する防衛的態度——前者ではいわゆる知性化——が感じ取られます。

\*

基本的には上記のような観点から物語を見てゆくことができるのですが、実際に産出される物語は多様で、その都度意味づけを考える必要があります。

のなかでは、“切られる人”を手前の人物と同一人物だとするものと、彼（彼女）の身内、仲間など、彼自身ではないとするものとが区別されえまゝ。前者の方が、語り手の手前の人物への同一化の度合いは強く、それだけ苦痛に敏感といえるでしょう。手前の人物が、自分の過去の苦しい手術体験を思い出しているとするものでは、とくにそれが明らかです。ときに前者、後者を問わず、手前の人物は過去の手術にある種の恨みをもっているとされることがあります。この種のものからは、語り手の被害感が伝わってきます。逆に、手前の人物は自分を救ってくれた過去の手術に感謝の念をもっているとされることがあります。そして、それがゆえに、自ら医者になろうとしていると付け加えられることも少なくありません。この場合には、後述のように、手前の人物は“切られる人”ばかりでなく“切る人”とも結びつけられていることとなります。

では本来、“切られる人”の苦痛に対する共感や回復の祈りなどが手前の人物に付与されるのですが、そうされず、冷淡さや憎しみが付与されることがあります。憎くてライフルで撃った相手が銃弾の摘出手術を受けているとされる場合には撃った方に冷淡さが付与されてもおかしくはありませんが、そういう内容の物語ではない場合にもこのことが認められるのです。このような場合には、その理由を考えてみる必要があります。筆者は、自然な感情の動きが阻害されているのではないかと、自己の感情が信じられなくなっているのではないかとという仮説をもっています。

で、手前の人物は“切る人”の側に属していても、語り手の真の、あるいはポジティブな同一化は“切られる人”の方にあるとみなされる場合があります。たとえば“ナチスの上官が手下を使って残酷な人体実験をしている”というような、多くは手前の人物を殺害や人体実験の首謀者とするものです。語り手は、悪い手前の人物にある種の同一化はしているのですが、共感的に同一化しているのは、殺害や人体実験の犠牲者である“切られる人”であることが伝わってきます。語り手は、かなり被害感の強い人で、攻撃性が他者に投影されるのではないかと推測されます。

手前の人物は、“切られる人”の側にも“切る人”の側にも属していると判断される場合があります。先述した、過去に手術を受けて救われた人が今医者になることを志しているというものがその例ですが、他に、“父親を憎んでいる息子が父親を殺すことを想像している”というような例があります。前者では、“してもら”側から“してあげる”側への健全な変化・成長が認められます。後者では、息子の攻撃性の激しさはサディスティックといえるほどのものですが、身内に対する攻撃であり、マゾヒズムも感じ取られます。

\*

人物はふつう男性と見られるのですが、ときに女性とみなされます。物語の内容にもよりますが、性的同一性の混乱の可能性や女性への否定的感情が示唆されている可能性があります。

\*

医学生が手術を見るのがいやで、背を向けているというように、後ろの場面は現実で、手前の人物は同じ物理的時空間にいるとされることがときどきあります。このような場合には、空想性または内向性の乏しさが推測されます。

\*

手術されている人が息子のことを思い浮かべているというふうには、ふつうとは逆に、後ろの場面が現実で、手前の人物が心像とされることがまれにあります。このような物語について筆者は、語り手はあまりに強く手術または加害の場面に引きつけられ、場面と自分との間に手前の人物を介在させ、彼の立場に移ることができなくなってしまった、それほどに攻撃され苦痛を与えられることに過敏である、と考えます。

\*

ライフルの認知・言及がある場合には、手術の原因となったものとして扱われたり、復讐の手段として処理されたりします。ライフル以外のものに認知される場合や、まったく言及がない場合には、それを意味づける努力も無駄ではないでしょう。

\*

“切る人”の傍らの人物には片腕がないとか、手術は腕の切断手術であるとかされる場合がまれにあります。言うまでもなく、“去勢”を連想させます。身体像へのこだわりを示唆しています。

\*

ときどき野戦病院での応急手術とされたり、昔の手術とされたりします。設備が整っていないことを感じとったがための反応です。加害場面という受け取り方も、そういう細部の認知と関連している可能性があります。語り手が秩序に敏感に反応することを示唆しているでしょう。

#### 第11節 カード8GF

このカードの絵は、椅子に横向きに座った若い女性が背もたれに片肘を突いて顎を支え、何かを見やっている様を描いただけの、すこぶる単純なものです。彼女の髪も服装も特段変わったところはなく、平素のこざっぱりしたものであるという印象です。このような人物のポーズと身なりから、多くの人は、彼女はしばしの物思いに耽っていると受け取ります。その場合には、彼女がどのような境遇の人で、今何を思っているかを具体的に語るのが、語り手にとっての課題となります。

しかし他方しばしば彼女はモデルをしているとも解されます。これら2つの受け取り方の違いの1つは、他者の視線があるか否かということです。前者では、女性は他者の目を意識せずにくつろいだ姿勢をとっているのに対し、後者では、女性は画家の目を意識し、ポーズを作っているのです。物語の違いが語り手の他者の視線に対する構えの強弱から生じたとは断定しませんが、1つの要因ではあるでしょう。2番目の要因として考えられるのは、女性の美しさへの反応の強弱です。女性にモデルを見る人は、彼女を美しいと思うことでしょう。しかし他の人々が女性に美しさを認めないというわけではありません。意識の強弱の問題です。これらのことから、絵を女性がモデルをしているところと解する人は、自意識的で、他者の視線に敏感に反応し、ときにそれに拘束されるが、またそれに向かって自己顕示的にもなる人であると一般的な仮説を立てることができます。

女性がモデルをしていると解されるとき、彼女を描いている画家—— だいたい売れない画家 —— を導入して、彼女と彼との恋愛、彼女の功による彼の画家としての成功が物語の主な内容となる場合があります。借り物の気味はありますが、女性の役割についての語り手の考えを示すものではあるでしょう。

さて、より多数派の、女性がひとり物思いにふけっているとす物語に戻ります。女性の境遇は未婚か既婚か、職業婦人(志望)か家庭婦人(志向)か、職業婦人(志向)の場合、どのような職業を志向しているか、生活は豊かか貧しいか、などの観点から見てゆくことが可能です。ここに語り手(女性)の、女性としてどう生きてゆくべきか、どう生きてゆきたいかという考えが表われているとみなされます。とくに貧しさを読み取っている場合には貧困コンプレックスとでもいうべきものが存在している可能性があります。境遇について述べていないものは、語り手が女性としての生き方に自覚的でないことを示しているでしょう。

女性の物思いの内容は概してとりとめもないものなのですが、ときに将来の夢想・野心や現在の迷い・苦悩、過去の回想など、明確な輪郭をもったものであることがあります。未来の空想において、あまりに現実味のない高望みが語られる場合には、語り手自身の客観性や現実吟味力の欠如を感じさせられます。過去のセンチメンタルな回想は、語り手が気分の人であることを示唆しているでしょう。現在の境遇における充足感を述べたものには、語り手の理想の自己像が、不足感・不幸福感が述べられたものには、現実の自己像が反映されているでしょう。気分の色

合いを何も感じさせないものは、語り手の感情生活の平板さを推測させます。

\*

女性の考えることが、自分や環境についての思いめぐらしではなく、特定の領域の知的活動である場合、たとえば彼女は画家で、絵の構図を考えているとするような場合は、その意味づけが必要です。知性の偏重や生き方の狭隘化などがあるかもしれません。

\*

また、女性がもの思いという内向状態にあるのでなく、何かに注意を惹かれ、それを凝視しているとされる場合には、内向と外向のバランスが著しく崩れ、外向に偏っていることが疑われます。

## 第12節 カード9BM

このカードの絵は、草原に男たちが身体を寄せ合って寝そべっている様を描いています。画面には4人いますが、寝そべっているのは3人で、左手前の後ろ向きの男は頭を起こしています。他の3人が帽子を被っているのに、彼だけが無帽です。このように絵をよく見ると、男たちを区別することも可能なのですが、ふつうはひとまとめにして、男たちの休息の場面と受け取られます。語り手には、男たちはなにゆえに休息しているのか、休息の前の、および（あるいは）休息の後の男たちの活動を具体的に語ることが求められています。活動は、ふつう職業活動、つまり労働であり、したがって男たちの職種をいうことが求められていることにもなります。その決定には、野外であることと男たちの衣服や帽子が寄与します。農夫、牧人（カウボーイ）、兵士、森林警備員、輸送隊、探検隊などとされます。決定された労働の種類・性質には、語り手の関心領域が示唆されている可能性があります。それとは別に、労働がとくに過酷なものか否か、強制されてやるものか否かに注目する必要があります。男たちの職種を具体的にし、休息のあとの再活動をごく自然なものとして述べているもの、はっきり述べていなくても当然のこととしているものからは、語り手に労働というものがどういうものであるかということがわかっていること、言い換えれば、勤勉さの感覚が身についていることが伝わってきます。過酷な労働を強制されているという場合には、強制されること一般に対する嫌悪感や反発心が示されています。絵がサボタージュの場面と解されるときには、それは疑いがないでしょう。さらに兵隊として戦地に駆り出され、遠い故国のことを思っているとする場合にも同じことが言えるでしょう。しかし男たちがサボっているという解し方は、休息に一種のやましさを感じ取ったゆえに生じたものともいえるので、ここから語り手の強迫性を導き出すことも可能でしょう。これは、上述のことと矛盾しません。外からの強制でなく、内からの強制に対する抵抗感を考えることができます。

\*

休息は休息でも、労働以外の活動の後の休息である場合があります。酒盛りの後の休息や一攫千金を夢見ている冒険旅行の合間の休息や逃亡に疲れての休息とするものなどがその例です。このような物語からは、語り手に労働というものの観念が定着していないこと、勤勉さが身につけていないことが推測されるとともに、活動の特殊な性質がもつ意味を引き出すことができそうです。

\*

男たちにそもそも休息を見ないこともまれながらあります。逃亡者たちが身を伏せているとするものや、兵士が敵の攻撃を受けて死んだとするものや、探検隊が食糧難で死に瀕しているとするものなどがその例です。逃亡者たちの潜伏を述べるものは先述の逃亡疲れの休息を述べるものとほとんど同じものと判断されます。ただ前者の方がより直截的に語り手の警戒心を伝えています。男たちが死んだ、あるいは、死に瀕しているとするものでは、なぜ休息しているとしえないかが問題とされていように思われます。動かないでいることが死であるとするならば、語り手の活動への強迫による過活動を推測することができます。物語内容から直接的に伝わってくる無力感や被害感も、このような解釈と矛盾せず、過活動は根底に存在するこれらの感情に対する防衛という見方もできるでしょう。

\*

すでに述べたように、絵に描かれた4人の男たちはひとまとめに扱われるのがふつうで、彼らのうちの1人ないし2人への個別的言及があることは多くありません。言及されるのは、たいてい左端の無帽の男か中央の男です。彼らが仲間のなかでどのような役割を担っているかに、語り手の自己像が示唆されている可能性があります。左端

の男は、しばしば仲間へ奉仕的に働く者とされます。たとえば、仲間が休息している間、外敵に襲われないように、あるいは、牧畜たちに事故が起こらないように見張りをしている、などとされるのです。これには、単に奉仕の精神だけでなく、不安や警戒心も読み取れます。しかし彼はまた、仲間に加わりきれていない者、あるいはまったくの部外者とされることもあります。たとえば、他の3人が眠っている間に仲間集団から逃げ出すとか、冒険旅行の際の野宿で、他の3人は平然と眠りこけているが、彼だけは不安で眠れないとか、されるのです。集団帰属意識が薄弱であることが示唆されているように思われます。

\*

このカードでは、概して物語は単純で短いものです。もし男たちの誰かを主人公にした長い物語が作られたとしたら、例外的反応と言わねばなりません。語り手に作話傾向が疑われます。

### 第13節 カード9GF

水辺を走る若い女性をもう1人の若い女性が木の陰から見ているというのが、このカードの絵の一般的な認知の仕方です。誰も自然に、手前に大きく描かれた木陰の女性の立場に身を置きます。走る女性はなぜ走っているのか、木の陰の女性は走る女性とどういう間柄にあり、なぜ彼女を見ているのか、見て何を思っているか、などを具体的に述べるのが課題です。

2人の間には動と静という大きな対照性があります。水辺の女性はドレスの裾をつまみ上げ、踵の高い靴を後ろに蹴り上げ必死の形相で走っているのに対し、木の陰の女性はじっと静止して見ている感じです。この“動”と“静”の対照性をどの程度感じ取るかによって、物語の内容は変わってくるでしょう。対照性をもっとも強く感じ取ったものとして、それを敵対関係にまで高めたものが考えられます。敵対関係にまではしていないが、2人の性格の違いを述べたものはそれに次ぐとみなされます。敵対関係は、2人の年恰好が似通っていることもあって、ライバルの関係とされる傾向があります。しばしば2人は1人の男性をめぐる争っているとされます。この争いは相互的な場合もありますが、水辺の女性の方が攻撃的であるとされる傾向があります。言うまでもなく、それは彼女が“動”だからです。しばしば彼女は、悪い性格の女性で、自分の好きだった男性が良い性格の木陰の女性を選んだことに怒り狂い、彼女をとっちめてやろうと探し回っているとされます。ライバル関係というより、いじめ-いじめられる関係であることもあります。やはりいじめる方はたいい水辺の女性ですが、木陰の女性は日頃のいじめの仕返しに悪巧み——たとえば、相手の大切なものを隠すとか——をし、その結果を見届けようとしているとされることもあります。

以上に述べた物語類型からは、人と人との関係への関心が強いあまり、主観的、感情的に反応しがちな人が思い浮かべられます。これに対して、2人のうち一方は積極的、行動的であるのに対し、他方はおとなしく、控えめであるというふうに性格の違いを述べながら、2人を敵対関係にあるとはしないもの、否、一方が他方に好意的であるとさえするもの、などからは、人間関係への強い関心はありながら、知性的、客観的でいられる人が想像されます。2人を敵対的と見る人のなかには、現実の人間関係で敵対的になりやすい人も含まれているでしょうが、まず言えることは、上述のような、主観的、感情的反応傾向であると筆者は思っています。

\*

次に述べるのは、2人の動と静という対照性を、それ以上に意味づけせずに、事実的に受け止めている物語です。たとえば、木陰の女性が知人ないし友人の良くない行為ないし恥ずかしい行為を偶然に目撃してしまったというような物語です。片や傍観者で片や行為者です。この物語では、まだ木陰の女性に潜在的なライバル意識を見取ることができますが、多くの場合それすらなく“木陰で静かに読書していたら、騒がしい足音がするので下を見たら、1人の女性が血相を変えて走って行くのが見えた”とし、あとはせいぜい“誰かが溺れたので救助に向かって”などと走る理由を述べるぐらいの、淡々とした反応です。この種の反応では、2人は見ず知らずの間柄であることが多く、たとえ姉妹や友人としても、それは内容に影響を及ぼしていないという印象が強いものです。このように、2人の対照性を動と静のそれ以上に意味づけないということは、取りも直さず、2人の間に個人的な関係を想定しないということです。逆に言えば、あまり人と人との関係に関心が強くない人は、動と静の対照性を、その事実を越えて強く意味づけることもしない、ということになるでしょう。

\*

2人の動と静という対照性すら十分に感知されていないと思われる反応について述べます。それは、2人が同じような行動をしている、あるいは同じような気分・感情のなかにいるとみなされる反応です。たとえば“お嬢様が忘れ物をしたので召使が届けようとして追いかけている”とか“クラスメートの2人が午後の授業開始時間に間に合うように必死で駆けている”とかいうようなものです。前者では身分の対照性は認知されていても、一方は他方に同調的です。動と静という対照性は消えていると言えるでしょう。後者では2人の違いはもってなくなっています。これらにおいては、2人はたとえ主人と召使の関係や友人関係にあっても、彼女らの間の個人的関係はほとんどまったく問題になりません。上の例で召使はお嬢さんの世話を焼いていますが、それは個人的関係ではなく役割——保護者的役割——の遂行というべきでしょう。概してこの種の反応では、語り手自身2人のどちらにも強くは同一化していないという印象があります。語り手自身が単に彼らの傍観者のようです。このことをもっとも端的に示すのは、2人の他に同じように走っている人々が近くにおり、2人はたまたま画面に収まっているだけとするものです。ここまではっきり述べているものは少ないのですが、その気味はこの物語類型の多くのものに多少ともあるのであり、したがって、この物語類型は、すぐ前に問題にした物語類型以上に、一般的には対人関係への、特殊には女の子同士の関係への関心の希薄さとそれゆえの鈍感さを推測させます。

\*

ところで、絵のなかの2人の女性の間柄は、友人、仲間、姉妹などとされやすいのですが、すでに掲げた例のように、召使とお嬢さんとされることもままあります。これは2人の服装の違いに着目してのことでしょうが、身分の違いへの敏感さがそうさせるのでしょう。まれに2人は母親と娘ともされます。木陰の女性を母親とし“母親が娘に勉強させよう、しつけをしようと、逃げる娘を追いかけている”などとするものです。大勢に反して親子と見るところに、語り手の心理的自立の未達成と女性像の未発達を推測されます。

\*

さらに、2人を実在の別人物としないで、一方（木陰の女性）を同一人物の現実の姿、他方（水辺の女性）をその仮象、つまり映像、画像、心像、幻影などとするものにまれに出会います。木陰の女性が、水に映る自分の姿を見ている、自分を絵に描いている、夢幻体験のなかで自分のもう1つの姿を見ている、などとされるのです。これらでは過剰な自意識が示唆されているように思われます。

上述の絵解き自体、絵のなかの木は木と見られているかどうか怪しませるのですが、はっきりと、木の部分を世界の裂け目、2つの世界を分け隔てるもの、などとしているものもあります。自分が自分を見るという物語も、本来こういう見方から発しているのではないかと思わされます。このような観念的な把握をすること自体、現実感覚が揺らいでいることを推察させます。

#### 第14節 カード10

このカードの絵は、相近接した2人の人物の頭部を闇から浮かび上がらせる形に描いています。右側の背の低い、ふっくらした顔立ちの人物が左手を左側の背の高い、頬がややこけた人物の胸に置いているのが見えることから、ほとんどすべての人が、2人は抱擁し合っていると解し、しかも大部分の人は、男女の抱擁とみなします。さらにそのうちの大半の人が、2人を中・老年の夫婦や恋人とみなします。2人を包む闇のせい、たいていは、何らかの悲しい事態のなかでの、あるいは、悲しい事態が去ったあとの抱擁が読み取られます。人物の年齢、性別を考慮して、どのような関係にある2人がどのような事情のゆえに抱擁しているかを具体的に語るのがこの絵での課題です。

抱擁の背景事情として語られやすいのは、別離、再会、片方あるいは両方に生じた不幸な出来事、とくに大切な人の死や病気、などです。いずれも頻度が高いので、基本的な設定だけからは、ノーマルという以上に意味づけるのは困難です。ノーマルというのは、男女間の愛と信頼の関係の存在を肯定し、受け入れているということです。これ以上に意味づけるなら、別離なら、その理由、再会なら、それまでの別離はなにゆえだったか、不幸なできごとゆえの抱擁なら、どのような不幸であるか、を考慮することが必要です。別離の理由としては、夫ないし恋人の出征や出稼がしばしばあげられますが、特別なものでないがゆえに個人的な意味は薄いとみなざるをえません。2人の際・結婚に対する親や周囲の反対が時々語られます。この場合には状況は密会の様相を帯びており、そこから、性愛が語り手にとって禁じられるべきものとなっていること、また、性愛をそのように受け取るように仕向



けた親の厳格な教育方針への反抗心があることが推測されます。不幸な出来事として語られやすいのは、2人(夫婦)の子どもの死や病気です。これまた頻度は低くないので、個人的な意味は見出しにくいのですが、語り手の子どもへの強い同一化が感じ取られ、親の愛情をめぐる語り手の思い、つまり親の愛情に対する欲求、親に対する忘恩の後悔などが読み取られる場合もあります。

まれですが、ふつうの意味での再会というより、心理的な意味での再会とみなされるのがよい物語に出会います。それまで仲違いしていた、あるいは誤解しあっていた2人の和解・仲直りを内容とする物語です。語り手の心理的な繊細さ、それゆえの傷つきやすさが伝わってきます。

\*

先述のように、2人の人物は、男女、それも中・老年の男女と見られやすいのですが、左の人物が老女と見られたり、右の人物が男性(主に男の子)とみなされたりすることがあります。前者は決してまれなことではないので、性別の誤認とはみなせず、後者だけがそれに相当するでしょう。前者は、男性の役割も兼ねた偉大なる母親への希求を推測させる場合があります。後者は、語り手の女性像、男性像が多かれ少なかれ一般と異なることを意味するでしょう。もしかなり幼い子が見られているなら、後述のように、語り手の自己像の幼さも問題となりえます。

\*

2人の抱擁の背景に悲しい事情があるとされるのがふつうであることはすでに述べましたが、そうでない場合もあります。たとえば、幸せいっぱい若い男女の愛の抱擁を見たものや、夫婦の習慣的な抱擁を見たものがその例です。これらでは、情愛面の未分化、その細やかさの欠如、あるいはその抑制が推測されます。しかし他方、同じように特別の悲しい背景事情には言及していないながら、語り手の情緒面での分化・発達を示唆している物語があります。それはたとえば“長年連れ添ってきた中年の夫婦が今ふたりだけになって愛を確認し合っている”というようなものです。これからは、2人して乗り越えてきたさまざまな悲しみや悩みが、述べられるまでもなく感じ取られます。具体的な悲しい事情を述べる物語以上に情愛面の成熟が示唆されています。

右の人物が幼い子と見られて、その子が父母や祖母に愛撫されているとするような場合には、幼児への強い同一化から、語り手が無意識的に非常に幼い自己像を抱いていることを推測してよいでしょう。

ごくまれに絵は同性愛者の抱擁と解されます。語り手の現実の同性愛志向を明かしている場合があります。

\*

これまでは、あたりまえの抱擁、つまり、愛と信頼を前提にした抱擁が問題になっている物語について述べてきましたが、そうでない抱擁がごくまれに語られます。片方、あるいは両方が愛情を装っているとされたり、吸血鬼が血を吸おうとしているとされたりするのです。皆がごく自然に愛と信頼を感じ取るところに敢えて憎しみや不信を見ることは、語り手の情愛面での屈折した心情を表しているでしょう。

\*

まれに、2人の中の大きな影の部分が自然な抱擁を見ることの障害になる場合があります。すなわち、口がないとか、舐めあっているとか、食べ物を食べあっているとか、果てはアクロバティックな姿勢で抱擁しているとか、異様な知覚が生じてしまうのです。やはり情愛面の著しい未分化・未発達が問題になっていると思われるのですが、知覚の異常なので、問題はより深いとみなすべきだと思います。

## 第15節 カード11

このカードの絵は、これまでのものとはかなり異なっています。すぐそれとわかる人間が描かれていません。描かれているのは、人に危険を予感させ、恐怖を呼び起こす自然の情景です。断崖絶壁に沿って細い石畳の道が続いています。道の上方には洞穴があり、そこから竜が首を長々と下に伸ばして、あたりを窺っています。竜の下方には大きな岩がごろごろと転がっています。道の行く手には小さく、四足獣とそれにすがりつく人のようなものが見えます。その先にはアーチ型の橋があり、橋の上に人影を見ようと思えば見えなくありません。

以上は筆者なりに試みた絵の客観的な描写です。それでも、多くの人の実際の物語を考慮に入れると、すでに個人的な見方が混じっていることを認めざるをえません。このような、細部がはっきり何々と同定しがたい絵の性質からして、絵の主要な要素を取り込んだ、大多数の人に共通の状況認知というものを提示しがたいと言わねばなりません。語り手は、そういう物語作りの基本的前提というべきものを欠いた、頼りない事態のなかで、自分なりに

細部を同定していき、それらを統合して絵全体が表す状況を具体的に述べることを要請されています。その要請に応えるには、自信、自由さ、統合力などが必要ですが、それ以前に絵が喚起する不安や恐怖に耐える力が必要でしょう。

以下に、一般的な捉え方と言えるほどではありませんが、比較的頻度が高い絵解きとそのヴァリエーションを挙げながら、分析・解釈のポイントを示してゆきましょう。

\*

絶壁の高所にある洞穴から首を出して下方を窺う竜を認知し、人や動物が、竜に襲われること、竜と戦うこと、などを主要な内容とするものがあります。この種の物語は竜という架空の生物を含んでいるというだけの理由で、少なくとも語り手に、ファンタジーを受け入れるだけの柔軟性を推定させてくれます。がちがちの現実主義者ではないということです。

“人（々）が牛（馬）に荷物を載せて通りかかったとき、突然竜が現れ、襲ってきたので、人（々）は逃げ惑っている”というのがもっともありふれた解釈です。人（々）と牛（馬）はどうなるのか、生き残れるのか、それとも全滅するのか、など結末に着目する必要があります。あまりに悲惨な結末は、強い破壊衝動やニヒリズムを示唆しています。

突然現れた竜に恐怖反応を起こした牛（馬）を人（々）が制御しているということを主な内容とする物語があります。これは、後述の、険しく狭い道であるがゆえに脅えて動かなくなった牛（馬）を人（々）がなだめているという物語と同様、自らのなかの動物的部分、すなわち衝動や情動のコントロールが関心事であることを示唆しているでしょう。

竜に偶然襲われるのではなく、人々に危害を及ぼす悪い竜を勇敢な人が退治にやってきたとするものにも時々出会います。これは上述の物語と比べると、ありふれた英雄譚を拝借してきた感がより強くします。それゆえ物語のなかの人（々）は能動的、意志的ですが、語り手がそうとは限らないでしょう。むしろ逆であることもあるでしょう。

これまでの物語では、竜は悪い生き物、つまり害獣として扱われているのですが、それを否定する物語にまれに出会います。まず、人が竜の生息する領域を思慮なく侵したために竜が怒って人を襲うとすることがあります。この種の物語では、語り手が竜に加担しているような趣があります。自己を他者の侵襲からまもろうとする意志、一種の人間嫌いが感じ取れます。次に、人は竜を見て恐怖しているが、竜は人を襲う気はない、ただ好奇心から出てきたただけなのだとする物語があります。この種の物語も、他者の自分への過剰な反応をいやがる傾向を推測させます。ただ、力の意識を前の物語より感じさせます。しかし他方、この種のもは、本来恐ろしいものの恐ろしさを否定する防衛工作を示唆しているともとれます。

以上は、絵のなかに人と竜を認知して生じた物語ですが、このヴァリエーションとして、人を認知せず、上述のような人と竜とのかかわりを、牛や馬などの動物と竜との間に見るものがあります。その際動物の擬人化が強くなることもあります。人を認知せず動物のみ認知して、その動物を擬人化することの一般的な意味については確信をもって言えませんが、それは絵の不安や恐怖を呼び起こす場所から心理的に距離をとることであり、その意味で不安耐性がやや弱いことを示唆しているのではないかと筆者は考えています。それはともかく、人を認知しないがゆえの、特殊な趣の物語も生じます。それは、竜と動物が領地をめぐって戦っている、などとする物語です。食うか食われるかの戦いではなく、覇権争いを見るところに、語り手の権力志向が表れている可能性があります。

\*

竜という架空の動物を認知しないで、人が動物を連れて危険な山奥の道に行く困難を述べた物語もかなり頻度が高いものです。竜に見られやすいゲシュタルトは、切れた吊り橋の一部や上に向かう急な坂道と同定されるか、まったく触れられないで終わるかします。非現実的な要素はまったくなく、語り手の現実主義を感じさせます。難所の通過に成功するか、挫折するか、それはどのようにしてか、という結末部分を考慮する必要があります。

吊り橋が切れて人が転落して死んだ、負傷したという結末は良い予後のサインではありません。

やはり人を認知しないで動物のみ認知し、動物を多少とも擬人化して、難所の通過や難所への迷い込みを述べる物語も少なくありません。意味づけは人を認知した物語に準じます。

\*

人を認知し、人が竜とではなく、牛や馬などの四足獣と争っているとされることもあり、まれに人間同士の争いをテーマにした物語に出会います。後者は、人が格闘する対象が竜でもなく、難所という物理的困難でもなく、同じ人である点が特徴です。絵が表わす凄みのある大自然に人間同士の争いはそぐわないという感じは否めません。語り手は人間同士の争いにとくに敏感に反応しやすい人であろうことが推測されます。

\*

絵のなかに人も動物も認知しないことは、問題を感じさせます。そもそも人や動物が存在しなければ物語は成立しません。せいぜい、画面のこちら側に人がいて、危険な場所を見ているというぐらいしかできません。したがって、たいていは失敗反応とみなさざるをえません。ただ不気味な、恐ろしい場所とするだけのものでも、まだ感性の健康さを感じさせますが、感情的にニュートラルな情景描写をしていたり、観光客が来る景勝地を見たりしている場合には、感性の鈍磨を疑わざるをえません。

\*

人や動物を認知しないのも知覚の異常と言えないこともないですが、より積極的に絵の細部の特異な認知が示されることがままあります。その際周囲の事物と大きさやその他の点でアンバランスが認められることが少なくありません。それらは語り手のなんらかの問題を示唆していますが、認知されたものから、その都度意味づけを試みるしかありません。

\*

知覚の異常とは言いにくいのですが、絵全体が劇の舞台のような作り物に見られることがあります。脅威を与えるものからその現実性を奪っている点に、防衛工作を感じ取ることができます。

#### 第16節 カード12M

このカードの絵では、一人の老人が、横たわる人の足元の方において、その人の顔の方に手を差し伸べています。横たわる人は短髪でネクタイをつけており、目を閉じ、片膝を立てています。老人は後ろ向きで、顔は見えません。老人は一体何をしているのか、何をしようとしているのかを具体的に語ることが、この絵での課題です。

大部分の人は、病める人への治療行為を連想します。そのうちのまた大部分の人は、専門家による催眠術を使つての心の治療ないし呪術を使つての難病の治療とします。残りの方々は、近親者による看病とします。語り手のなかの何がこのように絵解きを分けるのかということが問題になります。

催眠術や呪術は、心によって他者の心の奥深くまで浸透し、それを大きく動かすものと言えます。そういうことが可能であること、そういうことを可能にする人がいることを少なくとも知っていなければ、たとえ催眠術ということばやその仕草を知っていても、それらによる治療の物語は作られないでしょう。後述のように、催眠術の実演や実験という受け取り方もありうるのです。他方、心を動かす催眠術というものを知識として留めるのは、心というものへの関心がそれだけあるということでしょう。あるいは心が種々の行動のもとであるという自覚があることだと言い換えてもよいでしょう。したがって、催眠術や呪術による治療の物語を作る人は、心への関心があり、心によって心に影響を与えることが可能であるかもしれないと思っている人であると、ごく一般的に意味づけられるのではないかと思います。物語の結末部分における治療の成功、不成功が、治療に対する語り手の信用度を示唆しているでしょう。なお、催眠術治療の物語では、治療を受ける人が自主的に受けに来たかどうかにも着目すべきです。語り手の内面的問題を自覚する力についての示唆が得られるのではないかと思います。難病に対する呪術治療の場合には、患者本人が自ら求めて治療を受けるといふより近親者が受けさせるという趣が強く、患者は受動的なものです。これら2種類の物語の意味を分かち重要な点の1つはここにあるのではないかと筆者は考えています。

\*

看病・看護は、催眠術や呪術による治療のように、病める人の心に深く立ち入って大きな影響を与えることはいえるでしょう。むしろそれは、病める人の周りにいて見守り、必要な世話をするということです。治療の専門家でなく、身内の者にでもできること、否、身内の者だからできることでしょう。そして男性よりも女性に向いたことでしょう。絵からこのような看病・看護を連想する人は、人間のもっとも基本的な欲求である、見守られ、世話されることを必要としていること、あるいはそれこそが重要と考える人なのではないでしょうか。絵の老人は、病める人の父親や祖父とされることが多く、病気の息子や孫の熱を計ろうとしている、などとされます。

ときどき、看病の場面というより、病める人の死を嘆いている場面といった方がよい場合がありますが、このような物語からは、看病する老人の無力さが伝わってきます。概して、近親者による看病を内容とする物語からは、語り手に、強力な精神的影響力をもった父親像が存在するようには思われぬものです。

\*

絵の老人が病める人の近親者であって、しかも催眠術をかけているとされることはごくまれにしかありません。現実に親が催眠治療者であることは非常に少ないということのせいもありますが、それだけではなく、人は、おのずと家庭における親の役割と社会における権威像の役割とを分けて考えるものだからではないでしょうか。もし上述のようなことがあったら、それは成長に伴う権威像の変遷がうまくいっていないことを示唆しているでしょう。

\*

ときに老人の精神的感化力に神秘性が付与されることがあります。すなわち“どこからともなく不思議な老人が現れ、病める人に癒しを与えたあと、またどこへともなく消え去る”といった物語に出会うのです。このような老人にはいわゆる老賢者の趣があり、語り手が、精神的影響力をもった父親的存在を求めて得られないことを示唆しています。不思議な老人が、病める人の今は亡き父親であるとされる場合もあることから、そう言ってよいでしょう。

\*

この絵で広義の“治療”を見ないことは少数派に属します。治療という善意的行為とは逆の、危害を加える悪意的行為を見る場合と、治療でも加害でもないニュートラルな行為を見る場合とが区別されます。前者の例は、眠っている間に絞め殺そうとする、催眠術で眠らせて秘密の情報を聞き出す、などというものです。睡眠ないし催眠状態という受身的で無防備な状態にあることの危うさを感じとったゆえに生ずる絵解きと思われ、語り手の対人的不信感や警戒心が伝わってきます。

後者、すなわち治療でも加害でもないニュートラルな行為とは、催眠術の実験・実演をすることや眠っている人を起こすことです。前者では、たいてい人々に見せることが目的となっており、物語の主人公は施術者です。この点で、語り手は病める人の方により強く同一化しているとみなされる、“治療”を内容とする物語とは異なります。それゆえ催眠術実験・実演の物語から語り手の自己顕示性を読み取ることは無理なことではありません。

単に眠っている人を起こすとするだけのものや、眠っていることを確かめようとしているとするものは、ほとんど失敗反応です。それ以上に意味づけられないという点に、広義での“世話し世話される”経験がきわめて乏しいことや対人的かかわりの弱さが推測されます。ただ、眠っている人へのいとおしい気持ちから顔や身体に触れようとしているとするものでは、このような解釈は控えるべきでしょう。

\*

横たわる人はたいてい男性、それも若い男性と見られるのですが、女性、それも中老年の女性と見られることもままあります。これを性の誤認としてしまうことは躊躇されますが、やはり語り手の男性像、女性像が一般とは異なっていることを示唆しているでしょう。それと、手前の人物が老人だから、もう一方の人物も同じ老人にしてしまうという、ある種の精神の怠惰さも感じられなくはありません。

## 第17節 カード12F

このカードの絵では、画面左手に女性と見える人物のほぼ正面向きの上半身が配され、そのすぐ右隣に黒い頭巾を被った修道女風の老婆の顔が配されています。2人は直接的にかかわり合っていないのですが、距離的に非常に近接して描かれ、老婆は左側の女性のすぐ後ろにいるかのようです。しかも老婆の手と表情はなにやら思わせぶりです。それで、2人を無関係とするのではなく、一方が他方にもつ意味に言及することを求められていると誰しも感ずるはずで

実際に作られた物語から、老婆が左側の女性に対してもつ象徴的意味が問題にされやすいことがわかります。それは、老婆が見る者に強いインパクトを与えることと、老婆が実在の人間にしては他方の人物に近づきすぎていることからくるのでしょう。さらに、意味づけに際しては、老婆と他方の女性との間の年齢差、つまり一方は明らかに老いているのに、他方はまだ若いということが大きく寄与することがわかります。

老醜ということばがあるように、「老」は「醜」を連想させる力をもち、また醜悪ということばがあるように

「醜」は「悪」につながりを持ちます。実際にこの絵で作られる物語の大部分は、老婆を他方の女性に不幸や不運をもたらしたり、彼女を悪い行いに導いたりする邪悪な存在であるとするものと、他方の女性にとって厭わしい醜さの象徴的存在であるとするものからなります。これら2種の物語の違いは、2人の人物を善悪の次元で対比しているか、それとも美醜の次元で対比しているかの違いといえます。ここにおおまかにではありますが、語り手の価値判断の規準が示されている可能性があります。これらのいずれの次元でもなく、2人を単に老若の次元でのみ対比しているものにもときに出会いますが、この絵ではそれ以上の対比づけが求められているわけで、このような反応は記述水準の失敗反応に近いものといわねばなりません。

\*

2人を善悪の次元で対比させている場合、“悪”は外在的か、つまり若い方の人物の外から襲来するものか、それとも内在的か、つまり彼女(彼)の内部に存在する彼女自身の一部であるかに注意を払うことは意味のあることだと筆者は思っています。前者の例は“悪霊がとりついたために身に不幸が生ずる”とするものや、“魔女がよからぬことを吹き込んでいる”とするものです。これらでは、語り手が、自分を“善”の側に位置づけ、内なる“悪”を十分に自覚していないがゆえに、“悪”に対しては被害的に振舞う傾向が示唆されていると、ごく一般的に意味づけることが可能です。後者、すなわち“若い方の女性の心の邪悪な部分が老婆の姿に具現化されている”とするような場合には、語り手が、内なる“悪”を自覚しうるだけの、客観的な内省力をもっていることが示されていると言えます。しかしなかには“若い女性が何か良くないことを考えると、どこからともなく魔女が現れる”というように、“悪”が内在的か外在的か区別しえず、移行的であるとみなさざるをえない場合もあります。上掲の2つの物語と似ているが区別が必要なものとして“若い方の女性は裏表のある人で、老婆こそ邪悪な彼女の真の姿である”とするものがあります。この種の絵解きからは、人間誰しものもつ二面性を客観的に容認するのではなく、それを批判・糾弾し、暴露しようという、二面性に対する過敏な反応性が強く伝わってきます。

\*

2人を美醜の次元で対比させている物語は、たとえば“若い女性が鏡を見ていたら、自分の年とったときの顔が映ってぞっとした”とか“女性が鏡を見て化粧していたら、母親がたまたまやって来て、一緒に鏡に映った。女性は数十年後には自分もこうなるかと思って心が沈んだ”とかいうようなものです。このようにしばしば鏡への言及があります。鏡は、その前で女性が美しくなるうとするものであり、美醜の次元が問題にされる物語で、鏡への言及が少なくないのは興味深いことです。もっとも、鏡への言及は、この物語類型に限らないということを言っておきます。

この物語類型のもう1つの特徴は、語り手の、若い方の女性に対する否定的な反応と老婆への同情的、肯定的な反応が見取れる場合があることです。たとえば“貧しい老婆が施しを求めてきたが、若い女性は、蔑んで相手にしない”などというものにそれは見て取れます。老婆への肯定的同一化についてはあとで述べるので、ここでは、美の志向は、必ずしも単純でなく、アンビヴァレントでもありうるということを言っておきましょう。

\*

これまで取り上げてきた物語類型と似ているものの、それらに含めるには単純かつ表層的過ぎる物語にふれておきましょう。それは、“若い女性が自分にとりついた奇怪な老婆の存在に気づき、失神してしまう”というようなものです。これでは、老婆は“悪”とも“醜”とも意味づけされておらず、しいて言えば“怪”の次元に留まっています。語り手は、観念の発達が弱い、表層的に反応する人ではないかと思われる。

\*

さて、これまでは、老婆が若い方の人物にとって否定的な意味をもっているとする絵解きについて述べてきましたが、この絵で出会う絵解きはそういうものばかりではありません。むしろ逆に、老婆が若い方の人物に対して肯定的な意味をもっていると捉えられる場合が少なくありません。すなわち老婆は若い方の人物を守護する背後霊であるとされたり、彼女(彼)の悪い行いを戒める超自我的存在とされたりするのです。このような内容の物語は、老人一般、あるいは老いることにある種の親和性をもつがゆえに生ずると思われる。そしてその親和性は、老人に知恵や私利私欲を離れた達観などを感ずるがゆえに抱かれるのでしょうか。老婆の肯定的な捉え方と呼応するように、若い方の人物が否定的に捉えられている場合があります。上掲の例のように、彼女が自分の美しさを鼻にかけて、老婆を蔑んでいる、とするものです。まだ若い語り手がこのような絵解きを示すなら、女性性をめぐる葛藤、

もっと端的には母親との葛藤が存在するのではないかと推測してみてもよいでしょう。

\*

その他、娘と母親の現実の共生的・癒着的関係を述べているもの、嫁と姑の現実的な敵対関係を述べているものなどがあります。老婆が非実在の象徴的存在とされやすいこのカードでのこうした日常的、実際的な物語は、語り手の概念化や抽象化の能力の発達に疑問がもたれます。

\*

すでに触れたように、この絵で、老婆がもう一方の女性に対してもつ意味を明らかにしそこなっているものは失敗反応に数え入れられます。母娘が写真を撮ってもらっているとすると、双方がただ同じ場所にいるとするものも同様です。このような絵解きにおいては、人と人との関係一般、あるいは(および)特殊には母親と娘の関係に対する感覚が麻痺しているとすら言わねばなりません。

\*

若い方の人物はたいてい女性に見られるのですが、男性、ただし女っぽい男性とみなされることもままあります。語り手の女性像の許容範囲が一般より狭く、男性像のそれが広いということでしょうか。

#### 第18節 カード13MF

このカードの絵では、ベッドに女が胸をはだけて横たわっており、彼女の手前にはこちら向きに男が立って、右腕を顔に押し当てています。いったい何が起こったのか、男は泣いているのか、泣いているとしたら、その理由は何か、それとも眠たくて目をこすっているのか、それならどういう事情でか、などのことを具体化することが課題となります。その際、裸体の女の右腕が力なくベッドから床に垂れていることや男がネクタイをつけていることが、大きく寄与します。前者は女の死や失神状態や深い眠りを、後者は男が外から部屋に入ってきたばかりであること、あるいはこれから外に出てゆこうとしていることを連想させるのです。

よく出会う絵解きは、“男女関係のもつれから、男がかつとなって恋人(愛人、妻)を絞め殺してしまい、後悔の涙にくれている”とするもの、“外からやって来た男が、妻(恋人、愛人)が死んでいるのを発見し、嘆き悲しんでいる”とするもの、“男女が一夜同衾し、翌朝男は眠い目をこすりながら会社にゆく(帰ってゆく)”とするもの、“男が女に関係を拒絶されて泣いている”とするもの、および“男が酔いの勢いで女と同衾してしまったことを後悔している”とするものです。

では、絵が喚起する性愛と攻撃性という人間の二大衝動のどちらもが明確に表わされています。語り手自身が性的な面でも攻撃的な面でも無意識的に防衛を働かせる人でないこと、言い換えれば、男女関係におけるいざこざに理解を示せるだけの心理-性的発達を遂げていて、かつ感情にも身を任すことがあることを推論することができます。では、強姦され殺されたというように、明らかに性的な要素が含まれている場合もありますが、概してそれは後退しています。女が病死したというものでは、ほとんどまったく性的な要素はなく、単に殺されたとするものでは、性的要素をまったく否定することはできませんが、少なくともそれは潜在状態にある、あるいは後退しているといえるでしょう。二大衝動のうち、性の方に対し抑圧的であることが感じ取られます。しかし、この種の絵解きを示す人には、性に対してばかりでなく、攻撃的行為に関しても防衛的であることが察せられます。死因を他殺としても、と異なり、殺害者は第三者であるからです。では、性的要素が前面に出ていることは明らかですが、女は単に眠っているだけであり、死んでいるのでも、失神状態にあるのでもないことから、攻撃的要素はまったく影を潜めていると言えます。少なくとも、語り手に無意識的な性の回避傾向はないとみなされえます。では性愛関係の破綻が問題になっていますが、と異なり、男は女に対し攻撃的に出ていません。ただ嘆くばかりです。語り手のもつ受身的で弱い男性像と自己主張する強い女性像が推測されます。女は眠ってはいず、目覚めているらしいことも、強い女性像を示唆しています。も、性的要素が前面に出て、攻撃的要素は認められない反応です。男女が夫婦でも恋人同士でもない点が特徴的です。語り手が絵の含む性的刺激から受けた衝撃が物語の内容に反映しているという趣があります。語り手には性愛に対して欲求と罪悪感が並存しているのでしょう。

\*

この絵での物語の大部分は、以上の5つの代表的な絵解きのどれかに類しています。以下には、それぞれに似てはいますが、区別が必要な物語を取り上げてゆきます。

のような、絵の男性が女性を殺したとする物語類型には、逆上しての殺人ではなく計画的殺人を述べるものが含まれます。このようなものからは、語り手の冷情性が伝わってきます。殺人の打算性の有無、殺人のあとの男の感情的反応と行動などを考慮して物語を解釈する必要があるのは言うまでもありません。

のような物語類型における女の死因には、すでに述べた他殺、病死の他に自殺がありえます。自殺は本人の意志によるものであり、したがって自殺とすることは他殺とすることより、絵の女性への強い同一化を感じさせます。とくに自殺が男性への無言のアピールとみなされる場合には、いわゆる受身的攻撃性が読み取れます。

女が殺された理由が自発的に述べられることはまずないですが、女が男には隠していた行動により人の恨みを買って殺された、などとされる場合もあります。このような場合には、語り手の女性への不信と攻撃性が見て取れます。

女が死んだことの悲嘆より、最初に死体を発見した恐怖や殺人犯の疑いをかけられる懸念を男に付与する物語にまれに出会いますが、これらでは、真の関係性の障害や自己中心性が推察されます。

を含む物語類型では、男女の冷めた情性的な関係が強調されることがあります。“夫が会社に出かけるというのに、妻は起きもせず、眠りこけている”などとするのがその例です。このようなものには異性関係に対する語り手の醒めた見方が示唆されています。これに類するものとして、夫が帰宅したらすでに妻は寝ていた、とするものがあります。この場合、性行為はないことにされているわけであり、異性愛に対する回避傾向も読み取れます。

が属する、男女関係の破綻・消滅の危機をテーマにした物語類型には、男が女に拒否されたというより、男が女に失望したというものも含まれます。言うまでもなく、語り手の否定的な女性像が反映されています。

が属する物語類型には、男が女に誘惑されて性交渉をもったとするものが含まれています。したたかな女性像、それと対照的なうぶな男性像を推察させます。

\*

上述の5類型以外の物語のうち、いくつかの興味深い物語に触れておきます。

まれながら“興奮状態にあった女を鎮めた男が、やれやれと汗を拭っている”とするものに出会います。これからは、女性に対するある種の失望や諦観が伝わってきます。これと似たものに、“男性が外で倒れていた女性を家に連れ帰って介抱し、今終って汗をふいている”とするものがあります。これでは、男性と女性は見ず知らずの関係で、しかもまったく性愛抜きです。女性を性愛の対象とすることの徹底した回避、弱者としての女性の救助への倫理的意志などが感じ取られます。

女性は死んではないのに男性が死んだとはやとちりして、驚き、嘆いているとするものがあります。多くの人のように、死んだとしてしまえないことには、不安・恐怖への耐性の低さとそれゆえの否認の防衛メカニズムが推測されます。

男が裸の女を見て、困惑し、顔を背けているというものにもまれに出会います。絵を見たときの語り手の衝撃がそのまま絵の男性に移し置かれたような感じを受けます。防衛の脆弱さと幼児性が伝わってきます。後述のように、男女の関係が母親と息子、姉と弟などとされがちであることも、異性愛の未発達を証しています。

\*

絵の男女の関係が夫婦、恋人、愛人という性愛で結ばれた関係以外のものにされるのは、問題視されてよいでしょう。いずれも性的なものに対する防衛を意味します。

ごくまれに男性を男装した女性とし、2人が同性愛の関係にあるとするものに出会います。多少奇を衒った反応ではあっても、語り手の性的同一性の問題を示唆しているとみなしてよいでしょう。

やはりまれながら、女性を人形とするものに出会います。それが男性にとって、生身の女性の代理を意味しているとみなされる場合があり、語り手の代理物による満足追求の傾向が推測されます。

## 第19節 カード14

このカードの絵は、真っ暗な室内にいる、まだ若そうな男性が開け放った窓から明るい外を見ている、という図を表わしています。男性は何のために外を見ているのか、外を見て何を思っているのか、などのことを具体的に語る事がこの絵での課題です。人物はそのシルエットだけが、表情はまったくわかりません。外の様子もまったく不明です。このようにこの絵では、状況を具体化する際に手がかりとなるディテイルは、男性の持ち上げられた膝と室内の暗闇ぐらいしかなく、あとは窓というものがもつ一般的意味に依拠せざるをえないといえるでしょう。

窓は、内と外を隔てつつ通じ合わせるものです。内側にいることは、守られ、安心していられることと同時に閉じ込められ、自由を奪われていることを意味します。室内の暗さは、これらの意識のどちらにも寄与するでしょう。この絵を見て、もし守られている感じ、安心感の方が触発されれば、人物は外の景色を見て、くつろいでいる、休憩しているという絵解きが生ずるでしょうし、閉じ込められ、自由がない感じが触発されれば、人物は外に脱出したがっているという絵解きが生ずるでしょう。それぞれ語り手の安全希求ないし外界への恐れ、自由の希求ないし被拘束感の強さを表わしているでしょう。ただしこのようなおおまかな分析の段階では、ごく一般的な意味においてそう言えるだけです。

脱出がテーマになっている場合、人物はなぜ閉じ込められた（と感じている）のか、脱出できるのか否か、自力で脱出するのか出してもらえるのを待つのか、などのことを考慮に入れる必要があります。これらからは、それぞれ被害感の有無、楽観性・悲観性、能動性・受動性に関する手がかりが得られるでしょう。無実の罪で監禁されている、などとされる場合には、語り手の、ときに被害感に至る、拘束への敏感さが示唆されています。

ところで、先述のように、絵のディテイルが少ないことと窓が豊かな象徴的な意味をもつことがあいまって、脱出は脱出でも、物理的脱出は伴わない、心理的ないし象徴的な脱出が問題になることが少なくありません。すなわち“悩み事のある人が窓辺で考えているうちに希望が湧いてきた”とか“暗い過去に訣別し、明るい未来に飛び立ちとうとしている心境を表現したもの”とか絵解きされるのです。前者ではまだ窓は現実の窓として扱われていますが、後者では、もうそうはいえないことがわかります。ともに語り手の内面性の発達を示していますが、後者では観念性の強さが顕著です。

\*

ときどき人物の自殺願望・企図が語られます。人物は高い塔にいて、そこから飛び降りようとしていると見られるのです。これも一種の脱出、物理的かつ心理的な脱出をテーマとしたものとみなされえます。結末の部分を検討して、語り手の希死念慮を判断する必要があります。自殺に直接的に言及はしていないが、空を飛べると思って飛び出して転落死してしまうとするものや、事故で転落死してしまう、などとするものは、語り手の潜在的な希死念慮を疑う必要があります。

\*

この絵の人物は、くつろいでいるときはいうまでもなく、脱出したいと願っているときでも、静止しています。今まさに脱出しようとしているところとされることもありますが、それはまれです。人物は活動を休止し、ものを思い、憧れているとみなされるものなのです。ですから、彼がなんらかの活動に従事しているとか、仕事のためにそこに来ているとかすることは、特異なこととして目を惹きます。語り手の、強迫的に活動に駆られる傾向が窺われます。また、人物が室外の何かに好奇心を刺激され、それを見ているとするものも、異質な感じを与えます。なぜなら、人物は、たとえ外のものを眺めていても、心は内面に生ずる思いを追ったり、情緒に浸ったりしているからです。見るともなしに見ている人を印象づけるこの絵で、何かに強く惹かれ、注視している人を連想することは、語り手の態度が外向に偏していることを思わせます。

\*

この絵での“1人の男性が窓から外を見ている”とだけする反応は、記述水準の失敗反応です。ディテイルは少ないですが、窓や暗闇といった情緒にも観念にも訴えるところがあるこの絵での、そのような反応は、語り手の感性の乏しさや観念の未発達を疑わせます。暗闇を停電のせいとするものにまれに出会いますが、これも同じように意味づけられるでしょう。

\*

人物が内において外を見るという大方の受け取り方とは逆に、暗い外から明るい内に入ろうとしているとされることがまれにあります。たいてい侵入、潜入のニュアンスを伴っています。暗さに秘密性を嗅ぎ取った絵解きといえるでしょう。語り手に侵入、窺視、偵察などの欲求あるいは（および）それらの不安の強さが推測されます。“泥棒が物を盗んで逃げてゆくところ”とするものは、侵入ではなく脱出を扱ってはいますが、同じような解釈を許容するでしょう。他の多くの脱出をテーマにした物語とは暗闇への反応が異なります。

ごくまれに、暗闇にシルエットの男性とは別の人がいるとされることがあります。その人は、男性の妻や恋人、あるいは娘など、女性とされる傾向があります。語り手のひとりで行われる能力や異性関係の問題について示唆す



るところがあるだろうと筆者は思っています。

## 第20節 カード15

林立する墓の間にやせ細った奇怪な人物が立っている、というのが、このカードの絵の一般的な認知です。墓場は人が好んで行く場所ではありません。そこにいる人物も、生命感にあふれた人間とは正反対です。そういう積極的に同一化するのが難しい対象に対する同一化をこの絵では求められているといえます。絵に描かれた人物は1人だけですが、彼(彼女)は1つの墓の前に立っています。その墓が生ける人間と等価の扱いを受けて、彼(彼女)と墓のなかの人との関係を軸に物語が展開する可能性が開けます。というより、そうあることが要請されているといった方がよいでしょう。語り手は、墓のなかの人は人物にとってどういう存在なのか、物言わぬ死者と人物はどういう内的な対話を交わしているのかを具体化してゆかねばなりません。その際に寄与するのは、人物の仕草、風貌、身なりなどです。人物の、肩をすぼめ、両腕を前下方に伸ばし、両手をすり合わせるようにしている仕草は、謝罪や祈りや誓い、さらには束縛状態を連想させる力をもっています。また人物の目が窪み、頬がこけた顔立ちには、人物自体が死者、つまり霊的存在であることを連想させるだけのものがあります。

墓のなかの死者は、しばしば人物によって直接間接に殺された被害者とされ、人物は罪を悔い改め、被害者に謝罪しているとされたり、罪のために罰を受けているとされたりします。死者を死者たらしめたのは、絵のなかの人物その人であるとしている点で、これらの絵解きは、人物と死者とのもっともシンプルな、短絡的でさえある関係づけを示しているといえるでしょう。とくに、殺人の罪の悔い改めを見たものは、内容的にも理にかなっています。それに比べると、殺人の罪に対する罰を受けているとするものは、やや不自然さを免れません。なぜなら、法廷で罪を裁かれているならともかく、墓場で罰せられるようなことはまずないからです。こういう不自然さを避けるためでしょう、ときには絵の情景は死刑の宣告を受けた人物の脳裡に浮かんだ心像であるとされたり、人物の背後の多くの墓は墓でなく法廷の椅子を表すとされたりします。さらに、絵のなかのすべての墓が人物によって殺された被害者の墓とされ、人物は彼らの怨念に苦しめられているとされることもあります。殺人という連想は同じでも、殺人の罪を悔い改めているとする方がよほど容易で自然なのにそうしていないところに、かえって積極的な意味を見出せそうです。殺人に対する罰を読み取る語り手にはある種の反抗性や他罰性が推測されます。とくに、絵のなかのすべての墓を取りこみ、大量殺人犯を連想する語り手には、自己誇大性と強迫性が感じ取られます。

ところで、上述の絵解きとは異なるものの似ているものとして“殺そうとして捜し求めていた相手がすでに死んでいることを発見し、悔しがっている”とする物語がまれながら生じます。死者は絵の人物によって殺されたわけではありませんが、殺される可能性があったわけです。容易でもシンプルでもない絵解きゆえに、語り手の内的なもの投入が感じ取られます。物語の内容どおり、執拗な攻撃性、執念深さといったものが示唆されているとみてよいでしょう。

＊

墓のなかの死者は、絵の人物にとって大切な父母、配偶者、師匠、友人などとされることも少なくありません。死者への愛惜の念、先立たれた恨み、後追い死の願望、忠誠心、生前に悲しませた罪悪感などが、人物に付与されます。いずれも死者への深い愛着を表わしています。語り手自身、他者に愛着をもつことができますが、他面、精神的未自立や強すぎる依存欲求の問題を示唆している場合もあるでしょう。しかし人物に上述のような思いや感情が付与されておらず、墓参りは習慣的、儀礼的なものとしがみなされない場合もあります。このような場合は、絵が含む刺激をほとんど感じ取っていないと判断されるがゆえに、失敗反応とみなしてもよいでしょう。墓があつてその前に人がいる図から墓参りを連想するのは、なんの努力もいらない内的作業だからです。ただ、人物が墓守とされることがあり、その場合には奉仕欲求あるいは支配欲求の強さなどの積極的意味づけも可能になるでしょう。

＊

死者が絵の人物にとって身近な人ではありますが、人物に付与される思いや感情が、死者への愛着というより、死者を殺害した者への復讐願望である場合がまれにあります。人物は愛する死者に向かって、必ず復讐してあげると誓っているなどとされるのです。ここには人物の死者との強い同一化と被害感情の共有が認められます。被害感情は語り手自身のものでもあろうと思われれます。

＊

先述のように、人物自身が死者であるとみなされる可能性があるのですが、その場合には、墓は他者の墓でなく、人物自身の墓とされることも生じてきます。すなわち“生前にやりたいことをやれなかったために（あるいは、ひどい目にあったために）死んでも死に切れない人が、墓から甦った”などとされるのです。この種の絵解きからは、すぐ上で触れた絵解きとの近縁性が感じ取られ、やはり語り手に被害感情を抱きやすい傾向が推測されます。一方それは、殺人という、やってはいけないことをやってしまったために罪の意識をもっているとする絵解きと対極をなすものとみなせます。この観点からすると、語り手に、エリクソンがいうところのイニシアティブ（主体性）が阻害されていた可能性を推測することができます。被害感情も主体性の阻害も観点の違いだけで、互いに重なり合うものとみなしてよいでしょう。

墓を人物自身のものであるとしている物語として、他に“墓場をさ迷い歩いていた人が自分の名前を書かれた墓を見つけて不思議な気持ちになっている”とするものがごくまれに生じます。物語の細部を考慮して解釈する必要がありますが、墓を人物自身のものであることに一般的に、他者との関係の希薄さや自意識過剰な傾向が示唆されているとみてよいのではないかと考えています。

\*

人物が目の前の墓のなかの死者と個人的に関係づけられていないか、あるいは墓が人物自身のものであるとされているかして、なおかつ人物への語り手の積極的あるいは肯定的な同一化が認められない物語は、問題の反応と映ります。たとえば人物を単にゾンビとするもの、“墓から出てきたドラキュラがこれから生き血を吸いに行く”とするもの、“墓荒らしが墓を掘り起こそうとしている”とするもの、さらに、“墓の中の死者を蘇らせ、彼らの力を得て、これから悪いことをする”というものなどがその例です。これらの例では、絵の人物は苦しみ、衰える者ではなく、一種超人的で邪悪な力をもった不気味な存在とされているのが特徴的です。これは、人間の老病死苦に対する防衛のゆえに、それが影として脅威を帯びるようになったことと解せるかもしれません。

\*

ついでながら、絵は人間存在の否定的な様態を表わしているので、自己が病んでいることを深いところで感じている人は、それを無意識的に投影する可能性があるように思われます。とくに人物の奇怪さや惨めさが際立たせられているような場合に、そういう投影を感じさせられます。

## 第21節 カード17BM

1人の裸の、あるいは裸に近い男性がロープにぶら下がっている、というのがこのカードの絵に共通の認知です。普通の人の日常生活ではほとんど見かけることのない行為です。そういう行為を男性はどんな理由から、何の目的でやっているのかを具体的に示すのが、この絵での課題です。

よく出会う絵解きとして“ホテルの火事のため客がロープを伝って脱出しようとしている”とするものや“サーカスの芸人が芸を見せたあと得意になっている”とするものがあります。前者は、絵の男性の特殊な行為を、普通の人が非常事態でやる手段的行為と捉えたもので、行為の特殊性を事態の特殊性に帰する形で上述の課題を処理していると言えます。それに対し、後者は、大人がロープにぶら下がるという特殊な行為を、特殊な立場の人がやるその人にとって普通の、それ自身が目的的行為と捉えたもので、行為の特殊性を立場や役割の特殊性に帰する課題の処理法をとっていると言えます。

両者のもう1つの大きな違いは、前者では、自己救出という必死な活動が問題になっているのに対し、後者では、他者を相手にした遊び的行為が問題になっていることです。以下に述べるように、それぞれにヴァリエーションがありますが、このカードでのおおかたの物語は、これらのどちらかに属させることができます。したがってそれぞれは、個人的な特徴ではなく一般的なかわりの型の違いをあらわしていると言えるのではないかと思います。しかしそれぞれについて、より詳しく意味づけるには、それぞれにおけるヴァリエーションを見ておく必要があります。

人物の行為を特殊な事態での手段的行為として捉えるものには、先に言及した火事現場からの避難・脱出を内容とするものの他に、監禁状態からの脱出を内容とするものもあります。前者ではしばしば、絵の人物は入浴中に火事になり裸のまま逃げ出したとされます。これは明らかに人物を全裸の状態と見て、それを理屈づけようとした試みです。裸であることを自分の意志によるのではなく、外的な事情によるやむをえないこととするところに、自己露

出に対する抵抗が感じ取れます。他方、監禁状態からの脱出は人目を忍んで密に行うものです。人物は必ずしも全裸の状態にあるとはされていませんが、そういう状況を想定したことに、語り手の裸体に対する羞恥心が示唆されている可能性があります。

人物の行為を特殊な立場・役割の人がする、それ自体が目的の行為として捉えるものにおける特殊な立場・役割には、サーカスの芸人の他に、スポーツ選手、消防士、スタントマン、ターザンなどがあります。これらは、固定した立場・役割ですが、腕自慢の人が力のあるところを見せている、余興で綱登り競争をしている、気が変な人が人目を引こうと裸でビルの壁を登っている、などという、普通の人の取る一時的な役割とみなされる場合もあります。多くの場合、人物のまわりには観客があり、彼は彼らに自分の芸を見せ、かつ見られています。“先生が生徒に模範演技を示している”というようなものもあります。これでは、教えた欲求も示唆されています。しかし彼の行為は練習・自己鍛錬のためのものであるとし、観客は不在とみなされることもあります。これは、スポーツ選手や消防士の場合には当然のことにように思えるのですが、逆に観客の不在を暗黙に想定したがゆえにそのような立場・役割を連想したという可能性も考えられます。そして、観客不在の想定には、先述の場合と同様、人物が裸、あるいは半裸であることが寄与しているのではないかと思われるのです。ただし、ここでは、単に裸体であること自体ではなく、裸体の質、つまり逞しさ、発達した筋肉が目ざされていることは、その言及の有無にかかわらずまず間違いありませんし、また、スポーツ選手も消防士もいずれは人々の視線を浴びるわけです。したがって観客の不在は、語り手の、顕示・誇示に対する意識的抑制を表わしていると解されるのです。

以上述べてきたことから、このカードにおける絵解きを分けるのは、生真面目で、つねに行為の動機を理解しようとするか、それとも遊び心もち、他者の行為の動機をあまり深く考えず、簡単にかつ表層的に他者を受け入れるか、自己を開示することを好まないか、それとも自己を開示しないし顕示する傾向が、抑制の有無にかかわらず存在するか、ということであるように思われます。物事をあまり真面目にとりすぎる人では、“ロープを登りきったら、幸せになれる”“ロープ登りは人生を象徴している”などと、絵の人物の行為を観念的かつ教訓的に捉えることにもなるでしょうし、あまりに安易なかかわり方をする人は、人物をターザンなどとするでしょうし、自らの顕示欲求に対してアンビヴァレントである人は、“素っ裸でビルの壁を登っている人を下の観客たちが冷ややかに見ている”などという絵解きをするでしょう。

\*

例外的に、人物の行為を自己救出でなく他者救出の行為とすることで、他者との関係が持ち込まれる場合がごくまれにあります。愛他的、英雄的な面の誇張が示唆されているといえることは明らかです。

\*

また、まれに、人物が何かを積極的・意図的に見ている、あるいはどこかに潜入しようとしているとされることがありますが、これらでは見られるという自己露出的傾向より、見るという窃視的傾向が優勢であることが示されていると思われます。

\*

最後に、人物はロープを登っているのか降りているのか、ロープの張り具合がおかしい、足は使わず手だけで登っている、などと、人物の動作自体について疑問をもったり批判的に述べたりする人がいますが、これらはいずれも課題からそれた拘泥です。本質的なことをおろそかにして、些細なことにとらわれる傾向を表わしています。

## 第22節 カード17GF

このカードの絵の主要部分を簡略に描写してみましょう。画面手前のアーチ形の橋の上には女性らしき人影があり、その人は手すりに両手をついて川面を見下ろしています。橋の下越しに、向こう岸で数人の男たちが荷物をかついで運んでいるのが見えます。人影は小さく、よく見ると1人は他の者と違い、腰に手を当てて突っ立っていることがわかります。彼らのそばには窓が少ない、倉庫のような高い建物が立っており、空では太陽が光線を放射していますが、太陽自体は黒くて、輝いているようには見えません。

さて、このような絵において、橋の上の人と下の人々の間にはかなりの距離があって、しかも一方が他方へ関心を向けているという構図でもないのに、両者を結びつけて物語を作るのは必ずしも容易ではないように思われます。事実、筆者が上にしたような絵の記述で終わっている反応もしばしば生じます。しかし、大半の人は、橋の上の女

性を中心に据え、彼女を下の方の男たちと何らかの形で関連させて絵解きをします。複数の人が描かれていれば、彼らをなんらかの形で関連づけるのは、絵解き一般の要請でもあるからです。橋の上の人と下の男たちを関連づけているか、関連づけているとすれば、どのくらい強く、あるいは緩く関連づけているか、また、どのように関連づけているか、相互に属し合う関係と見ているか、それとも一方は他方に敵対的と見ているか、などに注目する必要があります。これらのことは語り手の集団帰属意識や対社会的関心や関係能力一般について示唆してくれるでしょう。

他方、背景の一種異様な黒い太陽とその光線が、絵解きに小さからぬ影響を及ぼします。それは直接言及されることはあまりありませんが、なにか絵の状況全体に不健全さ、異常さの雰囲気醸し出しているといえます。具体的には、人々が奴隷のように酷使されているさまや盗賊たちが荷物を盗んでいるさまが読み取られます。自然の異変や物理的な環境汚染が読み取られることもあります。周囲の世界の異常さより、橋の上の人自身の悩みや自殺企図への言及に絵の醸す雰囲気の影響が感じられる場合もあります。このような暗い雰囲気をどれくらい強く、あるいは弱く感じているかということも、このカードでの絵解きを分析する際には注目すべきです。言うまでもなく、絵から暗く悲惨な状況を読み取れば、語り手は、感性が鋭く、かつ、物事の見方が悲観に傾きやすいということですし、逆に、何ら不健全な状況を感じ取らなかつたら、感性の鈍さや暗いものに対する防衛が示唆されていると見てよいでしょう。

\*

さて、物語類型を示しながら、以上の2つの観点についてより具体的に説明していきましょう。まず、絵に奴隷社会を読み取った物語類型から始めます。

しばしば、橋の上の女性の父や兄や恋人が橋の下の奴隷たちのなかにおり、彼女はその人が酷使されるさまを見て憐れんでいる、とされます。この種の絵解きでは、橋の上の人は橋の下の人々と強く直接的に関連づけられているばかりでなく、両者は相互に属し合っているとされています。奴隷制を読み取ることに、支配 - 被支配関係に敏感であることが察せられますが、上記の関連づけから、語り手は被支配者の側に身を置きがちであると推測されます。他方、橋の上の女性の身内の者が男たちを酷使しており、そのことに彼女は胸を痛めている、とするものにも時々出会います。これにおいては、橋の上の人と下の人々との関連づけは認められますが、前者は後者（奴隷たち）には属していません。

橋の上の人も下の人々と同じ奴隷ですが、今逃げ出してきて、橋の上から仲間たちを見ているとされる場合もあります。これにおいては、両者の強い関連づけも、相互の属し合いも明らかで、語り手がかなり被支配感ないし被害感が強い人であることが推測されます。しかし、橋の上の人も下の人々と仕事内容は違うが同じ奴隷の身分で、彼女（彼）は絶望して身投げしようとしている、とするものでは、両者の関連づけや相互の属し合いの程度も緩くなっていることが感じ取られるでしょう。さらに支配者側の女性、あるいは通りすがりの女性が、奴隷社会を改革せねばと思っている、というものでは、関連づけはさらに緩い、観念的なものになっています。関連づけが緩くなるにつれ、語り手の社会性の程度は低くなっていると一般的に意味づけることが可能でしょう。最後の物語類型では、語り手の誇大自己像すら推測されえます。関連づけがまったくない、あるいは無関係という関連づけがあるというべきかもしれない反応の例として、橋の下には汚れた暗い社会があり、橋の上にはそれと無縁な明るい社会がある、とするものがあります。このような絵解きはあまりに知的、観念的であるといわざるをえません。

\*

次に、絵の男たちに盗みという犯罪行為を読み取った物語類型に話を移します。奴隷制を読み取ることが語り手における支配 - 被支配という関係様態の優勢を意味するとしたら、盗みという犯罪行為を読み取ることは、奪う - 奪われるという関係様態の優勢を示唆しているでしょう。橋の上の人は、盗賊たちが物を密かに運んでいるのをたまたま目撃し、警察に告げようと思っている、とされることが多いのですが、まれに、橋の上の人は盗賊たちの仲間、仲間たちのために見張りをしている、とされることもあります。前者においても後者においても、語り手に、暴露 - 隠蔽という関係様態も優勢であることが感じ取れます。後者においては、橋の上の人と下の人々は相互に属し合っているわけですが、語り手が盗賊に積極的に同一化することは考えにくいので、むしろ盗みや奪取の願望は投影され、被害的な形で意識されるのではないかと考えられます。

\*

橋の上の人の個人的な悩みが強調され、環境世界の暗さには言及がないか、逆に環境は健康的な活気に満ちてい

るとされたりしているものについて述べますと、この種のものでは、語り手の社会的関心の低さや内閉性や依存性が印象づけられます。概して橋の上の女性は、下の男たちに積極的に関心を向けるよりも、受身的に向けられることを望んでいるが向けてもらえないことを嘆いているという趣があります。女性が身投げしたが男たちに助けられた、物を川に落としたが男たちに拾ってもらった、などとするものにもときどき出会いますが、これらにも、関心を向けられたいという願望は感じ取られるでしょう。なお、橋の上の女性の自殺願望が語られる場合には、結末の部分に注意する必要があるのは、カード 3BM におけるのと同様です。

\*

最後に、環境世界の暗さにも、橋の上の人の悩みや自殺願望にも触れていない絵解きについて述べます。もし橋の上の人と下の人々を関連づけておらず、すでに述べたような記述水準にとどまるものであれば、失敗反応とみなさざるをえません。明確な関連づけがある物語とは、橋の上の女性が、働いている父親あるいは恋人のために昼食の弁当を渡しに来て、今作業の終わるのを待っている、というようなものです。橋の上の人は下の人々と明確に関連づけられてはいないが、彼女は、下の人々と同じ荷役である恋人の船が来るのを待っているとするものでは、両者の緩い関連づけがあるのは明らかです。これらの物語類型、および前掲の物語類型より、このカードでは、異性愛もテーマになりやすいということがいえます。しかしメインテーマというわけではありません。

\*

特異な絵解きの例としては、橋の上の女性が下の男たちに追跡されている、とするものや、彼女は橋の掃除や洗濯物干しなど作業をしている、とするものや、男たちは体操しているとするものなどが挙げられます。最初の例では、追跡念慮・妄想が疑われさえます。

### 第 23 節 カード 18BM

このカードの絵では、1人の男性がコートの前をはだけて後ろにのけぞっています。彼の背後には誰かいて、彼の左腕と右肩を手でつかんでいます。しかし少なくとももう1人誰かいるらしく、彼の右脇のあたりにその者の腕の手首が見えています。背後の人々の姿はまったく見えません。当然のことながら、物語は、絵の男性と彼の背後の姿は見えない人(々)とのかかわり合い、言い換えれば、絵の男性は背後の人(々)に何をされているのかということに焦点を当てて展開しなければなりません。このように、このカードでの課題は単純でわかりやすいものです。

絵の人物が背後の人にされている行為は、大きく、“抑えられている”か“支えられている”かのどちらかに分かれれます。前者は、束縛され、自由を奪われていることであり、(犯人の)逮捕、(暴漢の)襲撃、(自暴自棄的な行動の)制止、(良くない組織への)誘惑などを含みます。後者は、自力で立つのは困難な人が支えられているということであり、自力で立てない理由として、酒酔い、病気、心の悩みなどが言及されます。“抑えられている”とも“支えられている”とも言えないものとして、服を着せてもらっている、肩を揉んでもらっている、とするものがあります。さらに、背後の人(々)にまったく言及しないか、言及しても、絵の人物へのかかわりが不明なものがあります。

さて、上述のことから推察できるように、このカードは、他者の力、あるいは外の力をどのように捉える傾向があるかを見るのに適したものと言えそうです。人物の背後の存在の姿が見えないことが、それに寄与しているのかもしれない。しかし、人物が背後の他者に抑えられ、束縛されているからといって、語り手が他者の作用に対して否定的であるとか、逆に、支えられているから、他者の働きかけに対して肯定的であるとか、単純には言うことはできません。それぞれの絵解きの頻度の高さからいってもそう言うには無理があります。

絵の人物が抑えられ、束縛されていると解するときは、語り手になにがしかの緊張感が生じている、言い換えれば身体に力が入っていると思われれます。そしてその力は、ほかならぬ主体性を保つのに必要な一種の活力、抵抗力を表わしていると解されえます。他方、人物が支えられていると解するときは、語り手自身、一種の脱力感、身体を預ける感覚を何がしか体験していると思われれます。そしてそれは、語り手の無力さや依存性とかかわっている可能性があります。もちろんこれは一般論ですが、こうした一般的な見方をもっていると、例外的な絵解きが理解しやすいということもあります。たとえば、失神した人、あるいは死んだ人が背後の人に思いのままに操られている、とするものでは、語り手自身の強い無力感が伝わってきます。あるいはまた、逮捕された犯人が、観念して無抵抗

でいる、とされる場合にも、同種の無力感が推測されえます。人物が肩を揉んでもらっているとか、服を着せてもらっているとか解する場合には、語り手に緊張感も脱力感も体験されてないでしょう。他者に何でもやってもらえらるという心地よい万能感のうちにあると言えるでしょう。

これもすでに触れましたが、背後の存在にまったく言及しないか、言及しても前景の人物へのかかわりが無い、あるいは不明である場合には、まさに語り手にとって他者の意味は極めて小さいこと、つまり自己愛的であることを表しているでしょう。実際、物語の内容も、たとえば、舞台のエンディングで、カッコよく決めているところ、など、ナルシシスティックなものが目立ちます。

\*

背後の人(々)の抑え、束縛する意図は多様です。意図の種類によって、背後の人(々)が、女性になったり、非実在の存在となったりすることがあります。もちろんあの場合には、背後の人(々)の姿が見えないということも寄与しています。背後の人(々)の意図と前景の人物のそれに対する反応の組み合わせに意味を見出すことが可能であろうと思われませんが、基本的には、それは、語り手にとって優勢な関係様態を表わしているとしてよいでしょう。たとえば人物が襲われているとするものでは、強い攻撃的衝動の存在とそれゆえの身構えが示唆されており、“良心に負い目のある人が、夢の中で何者かによって苦しめられている”というものでは、いわゆる超自我の介入が優勢な関係様態が示されているでしょう。“道行く人が不気味な手によって沼の深みに引きずりこまれてしまった”というものでは、語り手がさまざまながらみに引き込まれる恐れをつねに抱いていることが示唆されている可能性があり、“やけになって自殺しようとする男を友人が必死で止めている”とするものでは、行動化とそのコントロールが語り手のテーマであることが示されているかもしれません。

\*

背後の人(々)の特殊な意図の例として、絵の人物が見たくないものを残酷にもむりやり見させようとしているというものが挙げられます。意識的に防衛されてはいるにせよ、語り手の窃視衝動の強さが示されているように思われます。

背後の人が人物をわざと驚かせているというものにまれに出会いますが、これは、闇の中で背後からつかまれる不気味さを防衛的に回避する試みと解されます。語り手のトレランスの低さを推測させます。

\*

以上に言及してきた物語類型では、絵の人物の背後に複数の人物が想定されているのかそうでないのか判断が困難な場合が少なくありませんが、絵の人物の肩に置かれた手を女性の手としている場合には、まず、彼女1人だけが背後にいるとみなしてよいでしょう。人物の右手の部分に認められるもう1人の手首は無視されているわけで、それだけ個人的なバイアスの大きい反応と言えるでしょう。母親あるいは恋人に、自分を置いて行ってくれるなどずがられている、とするものや、妻にコートを着せてもらっている、とするものなどから、母親的なものを求める心性が感じ取れます。

#### 第24節 カード18GF

このカードの絵では、階段下で中年の女性がもう1人の人の首をつかみ、覆いかぶさるようにして顔を覗いています。つかまれている人は、斜め後ろ向きなので、顔の表情はわかりません。性別も不明瞭ですが、胸のあたりのわずかなふくらみから、女性が連想されやすいでしょう。

このカードでの課題も、前のカード同様、単純でわかりやすいものです。すなわち、こちら向き女性の、もう一方の人の首をつかむ行為は何を表わしていて、なにゆえにそうするのかを具体的に述べてゆくことが課題となります。

彼女の行為は、大きく、“介抱”と“攻撃”のどちらかに分けられます。誰に対する何ゆえの介抱あるいは攻撃であるかが問題になるのですが、“病弱の娘が階段を降りる途中足を踏み外して転落したので、母親が急いでやってきて、介抱している”というものや“母親が、娘の品行を見かねて、娘に詰め寄り、叱っている”というものが、典型的なものとしてあげられます。これらからもわかるように、介抱ないし攻撃されている人は、している人の娘とされることが多いのですが、ときには逆転することもあります。また、母-娘関係に相当する姑-嫁、女主人-召使とされることもあります。すなわち、年配の娘が老齢の母親の世話をしているとされたり、姑にいじめられて

いる嫁が恨みから姑を殺そうとしているとされたりするのです。

さて、“介抱”も“攻撃”も頻度が高い絵解きですし、そういう絵解きを示したからといって、語り手の個人的特徴を表わしているとみなすわけにはいきません。せいぜい、攻撃的行為を認知する場合には、攻撃性が抑圧されてはいないということが言えるぐらいでしょう。したがって、物語の解釈に当たっては、物語のディテイルを手がかりにする必要があります。

\*

“介抱”の物語においては、前掲の例にも示されているように、階段からの転落への言及がしばしばあります。それは介抱の理由づけとして、もっとも思いつきやすいもの、言い換えれば、絵に描かれたものの内部での処理と言えるものです。しかし多くの人は、それだけでは足りないと思うようです。すなわち、階段からの転落はそうそう起こるものではなく、その原因をさらに求めるわけです。それで、病弱とか身体障害とかが付加されるのです。これらは、絵以外のところから持ち込まれた要素と言えるでしょう。このような一般的プロセスを考慮すると、階段からの転落のみを述べ、その原因たる病弱や身体障害や精神的興奮に言及していないもの、および、逆に、階段からの転落に言及せず、病弱や身体障害や精神的な悩みについてのみ語っているものは、特殊なものとしてクローズアップされてきます。前者は、語り手のあまりに単純な、現実性を欠いた心性を推測させ、後者は、語り手が抱えている親子関係の問題を示唆している可能性があります。後者についてさらに言えば、とくに、疲弊して外から家に帰りついた娘を母親が介抱している、というような物語では、母娘間の根深い葛藤の存在が推測されます。

“介抱”の物語で、もう1つ注目すべきディテイルは、介抱された人が治療されて生きながらえるか、それとも死んでしまうかという点です。言うまでもなく、後者の方が悲劇的なわけで、母親の嘆きを強調するところに、語り手の親に対する受身的攻撃性を推測することができます。

まれながら、母親が死んだわが子の亡骸、あるいは、死んだわが子の代理の人形を肌身離さず持ち歩いている、とするものに出会います。愛するわが子を失った母親の衝撃は、現実感覚を失わせるほど強いものであることを言おうとしているわけで、語り手自身、親の自分への執着を疎ましく思っているか、それほどの強い愛情を願望しているかのどちらかかもしれません。

\*

“攻撃”の物語では、攻撃が殺意のあるものかそうでないかということと攻撃の動機が問題になります。言うまでもなく、殺してしまうとするものや、殺そうとしたが寸前で思いとどまるとするものでは、語り手にかなり強い破壊的衝動が感じ取られます。

攻撃の動機については、相手のためを思っているのものが、それとも相手を虐げるためのもの、ないし自分を守るためのものかの区別が可能で、前者の例はすでに挙げましたが、他に“障害児をもった母親が、自分が亡き後のわが子のことを思うと不憫で、わが子を絞め殺そうとしている”というものもあります。母親の悲しみを典型的に示したものであり、母なるものの成熟した理解の表われと解することができますが、他方、この種の物語においては、介抱と攻撃が同時に存在すると言え、これらを、母親の庇護する面と呑み込む面という2つの機能と等価とみなせば、グレートマザー（太母）的な資質を語り手に推測することもあながち荒唐無稽ではないでしょう。

後者、相手を虐げるため、ないし自分を守るための攻撃の例も、すでに挙げましたが、他に“夫を奪われた本妻が奪った愛人を責めている”というものや“メイドに秘密を知られた女主人が、口外しないようにメイドを脅している”というものがあります。それぞれ語り手が敏感に反応する価値領域を示唆していることでしょう。

\*

ごくまれに、絵の人物の行為が介抱とも攻撃とも解されていない反応に出会います。

“母親が娘の口あるいは目のなかを点検している”とするものや、“同性愛の女性が愛撫している”とするものがその例です。それぞれ特異な絵解きであるがゆえに、語り手のとくに優勢な関係様態を示しているとみなせます。前者は、人でも物でも知的に調べ点検する傾向を、後者は潜在的な同性愛傾向を表わしているでしょう。

\*

絵の2人の人物の関係は、これまで述べてきたように、母娘とされることが最も多く、姑と嫁、主人と召使などがこれに続くのですが、中・老年の姉妹、友人同士とされることも少なくありません。そういう関係設定に、心理的な同性愛傾向が表わされている可能性も否定できません。手前の、背中を見せている人物が男性と見なされるこ

とは多くなく、夫婦、母親と息子、などとされる場合には、その理由を推測してみる必要があるでしょう。

#### 第25節 カード19

このカードの絵のなかにははっきり同定できる事物や生物はありません。せいぜい何々らしく見えるものがあるだけです。これ1つをとっても、このカードでの課題は他のカードでのそれとかなり異なっていると言わざるをえません。いくつものゲシュタルトを、辻褃の合うように同定してゆかねばなりません。これにはちょっとした勇気や決断力が必要です。本来ゲシュタルトをどう受け取ろうと正しいも間違いもないのですが、正しさにあまりに囚われると、どのような同定も不適切に思えて、反応することが不可能になってしまうでしょう。あらゆる面で自分の判断に自信がもてない人の場合にも同じようなことになるでしょう。困った末に、絵は何が何やらわからない本来無意味なものを表わしているという判断から、そのこと自体を説明する方向に努力が注がれることになり、その結果、ピカソの描いた抽象画であるとか、幼児のなぐり描きであるとか、夢の中の心象風景であるとかされるでしょう。しかし、この種の反応は、必ずしも同定の努力ののち生ずるとは限らず、ほとんど最初から同定の努力を放棄して、高みから見下すように、幼児画、狂人の描いた絵とみなすこともあるでしょう。そうして本来の自信のなさを隠そうとしているとも言えます。

ところで、上述のようなこのカードでの課題はロールシャッハ・テストを連想させるかもしれません。しかし類似性は表面的であり、違いをしっかりと認識しておく必要があります。言うまでもなくロールシャッハ・テストでは、どの図版も偶然にできあがったものです。どれも左右対称であることが、製作者の意図を含まない機械的に成った図形であることを印象づけています。それに対して、このカードの絵は偶然にできあがったものとは思われません。左右対称ではありませんし、それぞれのゲシュタルトは意味ありげです。何か製作者の意図を感じ、それを無視することはできません。だから、それをうまく言えない場合にも、物理的な作用によって生じたものとはされず、上述のように、絵画作品とされるのです。

さて、最初の当惑にもかかわらず、たいていの人は、自らの現実感覚を少し脇においておき、メルヘン的な世界に足を踏み入れ、絵のなかのゲシュタルトを同定してゆき、全体の状況把握に至ります。大部分の人が、中央部の大きなゲシュタルトを家や船と認知し、そのなかにいる人々を想定して、物語を展開してゆきます。これはごく自然なことでしょう。すでに述べましたように、物語は人間またはそれに代わりうる動物なしでは不可能で、絵に人間が描かれていなければ、人間を収容している容器を見ようとするでしょう。幸いこのカードでは、家や船や車など、そういう容器が認知されやすいのです。したがって、家、船、車などを認知しているかどうか、注目すべき事柄になります。自然なことが、自然に運んでいるか否かを見るのです。

ところで、家や船を認知することは、同時にその周囲のものを解釈することを含んでいるでしょう。周囲のものは何かただならぬ、平穏でない状況を連想させる要素を含んでいて、大雪や吹雪のなかの家、嵐の海のなかの船が認知されやすいのですが、魔物に取り囲まれた家や船が認知されることもあります。このような認知の仕方です。厳しい環境から守ってくれる容器のイメージの存在が見て取れるのですが、容器の守る力の強弱が問題となりえます。容器のなかの人々は、守り抜かれるか、それとも、容器が破綻をきたし、なかの人々は被害を蒙るかに注目し、語り手の家庭の守る力への信頼度を推測することができるでしょう。残酷にも、なかの人々の破滅を語る物語では、語り手の家庭への絶望が伝わってきます。とくに火事による被害を語るものからは、切実な危機感が伝わってきます。火事は必ず多かれ少なかれ被害をもたらすからです。

\*

しかし家や船の認知は必ずしも上述のような物語に至るとかかぎりません。家や船の周囲だけでなく、家や船そのものも不気味な雰囲気を感じていると見られることがあります。この種のものでは、語り手の、家や船の内部の人々への同一化は感じ取れません。人を守ってくれる家庭のイメージがしっかり形成されていないことを示唆しているのではないかと考えられます。他方“お化けが家のなかの団欒を羨ましそうに見ている”というような、語り手に、守る家庭のイメージはあるけれども、自分はそれから疎外されているという感覚があることを思わせるものにもまれに会います。

\*

家や船を取り巻く環境の厳しさに全然触れられないこともまれではありません。先述のように、このカードでは、



総じて現実性の薄い、メルヘン的な世界が語られやすいのですが、そういう性格が強まるほど、環境の脅威からの守りとなる家や船のイメージは希薄になっていると言えそうです。わくわくさせるお菓子の家や冒険譚的な痛快な航海が語られる場合には、快活な気分や活動性の高さが印象づけられますが、内容が借り物的であるし、語り手のかかわりは浅いものであるように思われます。

\*

さて、絵のなかのゲシュタルトを同定しながら、家や船などの人間を収容する容器を認知しない人々も少なくありません。上で、家や船が守りとなる家庭を象徴していると言いましたが、これらの人々では、そういう家庭のイメージの形成が弱いと単純に言うことはできません。家や船の認知は、守りとなる家庭のイメージの十分条件ではあっても必要条件ではないのです。ただ、あまりにも内容が貧寒であったり、荒廃した、あるいは荒涼とした情景が見られたりしている場合には、安全基地としての家のイメージの希薄さを印象づけられます。他方、家や船のゲシュタルトが、大きな生物に見られる場合には、幼児性を感じ取られます。

## 第26節 カード20

このカードの画面はわずかな白の部分を除いて、ほとんど黒一色で占められています。すべてが闇に溶け込んでいるなかに、街灯の光を浴びた1人の男の上半身が浮かび上がっている、というのが、このカードの共通認知と言えるでしょう。単なる男の存在の認知を越えて、彼は街灯の下に立って何をしているのか、何のためにそこにいるのかを具体的に語るのがこのカードの課題です。

男の見方は大きく2つに分かれます。1つは、男は何か大切なものを喪失し、無目的に悄然と佇む、というものであり、他は、男は誰か大切な人(もの)を待つ、というものです。

これら2つがまったく別物というわけではないのは、大切な人(もの)を待つのは、今それが欠落しているからであるということから明らかです。したがって大切なものの欠落や欠損がこのカードでの物語の基本テーマであると言ってもよいのですが、佇む目的の有る無しの違いから、一応分けておきます。

男の喪失したものは、家、家庭、仕事など、人間の基本的な拠り所となるものとされることが多く、他に、恋(失恋)、方向感覚、持ち物などとされます。言うまでもなく、語り手が現にこれらのものを喪失して悩んでいるというのではなく、彼にとっての価値観が問題になっているのです。喪失の対象が、人間一般の拠り所となるものであれば、語り手の常識性が示されていると言えます。道に迷った(方向喪失)とか、持ち物を落として探しているとかするものは、精神的な未発達、幼児性を感じさせます。

男が待つ人は、多くの場合、彼にとって大切な恋人や友人や家族です。つまり彼は愛着している相手を待つのです。彼は相手の来ことを信じて忍耐強く待つとされます。語り手の愛着形成や信頼感の確立について示唆を得ることができるように思われます。ときには“何年も前にした再会の約束を果たすために、来るか来ないかわからない人を待ち続ける”とされることもあります。忠誠心にこのほか高い価値を置いていることが推察されます。ところで、このような人待ちには秘密めいたものはありません。しかし、暗闇のなかでのことであるせいか、麻薬の売買の相手を待っているとか、刑事が犯人を待ち伏せしているとか、看守が脱走者を見張っているとか、密やかな特殊な人待ちとされることもときどきあります。語り手の露見を恐れる気持ちや、他者に対する暴露の欲求の存在が、そういう解釈を誘うのではないかとされます。

\*

人待ちではないが、広義での“待つ”に含められるものとして、動物や植物への“期待”を表わす絵解きがまれに生じます。絵の人物は、栽培している植物の生育を見に来ている、とするものや、森の中に蝶を採集に来ている、などがその例です。対象が人間でなく動植物であるところに、語り手の対人面でのなんらかの困難さとそれゆえの関心領域の偏りを表わしている可能性があります。これらとは別に、帰宅する人が最終のバスを待っている、とするものにもまれに出会いますが、これも、待つ対象が直接的に人ではないところに注目してよいと思われます。

\*

“喪失”も“待ち”も問題となっていない反応がときどき生じます。たとえば、絵の男性は、単に帰宅の途中である、牛乳ないし新聞を配達している、などとするものや、夜の散歩を楽しんでいる、ロマンチックな雰囲気浸っているという趣のもので、いずれも、夜とか闇が人の心に訴えるものを、普通に感受していないことを示してい

ます。前者では、感性の鈍さが、後者では、対人的な疎外感やある種の感傷性が感じ取られます。

\*

絵の人物は、ほとんどすべての場合男性に見られるのですが、ごくまれに、女性とみなされます。大勢に抗して、女性を見ることの意味を、ディテイルを考慮しつつ推測する必要があります。

\*

これまでは絵のなかに人物を認知した絵解きをとりあげてきましたが、人物を認知していない、あるいは認知していても、その認知の仕方が通常とは異なる反応にときとき出会います。深海や宇宙の情景を述べたものが比較的多いのですが、これらでは、画面のなかの、人のゲシュタルトを構成する白い部分やその他の斑点は、魚や星とみなされる傾向があります。深海や宇宙など、人間が生存できない場所を想像することにはどんな意味があるか、一概には言えませんが、暗闇に対する深い恐れがあるのかもしれないと筆者は思っています。

まれながら、爆弾の炸裂や銃火の連想から戦争中の状況を思い浮かべる人がいます。このように、多くの人が暗闇から感じ取る静けさや寂しさとは対照的な、激しい破壊現象を感じ取ることは、語り手自身の激しい攻撃的・破壊的な衝動の存在を推測させます。なおこの種の反応では、絵の人物が認知されているのかいないのかははっきりしない場合が多いという印象です。認知されていても、特殊な認知の仕方なのでしょう。一般に、通常とは異なる人物認知においては、語り手の身体図式のなんらかの特殊性が示唆されているように思われます。人のゲシュタルトのあたりに人魂を見るような場合には、身体図式のあいまいさが伝わってくるようです。

\*

最後に、絵の右上方に認められる2本の線状のものが、鉄条網などの囲いの条線を連想させることがあることを述べておきます。上で触れた、看守が脱走者を見張っている、という絵解きにおいては、この連想が少なからず寄与しています。ボクシングのリングの囲いを連想した人もいます。いずれにせよ、語り手には、拘束されることに非常に敏感であることが推測されます。

## 第27節 カード12BG

このカードには木と小舟がある水辺の情景を写した写真が用いられています。筆で描いた絵ではなく写真であることは多くの人がすぐ感じ取るとはでないでしょうか。情景のなかに人はいません。

このように、写真であることと人の姿がないことが、このカードの大きな特徴です。写真であることは、画中のものは必ず現実の何かを表わしていることを意味し、見る人に正しく言い当てねばという姿勢を、他の絵より強く呼び覚ますでしょう。しかし幸い、このカードの写真には、判断を迷わせるような不可解なものは写っていません。

画中に人がいないことは、すでに述べてきたように、物語作りを困難にします。なんらかの意味で人の代わりにするに足るものが見出せると、物語作りが促進されます。カード19では、人を収容する家や船や車を認知し、なかの人々を想定して物語作りが展開することを述べました。このカードではどうでしょう。小舟は人が乗るものであり、乗り手についての物語を作ることが可能でしょう。木は人がよじ登ったり、木陰に憩ったりするものです。否、写真の情景全体が、人の訪れる、あるいは訪れない場所であり、訪れる、あるいは訪れない人々を想定すれば物語作りは進むでしょう。他方、写真のなかの小舟や木、あるいは場所全体を擬人化して、物語を展開する手もあります。たとえば、木を、大昔から人間の営みを見守ってきた神の如き存在とするように、あるいは、誰からも顧みられなくなった小舟が寂しがっているとするように。実際にどちらのアプローチもとられます。しかしこれらが互いにまったく別のアプローチであるとは言えません。なぜなら、絵の場所を訪れる、あるいは訪れない人を主体にして物語を作ったにしても、人は個性をもった人ではなく、あくまで一般的な「人々」であり、結局人々が頻りに訪れるような楽しい場所、あるいはめったに訪れることのない寂しい場所というように、場所を個性的な主体にしていることになるのです。小舟や木を含む場所全体が、語り手の対社会的な自己像を表しているという観点から、このカードの物語を分析・解釈することが有意義ではないかと考えます。

\*

もし絵の場所が、休日には家族連れや恋人たちがやって来る憩いの場所であるとか、学校が終わったあとの午後には、子どもたちがやって来て舟遊びに興ずる場所とかされる場合には、語り手自身が、他者との交際を好む、開放的な人であることを示唆しています。反対に、絵の場所が、めったに人が訪れることもない、ただ漂着した小舟

だけが人の気配を感じさせる静まり返った場所とされるような場合には、人との交際に積極的でない、むしろ孤独を好む語り手の人柄が偲ばれます。まれに、前人未踏の場所に探検家が小舟に乗ってやってきて、今付近を探検しているという物語に出会います。この場合には、他者と情緒的なつながりを求めるより、知的探索志向の強いかわり方をすることが示されているでしょう。また、時の流れが考慮に入れられ、昔は人々で賑わっていた場所が、今は訪れる人もなく、寂れている、とか、今は冬で人気がないが、春が来れば、また人々の楽しげな声が聞こえる、とかされることもあります。それぞれ、自分の対人的態度の変化の回顧と期待を表わしていると解することができます。とくに、子どもの頃よく遊びに来た場所に、大人になった今再びやって来たら、寂れていて、感慨を催している、というようなものでは、成長にともなう開放から内閉への対人的態度の変化が感じ取られます。

まれに、絵の場所は、誰もこわがって近づかない不気味な雰囲気が漂う場所とされます。その理由として、過去の自殺や水死などの事件・事故が述べられることがあります。いずれにせよ、自分には他者に接近してもらっただけの価値がないのではないかという強い自己不信が推測されます。

\*

以上に述べた例においては、場所は個性的な主体として扱われながら、まだそれは、言わば潜在的な形においてでした。しかし、場所全体の“地”から木や小舟を“図”として浮かび上がらせ、擬人化する例においては、木や小舟は明確に主体として扱われています。語り手は、「人々」の側から、木や小舟に乗り移っているわけです。そこに、よく言えば同一性の柔軟さ、悪く言えば、同一性の弱さないし幼さが示唆されているように思われます。

\*

小舟はまれに小舟以外のものとみなされます。棺桶とみなして、風葬の場を連想した人もいます。大勢に抗して、そのように見ることに、個人的な意味があることでしょう。

\*

絵の情景のなかに人や動物が認知されることもまれにあります。主に木の一部分が人の顔や動物に見られるのです。これは認知上の誤りであるがゆえに、小さからぬパーソナリティの問題を示していると判断されます。ただこの種の物語と混同してはならないのは、ときどき出会う“捨てられた赤ん坊を乗せた小舟が漂着した”という物語です。これにおいては、ふつつ赤ん坊そのものは認知されていません。このように、小舟のなかに人がいるとする物語は他にもありますが、たいてい人の認知はあやふやです。人の認知から出発した物語ではなさそうです。ちなみに、上掲の捨て子の物語は、絵の場所を赤ん坊が受容されつつ息を引き取る場所と見ているとも言えます。そういう意味で、“母なるもの”の希求の存在を語り手に推測することが可能です。

## 第28節 その他のカード<sup>[註2]</sup>

カード 3GF, 13B, 13G および 16 については、筆者に使用経験が少ないので、簡単な叙述にとどめます。

### 1 カード 3GF

3BM においてと同様な内容の物語が作られます。ただ、人物はほぼすべての場合女性と見られ、3BM のように男児に見られることはありません。3BM のように自殺願望を連想させるピストル様の物体も描かれてありませんが、それでも人物の自殺願望への言及がある場合があります。ここでのそれは、直接的なトリIGGERがないゆえに、より注意が必要だとも言えます。

人物が顔を手で覆っていることが、隠蔽や仮面性の連想を誘うことがあります。語り手の暴露の不安や欲求を示唆しているでしょう。

### 2 カード 13B

まだ幼い少年がひとりぼっちでいるのはなぜか、彼にとって本来存在すべきなのに今不在なのは誰なのか、父か、母か、母親か、友だちか。不在は一時的なものか永久的なものか。語り手はこれらのことを具体的に決定してゆかねばなりません。

このカードは明らかに写真作品からなるので、写真の撮り手を導入し、その人について語るということも生じます。

## 3 カード 13G

1人の女性が階段を昇っているというのが、ほぼ共通の認知です。彼女は何の目的で、どこに行こうとしているのかを具体的に述べるのが求められています。

4 カード 16<sup>[註3]</sup>

## 第6章 TATの意義と効用

## 第1節 他のパーソナリティ・テストとの比較

以下では他のパーソナリティ・テストとの比較検討を試みます。と言っても、実践的なことも含んだ詳細な比較ではなく、原理的な面に焦点を当てた簡略な比較にすぎません。

まず何と言っても投影法の代表たるロールシャッハ・テストを取り上げざるをえないでしょう。次に、TATと近縁性を感じさせるハンドテストとPFスタディを取り上げ、最後に、TATのみでなく投影法一般を視野に入れながら、質問紙法一般との比較検討を試みようと思います。

## 1 ロールシャッハ・テスト

ロールシャッハ・テストは、不定形のインクのしみを見せて、「これは（単なるインクのしみだが、もし何かに見えるとしたら）なんでしょうか」（Was konnte dies sein?）と問うテストで、はっきりしないものを見たら、それをはっきりさせ、納得しよう、つまりわかろうとする人間の自然な性向に依拠しています。その点で、TATと共通しています。TATもまた、絵を見たら自然に、何を表しているかわかろうとする、人間の本来の性向に基づくテストです。ただTATの場合、ロールシャッハ・テストと異なり、絵は初めから意味を帯びたもので、「これはどんな場面ですか」（What is the situation?）と問うわけです。非意図的にできあがったインクのしみについて「これは何でしょうか」と問うのと、作者の何らかの意図によって生じた絵について「これはどんな場面ですか」と問うのとの違いに、すでに両テストの基本的違いが示されていると言えるでしょう。

TATで「これはどんな場面ですか」と問われて、「若い女性が恋人に裏切られて悲嘆にくれています」と答える場合、明らかに「心理」が問題になっていますが、ロールシャッハ・テストで「これは何でしょうか」と問われて、「花です」とか「犬の顔です」と答えるとき、それは「心理」を表しているのでしょうか。「心的」あるいは「精神的」な働きを表れであることには違いありませんが、普通の意味での「心理」というにはちょっと抵抗があります。こういう素朴な疑問に答えるように、ロールシャッハ・テストの創案者ヘルマン・ロールシャッハは、当テストについて、「体験するのに用いる体験装置」を明らかにするものであり、「その人がいかに体験する（erleben）かだけを示し、彼がいかに生き（leben）、どこに向かっているかは示さない」と言っています（Rorschach, 1921）。また、クローパーも、「人格のより基礎的な、底部の構造への知識を開くことによって、観察できる行動の理解の手がかりを提供するもの」としています（『ロールシャッハ・テクニック入門』p. 17）。

両テストに関するこのような特徴づけはさらに推し進められ、一方（ロールシャッハ・テスト）は、心の構造、骨格、深い無意識層を明らかにするテストであり、他方（TAT）は、心の内容、肉、比較的浅い前意識層を明らかにするテストであるという通念ができあがっている感があります。これらの対比は、明快で印象的であるという半面、よく考えると、意味するものがわからなくなるという難点をもっています。筆者はせいぜい、基本的な心的機能を明らかにするものと心理的なかわり（関係性、関係相）を明らかにするものという区別でよいのではないかと考えています。この区別さえも、全面的に正しいとは言えないのです。すなわち、TATは心的機能の面についての知見を与えることもできるし、ロールシャッハ・テストが心理的かわりを明らかにすることもできるのです。前者は、物語作りの形式分析について述べたとき触れました。对人的共感性というきわめて重要な能力が、物語中の人物の思いや感情を十分に語れるか否かというところに端的に示されるわけです。

後者の例として、カード での「2人の女性がバーゲンセールで、これは私のものよ、と品物を恥も外聞もなく取り合いっこしている」というような人間運動反応があげられます。これからは、被検者に潜在する对人的かわりの様式が直接的に伝わってきます。このような反応は、ロールシャッハ・テストにおいて本来求められている意味づけ（qualification）の水準を越えた反応とみなされるべきですが、それゆえに、被検者理解の大きな手がかり

となることがあるので、テスターは、得てしてそれに頼りがちです。しかし、その種の反応は、適正水準を越えた意味づけを示す稀少反応であること、および、過剰な意味づけの反応に頼るプロトコル解釈は本来のロールシャッハ解釈ではなく、むしろ TAT まがいの解釈になることを忘れないことが大切であろうと思います。筆者がこのようなことを言うのも、過剰に意味づけられた人間運動反応を含まないプロトコルの解釈の際にも、人間運動反応の内容が象徴的に解釈され、それが解釈全体のなかで形式分析以上に主要な役割を与えられている例を少なからず見かけるからです。

以上のような事情は、ロールシャッハ・テストにおいては人間運動反応以外の反応がわかりにくさをもっていること、言い換えれば、それ単独にはそこから意味を引き出すのが困難であることの証左でもあると思います。それゆえに、各反応の記号化、集計、比率計算などの量的分析が必要となるわけですが、またそれを許す性質をロールシャッハ・テストはもっているのです。それは、カードの図柄が非意図的、偶然的にできあがったものだということです。TAT においては事情が違うということは、すでに述べたとおりです。

上述のように、ロールシャッハ・テストでは人間運動反応以外の反応を単独に解釈することは困難であると一般的に言えても、ときに人間と同様、植物や事物が過剰に意味づけられて、強い象徴性を感じさせることがあります。それを解釈することが、ロールシャッハ解釈の本来の役目でないとしても、ロールシャッハ・テストの魅力をなすものではありません。こうした象徴性の点では、現実世界のできごとを内容とする TAT の物語は見劣りするよう思われます。

ロールシャッハ・テストが内容より形式重視になったのと対照的に、TAT は優れて内容的なテストであるといえるでしょう。<sup>[註1]</sup>

## 2 ハンドテスト

ハンドテストは、9枚の手を描いたカードと1枚の白紙カードを見せ、それぞれについて、「手は何をしているように見えるか」と問うテストです。手は、目や口と同じように「ものを言う」身体部分であるがゆえに考案されたテストであると言えます。描かれたものは何らかの意図や感情を示唆する手である点、および「手は何をしているか」という教示から、明らかに TAT に近縁なテストで、ロールシャッハ・テストとは、視覚刺激を用いる投影技法である点以外、まったく似ていません。ロールシャッハ・テストで、インクプロットに手を見て、その意図を述べる場合はありますが、だからと言って、ハンドテストと近縁であるとは言えません。初めから明らかに描かれた手に意味を見つけ出すのと、何に見えてもいいインクのしみから手を見つけ出すとは大きく異なります。

人は全身の姿勢ないし運動によっても、顔面の表情によっても自分の心を表現し、また、他者の心を察知するのですが、本テストでは、そういうマクロ的な手がかりもミクロ的な手がかりも除外され、手がかりは手に限局されています。これが TAT との大きな違いです。

もう1つ TAT との違いとして、TAT の多くの絵が複数の人間間の相互交渉を描いているのに対し、ハンドテストは、1つの手だけを描いて、相互交渉を表現していないということがあげられます。もっとも、手は対人的な意思伝達のためだけでなく、物へかかわるときにも用いられる、否、こちらのほうが主要かもしれない器官です。その場合には相互交渉は問題にならないわけで、1つの手だけしか描かれていないのはそのせいかもしれません。しかし手がかかわる対象が物だとしても、その手から手の所有者の意思を察知することを求められているわけです。いわば間接的な意思の察知の要請で、これは、直接的対人交渉における相手の心理の読み取りより繊細な感性を必要とするとも言えるでしょう。

以上の2点、すなわち、人の意思を察知する手がかりが限局されていること、および物とのかかわりから間接的に当人の意思を察知するということからすると、ハンドテストの課題は、最初の印象が与えるより困難な課題に思われてきます。もっともこれは「意思」をかなり複雑なものと想定する場合で、物をつかんだり放したりするなどの、手に固有の基本的な行為の意思が問題となる場合には、単純なテストともなるでしょう。その代わりパーソナリティ・テストとしての意義は少なくなるでしょう。

手は現実の世界と行動水準でかかわる器官であるがゆえに、行動水準のかかわり方に関する知見を与えてくれる興味深いテストですが、手による表現には限界がある点が、本テストの限界でもあるでしょう。<sup>[註2]</sup>

### 3 PF スタディ

PF スタディでは、24 場面のどれにおいても、言語によって状況が明確に規定されており、その状況への言語的対応を迫られています。人物も描かれていますが、顔に目鼻がない簡略な線画で、状況理解の補助的な役割しか果たしていません。視覚的刺激から人や物を同定したり、状況を判断したりすることが課題でない点で、TAT および上掲の3テストと異なります。

### 4 SCT

SCT では、視覚刺激は一切ありません。もっぱら言語によって、観念やイメージを喚起するのです。この点で、TAT および上掲の4テストと異なります。さらに、「状況」は視覚的刺激によっても言語によっても呈示されません。呈示された「状況」の判断やそれへの対応は問題になりません。「状況」を想像するきっかけだけが与えられ、どういう状況を想定するかは、被検者に任されているのです。しかし、「私の世界」の範囲での状況でなければなりません。

### 5 質問紙法一般

質問紙は客観的で、投影法は主観的であるとはしばしば言われるところです。確かにデータの処理の面から言えば、質問紙の場合、機械的になされますし、「主観」の入り込む余地はありません。その点でTATなどは対極にあると言ってよいでしょう。とくに量的分析の前提となる記号化などしない筆者の分析・解釈法は、「主観に委ねられた」ものの最たるものとみなされかねません。

すでに述べたように、筆者は筆者なりに、量的観点を取り入れたエヴィデンスに基づく分析・解釈を実践しているつもりですが、そのことはしばらく置いて置き、質問紙とTATのデータ自体に目を向けてみましょう。

質問紙から得られる回答は、自分についての主観的判断です。それも特定の具体的状況における自分でない、一般的な自分についての概括的判断です。考えてみれば、これは容易でない課題です。考える時間を要することもあります。しかし考えるはいけないのです。考えずに、迅速に判断しなければなりません。こういう判断が客観的正しさをもっているという保証はどこにもありません。否むしろ、回答者の立場に立って見たときの困惑の経験からすると、正しいと言えることのほうが少ないのではないかと思います。ここで「事実」というのは、困惑しつつ「はい」「いいえ」「どちらでもない」と回答してしまったということだけで、回答の内容ではありません。このような、正しさの点についてはなはだあやふやな回答を集めて、一個人の真実に迫ることができるのでしょうか。もちろん、質問内容に対する回答の傾向をチェックして、偏りを修正するという工夫がなされている質問紙もありますが、それとて、回答の内容が概略真実であるという前提に立ってのものだと思われまふ。以上が、質問紙——医学的な問診表のようなものでない、心理学的な、広範なパーソナリティの理解を目指す質問紙——に対する素朴な疑問です。

一方TATでは、語り手は絵から具体的な状況を想像するように求められます。たとえその状況が類型的な性質のものであっても、個別・具体的なものとして語るよう求められているのです。その際、語り手自身の思いや感情が、現実生活での強度には劣るものの、人物に付与されます。それらは主観的なものでなく、客観的所与です。そこには、正しさや誤りはありません。そういう意味で、質問紙法より確かな地盤に立っていると言えるのです。問題は、そうした客観的所与が、被検者の特徴をほんとうに表しているのかどうかということです。それは、特定の状況での欲求や感情や思いであり、被検者において恒常的に優勢な要因とはみなし難いのではないか、という疑問が呈される可能性があります。

こういう疑問に対しては、筆者は、かかわり様式（関係性、関係相）のポテンシャルという考えを導入し、同じ絵における他の物語類型との比較対照によって、その大きさ、ないし強さを判断するというやり方で対処していることをすでに述べましたが、そもそも、被検者がある特定の状況自体を自発的に連想すること自体が、その状況に含まれるかかわり様式の相応のポテンシャルを意味しているとも言えるのです。

筆者のデータの分析・解釈の方法は、決して機械的に進むものではなく、その過程でさまざまな主観が入り込む余地はありますが、人が思うほど、恣意、主観に委ねられているわけではありません。そういう批判や偏見のあるのは、従来の多くのTAT解釈にも責任があると思います。それらは、1つの物語を同じ絵での他の多くの物語と

比較対照するという態度をあまりにも欠いていたからです。

それはともかく、ここで筆者が強調したいのは、TATの反応(物語)は、どんなものであれ、被検者の創造物であり、機械的にでもやれる選択肢からの選択ではないということです。それは創造物として、客観的所与であり、汲めども尽きせぬ豊かさを秘めており、何度でもそこに立ち返って新たな発見をすることができるのです。

以上のことはTATを念頭において述べたものですが、TATに限らず、投影法一般に当てはまることでもあります。

## 第2節 TATに固有の意義と効用

### 1 TATの特色

第1節で述べたことから明らかになったように、TATは、ハンドテストのように「状況」を身体部分に局限することなく、SCTのように単に観念的に状況を想像させるのではなく、PFスタディのように状況を言語的に明確にし、絵はただそれを補足するだけで、それ自体としてはたいして連想を喚起する力をもたないものとして扱うのではなく、人物の仕草や表情をも描いた絵という形で具体的に呈示し、状況描写を求める点に特色があります。もちろん絵の数はかぎられているので限界はありますが、20前後の物語を詳細に分析・解釈すれば、被検者のパーソナリティについて相当広範囲に涉って、しかも微妙な点まで明らかにしてくれます。そういうテストなので、臨床の現場で被検者の病理的側面を明らかにすることに威力を発揮するだけでなく、健常者が自分を知る手立てとして、非常に有効ではないかと思えます。

### 2 事例の事実の理解を深める

ところで、これまで筆者は、物語中の人物の欲求、感情、思いから語り手自身のそれらを明らかにすることを述べてきましたが、それは要するに、人や物とのかかわりの様相を明らかにすることと同じです。パーソナリティとはどのつまり、当人の比較的安定した、かかわりの傾向のことであり、TATはそれを他のテスト以上に具体的に示してくれるものだと筆者は思っています。

### 3 パーソナリティ・テストとしての絵解き法の臨床的意義

TATは鑑別診断に向いているというより、事例の心理的理解を深めるのに適しているのではないのでしょうか。

TATに限らず、心理テストはいわば、履歴書や免許証にあるような正面向きの肖像写真という捉え方をしてもよいのではないかと思います。その写真は写されることを意識し、多少とも構えた態度でカメラと正対するという皆に共通の条件下でのその人の姿を写しています。それはスナップ写真ほど生活場面における生き生きした当人の姿を捉えてはいないでしょう。1枚の正式な肖像写真は数多くのスナップ写真に到底及ばないでしょう。しかしその代わりそれは、当人の顔の基本型を示していると言えます。顔を構成する諸要素のバランスやその1つひとつを知るには、正式な肖像写真にまさるものはありません。心理テストにも、少なくともこれぐらいの意味をもたせてもよいのではないかと思います。

他のテストにおいてと同様、TATの反応においてももちろん病理の兆候は現われえます。しかし、そうした兆候から鑑別診断に至るには、どうしても基準が必要になるでしょう。そして基準は量的基準がモデルになります。しかしTATは、第2部で述べるように、量的分析に向いていません。あるいは、量的分析はTATに馴染まないと言ったほうがよいかもしれません。もちろん量的観点がまったく必要でないかということ、そういうことはありません。特定のかかわり方が、繰り返し物語に表現されれば、そのことは重要ですが、そこには量的観点がはいっているわけです。

しかしTATの本領は、病理の軽重を厳密に区別することにはありません。むしろ、事例を理解するのに寄与してくれると言えます。事例は、外的、内的事実の集積からなりますが、事実を知ること、それだけでは理解ではありません。私たちはそれらの事実を解釈することにより、事例の理解に達するのです。解釈というと、すぐ主観的という連想が働き、それを攻撃しようとする人もいますが、解釈は理解と同じです。それはともかく、ときに、事実をどう解釈したらいいかわからない、あるいは、迷うということがあります。そのようなとき、TATは、事実の解釈のヒントを与えたり、不確かな解釈をより確実なものにしてくれたりします。これは、TATの効能の1

つに過ぎませんが、これだけでも、心理臨床への小さくない貢献だと思えます。

ここでTATの使用者にしばしば認められる、物語解釈における誤った態度に言及しておきます。それは、物語の理解に際し、語り手の生活的事実を持ち出すことです。つまり、語り手の過去のこれこれの経験が、これこれの物語を作らせたのだ、とするわけです。しかしこういう納得の仕方に何か意味があるのでしょうか。TATは事例理解に何かを加えたといえるのでしょうか。それで終わってしまえば、ゼロです。せめて、特定の過去の経験はTATの物語に反映されるほど重みのあるものであるのかという受け取り方をすれば、なにがしかの貢献はあるでしょう。しかしそれでも、今問題にしているような解釈態度は、そもそも正しくありません。TATの物語は、語り手の経験の範囲外のことを示していることが少なくないからです。たとえば、カード13MFで、男性と女性の感情のもつれから、男性がかつとなって女性を殺したという物語は珍しくありませんが、語り手が実際に殺人を犯したことはないの言うまでもありません。TATの物語は、現在・過去・未来の個人的な体験（可能性）や種々のメディアを通して見聞したものと関連があることは疑いをいれませんが、事実の側から物語を説明するのではなく、逆に語り手の常習的なかわりのパターンが、似たような体験を多くさせているというふうにも考えることもできるわけです。つまり、優勢なかわりのパターンが事実を説明する、あるいは理解させるということです。このようであってこそ、パーソナリティ検査の名に値するのではないのでしょうか。そして、語り手を自己認識や自己改善にも導く働きをするのではないのでしょうか。

心理テストについては、当たっている、当たっていないなどという言い方がよくなされますが、それは事実との対応から言っているわけです。しかし事実なら、なにも心理テストをやらなくてもわかるわけです。（それとも、ふだんの当人の行動からは容易に予見できない事実を予見せよというのでしょうか。）事実は大切ですが、先述のように、事実自体というものではなくて、その解釈があるのです。解釈することは、納得しようとすることです。納得できなければ、事実は力を持ちません。事実を解釈し、事例の全体的理解を促進してくれてこそ、心理テストは意味があるのではないのでしょうか。少なくとも、そういうテストがあつていいと思います。そしてTATはそういうテストの一つと言えます。

この際注意しておきたいのは、TATは事実の理解に役立つのであって、逆ではないということです。ときどき事実を助っ人に引っ張ってきてTATを分析・解釈しようとする場合がありますが、これは本末転倒です。これでは何のためにTATをやったのかわかりません。テストは、事実が教えてくれないものを教えてくれるかもしれない、あるいは、不確かな推測をより確かなものにしてくれるかもしれないという期待のもとに実施するわけです。そういう意味で、テストの独立性は尊重されるべきです。私は、事実についての情報は脇に措いて、つまり目隠し的にテストを分析・解釈することもよしとします。とくに、分析・解釈の訓練の過程では、そういうやり方を薦めます。しかしこういう私の主張が、事実無視ないし軽視の印象を与えるのか、ときにそういう批判を受けることがあります。それは、TATを分析・解釈していくことと、その結果を考慮に入れた事例の総合的理解に至ることとを取り違えている結果でしょう。両者は別のプロセスであり、前者のあとに後者がなければならないというのは自明のことに思われます。<sup>[註3]</sup>

## 第2部 物語の分解と量化の試み

すでに述べたようにこれから述べるのは新しい試みです。それは端的にいえば、物語の分解と量化の試みです。筆者はこれまで、こうした試みに異を唱えてきました。

曰く。画家がそれぞれ独自の意図をもって描いた絵は質的に異なる。そういう絵に共通に適用可能な分析の枠組みを設けるのはどんなものか疑問に思える。さらに、つぎのようにも書きました。絵、そして絵解きという、ほとんど分解不能な、全体として把握してのみ意味があるものが対象になっているのであるから、絵解きの結果を、無理に相当程度分解して、細かい指標を取り出すことは可能は可能であるが、その時点ですでに絵解きの持ち味は失われている、と。

このような趣旨のことを、いろいろな論文で書いてきましたが、あまり論理的ではない見解だと思ふようになりました。これ自体は的外れだとは思いませんが、しかしこのような理屈をいう以前に、1つのTATの物語は、語り手理解の多様な手がかりを含んでいて、しかもそれらを予期することは困難であるという実際経験が、記号化の



考えを追いやってしまったというのが、実情に近いでしょう。

しかし、絵の作者の意図はそれぞれ異なっても、そこに表出されているのは人間の行動や態度や感情に違いはないし、絵解きする人も同じ人間としての枠組みをもってそれから意味を汲み取るであろうという、至極単純な結論に達しました。それで、関係相というものをカテゴリー化して、少数にしばれば記号化と量的把握も可能であろうと思うようになりました。実際やってみると、それは不可能ではなく、被検者に存在する関係相の概観や構造的把握をもたらしてくれました。またほかの人との比較も容易になりました。これで事足りるとはいえませんが、TAT プロトコルの理解に少なからぬ貢献をしてくれると思います。以下に新方法の詳細を述べます。

## 第7章 関係相の種類

これまで、かかわる仕方、かかわりの様相、関係様態を明らかにすることこそ、TATの主たる役目であるとさんざん言ってきました。それらのことばを、「関係相」ということばで統一することも提案してきました。しかし関係相が具体的にどのようなものを指すのか、また、どのようにチェックしてゆくの、などについてはほとんど触れませんでした。そこで、ここでは、これらの詳細を述べてゆこうと思います。

まず筆者がカテゴリー化した関係相の一覧表を掲げます。<sup>[註1]</sup>

表の左側には関係相のカテゴリーが列挙され、右側には、それらが認められるカード番号を記入するようになっています。最上位カテゴリー6個で、それぞれ下位カテゴリーをもっています。1つの下位カテゴリーには相反するものがvs.の形で置かれています。それは、相反するものは、同じ軸の両極端に位置し、相通ずるものがあり、反応解釈の際には考慮されるべきだと考えたからです。

記録する関係相は、物語中のどの人物が示したかどうか問いません。どの人物が表わしても、また同じ人物が何回示しても、それぞれ登録します。もっとも同一人物がまったく同じ関係相を同一人物に対して繰り返し示す場合には、登録を控えます。

すでに上でちょっと触れましたが、チェックしたものを記録する仕方がロールシャッハ・テストと違います。ロールシャッハ・テストの場合は、カードごとに、チェックしたものを記録するのですが、ここでは、あるカードの反応(物語)中に、ある特定の関係相が認められたら、そのカードの方を、余白に登録するのです。そうして、最後に、ある関係相が、どのカードでどのくらい生じたかを調べ、他の人との比較が可能になるのです。

各カテゴリーの包含するものや意味はこれから詳しく論じますが、ここで、具体的な反応のチェックの仕方を例示しておきましょう。

### カード1の物語

「この少年は裕福な家庭……中流家庭ぐらい。兄弟が多くて、兄が父親に可愛がられている。この兄の弾くバイオリンにずっと憧れていて、兄のいないときにこっそりバイオリンを持ち出したんだけど、どこか傷つけてしまって、兄はこの父からもらったバイオリンをすごく大事にしていたので、どうしようかと悩んでいるところ。たぶんこのあと隠そうとするんだけど、嘘が下手な子で結局ばれてしまって、しばらく兄と不仲になってしまうんだけど、兄はけっこう年上で、そのうち許してくれて、このあとバイオリンを教えてくれるようになる。」

少年は、兄弟も多く、かわいがられていないらしいことから、剥奪の状態 (Dep) がチェックされますが、兄のバイオリンをこっそり持ち出すことは、盗みに匹敵する行為で、やはり Dep がチェックされます。バイオリンを傷つけることは、Harm に相当し、それを隠そうとすることは、Conc に相当します。結局ばれてしまうことは、Expo に相当し、兄と不仲になることは、Hos/Disg に相当します。そして最後には、兄と和解し、兄がバイオリンを教えてくれるようになります。したがって Uni と Gui に登録されます。

これでほぼ関係相は登録しつくされていると思います。

似たところのある物語をもう1例挙げましょう。関係相にアンダーラインをひき、そのあとに括弧つきで記号を示すことにします。

関係相のカテゴリー	当該の関係相が含まれる 物語のカード番号	小計	小計	小計 ~
Expl: 見 (知り) たいものを意図的に見 (知) る (暴く・見破る・探る・偵察する・追及する・調査する・観察する・模索する) vs. Pas-F: 見たく (知りたく) ないものをたまたま見て (知って) しまう (目撃する・知って驚く・恐怖する)				
Expo: 自分を見 (知) られる・(見) 知られた (認められる・誉められる・有名になる・英雄になる・自己を主張 (表現・ 実現) する・変身する・告白する・ばれる) vs. Conc: 自分を見 (知) られない・見 (知) られたくない (隠す・密かに行動する・偽装する・隠れる・引きこもる・逃げる)				
Con/Coer: 統制・強制 (有無を言わずやらせる・従わせる・禁止する・処罰する・脅す・叱る) vs. Ask/Req: 依頼・要求 (頼む・求める・誘う・祈る)				
Dec: 教唆 (だます・よくないことを吹き込む・けしかける) vs. Gui: 教導 (正しく導く・教える・諭す)				
Spo/Sav: 支援・救助 (支える・助ける・救う・治す・気遣う) Prov/Ser: 供給・奉仕 (与える・世話する・つくす) vs. Harm: 侵害 (襲う・闘う・殺す・虐げる・壊す・自殺する) vs. Dep: (物の) 剥奪 (奪う・盗む・取る・困窮する)				
Like: 好感・愛着 (好く・慕う・かわいがる) vs. Hos/Disg: 敵対・嫌悪 (冷淡・無関心・好かない・馴染めない・嫌う・憎む・恨む・呪う・妬む・ 羨む・さげすむ) Love: 性愛・執着 (恋慕する・求愛する・愛し合う) vs. LoL: 愛の欠如 (愛が冷めた・心変わりする・愛を装い利用する・異性に対し無関心・憎 む・恨む)				
Uni: 結合・融合 (再会する・和解する・相和する・受容する・結婚する・性交する・待つ) Vs. Sep/Los: 分離・喪失 (死に別れる・別れる・失う・見捨て (られ) る・拒絶する (される))				
Pos-F: 向上・発展 (成長する・幸せになる・立ち直る・活躍する・保護される・保存される) vs. Neg-F: 衰退・没落 (自殺する・破滅する・苦しみ続ける・不幸になる・犠牲になる・朽ち果 てる・荒廃する)				
関係性が不明, あるいは欠如, あるいは全体的な反応失敗とみなされるもの				

「この少年はバイオリンをずっとまえから演奏したいと思っていた (Expl)。家が貧乏なので、バイオリンを買うことができず (Dep) いつも持っている人をうらやましいとおもっていた (Hos/Disg)。父母にねだっても (Ask/Req) ても買ってもらえなかった。(中略) しかしどうしてもほしくてたまらなくなり、人通りの少ない楽器屋から、バイオリンを盗んで持ち逃げしました (Dep)。しかし、お父さんとお母さんが帰ってきたらなんといわれるだろうかと、後悔しはじめました (Con/Coer)。(中略) やがてお父さんとお母さんが帰ってきたとき、少年はあまりにも自分の世界に入っていたので、バイオリンを隠してなくて、すぐ見つかってしまった (Expo)。父と母はとても驚き (Pas-F) そんなにバイオリンを欲しかったのかと思い、家の経済状態もよくなったので、これを機会にバイオリンをプレゼントすることになった (Prov/Ser)。楽器屋さんにも父母に連れられて謝りにいった (Expo)。楽器屋の人はおおらかな人で、許してくれ、バイオリンを売ってくれ

た (Uni)。」

次に、各力カテゴリーの出現数の平均値、出現率の平均値および範囲を参考のために示しておきます。被検者は男女 50 名で、出現数の平均値は、各被験者の各力カテゴリーの出現数を集計したものを被検者数で割ったものです。出現率の平均値とは、被検者ごとに各力カテゴリーの出現率を調べ、それらを総計して、被検者数で割ったものです。男女別にしたのは、いくつかの使用カードが男女で異なるからです。範囲に関しては、あまりに極端なものは除外し、およそのところを示しました。

関係相のカテゴリー	出現数の平均値と およその範囲		出現率の平均値と およその範囲	
	男	女	男	女
Expl: 見 (知り) たいものを意図的に見 (知) る (暴く・見破る・探る・偵察する・追及する・調査する・観察する・模索する) vs. Pas-F: 見たく (知りたく) ないものをたまたま見て (知って) しまう (目撃する・知って驚く・恐怖する)	17	19	36	32
Expo: 自分を見 (知) られる・(見) 知られたい (認められる・誉められる・有名になる・英雄になる・自己を主張 (表現・実現) する・変身する・告白する・ばれる) vs. Conc: 自分を見 (知) られない・見 (知) られたくない (隠す・密かに行動する・偽装する・隠れる・引きこもる・逃げる)	8-25	12-30	30-40	25-40
Con/Coer: 統制・強制 (有無を言わずやらせる・従わせる・禁止する・処罰する・脅す・叱る) vs. Ask/Req: 依頼・要求 (頼む・求める・誘う・祈る) Dec: 教唆 (だます・よくないことを吹き込む・けしかける) vs. Gui: 教導 (正しく導く・教える・諭す)	6	7	12	13
Spo/Sav: 支援・救助 (支える・助ける・救う・治す・気遣う) Prov/Ser: 供給・奉仕 (与える・世話する・つくす) vs. Harm: 侵害 (襲う・闘う・殺す・虐げる・壊す・自殺する) vs. Dep: (物の) 剥奪 (奪う・盗む・取る・困窮する)	5-10	5-10	7-20	7-20
Spo/Sav: 支援・救助 (支える・助ける・救う・治す・気遣う) Prov/Ser: 供給・奉仕 (与える・世話する・つくす) vs. Harm: 侵害 (襲う・闘う・殺す・虐げる・壊す・自殺する) vs. Dep: (物の) 剥奪 (奪う・盗む・取る・困窮する)	10	12	21	20
Like: 好感・愛着 (好く・慕う・かわいがる) vs. Hos/Disg: 敵対・嫌悪 (冷淡・無関心・好かない・馴染めない・嫌う・憎む・恨む・呪う・妬む・羨 む・さげすむ) Love: 性愛・執着 (恋慕する・求愛する・愛し合う) vs. LoL: 愛の欠如 (愛が冷めた・心変わりする・愛を装い利用する・異性に対 し無関心・憎む・恨む)	5	8	10	13
Uni: 結合・融合 (再会する・和解する・相和する・受容する・結婚する・性交する・待つ) vs. Sep/Los: 分離・喪失 (死に別れる・別れる・失う・見捨て (られ) る・拒絶する (される))	3-10	5-15	7-15	8-22
Uni: 結合・融合 (再会する・和解する・相和する・受容する・結婚する・性交する・待つ) vs. Sep/Los: 分離・喪失 (死に別れる・別れる・失う・見捨て (られ) る・拒絶する (される))	7	11	16	17
Pos-F: 向上・発展 (成長する・幸せになる・立ち直る・活躍する・保護される・保存される) vs. Neg-F: 衰退・没落 (自殺する・破滅する・苦しみ続ける・不幸になる・犠牲になる・朽ち果てる・ 荒廃する)	5-10	[註2]	10-25	[註2]
Pos-F: 向上・発展 (成長する・幸せになる・立ち直る・活躍する・保護される・保存される) vs. Neg-F: 衰退・没落 (自殺する・破滅する・苦しみ続ける・不幸になる・犠牲になる・朽ち果てる・ 荒廃する)	3	4	6	11
Pos-F: 向上・発展 (成長する・幸せになる・立ち直る・活躍する・保護される・保存される) vs. Neg-F: 衰退・没落 (自殺する・破滅する・苦しみ続ける・不幸になる・犠牲になる・朽ち果てる・ 荒廃する)	1-5	3-10	[註2]	2-15
関係性が不明、あるいは欠如、あるいは全体的な反応失敗とみなされるもの				

## 第8章 関係相のカテゴリー<sup>[註1]</sup>

では、各カテゴリーの解説に移ります。

各カテゴリーは、長年多くのプロトコルに接してきた過程でのおのずから成ったもので、とくに理論的背景があるわけではありません。

### 第1節 大カテゴリー

まず大カテゴリーから述べていきます。

は、見ることや知ること、あるいは見せることや知らせることが問題になっている場合です。しかし、先般言ったように、これらと反対の場合、すなわち、見（知り）たくない、見せ（知らせ）たくない、隠したい、隠れたいという場合なども含みます。

は、自分の意思で相手を動かすことが問題になっている場合です。いろいろなケースがあり、それらごとに下位カテゴリーを設けてあります。

は、人のために、あるいは人のせいで自分が自発的に動くことが問題になっている場合です。両者を分けて下位カテゴリーを設けてあります。

は、感情のカテゴリーです。ポジティブな感情の表れとネガティブな感情の表われの両方を含みます。

は、人間同士の結合が問題になっている場合と反対の別離や喪失が問題になっている場合です。

は、未来の見通しの明るさや反対の暗さが問題になっている場合です。

以上が大カテゴリーのごくおおまかな意味づけです。

### 第2節 下位カテゴリー

以下にはそれぞれの下位カテゴリーについて、<sup>[註2]</sup>でその具体的表れや記号化について説明するとともに、<sup>[註3]</sup>でどのような意味づけが可能なのかを示唆し、どのカードで現れやすいかを示してしてゆこうと思います。

#### 1 カテゴリー<sup>[註2]</sup>

##### a Expl (Pas-F)<sup>[註3]</sup>

暴く、見破る、探る、偵察する、追及する、調査する、模索する、観察する、などは広い意味で、見たい、知りたい欲求の表れとみなされるので、探索 Exploration（略記 Expl）という英語を当てました。相手の秘密を探る、暴くということには、不信感を解消したいという願望や、明らかにされる秘密を利用する悪意が含まれています。他のものには、純粋な好奇心や見ることの楽しみが示唆されているでしょう。しかし、そういう好奇心や認識欲や見ることの享楽も状況次第で、違ったものに変わりうるのではないかと思います。筆者が一見異なったものを同じカテゴリーに含めるゆえんです。

これと反対なのは、見たくない、知りたくないという欲求なのですが、これらは、このままの否定的なかたちではTATに表れにくいものです。それで、見（知り）たくないものをたまたま見て（知って）しまったというものを、見（知り）たくない欲求を表わすカテゴリーと判断し、Passive Finding（略記 Pas-F）と記号化しました。見てはならないものを目撃してしまった、知りたくないことを知らされ驚く、恐ろしくて眼をそむける、などの反応がここに属します。

Expl は、男でも女でも、カード5, 9GFで多く表れます。これは、5では、部屋をのぞいた女性が、意外なものや状況を見て驚くという物語が、9GFでは、一方の女性が他方を偵察しているという物語が多発することによります。Pas-Fは、男子では多くありませんが、女子ではカード6GFと13MFでやや多い傾向があります。6GFでは、女性が背後から男性に突然話しかけられ、ハッとするという物語作られやすく、13MFでは、女性が死んでいるのに男性が気づき驚くとするものがかなり多いからです。しかしこういう設定は男子でも多いのですが、驚愕反応に明らかに言及しないせいか、登録数は比較的少なくなっているのだと思われます。

b Expo (Conc)<sup>[註3]</sup>

次に自分を見られたい、知られたいという願望が問題になっている場合を Exposure (略記 Expo) として記号化しました。認められる、誉められる、有名になる、英雄になる、自己を主張する、自己がなりたい自分になる、変身する、などの反応がここに属します。告白することや警察に自首して出ること一種の自己開示であり、ここに含めます。さらに、絵画や彫刻によって自己を表現しているとみなされるもの、および人間ではなく物が皆から慕われるとするものも、含みます。これらでは、絵や彫刻や船に同一化しているとみなされるからです。秘密がばれるとするものも、自発的開示ではないので異論はあるかもしれませんが、ここに含めました。これらはすべて、自分を他者に、あるいは自己自身に、自分はこういう人間であるとして示すことであるとまとめられるでしょう。含むものが多様であるように、意味づけも多様になります。ナルシスティックな自己顕示や野心を表わすこともあれば、アイデンティティ (自己確立) の意志を表わしていることもあります。

これらと反対のものが、隠蔽 (Concealment, 略記 Conc) で表わされる、隠す、隠れる、偽装する、引きこもる、密かに行動する、逃げる、などの行動・欲求が問題になる場合です。閉じ込められるとするものは、自発的意図の行為ではないので異論はなきにしもあらずですが、ここに含めます。暴く、ばらす、などの意図や行動、および反対の、隠す、隠れるなどの意図や行動が問題になっている場合には、他者に対する不信や疑惑が推測されます。後者からは、自信のなさや他者に対するおそれや過敏さを感じ取られます。

Expo は、男では、カード 17BM で突出して多く、11, 8BM, 6BM がこの順で続きます。これに 14 が続きます。男子で 17BM が突出しているのは、画中の綱にしがみついている男が、サーカスで綱芸を披露して拍手喝さいを浴びている反応が多発するからです。11 では、竜を倒して英雄視されるという反応が多発し、8BM では、画中の男性が医者を目指し、名医になるという話が多く出ます。6BM では、男子で母親のもとを離れ、自立し、成功するという話や、すでに家出して自立した息子が帰郷したとする物語が、比較的多く見られます。

女性では、2 および 8BM で多く、あとに 14, 12F, 1 がこの順番で続きます。2 では前景の本を持った若い女性が、都会に出て勉学を続け、先生になるという、自己確立の物語が出やすいのです。8BM は男子と同じ理由で多くなっています。14 で多いのは、引きこもっていた男性が世の中に出て行き、自分を確立するという物語の多さからです。12F でも、魔女に見られやすい女性に取りつかれた女性が、魔女から解放され、自分の道を歩んでいくという物語が比較的多く見られます。1 で多いのは、画中の人物はまだ子どもで、親の監督を受けやすく、無理やりバイオリンの練習をやらされ、いやでたまらないが、やがて有名なバイオリニストになったという物語が多く出現します。一見これと反対に、親の支配を脱して、自分の道を行き成功するという物語もつくられます。これもこのカテゴリーに属させることができます。

次に Conc の出現についてですが、男子では 11 で多く、9GF と 14 がこれに続きます。女子では 17GF で最も多く、11, 9GF がこれに続きます。男子でも女子でも 11 で多いのは、怪物の出現で逃げる、隠れるという物語が多いからです。9GF で男女とも多いのは、一方の女性が他方の女性から隠れているとするものが比較的多いからです。

2 カテゴリー — Con/Coer (Ask/Req) および Dec (Gui)<sup>[註4]</sup>

他者を自己の意図・欲求の実現のために、統制・支配、あるいは誘惑・そそのかし、あるいは依頼・懇願などによって動かそうとする意図や行動が問題になっている場合です。他者を、有無を言わず、強制的にあることをやらせたり、あることをやるのを禁止したり、禁止を犯したときには罰したりしている場合には、Control/Coercion (略記 Con/Coer) とします。身分・地位的に優勢であることが前提になっています。

これと異なり、相手に下手に出て、あることをやってくれるように、依頼したり、要請したり、誘ったりしている場合を Ask/Request とし、Ask/Req と略記します。

上述のものと似ていますが、相手をだまして何かをやらせる場合は、Deceive (Deception) とし、Dec と略記します。

最後に、相手を正しく導く、教える、諭す、など教導が認められる場合には、Guidance とし、Gui と略記します。この場合には、自分の思うことを一方的にやらせるというより、相手の意図するところを、導いて実現させるというニュアンスもありますので、以下の との中間に位置するものといえるでしょう。

いずれの下位カテゴリーにおいても、人を動かすという点で共通し、広い意味で依存という関係相を指摘できます。赤ん坊が母親に絶対的に依存して、すべてをやってもらわなければならないように、絶対的支配者も、すべてを配下の者にやらしてもらわねばなりません。そういう見方をすると、依存性は、この種の関係相を見る人の根底にあるものといえるでしょう。依存性の反対は自立性ですが、「依存しない」、「自立してやってゆく」と積極的に述べるものは少なく、対立対を立てることが困難です。むしろ次に述べる を反対対と考えたらどうかと思います。

Con/Coer は、男性でも女性でもカード1でもっとも多く、男子では7BM がこれに続き、女子では7GF が続きます。これらでは、年長の人物が見られやすく支配 - 被支配関係が読み取られやすいのです

Ask/Req も、Gui も多くありません。ただ Dec が男子では、7BM と 12M で若干多く、女子で、Dec が 12F と 6GF でやや目立ちます。

### 3 カテゴリー — Spo/Sav および Prov/Ser (Harm・Dep)<sup>[註4]</sup>

ここに集められたのは、人のために、あるいは人のせいで自分が動くとするものです。前者は利他的、愛他的な振る舞いや態度を意味し、困っている人、危機的状況にある人を支援したり、救助したりするというもの Support/Save (略記 Spo/Sav) と、とくに困っていない人に対する、親的な世話、必要なものの供給などを述べたもの Provide/Serve (略記 Prov/Ser) に分けられます。他方後者は、侵害的・剥奪的な振る舞いや態度を意味し、殺す、壊す、襲う、自殺する、など自他を損傷する行為を述べたもの Harm と、ものを盗む、強奪するというもの Deprivation (略記 Dep) に分けられます。後者には具体的に誰かにものを盗まれたというより、全体的にものに恵まれない悲惨な生活を述べたものをもここに含めてあります。

愛他的な行為・態度を述べたものと加害的な行為を述べたものを同じ大カテゴリーの下に置いたのは、両者が人間の行為や態度、感情の同一カテゴリーの両端に位置するものであり、状況によって一方から他方に移りうると考えたからです。

Spo/Sav は、男子ではカード 12M と 8BM で圧倒的に多く、女子では 8BM と 18GF で多くなっています。いずれもカードの特徴によります。とくに 8BM では手術場面が見られることが多く、その場合 Spo/Sav に登録してしまうからです。Prov/Ser は男女とも多くありません。女子が 7GF で若干高いぐらいです

Harm は、男子では5つの山があります。11, 8BM, 15 でほぼ同じほど突出して多く、13MF, 18BM がそれらに続きます。女子において少ないといえますが、18GF を除けば男子と同じパターンが見られます。いずれも絵の特徴によります。Dep について男女ともどのカードで多いということはありません。

### 4 カテゴリー — Like (Hos/Disg) および Love (LoL)<sup>[註3]</sup>

は、人に対する好き、愛しているというポジティブな感情や、嫌い、憎んでいるというネガティブな感情が問題になっている物語が集められています。他のカテゴリーのなかにおいても、人物の好悪を判断できるものは含まれていますが、副次的な扱いにならざるをえません。ここでは、好悪、愛憎といった持続的な感情が明確に表現されているものを対象にしています。

さて、このなかで性的要素を含んでいない好き、慕うなどを Like とし、愛している、恋慕しているなど、性愛的要素を含むものを Love としました。これらと反対の否定的感情をそれぞれ、Hostility/Disgust (略記 Hos/Disg), Loss of Love (略記 LoL) としました。

率直に言えば、このカテゴリーは問題を含んでいることを認めざるをえません。というのは、恋愛は相互に牽引

するものより浮気や三角関係など、葛藤を含んだもののほうがはるかに多いのですが、それら全部を拾い上げていません。できるだけ LoL として拾い上げましたが、カテゴリーの修正の余地があるでしょう。

この種の反応には、 の Spo/Sav や Prov/Ser に見られるなど他者への配慮は含まれていません。個人的な感情の表明だけがあります。したがって、個人主義的で、ときには主張を譲らず、頑固になることもあるように思われます。

Like は、男女ともそれほど多くありません。Love も、男子では少なく、女子がカード 10 で比較的多く示しているだけです。

否定的な感情 Hos/Disg は、男子では 9GF で比較的多く、女子では、7GF で圧倒的に多く、9GF、12F がそれに続きます。(7GF では、女の子が聞きたくもない話を聞かされることと聞かす女性に嫌気がさしている、とするものがほとんどを占めます。)

LoL は、男子では、4 でやや多く、女子では、4 でかなり多く、13MF で比較的多くなっています。(4 で男性の浮気を女性が追及しているという話や、13MF で男性が女性の愛を失って女性を殺したとする話が多いです。)

## 5 カテゴリー — Uni (Sep/Los)<sup>[註4]</sup>

自己の大切な人を、死やその他の不可抗力的な理由で、あるいは、他者に奪われたり、見放されたりして失う事態、すなわち関係の消滅が問題になっている場合を、Separation/Loss とし (略記 Sep/Los)、それと反対に、再会や和解など、関係の修復、成立などが問題になっている場合を、Union (略記 Uni) と表わします。Uni には、たんに人を待っているとする場合も含めます。さらに、結婚する、性交するというものも、含めてあります。

Sep/Los が多い場合は、被検者が別れを多く経験していることが推測されます。人と関係を結ぶことに不安やあきらめや、反面、願望をもっていることが、それぞれ Sep/Los と Uni に示されているでしょう。

Sep/Los は、男子では、カード 20 で比較的多く、10 がこれに次ぎます。女子では 20 で圧倒的に多く、10 がこれに次ぎます。3BM や 13MF や 18GF でも比較的多く見られます。(20 では喪失の体験を語るものが多く、10 では別離を語るものが多くです。)

Uni は、男子では 10 で圧倒的に多く見られ、9BM がこれに次ぎます。女子でも、10 で非常に多く見られ、20 がこれに次ぎます。(男女とも 10 で多くなっているのは、抱擁が見られやすいからです。男子は、9BM で一群の男たちが寄り添っているところを Uni と登録しました。)

## 6 カテゴリー — Pos-F (Neg-F)<sup>[註4]</sup>

人がこれからの人生を希望や自信をもって生き、成長・発展するというものを Positive Future (略記 Pos-F)、反対に人生に悲観して破滅する、不幸になる、などとするものを Negative Future (略記 Neg-F) としました。

このカテゴリーは、気分の明暗を示唆しているように思われます。気分がものの見方に影響するのは自明のことですが、ただ判断の基準を定めるのが困難で、登録もあいまいになりやすいのが難点です。

Pos-F も Neg-F も、被検者にバラつきが大きいです。これは上述のように判断基準が明確でなかったことにもよるでしょう。

## 7 カテゴリー — 関係性が不明、あるいは欠如、あるいは全体的な反応失敗とみなされるもの<sup>[註5]</sup>

### 第9章 下位カテゴリーの詳細<sup>[註1]</sup>

以下で、前章で述べた大カテゴリーの下位カテゴリーについてより詳しく説明し、該当するものの例を掲げます。

その際、しばしば、あるいはときどき出会うもの(イ)と、まれにしか出会わないもの(ロ)を分けてみました。それによって、関係相のポテンシャルを判断しやすくなるであろうと考えるからです。しかし、両者の区別は絶対的でもなく、また、実例も掲げられたものに尽きるわけではないことを承知しておいてください。例示のあと、当該の関係相がパーソナリティ理解に関してもつ意味を考察します。<sup>[註2]</sup>

#### 第1節 Expl [ i ]<sup>[註3]</sup>

隠されたもの、秘密のものを暴いた・暴こうとして探る・見張る、あるいは、秘密のものを隠そうとする・暴かれはしまいかと恐れる、など、発見・暴露が問題になっているものがここに含められます。暴く主体はたいてい絵に描かれていますが、そうでない場合もあります。暴かれる側は、奮えたり、逃げたりするとされますが、そういう反応に言及がない場合や暴かれることに気づいていないとみなされる場合もあります。

#### 例示

(イ)

- ・カード1で、父親のバイオリンを内緒でいじって壊し、見つかって叱られることを恐れているとするもの
- ・4で、女性が男性の浮気を追及するもの
- ・5で、絵の女性が、不審な物音を聞きつけ見に来たとするもの
- ・6GFで、男性が女性の秘密(犯した罪など)を追及しているもの
- ・8BMで、絵の手前の人物が不法に行われる手術または人体実験を目撃してしまうもの
- ・9GFで、木陰の女性が、走る女性の秘密の行為をたまたま見る、あるいは偵察するもの
- ・10で、男女が人目を忍んで密会しているもの
- ・12Fで、老女が、若い方のやましい行いをなにかも見抜いているもの
- ・17GFで、橋の上の女性が、男たちの盗み・密輸の行為を目撃したとするもの、など

カード12Fでは、上記のもの他に、邪悪な老女こそ、見かけは美しい若い方の真の姿であるとする絵解きも生じます。このようなものでは、被検者自身が暴露する側にまわっているという感じがして、とくに強い人間不信と暴露欲求の存在を推測させます。

(ロ)

- ・カード3BMで、絵の女性は、自分の売春行為が新聞で報じられ恥じているもの
- ・5で、絵の女性が部屋主のいないすきに部屋の中を探る、あるいは子ども(夫)の性行為を目撃してしまった、とするもの
- ・8BMで、身内の人が医療ミスで死んだことがわかり、恨んでいるもの
- ・9BMで、脱走兵が追手に見つからないように隠れているもの
- ・13MFで、男性は女性が生前悪い組織に関係していたことを彼女の死後に知って複雑な思いをもっている、あるいは、男性は女性の不倫の現場を見てしまった、あるいは、殺人の現場に踏み込まれて犯人の男性は顔を隠している、などとするもの
- ・14で、泥棒が逃げてゆくのを目撃したとするもの
- ・15で、奇怪な老人が墓場に出没するのを目撃したとするもの
- ・17BMで、男は高所から覗き見をしようとしているもの
- ・18GFで、秘密を知られてしまった女性が、知った女性を殺そうとしているもの
- ・20で、刑事が犯人を見張っているもの

上述のように、使用頻度の高いカードの大部分で、今問題にしている関係相が読み取られる可能性があります。



## 第2節 Pas-F [ ii ]

発見したもの、暴いたものを人(々)にばらす・知らせる、あるいは逆に秘めておく、など露呈や告知が問題になっているものです。上の Expi と大きな違いはないといえます。1つの物語が、両方に含められるという場合もあります。

### 例示

(イ)

- ・カード 6BM で、男性が友人・恋人の母親に、その死を告げるとするもの
- ・8BM で、秘密裡に行われている人体実験を見てしまった男性が、警察に知らせる・知らせようかどうか迷うとするもの
- ・9GF で、友人の秘密の行動を見てしまった女性が、そのことを誰にも言わず、自分の胸に秘めているとするもの
- ・17GF で、男たちの盗みの現場を見てしまった女性が、警察に知らせるとするもの

(ロ)

- ・カード 6GF で、男性が女性の秘密をばらすと脅して、金を要求するとするもの
- ・7GF で、女性が男性に知らなかった事実を知らされ、驚いているとするもの
- ・18BM で、絵の男性は、見たくないものを無理やり見させられているとするもの

## 第3節 Expo [ iii ]

自己自身をすすんで他者に見せる・見させる、あるいは、自己自身をいやいや人前に曝す、あるいは告白するなど、広い意味での自己暴露が問題になっているものです。陽性の自己顕示とその陰性の事態を含み、両者を分けたほうがよいという考え方もできますが、自己の劣等性や悪徳性を誇張して人に語る場合のように、両者は通底しているとみなされ、相違は実際のプロトコル解釈の際に考慮していただくとして、ここでは分けずにおきます。

### 例示

(イ)

- ・カード 1 で、男の子が、演奏会でうまく弾けるか心配しているとするもの、あるいは、バイオリンを壊したことを父親に打ち明けて、許してもらおうとするもの
- ・6BM で、男性が母親に言いにくいこと(家を出ること、結婚すること、金銭的援助を頼むことなど)を伝えているとするもの
- ・8GF で、女性はモデルとなっているとするもの
- ・15 で、犯罪者が墓の前で罪を悔い改めているとするもの
- ・17BM で、サーカスの芸人が綱渡りの芸をやって見せたとするもの

(ロ)

- ・カード 3BM で、泣いている女性が自分の姿を人に見てほしがっているとするもの
- ・7BM で、老人が有能な愛弟子に見惚れているとするもの
- ・8BM で、奇跡的な手術の様子を報道関係者が解説しているとするもの
- ・12M で、催眠術師が観衆の前で催眠の実演をやって見せているとするもの
- ・12F で、まじめな女性が自分の重大な秘密を、魔女の沈黙を守れというささやきにも負けず告白するとするもの
- ・14 で、切り絵師が切り絵の作り方をやって見せているとするもの
- ・17BM で、頭のおかしな人が素裸でビルの壁をロープで登っているとするもの
- ・18BM で、俳優が舞台上で演技しているとするもの

- ・19で、古い船が最後の航海を終えて博物館に展示されるとするもの
- ・12BGで、昔舟遊びに使った船が観光地に名物として保管されているとするもの

上述のカード8BM, 19, 12BGの例は説明を要するでしょう。8BMの例では、報道者が奇跡の手術をする人に同一化している趣があり、19と12BGの例では、船の擬人化とそれへの同一化がみてとれるから、という理由で、これらをここに含めたのです。

一般に、自己顕示欲求は強く打ち出されると鬨聲を買うゆえに、抑制されがちだと思われまゝ。陰性の例は、そうした自己抑制を表わしている可能性があります。もしまれにしか見受けられない種類のものがプロトコルにいくつあれば、被検者にかなり強い自己顕示欲求の存在が推測されます。それは自己の劣等性を補償するためのものである可能性があります。他者不在のナルシズムを思わせる場合もあります。ただ上掲の例のうちの17BMの反応は、自己の内なる顕示欲求に対し斜に構え、冷ややかに見ているという趣があります。

教える-教わる関係にも、ある場合には見せる要素があるのですが、見せるには、教える要素はなく打ち明ける、訴える、という意味が強い場合もあるので、それとは別に、この関係を取り上げることになりました（ただし「困ったことがあったら教えてね」という「教える」には、知らせる、打ち明けるという意味があります）。

#### 第4節 Con/Coer [ i ]

力づくで、有無を言わず人に指示・命令して何かをやらせる、何かをやることを禁止する、拘禁する、操るなど、統制・支配が問題になっているものです。この関係相は、統制・支配される側はかなり苛酷なものにもなりえますが、彼（彼女）の存在の破壊・損傷は目的とされていない点で、のちに取り上げる、人の存在価値の破壊・損傷が問題となる関係相と区別されます。それに対し、ここでは、むしろ、統制・支配される側は無傷で精一杯指示・命令どおり機能することを求められているともいえるのです。

#### 例示

(イ)

- ・カード1で、男の子は親にバイオリンの練習を強制されているが、いやでたまらないとするもの
- ・2で、男性が女主人に働かされているのを見た女学生が、男性に同情し、女主人に反発しているとするもの、あるいは、本を持つ女性は男性に恋慕しているが、男性の母親が牽制して女性を近づけないようにしているとするもの
- ・3BMで、子どもが親に叱られて泣いているとするもの
- ・5で、母親が騒がしい子どもを叱りに来たとするもの、あるいは子どもがしっかり勉強しているか母親が見に来たとするもの
- ・6BMで、息子の結婚の意思に母親が反対しているとするもの
- ・6GFで、悪党が女性の秘密を握って、悪い行為をさせようとしているとするもの
- ・7BMで、上司が立場を利用して部下に無理難題を押し付けている、あるいは、ボスが手下にやるべきことを指示しているとするもの
- ・7GFで、家庭教師が少女に勉強を強制しているが、少女は拒否しているとするもの
- ・8BMで、ボスが部下に命令して人体実験をやらせているとするもの
- ・9BMで、男たちは強制労働させられてぐったりしているとするもの
- ・12Mで、催眠術師が、ある人に催眠をかけて、思いのままに動かそうとしているとするもの
- ・12Fで、魔女が女性に取りつき、女性の心を支配するとするもの
- ・14で、男性は不当に監禁されているとするもの
- ・15で、手錠をはめられた殺人犯が死刑の宣告を受けているとするもの
- ・17BMで、監禁されていた男が脱出しているとするもの、
- ・17GFで、男たちは奴隷のように酷使されているとするもの

(ロ)

- ・カード 6BM で、息子が母親に叱られているとするもの
- ・13MF で、女性に別れを切り出され、男性は泣きながら出てゆくとするもの
- ・15 で、超能力をもった男が死者の霊を呼び寄せて、悪いことを企てるとするもの
- ・18BM で、犯人が逮捕されたとするもの、あるいは、絵の男性は、見たくないものを無理やり見させられているとするもの (この例は、すでに Pas-F の関係相のところでも掲げましたが、このように1つの絵解きに、複数の関係相が認められることもあります)
- ・19 で、家のなかの人は吹雪で外に出られず、春まで家のなかで忍従しているとするもの
- ・20 で、看守が脱走兵を監視しているとするもの

上掲の例には、指示・命令が相手に対する思いやりや善意から出ていると判断されたものは含まれていません。たとえばカード4で、危険なところに行く男を妻が必死で止めているとするもの、あるいは、精神錯乱の男性が出てゆこうとするのを妻が止めているとするもの、11で、人々は断崖に怯える牛を制御しようとしている、などは除外されています。しかしその判断が微妙なものもあります。その種のものもさしあたり含めて検討するのがよいでしょう。

多くの場合、語り手は、指示・命令される側により強く同一化し、その不快や苦痛を感じ取っているように思われます。そこから、語り手自身が、強制されたり束縛されたりすることに敏感であることが察せられます。しかし、それはまた、他者に対する強制や束縛の潜在的欲求があることに通じます。

#### 第5節 Dec [ ii ]

ある人に何かをさせるために、うまい話で釣る、だまして乗せる、そそのかす、など、広い意味での誘惑が問題になっているものです。

例示

(イ)

- ・カード 6GF で、男性が女性をうまい話で釣り、悪い行為に加担させるとするもの
- ・7BM で、老いた男性が、若い方の男性に儲け話をもちかけ、悪事を実行させるとするもの
- ・9GF で、一方の女性が他方の女性に緊急事態が発生したと嘘を言い、相手が慌てふためくさまを冷たく眺めているとするもの

(ロ)

- ・カード 4 で、女性がある男から侮辱を受けたと嘘を言って、男性を決闘に行かせるとするもの
- ・18BM で、男性は昔の悪の組織の仲間から組織に戻るよう誘惑されているとするもの

総じて出現頻度が低いことから、この関係相を読み取ることに、一般に人に対する不信感や猜疑心の存在を推測してよいでしょう。とくに、最後の例も含めて、ここに掲げられていないような特異な内容のものが見られる場合、かなり強い猜疑心の存在は疑いないでしょう。

#### 第6節 Ask/Req [ iii ]

相手に対する力の露骨な行使はなく、むしろ下手に出て、頼む、懇願する、などの形で自己の意思に相手を従わせる事態が問題になっているものです。

例示

(イ)

- ・カード 4 で、自分のもとを去って別の女のところに行こうとする恋人に、行かないでと女性が必死で頼んでい

るとするもの

- ・6BM で、息子が母親に金銭的な援助を依頼しているとするもの
- ・6GF で、上司が秘書に仕事を頼んでいるとするもの
- ・7BM で、上司が有能な部下にむずかしい仕事を依頼しているとするもの
- ・15 で、犯罪者が許しを乞うているもの

(ロ)

- ・カード5で、母親が子どもにお使いを頼んでいるとするもの
- ・18BM で、絵の男性は背後の女性に行かないでとすがられているとするもの

#### 第7節 Gui [ i ]

人を教え導く、人のために教える、助言する、諭す、など、広い意味での指導・教育が問題になっているもの。相手のために良かれと思ってする行為ながら、強制や操作のニュアンスがあることもあり、また、知ったかぶりをするという自己顕示のニュアンスがあることもあり、それらがあるかないかの判断は必ずしも容易ではないことを言うておきます。

例示

(イ)

- ・カード1で、男の子がバイオリンを習わせられている、あるいは、バイオリンの先生に教わっているとするもの
- ・6BM で、困った事態にある息子が母親に相談し、母親が助言しているとするもの
- ・7BM で、人生経験の長い男性が若い男性に助言しているとするもの
- ・7GF で、少女が本を読み聞かせられている、あるいは、勉強させられているとするもの
- ・7GF で、母親（メイド）が少女の不機嫌をなだめているとするもの
- ・8BM で、医者志望の青年が、父親のような立派な医者になりたいと思っているとするもの
- ・8GF で、先生が教え子のことを思っているとするもの

(ロ)

- ・カード2で、女性教師が生徒たちに対して農業について教えている、あるいは、キリスト教の伝道師が布教にやってきたとするもの
- ・9GF で、家庭教師（木の側）が逃げる生徒を追いかけしているとするもの（Con/Coer にも含められます）
- ・17BM で、体操教師が生徒たちに技を教えているとするもの

上述のまれな例からは、自己顕示的な教えたがりの性向（カード2、17BM）や教えられることを忌避する傾向（9GF）が推測されます。

#### 第8節 Spo/Sav [ ii ]

人を助ける、救う、治す、支える、など、困った事態にある人への援助が問題になっているものです。

例示

(イ)

- ・カード6GFで、年配の男性が、女性をなぐさめたり、励ましたりしているとするもの
- ・7BM で、老いた男性が苦境にある若い方の男を慰め支えるとするもの
- ・8BM で、息子が父親の手術の成り行きを心配している、あるいは、医師志望の青年が将来発展していない地域で人々を助けていきたいと思っているとするもの

- ・ 12M で、老人が病気の人を看病している、あるいは、医者が患者を治療しているとするもの
- ・ 18GF で、一方の女性が他方を介抱しているとするもの

(ロ)

- ・ カード 13MF で、男性が病気の女性の看病をしているとするもの
- ・ 17BM で、危険な目に遭っている子どもを男性が助け出そうとしているとするもの

## 第 9 節 Prov/Ser

### 1 相手のために思ってする行動や態度 [ iii ]<sup>[註1]</sup>

人を世話する、人に仕える・尽くす、人を見守るなど、相手のために思ってする行動や態度が問題になっているものです。

例示

(イ)

- ・ カード 2 で、親が娘に勉学を続けさせるために一生懸命働いている (娘も将来親に恩返しをしたいと思っている) とするもの
- ・ 3BM で、女手ひとつで、子どもを育てている女性が過労で倒れたとするもの
- ・ 4 で、闘いに行く夫を妻が心配して止めているとするもの
- ・ 5 で、母親がご飯だよと呼びに来た、あるいは、子どもが眠っている様子を見に来たとするもの
- ・ 6BM で、息子が老いた母親と一緒に住もうと提案しているとするもの
- ・ 8GF で、母親が子どもたちの遊ぶ様子を見守っているとするもの
- ・ 9BM で、仲間の 1 人が、皆のために寝ずの番をしているとするもの
- ・ 9GF で、メイドがお嬢さんに物を届けようとしているもの
- ・ 10 で、男性が女性をいたわっているとするもの
- ・ 12F で、祖母の背後霊が孫を見守っているとするもの
- ・ 15 で、愛する人を亡くした人が死者の冥福を祈っているとするもの
- ・ 18BM で、男性が背後の人に支えられている、あるいは、肩を揉んでもらっているとするもの
- ・ 19 で、家 (船) のなかの人々は外の脅威から守られているとするもの

(ロ)

- ・ カード 4 で、看護婦が病気の男性を世話しているとするもの
- ・ 6BM で、母親が息子に代わって、ある人に応対してやっているとするもの
- ・ 15 で、慈悲深い人が無縁仏の霊を弔っているとするもの
- ・ 12BG で、巨樹が人や動物の生の営みずっと見守ってきたとするもの

ご覧のとおり、ここで問題になっている行動・態度は、ほとんどすべてのカード (カード 11, 14, 20 を除く) で読み取られる可能性があります。したがって、ごくありふれた種類の関係すら読み取られることが少ない場合には、他者と肯定的な関係をもつことが困難であることを推測させます。逆に、まれな内容のものが語られる場合には、語り手が優しさや善意を意識的に強調したことが感じ取られ、現実の自己というより他者と自己に期待する理想を表わしているときみなされます。

### 2 人への配慮が認められるもの [ iv ]<sup>[註1]</sup>

人のことを案ずる、心配する、など、とくに何かの行動を起こすわけではないが、人への配慮が認められるものです。

例示

(イ)

- ・カード 9GF で、ただならぬ様子で走ってゆく妹を姉が心配げに見守っているとするもの
- ・17GF で、酷使されている男性たちを橋の上の女性が憐れんでいるとするもの

(ロ)<sup>[註4]</sup>

第10節 Love [ v ]

異性に対し恋慕する、求愛する、異性と性交した、など性愛が問題になっているものです。

例示

(イ)

- ・カード 2 で、若い女性が後景の男性に思いを寄せているとするもの
- ・3BM で、女性が失恋したとするもの
- ・4 で、女性が恋人に捨てられまいとしてすがっているとするもの
- ・6GF で、男性が女性をお茶（食事）に誘うとするもの
- ・8GF で、女性が恋人（夫）のことを思っているとするもの
- ・9GF で、2人の女性が同じ男性に恋しているとするもの
- ・10 で、男女が愛し合っているとするもの
- ・13MF で、男女が同衾したとするもの
- ・20 で、男性が恋人を待っているとするもの

(ロ)

- ・カード 4 で、恋人同士でない男女で、女性が積極的に男性に求愛しているとするもの
- ・6BM で、男性が女性に求婚しているとするもの
- ・6GF で、男性が女性に求婚するとするもの
- ・14 で、男性が好きな女性のことを思っているとするもの、あるいは、恋人が暗闇にいるとするもの
- ・17GF で、橋の上の女性が、恋人を待っているとするもの
- ・18GF で、正妻が夫の愛人を責めているとするもの

第11節 Uni [ vi ]

許す、許しを乞う、など受容が問題になっているものです。<sup>[註5]</sup>

例示

(イ)

- ・カード 1 で、父親のバイオリンを壊した男の子が、正直に話したら、父親は許してくれたとするもの
- ・6BM で、家出して戻ってきた息子を母親が受け入れるとするもの
- ・15 で、殺人を犯した男が、罪を悔い、死者に対し許しを乞うているとするもの

(ロ)

- ・カード 10 で、男女がわだかまりを解消し、和解の抱擁をしているとするもの

第12節 破壊・損傷が問題になっているもの

典型的なものは、ある人物が別の人物に大切な何かを、奪われるという形で失い、その人の自己全体の価値が減っ

てしまう事態が読み取られているものです。このような物語では、奪われる側が物語の中心人物であり、語り手は奪われる側により強く同一化していることが感じ取られます。しかし、奪う側が物語の主役であり、奪われる側は特定されない場合さえあります。また、「奪う」のが人間でなく、運命的なものである場合もあり、さらに人間であっても、積極的に奪うとはいえない場合もあります。そのような場合、奪われるということばを用いること自体に問題があるといえなくもなく、単に喪失したとすればよいという見解もありますが、喪失体験は一種の奪われ体験でもあるという考えから、一応ここに含めました。

主に奪われ(喪失)体験が問題になっているものと奪う行為が述べられ、奪われる側への言及はないものとを区別し、それぞれについて、これまでどおり、しばしば、あるいはときどき見受けられる例とまれにしか見受けられない例を掲げます。

#### 1 Harm [ i ] (破壊・損傷する - 破壊・損傷される関係)<sup>[註6]</sup>

攻撃という意味は非常に広いので、上述の関係相のあるものもこれに含めようと思えば含められるでしょう。しかしここでは、ある人の秘密を暴いたり、所有するものを奪ったりすることなく、相手そのものの破壊・損傷を狙ったかわりを問題にします。自殺も自分自身を相手にした破壊行為ですからこれに該当させ、また、物の破壊・損傷でも、その物がある人物と等価の意味をもつ場合には、ここに含めます。さらに破壊・損傷する主体が人間でない場合も対象になります。

ここに含める条件は、上記のもの他に、破壊・損傷が過去のエピソードでなく、現在性を保っていることです。「(過去に前科として)殺人を犯した男性(女性)が云々」という物語はここに該当させません。

これまでと同様、しばしば、あるいは、ときどき見受けられる内容のものともまれにしか見受けられないものに分けて、例を提示してゆきます。

#### 例示

##### (イ)

- ・カード1で、父親のバイオリンを勝手にいじっていたら壊れてしまったとするもの(「奪う」要素もあり)
- ・3BMで、女性は自殺しようと思っている、あるいは、ピストルで人を殺してしまったとするもの
- ・4で、男性が喧嘩(決闘)にゆくのを、妻(恋人)が必死で止めているとするもの
- ・7BMで、悪い組織のボスが手下に殺人を命令しているとするもの
- ・8BMで、ボスが手下に人体実験を行わせている、あるいは、父親が殺害されたところを息子が回想しているとするもの
- ・9GFで、恋人を奪われた女性が奪った女性をひどい目に合わそうとしているとするもの
- ・11で、竜が人々を襲い食べてしまう、あるいは、人々が悪い竜を退治する、あるいは、竜と牛が戦っているとするもの
- ・12Mで、老人が眠っている人を絞め殺そうとしているとするもの
- ・13MFで、男性が感情のもつれから恋人をかつとなって殺してしまったとするもの
- ・14で、男性が飛び降り自殺しようとしているとするもの
- ・15で、無残な殺され方をした男性が墓から蘇り、今から殺した相手に復讐にゆくとするもの
- ・17GFで、橋の上から女性が飛び込み自殺しようとしているとするもの
- ・18BMで、男性が背後から襲われ、暴行を加えられる(殺される)とするもの
- ・18GFで、正妻が夫の愛人を殺そうとしているとするもの
- ・19で、魔物が家を襲うとするもの

##### (ロ)

- ・カード1で、男の子がバイオリンの練習を親から強制されたが、やりたくないでバイオリンを壊すとするもの
- ・5で、不審な物音で部屋を見に来た女性が、室内で人が殺されているのを見て驚愕しているとするもの

- ・8BM で、ある青年が人を殺す方法をいろいろ考えているとするもの
- ・9BM で、兵士たちが敵に皆殺しにされたとするもの
- ・9GF で、恋人を殺して逃げる女性を、木陰の女性が見てしまったとするもの
- ・10 で、吸血鬼が女性の血を吸っているとするもの
- ・11 で、人間同士が戦っているとするもの
- ・13MF で、男性が計画的に女性を殺したとするもの
- ・14 で、人を殺した者が窓から逃げてゆくとするもの
- ・15 で、死者に恨みのある者が墓のなかの死者に向けて銃弾を放つとするもの
- ・17GF で、橋の上の女性は敵に追われているとするもの
- ・18BM で、男性が得体の知れないものに背後からつかまれ、死の世界に連れ去られるとするもの
- ・20 で、敵の爆弾が炸裂し男性は死ぬとするもの

攻撃性・破壊性で問題となるのは、その強さはどの程度かということ、それが能動的な形をとるのか、受身的、被害的な形で経験されるのかということ、およびそのコントロールは可能かどうかということです。やはり、攻撃・破壊的な行動・感情への言及が一般に少ないカードで、それが語られる場合、あるいは、攻撃・破壊性への言及が珍しくないカードで、とくに強い攻撃・破壊的行為が語られる場合、語り手は強い攻撃・破壊性をもっているということになります。能動、受動という経験の形に関しては、語り手が攻撃・破壊する側とされる側のどちらにより強く同一化しているかを見極めることによって判断されるでしょう。能動的な形の攻撃・破壊性がコントロール可能かどうかは、物語の結末の部分に注目して判断する必要があります。実行してしまう、あるいは、すでに実行されたとするものでは、行動化が危ぶまれます。攻撃・破壊的内容の物語が期待されてよいカードでも、それが見られない場合には、攻撃・破壊性の過剰な抑制が推測されます。

## 2 Dep [ ii ]<sup>[註1]</sup>

物語中のある人物——中心人物でなくてもよい——が、大切なものを奪われる、盗まれる、あるいは、逆に奪う、盗む、など、ものの強奪・窃盗が問題になっているものです。

### 例示

#### (イ)

- ・カード1で、男の子が父親のバイオリンを父親の留守中に勝手にいじって壊してしまったとするもの
- ・5で、泥棒に入れられ、家の中を荒らされたとするもの
- ・9GFで、一方の女性は他方に大切なものを奪われ、必死で探しているとするもの
- ・17GFで、橋の上の女性が、盗賊が盗みを働いているのを目撃したとするもの（暴露の要素もあります）
- ・18BMで、男性は強盗に襲われ金品を奪われたとするもの

#### (ロ)

- ・カード1で、男の子がバイオリンが欲しくて、店から盗んできたとするもの
- ・6GFで、女性は男性に秘密を知られ、金を脅し取られるとするもの
- ・7BMで、若い方の男性は老いた男性にだまされて、すべてを失うとするもの
- ・7GFで、少女は拾ってきた赤ん坊を母親に取り上げられそうになっているとするもの
- ・8BMで、男たちが、大切なものを飲み込んだ男性の腹を裂いて、それを取り出そうとしているとするもの（これには暴露と破壊の要素もあります）、
- ・9BMで、カウボーイが睡眠中に牛を盗賊に盗まれてしまったとするもの、
- ・12Mで、横たわる人は催眠をかけられた状態で大切なものを奪われるとするもの、
- ・12Fで、女性は魔女にとりつかれ、魂を失ったとするもの
- ・13MFで、男性は、人形（横たわる女性のこと）が盗まれるといけないので、夜は覆い隠しているとするもの



- ・ 14 で、盗みに入った泥棒が今逃亡しようとしているとするもの
- ・ 15 で、墓荒らしが、これから墓を掘り起こし、金目のものを盗もうとしているとするもの
- ・ 17BM で、泥棒がどこかの家に入ろうとしているとするもの

### 第 13 節 Sep/Los

#### 1 大切な人の喪失 [ i ]<sup>[註1]</sup>

死別や離別によって、あるいは、何者かの仕業で、大切な人を失った、失いそうであるとするものです。

#### 例示

##### (イ)

- ・ カード 2 で、手前の女性が思慕する男性にはすでに妻がいることを知って断念するとするもの
- ・ 6BM で、息子が戦死したことを息子の友人から聞かされ母親が呆然としている、あるいは、母親と息子が父親の死を悲しんでいるとするもの、
- ・ 7GF で、少女は赤ん坊に親の愛情を奪われてしまったとするもの
- ・ 8BM で、青年は大切な人が殺害されたことを思い出しているとするもの
- ・ 8GF で、女性が失恋の悲しみのなかにあるとするもの
- ・ 9BM で、故国を遠く離れて戦地に来た兵士が、休息中に故郷のことを思っているとするもの
- ・ 9GF で、一方の女性は他方に恋人を奪われたとするもの
- ・ 10 で、男女が別れを惜しんでいるとするもの、あるいは、夫婦が子どもを亡くして悲しんでいるとするもの
- ・ 12M で、父親が息子の死を悲しんでいるとするもの
- ・ 13MF で、男性が妻 (恋人) を何者かによって殺されたとするもの
- ・ 15 で、愛する人が死んで、墓前でその死を悼んでいるとするもの
- ・ 17BM で、男性はホテルの火事に遭い、素裸で逃げている (=すべてを失った) とするもの
- ・ 18GF で、娘を病気で亡くした母親が悲しんでいる、あるいは、夫を愛人に奪われた本妻が愛人を責めているとするもの
- ・ 20 で、男性は大切な拠り所 (家、家族、仕事など) を失ったとするもの

これらに、カード 12BG で、かつては人で賑わっていた場所が今は廃れてしまった、とするものを追加してよいでしょう。この場合、場所自体を擬人化しているわけです。

##### (ロ)

- ・ カード 11 で、囚われの身のお姫さまを奪い返すために、勇者たちが竜に立ち向かうとするもの
- ・ 15 で、愛する者を殺された人が墓の前で復讐を誓っているとするもの
- ・ 17GF で、女性は父親の形見の品を川に落としてしまったとするもの
- ・ 19 で、家族の団欒のなかに入れない人 (動物) がいるとするもの

#### 2 見捨て・見捨てられ [ ii ]<sup>[註1]</sup>

見捨てること、見捨てられることが問題になっているものです。

#### 例示

##### (イ)

- ・ カード 3BM で、女性が失恋したとするもの
- ・ 4 で、男性は今の愛人を捨て、新しい女のところに行ってしまうとするもの
- ・ 6BM で、息子が母親を置いて家を出てゆくとするもの

(ロ)<sup>[註4]</sup>

### 3 Sep/Los の意味<sup>[註1]</sup>

以上のように、規準をゆるくしたせいもありますが、TATのほとんどすべてのカードが、奪い - 奪われる体験、あるいは喪失体験を連想させるといことがわかります。しかしおのずと連想させやすいカードとそうでないカードに分かれます。

絵からこの関係相を読み取ることは、大切なものを奪われてしまった、失ってしまったという被害感や喪失感、これから奪われ、失うかもしれないという不安感や警戒心、他者の大切なものを奪いたいという獲得欲求や羨望の念を表わしています。それらがどれくらいの強さで存在するかを、それらが連想されやすいカードで、出現頻度の高い内容のものが連想されているか、それともまれなものが読み取られているか、あるいは連想されにくいカードで特異な内容のものが表わされているか、などを検討することによって最終的に判断することが必要です。

### 第14節 関係性が不明、あるいは欠如、あるいは全体的な反応失敗とみなされるもの

例示1 [ ]<sup>[註7]</sup>

- ・カード4で、働きに出る夫を妻が単に送り出すとするもの、
- ・6GFで、単に夫婦が会話しているとだけするもの
- ・7BMで、父親と息子が四方山話しているとするもの
- ・7GFで、本を読む女性と人形を持つ少女が和やかに時を過ごしているとするもの
- ・10で、夫婦が習慣的な挨拶の抱擁を交わしている、あるいは男女はダンスしているとするもの
- ・12Mで、父親が寝ている息子を起こすとするもの
- ・12Fで、母娘が写真をとってもらっているとするもの、あるいは、鏡を見ている女性が背後に奇怪な老女を見つけて卒倒したもの
- ・18BMで、洋服店で店員に試着させてもらっているとするもの

例示2 [ ]<sup>[註7]</sup>

- ・カード2で、3人の関係について触れないもの（まったく無関係であると自ら述べる場合には、それなりの関係づけをしたと判断される）
- ・6BMで、青年と老女は病院の待合室で診察の順番を待っているとするもの
- ・9GFで、木陰で読書していた女性が、あわてて走ってゆく女性に一瞬注意を奪われたが、すぐまた読書が続けるとするもの

物語が物語になるためには、人間ないし擬人化された動物や植物の登場が必要です。物語作りを求めるTATも、それを前提として、全カードの大半は人間を描いた絵ないし写真からなります。それらのうち人物が1人しか存在しないものは11枚（カード1, 3BM, 3GF, 5, 8GF, 14, 15, 17BM, 20, 13B, 13G）、2人以上が存在するカードは16枚（カード2, 4, 6BM, 6GF, 7BM, 7GF, 8BM, 9BM, 9GF, 10, 12M, 12F, 13MF, 17GF, 18BM, 18GF）です。誰にでもそれとわかる人間が存在しないカードは、カード11, 12BG, 16および19の4枚で、うち11には人らしきものを認知することができ、16は何も描かれていない空白カードです。

少なくとも絵に人物が2人以上存在していたら、語り手は、ふつつ彼らをなんらかの形で関係づけ、その関係が物語の主たる内容となります。たとえ人物が1人しか存在していなくても、別の人物を導入して、物語を展開することが少なくありません。というより、それがふつつのことです。さらに、人間が存在しないカードにおいてすら、語り手は、描かれているものから人間を連想したり、それらを擬人化したりして、なんとか物語を作り上げようとするものです。

このような一般的な事情であるとき、人物と人物の関係の様相が主たる内容にならないのは、注意を引きます。とくに2人以上の人物が存在する絵で、彼らの間になんらの関係も想定しなかったり、関係があるのかわか

らず、あると判断しても情緒的なニュアンスに欠けていたりする場合には、人間関係上の問題が推測されます。

人間関係の様相が主たる内容になるべきカードなのに、なっていない反応を例示してみると、カード 13MF で、息子がたまたま裸で寝ている母親を見てしまい目をそむけているとするもの、などがあります。このような、関係づけがないか、あっても希薄で関係相が不明な例では、何によってそれがもたらされたかを考えてみる必要があります。情動が平板化し、人間関係一般に反応が乏しくなっているのか、それとも、絵が連想させやすい人間関係にある種のコンプレックスがあり、それを無意識に避けようとして、そういう結果になったのか、カードの特性をも考慮して判断しなければなりません。

なお、人物が 1 人しかいないカードや人物が存在しないカードでは、人間関係が内容とならなくても、問題視する必要はありませんが、それでも、人間関係を物語の主たる内容にするか否かは、対人的な敏感さの指標となります。ある場合には過敏さの指標となるように思われます。たとえば、もしカード 11 —— 人間を峻拒するような大自然の光景が描かれており、そこに人の姿を認知しえないわけではないが、ごく小さい —— で、人間同士の —— 人と動物の、ではなく —— 争いを読み取るのは、人間関係への過敏さを思わせます。語り手が、とくに人と人の争いというものに強迫的に囚われていることを推測させます。また、人が複数存在していても、一括して扱われるのが普通のカード、たとえば 9BM で、人物の各々に個別的に詳しく言及する場合には、ある種の過剰な関心が推測されます。

### 第 3 部 事例の分析・解釈

ここで具体的な TAT 事例を扱います。ここでの事例の扱いの特色は、病態や診断名中心でなく、絵解き中心だということです。すなわち、表題は便宜上一応病態や診断名で示してありますが、何よりも絵解き自体の特徴に焦点を当てているということです。絵解きの特徴がそのまま語り手の特徴なのであるという考えに基づいています。病理でなく、人間の尊重の姿勢です。多くの絵解きを見ていくとき、いくつかの特徴的な絵解きの仕方に出会います。たとえば、人物に名前をつけるとか、自分の経験に言及するとか。しばしば出会う、そのような一般的な特徴がもつ意味を、予めおおよそでも知っていれば、解釈作業はらくになるでしょう。それで、まず、そのような、頻度に大小はあれ、一般的に取り出せる形式的特徴を列挙してみました。そしてそういう特徴を示す絵解きを含み、そこでその意味が論じられている事例と当該のカード番号を示すことにしました。いわば、絵解きの特徴を索引事項として、本文にあたっていただくというわけです。

しかしもちろん、TAT の分析・解釈は、それに尽きるのではなく、物語の内容こそその主要対象です。カードごとに絵は異なり、したがってそれに制約されたテーマを含む物語が展開します。それを意味づけていくのですが、このプロセスのなかには、そのとき扱っているカードでは、どのような物語が作られる可能性があるかを概観し、問題となっている物語を、それらのなかに位置づけてみるという作業も含まれます。それは大雑把なものであり、わたしが『TAT の世界』でやったような体系的で徹底したものではありませんが、それでも、読者には、作られる物語のおよその傾向をつかむことができると思います。そして、このおおまかにでも全体を把握しているというところがなかなか大事なのです。

わたしは、TAT の研究会を、これまで 16 年間にわたって主宰してきました。こじんまりした内輪の研究会ですが、2 ヶ月に 1 度のペースを崩さずに、途切れることなく開催して、100 回以上を数えています。その研究会の場では、わたしは、1 つのカードの物語からパーソナリティ所見を導き出す際、根拠を示しつつその筋道を明らかにしてきました。少なくともそう努力してきました。なぜ、どうしてその物語からそのようなことが言えるのかを説明することは、必要なことだと思います。人を納得させる説明ができることは、その解釈の妥当性の一証拠にもなります。しかし、このようなことができるのは、研究会や研修会だからこそです。ひとりで分析や解釈をする際には、プロセスを言語化することなく、所見だけを書き出します。だから、最終的な所見に至るまでに、ほんとうはどれだけのことばと論理が使われているかということに気づきにくいものです。研究会・研修会ではじめて、一物語の一所見に至るまでに長いプロセスがあることが明らかになります。わたしは、それを示すことこそが大切であると思い当たりました。それで、ふだん研究会でやっているような調子で、分析・解釈のプロセスをことばにして

いくことにしたのです。

本書では4つ<sup>[註1]</sup>の事例を扱います。それらの事例の1つひとつの絵解き（物語）を詳解していくわけですが、ある事例のあるカードで言ったのと似た内容のことを、別の事例の同じカードで言うことになったりすることもあるかもしれません。しかし、研究会での経験から、繰り返しも無駄ではないと思うようになりました。同じようなことを何度も聞くことによって、やっと心に浸透していくということもあるでしょう。ですから、繰り返しをいとわず、また、冗舌を恐れず、諄々と説く姿勢でいきたいと思います。<sup>[註2]</sup>

## 第10章 事例A

本章では、事例A（男性・19歳・大学生）におけるTAT反応を検討していきます。Aさんは、心因性反応との診断を受けており、強迫症状と関係念慮を示していた人物です。<sup>[註1]</sup>

### 1 カードごとの検討

カード1の物語 [10" - 1'11"]<sup>[註2]</sup>

小さいときから父親にバイオリンを弾くように教えられて、バイオリンの練習をしていたが、自分にその才能がなくて、戸惑っている状態。……これでいいですか。まだ。……これからはどうなります？ このあと、もう悩みに、悩みに悩んだ末、僕はバイオリンをもう弾きたくないと言います。お父さんに言って、結局どうなるかな。「そうか」と言って、「お前、じゃあお前が、自分が好きなことやれ」って、まあ許してくれる。

＊

まず物語の要約をしてみましょう。

要約：“小さいときから父親にバイオリンを弾くように言われ、バイオリンの練習をしていたが、自分に才能がないと悩んでいる。悩んだ末父親に、もうバイオリンを弾きたくないと言くと、父親は、自分の好きなことをやれと、許してくれた。”

要約してみて、元の物語は要約の必要がないほど無駄がないということがわかります。目立った形式上の問題は見当たりません。

父親の、バイオリンをやれという指示は少年にとって相当重圧で、Con/Coer [Cont. Coer] に該当するといっただよいでしょう。少年が悩んだ末、父親に、もうバイオリンを弾きたくないといったのは、思い切った自己主張であり、拒絶であり、Expo [Exp] および Sep/Los [Sep. Los] として登録できます。それに対する父親の反応は許容的であり、父と子の和解を招くと思われるので、Uni に属させることができます。

＊

絵の少年とバイオリンから、子どもの習い事を連想し、少年の頬杖をついたもの思わげな表情から、それに関する悩みを見たのだと思われます。バイオリンの稽古上の悩みは、うまく弾けない悩みとやりたくないのにやらされる悩みに大別されます。ふつうどちらか一方が前面に出ています。この絵解きでは、どちらもが、優劣つけがたく存在するように感じられます。少年は小さい頃から父親の指示でバイオリンを習っていて、その重圧を感じているところに関係相の Con/Coer [Cont. p] が認められます。彼は父親の期待に応えられない申し訳なさの下で「悩みに悩んだ」わけですね。実感がこもっています。語り手は、物語の少年と類似の経験をしてきたように感じられます。厳しい指導性をもった父親像が内在化されています。ただし、これは教育的には恵まれた環境にあったことが前提とされています。冒頭で述べたような連想が直ちに働くことは、それを証しています。少年の訴えを父親が拒絶しないで受け入れるところは関係相 Uni に相当させえます。

カード2の物語 [1'14" - 2'33"]

…… [18"] これ、この人の気持ですか。うん、それは自由ですけどね。…… [12"] 浮かばないや（小笑）。…… [37"]（図版呈示から1分14秒のち）この人は、うーんと、この本に関する学問的なことを志していて、こちらの男が、男が自分の家の所有する土地を守るための農業を営むことを主張して…… [6"] 2人は恋人同士であったが、

こういう人たちの、うーん、考えもあって、まあ志が違うのなら、それぞれの道を行けというようなことで、この人はこれからまた別のところへ行く。…… [11"] この人 (右の女性) とこの人たちとは？ この人はねえ、どちらかというこの男の母親みたいな、そんな感じです。はい。むずかしい (小笑)。むずかしい？ まあ、自分の心に浮かんだままに言ってくればいいから。

\*

要約：“手前と後景の男性は恋人同士であったが、女性は学問を志していて、男性は、家の所有する土地を守るために農業を営むことを主張して、それぞれに別の道に行く。(後景の女性は男性の母親のよう。)”

男女は恋人同士であるとされていますが、彼らの愛し合う関係が主題になっているわけではありません。だから Love に登録することは躊躇されますが、一応そうしておきましょう。それぞれ自己主張していることは、Expo [Exp] に該当し、それぞれ別の道を進むことは、Sep/Los [Sep. Los] に該当します。

ここでは語り手は絵解きにかなり難儀して、課題に対する質問をします。しかし特別問題視する必要もないでしょう。

\*

前景の本を持った学生風の女性と後景の馬を使って農耕をする男性の異質性を感じ取り、学問と農業の対立という普遍的なテーマが思い浮かんだようです。これはよくあることです。他方、前景の女性と後景の男性との間に恋愛関係も連想されていて、Love がチェックされます。これまた、しばしばあることです。しかし、これら両方のことが混合されて、上に見るような、男女は別れて己の道を進んで行くという展開——Sep/Los [Sep]——になることは、非常にまれなことです。学問と農業の対立が問題になる場合には、前景の女性と後景の男性の間にふつう恋愛関係は想定されません。たとえば、“女性が都会に出て勉強を続けたいと思っているが、彼女の家族はそれに反対している”といったように、両者は娘と父親、あるいは妹と兄のように家族とされるか、あるいは、“都会から赴任してきた教師が、農村の人々に冷たくあしらわれている”といったように、まったくの他人とされるものです。他方、両者に恋愛関係を想定する場合には、学問と農業の対立は問題になっていないのがふつうです。たいていの場合本例と同じように恋愛はうまくいかないのですが、その原因はもう1人の女性の存在です。すなわち後景の女性が男性の妻であったり母親であったりするからです。本例では、自発的には後景の女性への言及すらありません。同一の語り手に、上記両方のテーマないし内容が連想されることはありうるでしょうが、物語を作る際にはどちらか一方だけを選択するのがふつうであるという意味で、本例は特異なものです。この特異性は、したがって、これはこれ、あれはあれといった、心内の区分の弱さの表われという意味づけがまず可能でしょう。しかし特異は特異でも、相応の一貫性を備えた絵解きです。恋愛という情愛の世界のことより志向性という意志の世界のことが優るという意味で、意志優先の人という解釈が可能ではないかと思われまます。

カード 3BM の物語 [20" - 1'22"]

これ (ピストル) はなんですか。うん、自分に見えたとおり言ってくればいいんだけど。父親にお前はなんて親不孝者なんだと言ってひっぱたかれて、泣いているような、うなだれて泣いている様子。で、この子が何か学校かどこかで、まあ、遊び歩いたりなんかして、非行をやって、それを父親に咎められて泣いている様子。…… [6"] これは子ども？ 子ども。男の子？女の子？どっちか……男。で、これからは？ちょっと考え込んで、家庭がもういやになったとって、これからどっかへ飛び出して行くと思います。はい。【このあとカード4に移る間に、Aさんは、「これだけでも汗びっしょりで、顔が赤くなっちゃうんですよ。自分のね、非というかあやまちを知られることがほんとに怖いんですよ。これでも、これだけ言えるだけでもたいが治ったんですよ、云々」と言う。】

\*

要約：“男の子が、遊び歩いたりの非行をして、父親に、親不孝者とひっぱたかれて泣いている。家庭がいやになって、これから飛び出してゆく。”

父親に親不孝ものとひっぱたかれて、という部分は父親の強いコントロールを感じさせ、Con/Coer [Cont.

Coer] に該当します。同時にそれは拒絶であり、突き放しであり、Sep/Los [Sep. Los] とみなせます。男の子が家を飛び出してゆくという部分も Sep/Los [Sep. Los] に相当します。この物語では和解は生じていません。

語り終えたあと、語り手は、自己告白をしています。率直な人という印象です。物語の外での自己告白ですから、Expo [Exp] として登録できませんが、実際の行動としてそれが示されたのは興味深いことです。

\*

多くの人と共通に、人物は嘆き悲しんでいると見られています。しかし人物が子ども、しかも男の子にされることは、そう多くありません。たいていの場合人物は青年期以降の女性と見られます。そして夫や恋人に捨てられた、裏切られたなどと解されることがしばしばです。このように、他者から見放された悲しみが語られやすいのです。子どもの場合には見放され体験は、親に叱られることです。この絵解きでは、父と子の葛藤が鮮明に伝わってきます。カード1の絵解きに示唆されていた厳しい、子どもに過大な期待をかける父親像が確かなものに思えてきます。語り手は、未だ親との関係で自分を見るという、子どもの自己像に縛られていると推測されます。はじめ人物の性を決定せず、単に「子ども」としていることも、この推測を裏付けます。しかし、子どもが、親への反抗として「非行」をしたり、家を飛び出して行ったりすることは、ごく幼い子どもではなく、思春期の子どもと見られていることを示唆しています。したがって語り手の自己像も、その年齢段階のものともみなせるでしょう。もちろんこの場合、本人にはっきりとは自覚されていない自己像が問題になっているのです。

#### カード4の物語 [17" - 1'06"]

一目見て家庭内の不和ですね..... [10"] 父親がたとえばどっかの女性と関係したりなんかして、えー、これの発覚を妻が問いただすように、夫を責めている状態で、この絵から見ると、この夫婦はうまくいかなくて別れる..... [9"] まだ言うんですか。いいですよ。それぐらいですか。これぐらいでいいでしょう。

\*

要約は不要なくらい短く、内容もわかりやすい物語です。

父親が女性と関係したということは Love に、それを妻が問いただすという部分は Expl [Sk・Sk] に、そして、夫婦は別れるという部分は Sep/Los [Sep. Los] に該当させることができます。

\*

さて、「一目見て家庭の不和ですね」という言い方には、自分に馴染みの光景だという含みを感じられます。夫の浮気を妻が追及している場面という、よくある見方を示しているのですが、語り手の両親の間で類似の場面が演じられたことがあるのでしょうか。最初男性について夫といわずに、「父親」と言っていることも、それを裏付けます。これはまた、前の絵解きで指摘した、子としての自己像の裏書きにもなります。さて、現実との重なりはあるとしても、絵解きからは、強気で侵入的な女性像と母親像が推測されます。他方、男性像、父親像は、ここでは、逃げ腰の弱い存在です。これまでの父親像と少し違うような感じを受けます。これ以降の絵解きで、この点をより詳しく検討することができるかもしれません。

#### カード5の物語 [8" - 51"]

ちゃんといい子で勉強して、あの、うんと、自分の女の子が、ちゃんといい子で勉強してるかと思って、ちらっとドアを覗いたら、姿が見えなくて、驚いているお母さんで、どこ行ったのかしらと思って、ちょっとこれから探しに行こうといった感じに見えます。娘がね。ちがう、この人が。うん、うん、だから娘がどっかへ行っちゃったわけね。出て行っちゃった。遊びに行っちゃったかなんかして、またさぼったのかという..... 終わりです。

\*

これもほとんど要約不要です。母親の娘に対する態度・行動には監視の趣があり、Con/Coer [Cont. Coer] に当てはまります。いると思っていた娘がいなくなっていることに気づいて驚き、かつ不安になっていることは、Pas-F [H. Sk] に相当します。

\*

「ちゃんといい子で勉強してるかと.....」というところに Con/Coer [Cont. p] が、「姿が見えなくて驚いてい

る」というところに Pas-F [Disc. n] が認められます。「娘が出て行っちゃた」という部分に Sep/Los [Sep] を認めてもよいかもしれません。たかさんの関係相が認められるのですが、それぞれはそう問題のあるものではありません。その点に留意しておく必要があります。

さて、母親が子ども部屋を覗いているという、ごく普通の見方が示されています。覗く理由を、子どもがしっかり勉強しているかどうかを見るためとするのも、しばしばあることです。しかし、食事に呼びに来たのも、子どものことを気遣って来たのもないところに、監視・監督的な面の強い母親像が推測されます。夫への浮気の監視が、子どもに対しては怠けのそれとなって現れると言えるかもしれません。

はじめから子どもは不在とみなし、しかも親に無断で遊びに行ってしまったというところには、語り手自身の、親の束縛からの脱出願望を窺い知ることができます。子どもが自発的に女の子とされていることには何か意味があるのかもしれませんが、よくわかりません。

#### カード 6BM の物語 [5" - 1'10"]

この人が癌にでもかかっているような病気で、医者がおって、その告知をされた、えーと、その本当の癌だという告知を知って、驚いて聞き入っている母親とその本人。これからどうしようかしら……母親が子どもに、気持ちをしっかり持ちなさいよとか言って励まして、入院かなんかして、病気と闘っていく。…… [7"] 画面の外にお医者さんがいるわけね。はい。…… [6"] 病気と闘っていく、これから。この人の目がいかにも誰かを見ているような感じですね。しゃべっているとしか考えられない。そんなところですか。はい。

\*

要約：医者に癌を告知された息子とその母親が驚いていて、母親が息子を励まして、病気と闘ってゆく。

癌を告知され驚いていることは、Pas-F [H. Sk] に該当し、母親が息子を励ますということは、Spo/Sav [Spo. Sav] に該当します。

\*

医者に癌を告知された (Pas-F [Exp<sup>[註3]</sup>]) 男性が母親に励まされて (Spo/Sav [Sup]) 病気と闘っていくという絵解きです。このカードでなされる多くの絵解きとはずいぶん異なっているという印象を与えるでしょう。しかし、ときどき見られる一類型に属しているとは言えます。たとえば、男性が外で何か悪いことをして、その被害者が男性の家にやって来て、男性を非難し、被害を訴えるのに、母親が対応しているという物語があります。また、母親が息子を伴って会社訪問をし、息子に代わって会社の人に採用を依頼しているという内容の物語に出会ったこともあります。これらでは、母親は、本来は息子が直接対応すべき画外の相手に、母親が息子に代わって対応していることが共通しています。言わば母親は息子の盾になっているのです。本例もこれらに類しています。画外の人には医者で、男性に対し必ずしも脅威となる存在ではありませんが、癌を宣告すると、相手はダメージを受けるわけであり、結局脅威を与えている存在となっていると言えます。そういう恐ろしい相手に母親が息子に代わって対応しているのです。この種の物語からは、語り手が未だ母親の庇護下にあることが直接的に伝わってきます。この語り手もまだ母親に守られ、支えられることを必要とする、独り立ちできない人なのでしょう。なお、医者による癌の告知は、権威あるものが相手を無力化するという意味で、いわゆる父親による去勢を連想させます。したがって、絵解き全体は、エディプス状況を表しているとも言えます。こういう見方は、語り手と父親との関係の理解をいっそう深めてくれます。

#### カード 7BM の物語 [6" - 1'06"]

なんか2人の悪党が、ここになんか地図かなんかがあって、何かの悪い計画を企んで、2人でひそひそ話をやって、これからその計画を実行しようとしている様子…… [8"] どういう悪党？ そうですねえ、たとえば人の財産を奪うとかね、ちょっと強引だけど誰かを殺そうとかね、そんなことを企んで、今ある保険金の、なんか、そんな感じで、計画を練って、実行にいざ移そうという感じの場面。悪党2人ね。はい。

\*

要約：2人の悪党が、人の財産を奪うとかだれかを殺すとかの悪ことを企んで、実行に移そうとしている。

財産を奪うことは Dep に、人を殺すことは Harm に該当します。2人は仲間であることは明らかですが、それ以上の関係の性質はわかりません。それで [Neut] にも登録しておきます。

\*

2人の男性が、人の財産を奪う (Dep) とか誰かを殺す (Harm) とかの悪いことを企んで、実行に移そうとしているという絵解きです。このカードでしばしば出会う絵解きです。この絵解きでもそうですが、2人が身分や地位において区別されないことしばしばあります。それで、語り手が2人の人物のうちのどちらにより強く同一化しているかわからないこと、言い換えれば、どちらにも強く同一化していないらしいことゆえに、関係の性質が不明 ([Neut]) とせざるをえないことが少なくありません。一般的に人は悪人には積極的に同一化しないものです。ですから、この絵で2人とも悪党とみなすことは、必然的にどちらに対しても肯定的な意味での同一化は示していないということになるでしょう。しかし他方、このカードで、積極的な男性同一化の態度が乏しいことは、男性性の未確立という性的同一性の問題を推測させもします。語り手は、男性一般に対し、邪なことを企む悪い存在という否定的イメージをもっている可能性があります。それは、男性としての社会適応を困難にすることでしょう。

カード 8BM の物語 [12" - 1'22"]

この人がある志をもっていて、こういうふうになんか、まあ西洋の医学なら、こういう手術で苦しむのを見て、あの、もっとこの人、患者にとって苦しめない医療、医療の方法はないかということを考えようとして、より最新の進んだ医学を勉強しようと志して、これから未来に歩いてゆく子どもの様子。…… [9"] 子ども。子どもというか、僕ぐらいの、これからまあ本格的に学問かなんかを始める年齢の人。これらは現実の場面なわけ？ ここに医者がおって、患者に、なんかどっか腹がおかしくて、西洋医学の手術をしているところ。

\*

要約：“子どもが、患者が苦しめない医療を目指して、最新の医学を勉強しようとしている。(本格的に学問を始めるころの人。背景は腹の手術。)”

前半部分は、Spo/Sav [Spo. Sav] に、後半部分は、Expo [Exp] に該当します。

\*

患者が苦しむ手術を見て、苦しめない医療の方法を目指して勉強しようとしている (Spo/Sav [Sup]) 青年の物語です。

筆者はこのカードでは、語り手はこの絵を見た瞬間無意識裡に背景の“切る”側か“切られる”側のどちらかにより強く引き寄せられ、強く引き寄せられた方と手前の人物とを関係づけるように物語作りは進行するのではないかと考えます。そしてどちらの側により強く引き寄せられ、同一化するかということに、攻撃に関する受動性と能動性が反映されると考え、手前の人物がどちら側に属しているとされているかに注目します。本例ではどうでしょう。患者の苦しみに言及しているところを見ると、語り手は“切られる”側にかなり強く引き寄せられていると察せられます。しかし手前の人物は医学を志している青年で、背景の手術する医者の方に属しているとも言えます。語り手は、患者の苦しみを強く感じ取り、なんとかしてやりたいと思って、手前の人物を、苦しめない医療を志す医者にしたのでしょうか。出発点は、患者の苦しみへの共感であるとみなされます。したがって、攻撃性に関して受動的な立場に身を置きがちな人であることが推測されます。しかし、次に医者、すなわち“切る側”、攻撃する側に回っています。したがって、能動性も存在するとみなせます。このような、受動から能動への転換は、たとえば“昔手術によって一命を救われた人が、今度は自分が医者になって多くの人を救ってあげようと燃えている”というような物語ではいっそうはつきり認められますが、本例もこれに類するものと言えるでしょう。このように、受動性も能動性も、“両方”を併せもつのは、これまでの絵解きからも、この語り手に特徴的なことではないかと思えてきます。この点が一番注目されるべきことですが、他では、「子どもというか僕ぐらい」と言っているのが注意を引きます。ここにも子どもとしての自己像が垣間見えるからです。

カード 9BM の物語 [23" - 1'21"]

戦争に駆り出されて…… [25"] 戦地に赴いて、で戦争をして、その戦争の疲れから、みんなでグッタリ寝入っ



ている場面。いつまでこの戦争が続くのか、もういやだという感じで、グッタリと寝静まった様子。早く戦争が終わればいいのにと。…… いいですか。 はい。

\*

要約は不要でしょう。男たちはいやおうなく戦争に駆り出されているわけで、Con/Coer [Cont. Coer] に登録されます。兵士同士の関係の性質は不明であり、 [Neut] にも登録しておきます

\*

戦争に駆り出された (Con/Coer [Cont. n]) 兵隊の休息を見えています。絵の人物を兵隊とみなすことは、そう多くはありませんが、まれというほどではありません。彼らは、勇ましい兵士でなく、早く戦争が終わって故郷に帰りたいと思っている疲れきった兵士であるのがふつうです。本例はそういう意味で典型的なものです。戦争や兵隊から攻撃的なものを連想する人もいるでしょうが、私はそれよりも、強制や束縛に対する嫌悪感を読み取ります。さらに、戦争は敵がいるものですから、兵隊たちの休息はすっかり安心できる休息とは言えません。そういうことから、語り手に警戒心を読み取ることもできます。

兵隊同士の関係は不明あるいは中立的で、 [Neut] に登録するしかありません。

この絵では、ふつうあまり長い物語は生じません。これぐらいの内容と分量で問題ははありません。

カード 10 の物語 [17" - 1'05"]

2人が愛し合っていて、愛し合っているけども、2人の親が反対していて、むりやり家を抜け出して会ってきた2人が、まあ、これから駆け落ちしようとかいって、2人の愛を貫いていく場面。…… [7"] この2人は年齢的にはいくつぐらい？ うーん…… [12"] 僕が見たところだったら30歳と25歳ぐらい。駆け落ちしていく。 はい。

\*

2人は愛し合っているということから、Loveに登録されます。2人の親が反対しているということは親の厳しい統制を表すもので、Con/Coer [Cont. Coer] に登録され、絵の男女はそういう親に見つからないように会っているわけで、Concにも登録されえます。駆け落ちすることは、親からの別離であり、Sep/Los [Sep. Los] に相当します。

\*

絵は、親の反対にもかかわらず愛し合う男女の密会の場面と捉えられています。Con/Coer [Cont.p] とLoveに登録し、Expl [Disc. n] も登録してもよいかもしれませんが、これから駆け落ちするという部分はSep/Los [Sep] に相当させえます。多くの関係相が認められましたが、いずれもすでに馴染みのものであることに留意しましょう。

周囲の人々に受け入れられない恋愛をする男女の密会の場面という絵解きは1つの類型をなしています。男女の双方あるいは一方にすでに配偶者なり婚約者なりがいて、不倫の恋をする2人とされることもあれば、本例のように、男女の親が交際や結婚に反対しているとされることもあります。当然後者では前者より男女の年齢はより若いのがふつうです。そして、謹厳で異性愛に対し抑圧的な親像を語り手がもっていることが推測されます。語り手本人は異性愛を受容しうる健康さをもっているとみなされます。

カード 11 の物語 [42" - 1'40"]

柔道の修行かなんかで、うんと、滝のあるところに来て、修行してる人間。…… [7"] これからもここで当分稽古に励んで、で、たくましくなって、この秘境というか、ジャングルから抜け出して、また自分の国へ戻っていく場面。人というのは。これがなんか腕立て伏せやっているように見えて、自分ひとりで自分を鍛えていくような様子。これ全体が人ね。 はい。

\*

要約：“ 秘境がジャングルに柔道に修行に来て、稽古に励んでいる人が、たくましくなって国へ戻ってゆく。(腕立て伏せをやっているよう。)”

たくましくなるうとして自分を鍛えているということは、Expo [Exp] に該当させえます。実際にたくましくなるらしいので、Pos-F [S-pre] にも登録しておきます。

★

誰も来ない山奥でひとり修行しているという珍しい絵解きを示しています。関係相は Pos-F [S-pre] に該当します。ふつつ絵の場所は、転落の危険がある、また竜の襲撃もありうる恐ろしい場所と見られ、人が踏み込むとしてもやむをえずといった趣が強いのですが、本例では、自ら進んで乗り込んだことになっています。このあたりに、一般の人とは異なる志向性が感じ取られます。修行しているというのは、明らかに語り手の自己向上欲求と自己鍛練の意志を示しています。ストイックな努力家なのでしょう。しかし修行は柔道の修行で、精神というより身体の鍛練が問題になっています。腕立て伏せというのは卑近すぎて、“修行”のイメージをやや損なう感じもあります。それゆえ、この絵解きからは、青年期的な、男らしい逞しい身体をもちたいという願望を読み取るのがよいと思われれます。

カード 12M の物語 [21" - 1'28"]

夜中に寝てる女性を襲おうとしている老人。…… [7"] なにか家庭の財産問題かなにかで、この人に恨みがあって、そいつを寝静まったときにこっそり来て、首を絞めるかなんかして殺そうとしているところ。…… [6"] このあとは？ このあとはそのまま殺しちゃって、すぐにダーツと逃げてって、いかにも自分がやっていないということと言い張る。で、なんかこの老人は、その財産問題で、この人の、ま、おじかなんかの、直接的ではないけど間接的な、ま、血のつながりのある人間のように。…… [7"] はい。

★

要約：“財産問題で寝ている女性に恨みがある、間接的な血のつながりがある老人が、女性の首を絞めて、殺し、逃げて行き、自分はやっていないと言い張る。”

恨みという持続的な感情をいだくことは Hos/Disg [Host] に、殺すことは Harm に該当します。逃げて、自分の犯行を隠そうとすることは、Conc に該当させえます。

★

財産問題かなにかで女性に恨みがある老人が、女性が寝ているすきに締め殺し (Harm)、あとで、逃げて、自分はやっていないと言い張る (Conc [Sec]) という物語です。財産問題というのは、財産を奪われる不安や恨みでしょう。したがって、Dep がチェックされます。

さて、絵では、一方の人物は横たわり、眼をつぶっています。その無防備な人に他方の人物は何ごとかをしようとしています。このような絵から、多くの方は、広義の“治療”を連想します。手前の人物の仕草から催眠術を連想すれば、催眠療法を施しているとなりますが、単に熱を計ろうとしていることもあります。他方、治療行為ではなく、その反対に、相手の無防備であることを幸いに悪事を働くときどきあります。この違いはなにゆえに生ずるのか、その意味は何なのかというと、筆者は、語り手自身が、無防備な状態で安心してられないということ、つまり不安で警戒的であるということではないかと考えています。

しかし老人が財産問題で恨みがある女性を絞め殺そうとしていることは、これ以上の意味づけが必要です。横たわる人物はたいてい男性とみなされるのですが、ここでは女性です。

上述のことからも察せられるように、語り手はふつつ横たわる人の方により強く同一化するものであることからすると、女性的な自己像をもっていることが示唆されているのかもしれませんが。しかし語り手はもう一方の老人にもなっています。すでに触れたように、財産問題の恨みとは、自分に権利があると思っていた取り分が取れなかったという恨みでしょう。つまり不当に奪われた恨みにほかならないでしょう。語り手は少なくともそういう事態にとくに敏感なのであるということと言えます。

深層心理的な解釈を試みれば、老人に父親イメージが投影されやすいことから、語り手の父親は、エディプス的な息子に、本来自分のものである妻を奪われたので、その恨みから息子を殺そうとしているという解釈ができるでしょう。

カード 13MF の物語 [13" - 1'15"]

どっかけがを、けがをして道端に倒れていた女性を、自分の部屋に運んできて、看病して、その疲れて、汗、汗

だくになって額を拭いている、まあ壮年ぐらいの男。 壮年。 はい。 ちょっと髪の毛白いから。 このあと。 このあとは目が覚めて、どうですか、気分はいいですか、とか言って、名前は、とかきいて、好意とかそういうことには至らないけども、まあある程度看病して治ったら家に帰して終わり。…… [6"] それぐらいですか。 はい。

\*

要約：“ 壮年の男が、けがをして道端に倒れていた女性を自分の部屋に運んで、汗だくになって看病し、今額の汗を拭いている。(女性が治ったら、家に帰す。好意を抱くまでには至らない。)”

Spo/Sav [Spo. Sav] というカテゴリーがそのために設けられたような物語です。他に、偶然の発見と驚きの要素が認められ、Pas-F [H. Sk] にも登録しておきます。

\*

けがをして道端に倒れていた女性の看病に一生懸命の男性が見られています。主な関係相は Spo/Sav [Sup] で、あと「道端に倒れていた女性を……」というところを Pas-F [Disc. p] に相当させることもできます。物語は比較的単純ですが、以下のようにこの物語は語り手について重要なことを示唆しています。

まず、この種の絵解きは非常にまれです。しかしまれながら、筆者は同じようなものに出会ったことが幾度もあり、それゆえ1つの類型として捉えられるのではないかと考えています。語り手の性的潔白さや道義心をストレートに伝えてくれる興味深い絵解きですが、より詳しく検討してゆきましょう。

2人の人物は見ず知らずの間柄です。これ以前に性的関係はありえませんが、現在も性的関係をもつなど論外です。何しろ女性はけがをして倒れていたのですから。男性は道義心から女性を道端に捨て置くことができず、自分の部屋に連れ帰って介抱し、女性がある程度回復したら、そのまま家に帰します。このように、性的な連想を誘うこの絵で、性的なものは終始一貫して避けられています。しかもなかなか巧妙です。女性が半裸であることも、男性が腕を顔にやっているのも、うまく説明がつくのです。語り手はこれまでの絵解きで、人物間に恋愛関係を想定することは数回あったのですが、性的関係はまた別のようです。異常に潔癖であると察せられます。善意が、男性としての侵入欲求を萎えさせているのではないかという想像すらしたくなります。

#### カード 14 の物語 [3" - 38"]

さあ朝が来たというようなすがすがしい気分、あのう、暗闇から抜け出るような、なんちゅうかなあ、サーツとした気分浸っている男の心情。さあ、これからやるぞ！という気迫で、何かにこれから取り組んでいく若者の姿。まあそういうところ、

\*

要約は不要な単純な絵解きです。

鬱屈した状態から抜け出て、なにかへ挑戦するということは、自己主張ないし自己表現であり、Expo [Exp] に含めることが可能です。

\*

語り手は、窓辺でくつろいでいる人でもなく、悩みを抱えて悶々としている人でもなく、前向きの行動的な人を見えています。カード 11 の絵解きに窺われたような語り手の自己向上欲求や自己鍛練の意志を表しているといえよう。関係相に関しては、Pos-F [S-pre] が該当するでしょう。ただ、この絵解きの内容はあまりに明るすぎると印象は否めません。この絵には、内的あるいは外的閉塞状態の連想を誘うものがあるのですが、本例にはそうした徴候を認めることは困難です。わずかに「暗闇から抜け出るような」ということばが脱出のテーマを思い起こさせますが、“ 暗い過去からの訣別 ” というには軽すぎます。このようなことから、人物に付与された前向きの活動性が付け焼き刃的なものではないかという疑念もわくのです。

#### カード 15 の物語 [3" - 1'01"]

自分の、えー、これ、この人が女として、女で、自分の夫が死んで、私はこれからどうやって生活していけばいいのかわからないと思いついて、自分も後追い自殺でもしようかなどと考えて、途方に暮れて立っている未亡人、老未亡人。で、自分の死を、まわりの墓が自分の死を暗示しているかのように、死にまた襲われて、違う、死の恐怖に、おそ、

襲われて、苛まれているような心情をもった未亡人。…… [12"] それくらい？ はい。

\*

要約：“夫を亡くした女性が、これからの生活に思い悩んで、後追い自殺しようかと考えている。死の恐怖に襲われ、苛まれてもいる。”

まず、夫の死別が問題になっており、Sep/Los [Sep. Los] に登録します。自殺を考えているというところから、Harm および Neg-F [S-des] にも登録します。

\*

ただ前半部分と後半部分は別の絵解きのように思われます。別のものを合わせただけで、うまく統合しえなかった感じです。すでに指摘したことですが、互いに異なるものをしっかり区別しておくという精神が語り手には乏しいようです。

まず関係相をチェックしておきましょう。夫の先立たれたということから Sep/Los [Sep] が、自殺願望をもっているということから、Neg-F [S-des] がチェックされます。

さて、愛する人の死を悲しんでいるという絵解きはしばしば見かけられるものです。本例もそれに属させることが可能ですが、よく見ると、人物は愛する人の死を悼んでいるというより、残された自分の頼りなさを訴えているのです。そして後追い自殺を考えているうちに自分が死ぬのが怖くなるとされています。結局描写されたのは、依存的で弱い未亡人です。絵の人物は男性とも女性ともみられるのですが、どちらかというとも男性に見られることが多いようです。語り手が女性としたのはなぜかわかりませんが、女性としたことにより、母親のイメージが多少は混入した可能性はあります。依存的で弱いのは、語り手本人の特徴であるとともに、彼が捉えた母親の特徴でもあるようです。

カード 17BM の物語 [6" - 57"]

みんなのまわりに、まわりにみんなのいる中で、綱登りをして、みんなに芸を見せて笑っている、僕ぐらいのかな、ちょっと若いかな、少年のこっけいな姿。どうだ、おもしろいだろうっていうような感じで、綱をもってはしゃぎ、はしゃいでいる情景。このあと降りて、どうだ、お前でも、お前もやってみるかというような感じで、観衆、見ていた者に話しかけている。たくさんいるわけね。はい。…… [12"] そんなとこかな。そんなとこです。

\*

要約：語り手の歳ぐらいの少年が、皆のいるなかで、綱芸を見せてはしゃいでいる。見ている者にも、やってみるかとする。

明らかに Expo [Exp] が該当する物語です。さらに、気を許した友達関係が見て取れるので、Uni にも登録します。

\*

関係相のチェックはやや困難ですが、「みんなに芸を見せて……」と言う部分に、自己顯示が、全体から仲の良い友達関係が読み取れ、Expo [Exh] と Uni に登録しておきます。

このカードでは、綱登りを何のためのものと捉えるかということがまず問題になります。つまり現実生活上の手段としての行為、たとえば避難のためのものなのか、それ自体が目的のもの、言い換えれば“芸”なのかということです。サーカスの芸人が、上の方で綱芸を終えて、今拍手喝さいを浴びて降りてきたとされるのは、しばしばある後者の例です。この場合綱登り自体は芸ではありませんが、さりとして、単なる上に行くための手段とも言えます。綱登りは芸と結びついた、その一部と捉えるのが妥当でしょう。さて、これ以外の、綱登り自体が芸として捉えられているとみなせるものとして、人物が高くまで登って自己の力を誇示しているとするものや、自己の鍛錬のために登っているとするものなどがあります。芸は芸でも、本例のように、おどけて人をおもしろがらせるものである場合はまれです。人物の年齢に注意する必要があります。語り手は、自分よりちょっと若い、まだ少年を見ています。これは、まれなことです。人物は中年と見られていると判断されることが多く、老年と見られることもときにはあります。自然な傾向に反して語り手には少年に見えたのはどうしてでしょう。考えられることは、綱

登りのようなものは、真面目な大人はやらない、せいぜい子どもがやる遊びであるという思い込みです。もしこれが当たっているとしたら、絵解きに表現された遊び心とは反対に、語り手の考え方は非常に硬いと言わざるをえません。

人物を少年と見たもう1つの考えられる理由は、これまで見てきたように語り手の自己像が年齢より若いことです。子どもとしての自己像と子どもの内的世界に引き寄せて、絵の人物の年齢と行為が解釈されたということも考えられます。

カード 18BM の物語 [5" - 46"]

歩いていて突如後から誰かに襲われて、脅迫されているところ。..... [5"] 「おい、金出せ」「そんなものはない」って。「なけりやお前のうちまで連れて行け」っていう感じで、連れて行かれている場面。で、これからその人のうちへ行って、金を取られて、この後における奴が逃げてって、この男は警察に連絡して、事件をあからさまにする。それで終わりです。

\*

襲われ、脅迫されるということは Harm に、強盗の意のままに家に連れて行かせられるということは Con/Coer [Cont. Coer] に、「金を取られて」という部分は Dep に、そして、警察に連絡して、事件について供述するということは Expo [Exp] に該当します。

\*

さて、襲われ自由を奪われた状態を認知していることは、珍しいことでは全然ありませんが、すでに見た語り手の警戒心を思い起こさせます。強い攻撃衝動を秘めているのですが、自覚されないで外在化されるようです。金(財産)を奪われる、あるいは奪うことが問題になるのも、これで3度目です。語り手の金への執着、金を奪われることへの警戒心が示唆されています。強盗が人物を家まで連れて行かせるというのは、目を引きます。犯人が警官に連行されると見られることはしばしばありますが、それは、人物の右腕に回された別人の腕の認知によると思われれます。本例でも、その認知がもとなっているのですが、どこかに拉致されるのではなく、家に連れて行かれるとしたのは、家には金蔓(かねづる)である親がいるということが暗黙に前提とされていたからでしょう。すなわち親の庇護の下にある人物が見られていたのです。このようなことにも、語り手の子どもの自己像を見取することができます。

カード 19 の物語 [24" - 1'16"]

あの、幼稚園の先生が子どもにおとぎ話、おとぎ話を話すときに使っている紙の絵。..... [6"] 他に言いようがありません。何を描いた絵かな。これどうも、なんか、うち、うちみたいで、変わった形の家で、これが窓で..... [6"] 外見から見るとあんまりよくない家です。煙突が古ぼけてよくないけど、中では案外家族の人が楽しそうにしている、そんな感じのおとぎ話の一面。終わりです。

\*

要約：“幼稚園の先生が、外見はよくない家だが、家のなかでは家族の人が楽しそうにしているというおとぎ話を子どもに話すときに使っている紙の絵。”

「幼稚園の先生」は、おとぎ話によって子どもたちを教導くわけで、Gui に該当します。それだけでなく、絵はたとえ先生自身が描いたものでなくても、先生の思い入れがあるとみなされ、この物語を Expo [Exp] に登録することも可能です。さらにおとぎ話の、家族が楽しそうにしているという内容は、Uni に該当させられます。

\*

何が何やらはっきりしないこの絵を見て、抽象画や拙い子どもの絵を連想する人は少なくありません。こちらから、何を描いた絵かときいても、それ以上言えない人もいますが、この語り手は、家を認知し、家のなかの家族団欒にまで言及しています。このことは、安全や快適さを与えてくれるものとしての家のイメージが確立していることを示していると解釈することができます。関係相については Uni とするのがよいでしょう。

カード20の物語 [10" - 50"]

これは全部りんごの木で、りんごの生育状態がいいか悪いか夜に確かめて木を見ている農場、農業、農場経営者。…… [7"] 夜に。はい。…… [5"] どちらかという暗い感じで、今年は生育がよくないと言って、沈みがちな表情をしている人物。

\*

要約は不要でしょう。

りんごの生育状態を見ているということは、Expl [Sk. Sk] に該当するとみなし、よくない生育状態に沈みがちであることは、やや強引ですが、Neg-F [S-des] に該当させておきます。

\*

画外の人物の導入はないのですが、りんごの生育状態を気かけるといいうところは、関係相の Prov/Ser [Sup] に登録してもよいかもしれません。木の生育状態を確かめに来て、それがよくないことを知るとい部分に Expl [Disc. p] を認めることもできます。

さて、多くの人が、この絵に街灯の下に悄然と佇む男の姿を認めます。男は、何か大切なものを喪失した状態にあるとされるか、誰かが来るのを待っているとされるのがふつうです。わが語り手の絵解きは、人物を認知している点を除くと、これらとかなり異なっています。生育状態を確かめるといのは、期待が込められている点で、むしろ人待ちに近いと言えます。しかし、確かめて生育がよくないとわかったときの落胆は、喪失の状態に相当すると言えるでしょう。だから、語り手の絵解きは、ふつうどちらかだけにされるものの両方の要素を含んでいることになります。これは、語り手の特徴であることを、すでに私たちは見てきました。やはり、あれかこれかと取捨選択するのでなく、あれもこれもと抱き込むところがあるのでしょうか。しかし、“男は、待っていた人が現れそうもないので、悄然としている”という、これに相当するものも少なくないので、そう問題視する必要もないかもしれません。それより、語り手においては、喪失や期待が、家族や友人、恋人などの人でなく、りんごという物をめぐっていることの方に注目すべきでしょう。語り手の関心が、人より物に向かっていること、さらに言えば、語り手は、情愛の世界より実利の世界に住んでいるという見方ができると思います。

カード9GFの物語 [24" - 1'46"]

この女の人は、あの、こちらの女に追いかけられとって、今、木に逃げて、その、この女の動きを、見、見張っているというか、監視している様子で、どうしてかという…… [6"] こっちはまあ正しい人間というか、気のやさしくて、清らかな心をもった女性で、こっちがちょっと悪くて、意地悪い、まあ、いつもこっちの、あのう、女ぶりというかね、いい子ぶりを憎んでいる女で、どこ行ったのかしらって探し回っていて、もういいかげん疲れ果てて木に登って、逃げて、この女を見ているところ。このあとは？ このあと、向こう、この悪い女が向こうに行ってから、こっそり降りて、ひとりで、なんであの女は私のことをそんなにも責めるのかしらと思ひ悩んで、ひとりとぼとぼと歩く、歩いて行く。

\*

要約：“気のやさしい、清らかな心の女性が、彼女の女ぶりを憎む意地悪の女性に追いかけられて逃げ、疲れて、木に登り、女の動きを「監視している」。(悪い女をやり過ごしたあと、木から降りて、悩みながらとぼとぼと歩いてゆく。)”

この物語を、意地悪な女性の振る舞いから、Hos/Disg [Host] および Harm に登録し、もうひとりの女性が逃げて、「監視」から、Conc および Expl [Sk. Sk] に登録します。

\*

この種の絵解きはしばしば見かけられます。2人の人物を友人や姉妹など、既知の間柄にし、両者の間に敵対ないしライバル関係を見ること、さらに一方の善良な女性が他方の根性の悪い女性に追われて隠れているとされることが特徴です。関係相は、Harm と Conc [Sec] です。さらに「見張っている」「監視している」という部分から Expl [Disc. n] に登録できます。

語り手は、追われる方の女性に、より親身になって同一化していますが、ある部分では追う方の女性にもなって

います。それぞれの女性もつ属性の両方とも、すなわちやさしさ、清らかさも妬み深さもともに、語り手の属性を表しているとみなされるべきでしょう。しかしこれだけでは、まだこの絵解きから十分に汲み取ったとは言えません。まずこの絵を見て、2人の人物を相互に関係づけることは決して自明なことではありません。互いに見ず知らずの間柄であって、一方が他方を傍観しているだけという捉え方をすることもできます。そういう絵解きは少なくないので、問題の絵解きとすることはできません。こういう事情を考慮すると、2人の女性の間に個人的関係を想定すること自体が、人間関係に対する敏感さを物語っていると言えます。これは悪い意味で言っているものではありません。むしろ人間関係能力を持ち合わせていることの証になります。問題となるのは、相互の敵対関係が異常に熾烈なものであったりする場合です。その場合にはパラノイアの傾向が示唆されています。本例ではそういうことはありません。とくに逸脱したところはありません。あえて言うなら、男性がこのように女同士の対立を具体的に描写できるところに、語り手の女性親和的な部分を感じます。

カード 12BG の物語 [32" - 1'37"]

昔のどっかの名所で..... [6"] この船が昔からのもので、あの、江戸時代の武士かなんかが乗っていたような、あのう、池で、あのう、船遊びをするときなんか使う、よく使ったような船で、この木がまたちょっと観光名物みたいなもので、桜で、ずーとこの状態で置いてあって、ここの一面が観光地として今もずーと残っている。..... [9"] で、ずっとこれからもこの状態で、あの、保管される。 それぐらい？ はい。

\*

要約：“江戸時代の武士が舟遊びに使っていたような船と観光名物みたいな桜の木がある観光地が、これからも保管される。”

人物は登場していませんが、場所が擬人化され、その場所が皆に評判がいいとされていることは Expo [Exp] に該当し、大事に保存されるということは Prov/Ser [Spl. Serv] と Pos-F [S-pre] に該当すると考えます。

\*

絵の場所が、人々で賑わう、娯楽の場所として捉えられているのは、語り手の健康さを示すものと言えます。ただ、どこにでもあるような心を和ませる場所ではなく、高名な由緒正しい観光地であるところが注意を惹きます。船も桜も、すべてが観光客の鑑賞にたえるものであり、未永く大切に「保管され」るのです。ここに一種の場所の擬人化を読み取り、関係相をチェックすることができます。観光地で皆に見られるというところから Expo [Exh] に、人々の努力によって保管されるというところから Prov/Ser [Prov] と Pos-F [S-pre] に登録しておきます。物語全体には語り手の自己顕示性が無意識裡に現れていると解されます。しかしこの絵解きが意味するものは、そればかりではありません。絵の場所を訪れる人々は自由に船遊びをしたり、桜に手を触れたりできなさそうです。要するに、鑑賞するばかりで、その場に溶け込んで楽しむことは望めなさそうなのです。これは、自然の推移に任せる放任的態度とは反対の、堅苦しい形式的、人工的な現状維持の態度の存在を物語っているように思われます。これが、親から取り入れられたものだとしたら、語り手はかなり窮屈な生き方を強いられたということになるでしょう。

## 2 まとめの表

以下に、記入済みの「形式面のチェック表」および「関係相のチェック表」、「TAT 分析・解釈シート」を掲げておきます。それらを参考にしつつ、次の3で所見をまとめます。

形式面のチェック表 (事例 A)

	特 徴	カード番号	計
1	教示の確認をたびたび行う	-	0
2	絵を見ての個人的印象や感情を表現する	-	0
3	絵に描かれているものを列挙したり、純客観的に記述したりする	-	0
4	絵のなかの人物についての性格描写や評価・批判をする	-	0
5	絵から連想される自分の過去や既存の小説や映画の内容について語る	-	0
6	1つの絵に対し、2つ以上の絵解きの可能性を示すが、どれも十分に展開させない	-	0
7	時間制限はないが、初発時間や反応時間が並外れて長い	-	0
8	自発的に物語を作り上げるのが困難で、検査者の質疑などの助けを借りなければならない	-	0
9	物語が適度の詳しさと具体性を備えておらず、観念的・抽象的で内容がわかりにくい	-	0
10	不必要なディテールがあったり、繰り返しがあったりして、物語が長たらしく、まとまりがない	-	0
11	笑が多い	-	0
12	「……ではないですね」とはじめから否定形で語る	-	0
13	物語のどの部分が絵と対応するのかわかりにくい	-	0
14	人物への感情移入が乏しい	-	0
15	場所、時代、時間などへの言及が多い	-	0
16	絵を絵画(写真)作品とする	-	0
17	人物に名前をつける	-	0
18	会話体や独白体で演技的に物語作りを進める	-	0
19	[その他] ぶつう別個の物語として展開されるテーマが1つの物語のなかに結合された形で現れる	2, 8BM, 20	3

関係相のチェック表 (事例 A)

関係相のカテゴリー	当該の関係相が含まれる物語のカード番号	合 計	
Expl	4, 10, 20, 9GF	4	19
vs. Pas-F	5, 6BM, 13MF	3	
Expo	1, 2, 8BM, 11, 14, 17BM, 18BM, 19, 12BG	9	
vs. Conc	10, 12M, 9GF	3	
Con/Coer	1, 3BM, 5, 9BM, 10, 18BM	6	7
vs. Ask/Req	-	0	
Dec	-	0	
vs. Gui	19	1	
Spo/Sav	6BM, 8BM, 13MF	3	13
Prov/Ser	20, 12BG	2	
vs. Harm	7BM, 12M, 15, 18BM, 9GF	5	
vs. Dep	7BM, 12M, 18BM	3	
Like	-	0	5
vs. Hos/Disg	12M, 9GF	2	
Love	2, 4, 10	3	
vs. LoL	-	0	
Uni	1, 17BM, 19	3	11
vs. Sep/Los	1, 2, 3BM <sup>*2</sup> , 4, 5, 10, 15	8	
Pos-F	11, 14, 12BG	3	5
vs. Neg-F	15, 20	2	
	7BM, 9BM		2



絵解き法 (TAT) のすすめ (鈴木 睦夫)

分析・解釈シート

(被検者: Aさん 性別: 男性 年齢: 19歳 職業: 大学生)

絵 NO.	分析 (物語の形式的・内容的特徴)	解釈 (物語の特徴が意味するもの)
1	・素早い統覚 ・英才教育の重圧と父親の期待に悩む少年	・連想作用が平均かそれ以上に活発 ・厳しい指導性をもった父親像。教育的に恵まれた環境
2	・2つのテーマが融合合体した物語 ・恋人同士が、志が異なるので別々の道を行く	・心内の区分の弱さ (分離が困難) ・情愛より意志を優先させる人
3BM	・父親に咎められた ・人物は子ども。思春期の子ども	・過重な期待をかける父親像 ・思春期の子ども的な自己像
4	・男性を夫と言わず「父親」と言う ・妻の追及	・子としての自己像 ・強気で侵入的な女性像・母親像。逃げ腰の弱い存在としての父親像
5	・子どもが勉強しているかどうか見に来た ・子どもは不在。遊びに行った	・監督的な面が強い母親像 ・親の束縛からの脱出願望
6BM	・母親が息子に代わって対応している ・医者による癌の告知	・親の庇護下にある。母親に守られ支えられることを必要とする独り立ちしていない人 ・父親による去勢。エディプス状況
7BM	・2人とも悪党とみなす	・積極的な男性同一化が乏しい。男性一般に対して、邪なことを企む悪い存在という否定的イメージをもつ ・自己を潔白な存在とみなし、悪を自己以外の男性に属させる
8BM	・患者の苦しみへの言及 ・次に医者側の側に回っている ・「子どもというか僕ぐらい」	・攻撃性に関して受動的な立場に身を置きがち ・受動から能動への転換。能動的な攻撃性も存在する ・子どもとしての自己像
9BM	・戦争が終わることを望む疲れきった兵隊 ・兵隊の休息	・強制や束縛に対する嫌悪感 ・警戒心
10	・親に交際を禁じられた若い男女の密会	・謹厳で異性愛に対し抑圧的な親像。異性愛を受容しうる健康さ
11	・恐ろしい場所に自ら進んで乗り込んだ ・腕立て伏せ	・一般の人とは異なる志向性。自己向上欲求と自己鍛練の意志。ストイックな努力家 ・男らしい逞しい身体をもちたいという願望
12M	・寝ているときに首を絞められる ・横たわる人は女性 ・財産問題	・無防備な状態で安心してられない。不安で警戒的 ・女性としての自己像 ・自分に権利があるものを不当に奪われる事態に敏感
13MF	・まれながら独特な類型的物語	・性的潔白さと道義心。性に対して異常に潔癖
14	・積極的に取り組む若者の姿	・前向きな活動性。しかし付け焼き刃的可能性あり
15	・残された自分の頼りなさや死の恐怖	・依存的で自己中心的な母親像および自己像
17BM	・少年のやる綱登り遊び	・非常に硬い考え方。自己像が年齢より幼い。大人の世界と子どもの世界が分かれていて、自分を子どもの世界の住人とみなしている
18BM	・襲われた ・金を奪われる ・家に連れて行かれる	・警戒心と強いが自覚されず外在化される攻撃衝動 ・金への執着、金を奪われることへの警戒心 ・親の庇護下にある、子ども自己像
19	・家のなかの家族団欒への言及	・安全や快適さを与えてくれる家のイメージが確立している
20	・“人待ち”と“喪失”の2つの状態の要素を含んでいる ・喪失や期待が人でなくりんごというものをめぐる	・取捨選択せずに、あれもこれもと抱き込むところ ・関心が人より物に向かっている。情愛の世界より実利の世界に住む
9GF	・2人の間に個人的関係を想定している ・女同士の対立を具体的に描写できる	・人間関係に対する敏感さ ・女性親和的
12BG	・人々で賑わう場所 ・由緒正しい観光地。すべてが大切に「保管」される	・健康さ ・堅苦しい、形式的、人工的な現状維持の態度

### 3 総合所見

Aさんは、物語作りという課題を、自発性、具体性、人物への感情移入などの点で、とくに問題なくやり遂げています。一部のカードではやや難儀していますが、失敗はしていません。Aさんの心的活動水準は、少なくとも現実適応に支障がないほどには保たれていると言えます。

Aさんの物語作りの積極的な特徴として、ふつう別個の物語として展開されるテーマが、1つの物語のなかに結合された形で現れることが挙げられます。とくに顕著にそれが認められるのはカード2の物語においてですが、8BMと20の物語においても、指摘しえます。このことをどう意味付けたらよいか難しいところですが、当面必要でないものを排除する、あるいは脇に置いておくことができず、包含しようとする意志という意味で、差し当たり、やや強引な総合化の傾向とでも、言っておきましょう。

さて物語の内容から推測されるものに移ります。

まずAさんの人とかかわり方の特徴として、他者に対し警戒的であることが挙げられます。Aさんは、何か大切なものを他者に奪われるのではないかと強い不安や奪われた恨みをもっているのではないかとと思われるのです。カード12Mの物語は、財産を奪われた人が、恨みから、奪った人の命を奪う物語とみなせませすし、18BMの物語は、強盗に金を奪われるという物語です。このように物語では、金品を奪われることがテーマになっているので、金銭に対する強い執着心というものがまず思い浮かぶのですが、金銭が一般に代理物ないし象徴であるように、Aさんにおいても、何か別のものを象徴しているという可能性があります。ここで思い起こされるのは、カード6BMの物語です。その物語は、私には、いわゆる父親による去勢威嚇が無理なく連想されたのですが、ここから、Aさんが奪われることを恐れるのは、男性としてのポテンツではないかという推測が成り立ちます。

これと関連すると思われるのは、Aさんが、監督されたり、束縛されたりすることに敏感に反応することです(1, 5, 9BM)。監督や束縛も、人の自発性を奪うという意味で、一種の去勢です。ところで、監督・束縛するのは、カード1の物語では父親ですが、カード5では母親です。物語のなかの父親、母親は必ずしもそれぞれ現実の父親、母親を表しているとは言えないので、Aさんの場合も、現実にはどちらなのかという判断は容易ではありませんが——またそう問うこと自体はあまりに単純に思えますが——、私は、監督・束縛するのはどちらかと言えば、カード4の物語などからして、母親の方だろうと思います。カード1の物語のなかの父親は、現実には母親を表しているともできるでしょう。Aさんは、支配性の強い母親の下で、未だにその支配性から脱却できず、子どもとしての自己像ないしアイデンティティをもち続けています。見方によれば、これがAさんの最大の問題だとも言えるほどです。

母親の支配力のせいなのか、父親との関係のゆえなのか、Aさんは、自然な男性としての同一性感覚を確立しておらず、むしろ女性に対して親近性をもっているようです。しかし男性的でありたいという願望はあります。ただそれが、思春期的な身体面での男らしさの憧憬・追求であるらしいことが、やや年齢不相応なところを感じさせます(カード11)。

性的同一性の問題と関連しますが、Aさんは、性的に非常に禁欲的のようです。あまりに道徳的であるという感じすらします(13MF)。これも、かなり確実に親の影響です(10)。親自身が、異性愛に関しかなり抑圧的なのです。ここでも、「親」は、父親より母親のようです(4)。Aさんは、性的な面に限らず、道徳的・倫理的でありすぎる母親の影響下にあって、同じ価値観を受け継いだと推測されます。Aさんの物語から、情より意志を優先するところを感じてきましたが、ここに至って「意志」は倫理的な意志と言えるようです。物語から窺える、Aさんの向上心、自己鍛練の意志などはその表われでしょう。ただ、価値観からくるものゆえに、それが形骸化し、焦りを生むこともあるかもしれません。

なお、Aさんから見た父母の関係は、必ずしも良好なものではありませんが、家庭的に基本的には恵まれており、安全は保証されているという感覚をAさんはもっていると判断されます。

### 第11章 事例B

本章では、思春期やせ症の事例B(女性・14歳・中学生)をとりあげて、TAT反応を検討していきます。テスターからは、「被検者は、細くて弱々しく、声も小さいが、物語をどんどん作っていった。とても素直であるという印象を受けたが、ときどき冷やかな見方をすると感じた。ひととおり物語づくりを終えた後、カード2に戻っ

て、再度物語づくりを試みさせたが、やはり何も思い浮かばなかった」との報告を受けています。<sup>[註1]</sup>

## 1 カードごとの検討

### カード1の物語 [16" - 1'52"]

この子はバイオリンを練習しようと思うんだけど.....なかなか難しくて悩んでる。.....悩んでる？ うん。でも一生懸命やろうとして努力するんだけど、それでもできない。できない。ある日、とてもバイオリンの上手な先生がいて習い始めようとするんだけどお金が高くて習いに行けない。あきらめちゃって、バイオリンを売りに出す。うん、売りに出しちゃう。.....それで、そのお金は盗まれてしまって.....ずっと、一文無しで、さまよい続けて死んでしまう。この男の子が？ うん、終わり。この男の子って何歳くらいかなあ。12, 3歳くらい。

\*

要約：“(12, 3歳の)子がバイオリンを練習していて、一生懸命やろうとするけれども、できなくて悩んでいる。ある日とてもバイオリンが上手な先生に習い始めようとするけれど、お金が高く、習うのをあきらめ、バイオリンを売ってしまう (Sep/Los [Sep. Los])。けれども、売って得たお金は盗まれてしまい (Dep)、一文無しになり、さまよい続けて死んでしまう (Neg-F [S-des])。”

検査者からの質疑あるいは促しがありますが、それに応じて、すぐあとを続けられます。したがって自発性の面で問題があるとは言えないでしょう。

\*

出だしの部分はごくふつうの絵解きです。しかし終わりの部分は突拍子もない結末になっています。どこから逸脱したのでしょうか。バイオリンがうまく弾けなくて、誰かに教えてもらおうとされることは、ときどきありますが、バイオリンを売りに出すというのは、まずありません。そして、そのあとの展開はまったくわが語り手に固有のものです。

TATを知らない人にも、これはずいぶん変わった物語に思えるのではないのでしょうか。内容にあるようなことが現実には起こることはまずないからでしょうか。しかし、突飛な印象はそういう現実性の問題だけからくるものではありません。最初に提示された主題を越え出て、それと関係ない展開になっているからです。すなわち、バイオリンをうまく弾けないこと自体がどういう経過を辿って、どういう結果になったかということを一貫して追求することが期待されているのに、本例は、そういう皆の期待に背いているのです。誰も、なにか必然的でなく恣意的な展開だという印象を受けると思うのですが、それは今述べたようなことによるのです。このような暗黙の了解、言うなれば共通の土俵から外れてしまうことは、他者との疎通性、共感性に大きな障害となると思われます。形式面のチェック表の19に記入する必要があります。<sup>[註2]</sup>

次に物語の内容面を詳しく検討するまえに、関係相をチェックしておきたいと思います。「バイオリンを売りに出す」という部分はSep/Los [Sep]に、「お金は盗まれて」という部分はDepに、「さまよい続けて死んでしまう」という部分は、Neg-F [S-des]に相当すると考えます。

さて、お金が高くて習えないから、習うのをあきらめてバイオリンを売るというのは、必然性に欠けますね。少年が生活に困っていたという説明はないのですから。それとも少年は遊ぶ金がほしかったのでしょうか。しかしそれなら、バイオリンを売って得たお金を盗まれても、さまよい続けて死ぬことはないでしょう。それとも、少年は家族がいない孤児だったのでしょうか。それならどうしてバイオリンのような高価なものを所持できたのでしょうか。このように、この物語には、不自然な部分が多すぎます。多くの場合、明らかに述べられていない部分においても、そういう不自然さ、不合理さはあまりないものです。それは、すでに触れたように、語り手に、暗黙の共通の理解という常識性が備わっているからだだと思います。わが語り手は、この常識性が脆弱なようです。チェックされた関係相はいずれも、語り手のなかで高いポテンシャルをもつゆえに常識性を破って出現したものか、あるいは常識性が欠けているがゆえに、出現したのかわかりません。しかし常識性が欠けていることと、特殊な関係相のポテンシャルが高いこととは結局同じことを意味します。最後に、少年が、バイオリンの上手な先生に習おうとする部分は、語り手に精神的な指導者が不在で、それを希求していることを示唆していることを言っておきます。

カード2の物語 [1'02" - 1'50"]

何にも浮かびません。 うん、何でもいいんだけどなあ。…… ダメかな？ はい。ごめんなさい。

\*

完全な反応失敗です。 [ :Oth その他] に登録します。

\*

何かが顕現したときにその要因を分析することと、何も顕現しないときにその要因を探求することとどちらが困難かといったら、断然後者です。語り手はなぜ何も言えなかったのでしょうか。このカードは難しいカードであるという人もいますが、そんなことはありません。難しく考える人には難しいだけで、たとえば、学校帰りの女学生が農家の人々が働いているそばを通りかかったところという、スナップ写真的な反応でも、いいわけです。これだけでは貧しい反応といわねばなりません、決して失敗反応ではありません。また、これを記述的な反応に数える人もいますが、これも正しくありません。平凡とはいえ、絵の解釈はあるのですから。さて、わが語り手はどうして何も言えなかったのでしょうか。この後に続く、饒舌とも言える、恣意的な物語作りと顕著な対照をなしています。ここでは失敗の理由はわかりませんが、これ以降の物語が何かヒントを与えてくれるかもしれません。

カード3BMの物語 [24" - 2'07"]

この人は、結婚してて、相手の男の人は、旦那さんというのはとても酒癖が悪くて、ずっと待っているんだけど、なかなか帰ってこなくて、もともと2人は仲悪かったんだけど、ある夜この旦那さんは外出して、待っているんだけどなかなか帰ってこなくて、それでもずっと待っているんだけど、一晩夜が明けてもそれでも帰ってこなくて、その日がちょうど寒い日で、後から人が来て、その旦那さんが、足を滑らせて、井戸に落ちて死んでしまって、この人は晴れて実家に戻って、幸せとは言えないけれど、やり直すことができた。じゃあ、この人は奥さんの方なんだよね。そうです。この奥さんはだいたいどのくらいなのかなあ、年は？ 27, 8ぐらい。あと加えることはありますか？ ありません。

\*

要約：“(27, 8歳ぐらいの) この人は結婚しているけれど、旦那さんは酒癖が悪く、仲が悪かった (Hos/Disg [Host])。ある夜外出した旦那さんの帰りを待つけれど、一晩明けても帰ってこなかった (Sep/Los [Sep. Los])。その日は寒い日で、旦那さんは足を滑らせて井戸に落ちて死んでしまった (Neg-F [S-des]) ことを後で人に知らされた (Pas-F [H. Sk])。この人は晴れて実家に戻り、やり直すことができた (Pos-F [S-pre])。”

\*

基本的には“問題の夫の下での妻の苦しみ”と概括できる絵解きで、ときどき見かけるものですが、後半の部分は特異です。短い物語のわりに多くの関係相が認められます。絵の人物は、帰らぬ夫を待っているということで、見捨てられ経験をしているように思われ、関係相の Sep/Los [Sep] に相当します。夫が「井戸に落ちて死んでしまった」という部分は Neg-F [S-des] に入れてもよいでしょう。非常に恣意的な発想 (形式面のチェック表の19に登録<sup>(註3)</sup>) ですが、それに続く、女性が実家に戻ってやり直すことができたという部分は Pos-F [S-pre] に相当します。物語全体は個人的なものを感じさせます。思春期の女の子が、既婚女性の、問題の夫の下での悩みややり直しの願望に言及しうるためには、現実生活での間接的な経験が必要でしょう。つまり、不幸な結婚を嘆く母親を間近に見てきたということです。物語における夫の突発的な事故死も妻のやり直しの実現も、母親がいつか、あるいはいつも口にした願望空想ではなかいかとすら思えます。

カード4の物語 [51" - 1'34"]

…… こうしなきゃいけないってものはないからね。思いついた通りでいいからね。この2人は兄妹で、サーカスをやっているんだけど、なかなか人気が出なくて、苦労しながら技を身につけて行って、最後にはだんだん売れるようになってきて、そのうち大スターになって、幸せに暮らしていく。仲良く暮らしていく？ はい、終わりです。

\*

要約：“ 兄妹は、サーカスをやっていて、はじめは人気が出なかったけれど、苦勞して技を身につけて大スターになり (Expo [Exp]) 幸せに暮らしてゆく (Pos-F [S-pre])。 ”

兄妹の関係の様相が不明なので、 [Neut] に登録します。また、絵は物語のどの部分と対応するのかが明確ではないので、形式面のチェック表の 13 に登録します。

\*

語り始めるまでにかかなり長い時間を要しています。やっと打ち出された絵解きは、この絵から予想もされえないものです (形式面のチェック表の 19 にも登録<sup>[註3]</sup>)。

まず、この絵解きのどの部分が絵と対応するのかわかりません。考えられるのは、「人気が出なくて、苦勞しながら……」という部分です。人気が出なくてくさっている兄を妹がなだめ、励ましていると語り手は見ていた可能性があります。口に出さなかったのは、自明に思えたからかもしれません。弱い、あるいは無力な男性を女性が助け、支えていると見られることはまれではないので、今述べたような補足が可能なのですが、形式面のチェック表の 13 に記入せざるをえません。また、関係相の面でも、チェック表の [Neut]、つまり関係の様相が不明に記入せざるをえません。明白でないことに対する上述のような推測が当を得ていたなら、語り手の心のなかの男性像は、くじけやすい、弱い存在ということになるでしょう。

2 人の人物が兄妹とされることも非常にまれです。ふつう夫婦か恋人か愛人かのいずれかにされるものですが、兄妹とされることによって、2 人の間に自然に想定される異性愛の要素は排除されてしまいます。語り手は異性愛を排除するために男女を兄妹にしたのでしょうか。それもあるかもしれませんが、筆者には、親不在の境遇で子どもたち同士のがんばりが語り手の支配的テーマとしてあるがゆえに出てきた設定のように思われるのです。わたしがそう思う根拠は、これまでの絵解きから推測される両親間の関係の問題もありますが、主にはサーカスです。サーカスには、親のない子、口減らしのために親に捨てられた子が引き取られるところ、恵まれない境遇にあった人たちが寄り集まってする共同生活、容赦ない訓練などのイメージが付きまとっています。絵の男女にサーカスを連想させるものはありません。強いて探れば、背景のポスターの半裸の女性でしょうか。しかしこういう外的な手がかりによるより、上述した主体的要因によってサーカスが語り手に親しいイメージとしてあるところに、男性を支える女性の認知が加わり、上掲のような物語になったのだと思われます。

しかし、語り手にとってサーカスのイメージは、人気を博する場、スターになれる場でもあるようです。彼女の自己顕示欲求をも推測してよいでしょう。関係相の Expo [Exh. p] 欄に登録しておきます。さらに Pos-F [S-pre] 欄にも登録します。

#### カード 5 の物語 [13" - 1'44"]

この人は、あるお金持ちの家政婦さんなんだけど、その主人の人がものすごい犯罪を起こすことの話をしていて、これを他の人に話そうかどうか迷うんだけど、結局話してしまって、それがその主人にばれて、家を追い出されるんだけど、追い出されたから、その家政婦さんは警察に行って、その事件は未然に漏れるのだけど、その家政婦さんは、言ったことを後悔して……後悔して一生を終えてしまう。…… これくらいかな。 はい。

\*

要約：“ ある金持ちの家政婦が、主人がすごい犯罪を起こそうとしている (Conc) 話を聞いてしまい (Pas-F [H. Sk]), そのことを迷った末に他の人に話した。するとそれが主人にばれて、家を追い出され (Sep/Los [Sep. Los]), 警察に行き [打ち明けた]。事件は未然に漏れた [ために防がれた] けれど、家政婦は言ったことを後悔して一生を終える (Neg-F [S-des])。 ”

\*

ここでも、絵と物語の対応が自明とは言い難いですね。たぶん家政婦さんは今主人の部屋に来て、思いもかけず、主人の秘密のたくらみを知ってしまったところなのでしょう。しかし形式面では、チェック表の 13 に記入しておきます。内容面は、めまぐるしく展開して、それに応じて、チェックの数も増えます。主人が犯罪の話をしているのを知ったという部分は Pas-F [Disc. n] に、他人に話してしまうという部分、および警察に行くという部分は Expo [Exp] に、家を追い出されるという部分は Sep/Los [Sep] に相当します。後悔して一生を終えるという部

分は、Neg-F [S-des] に相当させます。

この物語のように、室内で生起している予想外のできごとに接し、人物は驚愕しているとみなす人は少なくありません。この種の絵解き一般のなかで本例をやや特異なものにしているのは、暴露されたのが犯罪であること、さらに、暴露した人物つまり「家政婦」への語り手の強い同一化があり、彼女の行く末にまで触れていることです。図らずも知ったのが、部屋主の性行為や病気や失踪である場合には、語り手は部屋の主の方により強く同一化して、絵の母親的人物を驚愕させているという趣があるのに、本例ではそうではありません。つまり、語り手は、多くの人がこの絵を見たときもつ、母親的人物に覗かれているという感じをもっていないようなのです。このことから、筆者は母体験の乏しさを推測します。同時に、非情な主人に仕える召使という設定から、語り手の、利己的で非情な父親像と無力な母親像をも推測します。

最後に、このカードでは、Pas-F [Disc. n] がチェックされることは珍しくありませんが、Expo [Exp] や Sep/Los [Sep] がチェックされることはまれです。いずれも語り手にとって高いポテンシャルをもつ関係相であると思われます。

#### カード 6GF の物語 [15" - 2'03"]

この人たちはものすごい仲の良い夫婦で……ある日お芝居を見に行き、そのお芝居に……そのお芝居がもとで、ほんの少しのきっかけなんだけど、けんかをしてしまって、突発的に奥さんは家を出てしまうんだけど、その奥さんは後悔して、戻ろうと思ったんだけど、その人にもプライドがあったから、なかなか戻れなくて、そのうち連れ戻しに来ると思ったんだけどなかなか来なくて、そのまま待っていて終わってしまった。

\*

要約：“すごく仲の良い夫婦であったが (Uni)、見に行った芝居がもとでけんかになり (Hos/Disg [Host])、奥さんは家を出てしまった (Sep/Los [Sep. Los])。奥さんは後悔して戻ろうとしたが、プライドがあってそれもできず、連れ戻しにきてくれる (Spo/Sav [Spo. Sav]) ことを期待したが、来てくれなかった (Sep/Los [Sep. Los])。”

またしても、この絵解きのどの部分が絵と対応するのか不明で、チェック表の13に記入されます。一般にこのようなことは、現在の生活への注意の不足と意味づけられるでしょう。現実適応とは、現在の生活への対処にほかならず、誰にとってもこれが一番必要ですから、TATの物語作りにおいても、絵の場面の解釈が主たる課題になるものです。絵の場面が中心とならず、長い時間を包含する物語のなかの単なる一場面という扱いを受けていることは、観念的で、現実適応の姿勢が弱いことを感じさせるのです。

\*

さてここでは、物語と絵との対応を見つけるのは、これまでのものにも増して難しそうですが、絵は夫婦の言い争いの場面と解するしかないでしょう。ともかく夫婦はけんかしたのですから、関係相の Hos/Disg [Host] がチェックされ、奥さんが家を飛び出すという部分、および連れ戻しに来てもらえないという部分は Sep/Los [Sep] に相当します。これらの関係相はこのカードではきわめてまれで、かなり気が強く、プライドも高い女性像が語り手のなかで優勢であることを推測せねばなりません。母親から形成された女性像なのでしょう。

なお、芝居がもとでけんかしたということにも意味づけが可能でしょう。芝居は見るものです。カード4でのサーカスも見erるものです。カード5でも“見る”ことがテーマになっていました。語り手は、“見る”ことに関する欲求や不安が強い人である可能性があります。

#### カード 7GF の物語 [5" - 1'16"]

この2人は親子で、娘のほうが抱いているのがその妹で、お母さんと娘がしゃべっているうちに娘が眠たくなってしまって、そのうち風が吹いてきて、ますます気持ちよくなった娘は、赤ちゃんを抱いている手を放してしまっただ。その赤ちゃんは、落ちてしまうんだけど、お母さんも、娘もうたた寝したまま気づかないでそのまま風が吹いている。終わりです。その後もずーっと気付かないのかな？ 起きれば多分気づくと思うけれど、寝ている間は……。起きたらどう思うかな？ 起きたらびっくり (笑) してたでしょうね。

\*

要約：“母と娘がしゃべっているうちに、娘は眠たくなり、妹を抱いている手を放したために赤ん坊は落ちてしまふ。(Sep/Los [Sep. Los]) 母親もうたた寝していて、それに気づかないまま。(起きたら気がつきびっくりする。)”

母と娘の関係の様相が不明です。それゆえ [Neut] にも登録します。

\*

これも非常に特異な絵解きです。絵にはおとなの女性と少女が描かれていて、2人は母と娘、お手伝いなし家庭教師と雇い主のお嬢さんなどとされます。この限りでは、本例もふつうです。しかしたいてい、おとなの女性が少女に対しなんらかの働きかけをしていて、少女はその働きかけを受け入れていないと解されます。この基本的場面把握に肉付けがなされて具体的な物語が生ずるのです。ところが、本例には、そういう基本的場面把握は認められません。母と娘は「しゃべっている」とだけされています。ですから、関係相のチェックでは、[Neut] に相当させます。おそらく語り手には一般的な母娘関係のイメージないし概念がしっかり形成されていないのです。すでに推測したように、現実の母親なる人が、母親なるもののイメージの形成に寄与しえなかったこととも関係しているでしょう。

物語のなかの母娘は心地よい風に吹かれて双方ともうたたねしてしまい、娘は赤ん坊を手放してしまいます。双方とも赤ちゃんが下に落ちるのに気づきません。これは赤ん坊を見捨てていると同じことでしょう。したがって、関係相は、Sep/Los [Sep] とチェックされえます。

なるほど少女の赤ちゃんの抱き方は、落としそうな抱き方で、少なからぬ人々がそれに言及しますが、その場合、おとなの女性の方が、少女が赤ちゃんを落とすのではないかと心配している、ちゃんと抱くように少女に言うなどとされるものです。ところがこの物語では母親は赤ん坊にまったく無関心であるかのようです。語り手の母親は、母性が未発達であること、語り手も、同胞に無意識的な敵意を抱いていることが推測されます。

#### カード 8GF の物語 [11" - 1'37"]

この女の人は絵を描くのが好きで、才能もあって、あるひとりの画家に才能を認められて、どんどん成長していきただけけれど、そのうちこの女の人は、有名な、その認められた画家より世間に知れ渡るようになってしまっただけで、この女の人はアトリエと一緒にしてただけで、その男の人は怒って、自分の絵を盗んでいるんじゃないかって、疑い始めて……どんどん口げんかになっていって、結局この女の人は出て行かされるだけ、別なところにアトリエを持って、どんどんさらに有名になっていった。終わりです。

\*

要約：“絵を描くのが好きな女の人が、ある画家に才能を認められて成長してゆき、やがてその画家よりも世間に知れ渡るようになった (Expo [Exp])。そのために画家は怒って、自分の絵を盗んでいる (Dep) ののではないかと疑い始め、口げんかになり (Hos/Disg [Host])、女の人は出て行かされる (Sep/Los [Sep. Los])。けれど自分のアトリエをもち、さらに有名になっていった (Pos-F [S-pre])。 ”

\*

この絵から絵のモデルや画家を連想する人は少なくありません。絵の女性は描かれる対象、つまりモデルで、彼女を描く画家は画外にいるとされるのです。物語としての展開は乏しいのがふつうですが、ときに画家自身の成功物語に発展します。すなわち、売れなかった画家が、この女性をモデルにした絵で売れ始め、有名な画家となるという物語です。

こうした一般的傾向に照らしてみると、本例の特異性が浮かび上がってきます。特異な点は、おわかりのように、まず、人物は描かれるモデルでなく描く画家であることであり、めまぐるしく話が展開して行くことです。関係相をチェックしてみましょう。女性が、彼女の才能を認めてくれた画家より世間に知れ渡るようになったという部分は、Expo [Exh. p] に相当し、彼女が自分の絵が盗まれているのではないかと男の画家が疑い始めるという部分は Dep に相当し、女性が出て行かされるという部分は、Sep/Los [Sep] に相当します。最後に、どんどん有名になっていったという結末部分は、Pos-F [S-pre] に相当させえます。このカードでこれらの関係相がチェックさ

れるのはきわめてまれなことですが、Dep も Sep/Los [Sep] も、さらに Expo [Exh] もこれまでの物語に認められるものです。とくに Sep/Los [Sep] はすでに数度チェックされています。実際この物語の内容はこれまでの絵解きに見られたことの反復であると見られます。すなわち、画家は“見る”人であり、カード4でのサーカスの芸人のように有名になります。また、カード5, 6GFの女性のように、男性と敵対し、家を出て行きます。語り手に優勢な関係相がだいぶ明らかになってきているという印象です。

ところで、男性画家の態度や振る舞いも注目に値します。彼は相手が成長するとライヴァル視し、そのライヴァルに脅かされ、あらぬ嫌疑をかけています。語り手は彼にも同一化しているわけですから、これらの態度、振る舞いは語り手自身のものでもあります。直前のカード7GFの絵解きに示唆された同胞抗争が思い起こされます。

#### カード8BMの物語 [6" - 1'18"]

この正面の男の人は、医者になることを夢見ていたんだけど、それで、実習生になって、あるとき手術に立ち会って、その手術に失敗してしまって、その患者さんは死んでしまうんだけど、それがきっかけになって、その男の人は、生かすための勉強をしようと思って、どんどんどんどん勉強して、ものすごい腕のいいお医者さんになったんだけど、ずーっと年を取ってから。何がきっかけになったかっていうと、この実習生だった頃の失敗した手術を見て、思い出しては、さらに腕に磨きをかけていく、(不明)のを思い出にしていた。少し疲れた？ ちょっと疲れたです。もう少し。頑張っただね。

\*

要約：“医者を目指していた実習生が、手術に立ち会ったとき、手術が失敗し、患者は死んでしまった (Harm)。男の人は、それをきっかけに猛勉強して、すごく腕の良い医者になった (Expo [Exp])。失敗した手術を思い出してはさらに腕に磨きをかけてゆく (Pos-F [S-pre])。”

\*

背景の“切る”人に関心がゆき、その人と手前の人物とを関係づけ、彼を医者志望の青年にしたのだと思われます。例によって、絵と対応しているのは物語のどの部分かすぐにはわかりにくいのですが、これまでのものよりはまだまだわかりやすく、「実習生だった頃の失敗した手術を見て、思い出しては」という部分としてほぼ間違いないでしょう。

関係相のチェックでは、手術に失敗して、患者が死んでしまうという部分から、Harmに記入しておきます。“切られる”側より“切る”側へのより強い同一化と背景を手術場面とすることから、攻撃性に対して抑圧的ではないとみなされますが、上述の部分は攻撃性の意識化が十分でないことを推測させます。7GFでも、同じことが推測されたことを思い出しておきましょう。

成功の物語であることは、これまでの多くのものと同じです。自己向上欲や顕示欲が強いのでしょうか。Pos-F [S-pre] に登録しておきます。

#### カード9GFの物語 [22" - 2'50"]

この2人は、浜のほうで姉妹で働いているんだけど、そのうち妹のほう結婚してしまって、ずーっと妹に見捨てられてしまって、お姉さんは寂しい暮らしをしていて、10年か20年たったある日、妹が突然訪れてきて、お姉さんを家政婦に雇おうとするんだけど、お姉さんも寂しい暮らしをしていたから、一緒について行って、その妹は、そのお姉さんに辛い仕事ばかり与えて、お姉さんは、献身的に働くんだけど、なかなかうだつが上がらなくて……それでもある日、この妹の旦那さんに見初められて結婚しようとするんだけど、妹がいたから、お姉さんは、分らないように妹を殺して、その夫の奥さんになるんだけど……その人は毎晩妹の夢にうなされて、だんだんノイローゼにかかって、うーん、暗い場所で一生を終えてしまう。これねえ、2人姉妹なんだよねえ。はい。どっちがお姉さんでどっちが妹？ こっち、(覗いている方)が姉で、こっち(走っている方)が妹。

\*

要約：“姉妹は浜のほうで働いていたが、やがて妹が結婚し (Uni)、姉は見捨てられた (形になって) 寂しい暮らしをしていた (Sep/Los [Sep. Los])。10年か20年後に妹が姉を突然訪れ、姉を家政婦に雇うが、姉に辛い仕事ばかりを与える (Con/Coer [Cont. Coer])。姉は献身的に働くが、「うだつが上がらない」。しかし



妹の旦那さんに見初められたので (Love), 妹を殺して (Harm), 結婚するが (Uni), 毎晩妹の夢にうなされ, ノイローゼにかかって, 暗い場所で一生を終える (Neg-F [S-des]).”

\*

これまでの物語と同様, 話がめまぐるしく展開し, 絵に対応するのは物語のどの部分かなかなかわかりにくいですね。「お姉さんは, 分からないように妹を殺して」という部分でしょうか。手前の女性が密かに他方の女性を狙っているという見方は珍しくないからです。しかしわからないというのが正直なところです。形式面の 13 に登録します。語り手の現実感覚の乏しさを指摘しえます。

関係相をチェックしておきましょう。姉が妹に見捨てられたという部分から, Sep/Los [Sep] が, 姉を家政婦に雇い, 辛い仕事ばかり与えるという部分から, Con/Coer [Cont. n] が, 姉が妹の夫に求婚されて結婚するという部分から, Love がチェックされ, 姉が妹を殺すという部分から, Harm が, 姉が夢にうなされ, ノイローゼで死ぬという部分から, Neg-F [S-des] がチェックされます。1つの物語にこれだけの関係相が含まれることはまれです。いかに語り手が, 現実から遊離して, 空想的になっているかが窺われます。そして, 空想もお決まりのパターンをもっていることも察せられます。

さて, 2人の女性を姉妹とすること, 2人が1人の男性をめぐるライヴァル同士であるとするのは, しばしばあります。ただ, 一方が他方を殺すというのは過激すぎます。しかも2人は姉妹なのですから。さすがに殺した方は精神の変調を来し, 不幸な一生を終えますが, 語り手の激しい同胞抗争と同胞に向けられた強い憎しみを感ぜずにはおれません。

#### カード 10 の物語 [13" - 1'45"]

この2人は親子で, ものすごく貧乏な暮らしをしているんだけど, ものすごく仲のよい親子で, ある日, 冬だったんだけど, 2人で歩いていて, お母さんは崖にすべりかけた子どもをかばって, 崖に落ちて死んでしまうんだけど, それでも子どもは立ち直って, ある1人の大人に引き取られて, それで, その人と旅に出かけていく。その旅から, どんどん子どもは成長して行って, いい人になった。この2人は, お母さんと子どもです。

\*

要約: “ すごく貧乏だけれどすごく仲の良い母と子で (Like, Uni), ある冬の日2人で歩いているとき, 子どもが崖をすべりかけたので, 母親は子どもを助けようとして (Spo/Sav [Spo. Sav]) 崖に落ちて死んでしまう (Sep/Los [Sep. Los])。子どもはひとりの大人に引き取られ (Prov/Ser [Spl. Serv]), その人と旅に出て, どんどん成長し, いい人になった (Pos-F [S-pre])。 ”

\*

まず関係相をチェックします。仲のよい親子ということから, Uni が, 母親が崖に落ちて死ぬという部分から, Sep/Los [Sep] と Neg-F [S-des] が, あるひとりの大人に引き取られるという部分から Spo/Sav [Sup] がチェックされます。

この物語でもやはり, 絵が物語のどの部分に対応するのかがわかりにくいです。抱擁のシーンが「ものすごく仲のよい親子」を連想させたのだと思われそうですが, 形式面の 13 に登録します。

しかし親子の抱擁から単に「仲がよい」としか言えないのは, 表現力が貧しすぎるという感じを与えます。そもそも親子について「仲がよい」というのも妙な感じですが。これらのことは, 語り手が十分に親子関係を生きてこなかったことを示唆しています。何の必然性もない親の死への言及や別の大人に引き取られて立派に成長してゆくという展開からは, 母親への否定的な感情が見て取れます。語り手は母親に対しての攻撃的な空想を抱いているけれども, 同時にそれに対して防衛していると言えるのではないのでしょうか。

ところで, 「貧乏な暮らし」という連想の根拠は何でしょうか。この絵では, 何か悲しみや不幸が背景に仮定されるのがふつうですから, 不幸を意味するものとして貧乏が語られたとみなしてよいでしょう。しかし, 不幸には, 愛する人の死や病気というのもあり, こちらの方がよく登場します。語り手にとっては貧乏が不幸の代名詞だった, あるいは貧乏に象徴されるものに苦しんできたということでしょうか。

なお, 親は母親であることが明らかにされていますが, 子どものほうは息子か娘かわかりません。息子であったら, 人物の性の誤認ということにもなるので, この点は確認しておいたほうがよかったです。

カード11の物語 [26" - 1'42"]

ある人がある日旅に出て、ちょうどこの絵の場面まで来て……橋を渡ろうとしたんだけど、その橋が途中で崩れていて、そこに1匹の竜が滝つぼから出てきて、無理難題を押しつけるんだけど、その人は、その難題を1問ももらさずに解いて、その竜がえらく感動して、橋を渡してくれて……渡してくれるだけじゃなくて、温かくもてなしてくれて、この谷を脱出できた。

\*

要約は不要にも思えますが、関係相を確認するために要約をしておきます。

要約：“ある日ある人が旅に出て、ここに来て、橋を渡ろうとしたけれど、橋は途中で崩れていた。そこに1匹の竜が滝つぼから出てきて、旅人に難題 [難問] を押し付けた (Con/Coer [Cont. Coer])。しかし旅人は1問ももらさずに解いたことに竜は感動し、橋を渡してくれた (Spo/Sav [Spo. Sav]) ばかりでなく、温かくもてなしてくれて (Prov/Ser [Spl. Serv])、旅人は谷を脱出できた (Pos-F [S-pre])。”

\*

これに似たような物語を語り手は読んだことがあるのかもしれませんが、前のカードの物語がこれに受け継がれているという見方ができます。ひとりで旅に出た若者が渡河に際し試練に遭うというわけです。幸い彼は試練を乗り越えて行くことができます。語り手の親離れにも希望がもてるということでしょうか。それはともかく、関係相をチェックします。竜——完全に擬人化されています——が無理難題を押し付けるという部分から、Con/Coer [Cont. n] が、竜が橋を渡してくれるだけではなく、暖かくもてなしてくれたという部分から、Prov/Ser [Prov] がチェックされます。

カード12Fの物語 [14" - 1'46"]

若い方の女の方は、横の死神にとりつかれていて、ある事に不幸になるのだけれど……ある日、この死神が姿を現して、ひとりのお婆さんに姿を変えて、女の人の近くにいるのだけれど……ある日、町から祈祷師が現れて、そのお婆さんは、死神だっけ見破るんだけど、それで、いろいろ大変なことがあったんだけど、その死神が女の人から離れて、それから、その女の方は幸せに暮らすことができた。終わりです。

\*

要約：“若い方の女の方は、死神に取り憑かれて (Con/Coer [Cont. Coer]) 不幸になるが (Harm)、ある日、死神がお婆さんに姿を変えて女の人の近くにいるとき (Expo [Exp])、町から祈祷師が現れ、お婆さんが死神であることを見破り (Expl [Sk. Sk])、死神は女の人から離れ、女の方は幸せにくらすことができた (Pos-F [S-pre])。”

\*

若い女性が死神にとりつかれて、彼女の身辺には不幸が起こる (Con/Coer [Cont. n] および Harm という関係相) が、祈祷師が死神と見破り (Expl [Disc. n] という関係相)、そのおかげで死神が離れてゆき、幸せに暮らす (Pos-F [S-pre] という関係相) という絵解きです。魔女が若い女性にとりついて、とりつかれた方は不幸になるが、お祝いによって魔女が退散したという物語は珍しくありません。この物語では、とりつくのは魔女でなく死神になっていますが、たいした違いはないでしょう。したがってこの物語はわが語り手にしては平凡なものです。主人公は窮地に陥るが、ある援助者によって窮地から脱出させてもらえるという、語り手の物語に特有のパターンが、ここでの平凡反応と合致したという見方ができます。

このような絵解きから言えることは、語り手にとって、悪は外在的であるということ、すなわち、自己内部に潜む悪が自覚されず、悪は自分の外にあるという捉え方をしているということ、要するに十分に内省的ではないということです。

カード13MFの物語 [13" - 1'18"]

この男の方は、女の人をちょっとしたことで殺してしまって、後悔するんだけど、自首する勇気もなくて、だんだん逃亡生活に入って、もうこの男の人が殺してしまったということが全面的に伝わっちゃって、どんどん追わ

れるんだけど、結局捕まらなくて、ある村にずっと住むことになって、その村はとっても不便なんだけど、平和で、その男の人も改心して、ずっと幸せに暮らしていく。

\*

要約：“男の人は女の人をちょっとしたことで殺してしまい (Harm)、後悔するけれど、自首する勇気もなく、逃亡生活に入る (Conc)。殺したことは広く伝わり (Expo [Exp])、ますます追われるが捕まらず、ある村に住む。村は不便だけれど、平和で、男の人は改心して、幸せに暮らす (Pos-F [S-pre])。”

\*

内容的に乏しい物語です。語り手は疲れてきたのかもかもしれません。男性が女性を殺して (関係相：Harm [Harm. a]) 後悔しているとされることはしばしばあります。本例の特徴は、男性が自首せず逃亡を続け、殺人の事実は「全面的に」伝わった (関係相：Expo [Exp]) のにもかかわらず最後まで捕まらずに、改心して幸せに暮らしたというところです。語り手は、ある貧しい (?) 村にかくまわれて幸せに暮らす (関係相 Pos-F [S-pre]) 男性に、強く同一化しているところが感じられます。すでに推測しえた弱い、無力な男性像に対する同情がそうさせたのではないのでしょうか。

#### カード 14 の物語 [12" - 59"]

この男の人は、ずっと鳥みたいに空を飛ぶのが夢で、それがもて周りの人に笑われるんだけど、それでも夢見ている、ある夜、ついに飛ぶ決心をして、窓から降りるんだけど、飛べるはずがなくて、そのまま落ちて死んでしまうのだけど、その人の魂は本当に鳥になって、大空を飛ばたい、幸せになっていった。

\*

要約：“男の人は、鳥みたいに空を飛ぶのが夢で (Expo [Exp])、周りの人に笑われるが (Hos/Disg [Host])、ある夜ついに飛ぶ決心をして窓から飛び降りる。しかし飛べるはずもなく落ちて死ぬが、魂は鳥になり、大空を飛ばたい、幸せになった (Pos-F [S-pre])。”

\*

絵の人物が空を飛びたいという願望をもっているとされることは、ときどきあります。人物にそのような願望をもたせたということは、語り手自身の現実逃避願望を示唆していると言えるでしょう。人物は、それが実現不能なことを知りつつ決行してしまいます。そして死んでしまうが、魂は鳥になります。このあたりには、一種の迫力を感じます。語り手の願望がそれほど強いということです。これは形を変えた自殺願望 (関係相：Neg-F [S-des]) ということもできますので、周囲が注意を怠らないことが必要でしょう。

#### カード 15 の物語 [7" - 1'13"]

この人は、お墓から甦ったんだけど、そのまま、ずっと悪さを続けてきて、でも死人だから、甦っても新陳代謝がないから、手足が痺れて、口がよく回らなくなってきて、足から腐ってきてしまって、また、教会の前まで戻ってくるんだけど、そこで力尽きて果ててしまうんだけど、神父さんがかわいそうに思って、またお墓まで埋めて戻してあげる……終わりです。

\*

要約：“(生前悪いことをしていた) この人は墓から甦ったが (Expo [Exp])、悪さをすることはやまなかった。しかし死人だから新陳代謝がなく、手足、口が思うように動かなくなり、足は腐ってきて、教会の前で力尽きるが (Neg-F [S-des])、神父が哀れんで埋め戻してやる (Spo/Sav [Spo. Sav])。”

\*

墓から甦った人を見ることは珍しくありませんが、死人だから新陳代謝がなく云々という、死者の身体的変化への言及はまずありません。死者が甦るといふとき、ふつうその身体的存在まで考えないものではないのでしょうか。たとえ身体的存在を仮定しても、甦るわけですから、身体が朽ち果てていくとは考えなくてもよいのではないのでしょうか。やや理屈っぽくなりましたが、しかし身体がだんだん弱ってきて力尽きるという部分から、関係相の Neg-F [S-des] がチェックされ、語り手の希死念慮や悲観的な人生観が推測されます。「神父さんがかわいそうに思って……」という部分からは、語り手に頻出する Spo/Sav [Sup] がチェックされます。

ところで、死者が甦ったとされるときは、ふつう、この世に未練や怨念を残したまま死んだからだとされるのですが、本例ではこの点がはっきりしません。ただ「悪さを続けてきて」という部分や神父の憐れみは、それを示唆しています。人物への強い同一化から、語り手は非常に強い怨念を抱えていると思われます。

カード 17GF の物語 [8" - 54"]

この人は船乗りで、人生に絶望して、この橋から飛び降りて死のうと思ったんだけど……ある女の人に止められて、どんどん話を聞いてもらっているうちに、心が晴れてきて……その人はうーん、いろいろあったうちに、その女の人と結婚して、幸せに一生を終えていく。終わりです。この橋の上の人は？ 男の人です。

\*

要約：“船乗りが人生に絶望し、橋から飛び降り死のうとする (Harm) が、ある女の人に止められ、話を聞いてもらうと (Spo/Sav [Spo. Sav]), 心が晴れてきた。やがて女の人と結婚して (Uni), 幸せに一生を終える (Pos-F [S-pre]).”

\*

橋の上の人が入水自殺をしようと思っていると見る人は少なくありません。思いとどまるとされたり、実際に飛び込んで、橋の下の男たちに救助される、とされたりします。だからこの物語に認められる関係相、Harm および Spo/Sav [Sup] はなんら特別なものではありません。ただ多くの物語と異なる点は、橋の上の人はたいてい女性と見られ、とくに自殺企図が問題になっている場合には、まず例外なく女性ですが、本例では男性とされていること、および男性が女性に助けられることです。このような、一般とは逆の人物の性別同定と物語展開は、語り手の性的同一性に問題、端的に言うなら、自らと反対の性、つまり男性への親近性と同一化傾向が強いということを示唆しているとみなせるでしょう。結末の「女の人と結婚して、幸せに……」の部分から、関係相の Uni への登録が可能です。カード 14 で示唆されていた自殺願望が、ここではっきり表現されたわけですが、このような結末があるのは救いです。

カード 18GF の物語 [38" - 2'40"]

この女の方は、男の人が病気で死んだことを、いまだに信じられなくて、ずーっと眺めているんだけど、その男の方は、生前ものすごくいい人で、それだから女の方も余計に悲しくて信じられなくて、ずーっと日が過ぎてしまっただけ、ある日、妖精が現れて、この人は行いがよかったもんだから、ある小瓶の中に水が入っていて、その小瓶の水を、この男の人に飲ませれば生き返ることができると言って、また消えてしまっただけ、その女の方は薬にもすがらないで、その瓶の水を飲ませて、男の方は生き返ることができたんだけど、そのままその女の方は妖精の存在を忘れていて、その妖精にお礼を言うのを忘れていて、妖精は怒って、今度は、その女の方の命を奪ってしまった。その命をまた瓶の……つぼに水として蓄えてまた消えていってしまった。この2人はどういう関係なのかなあ。母親と息子です。はい。

\*

要約：“女の人 (母親) は生前すごくいい人であった男の人 (息子) が病気で死んだ (Sep/Los [Sep. Los]) ことをいまだに信じられず、ずーっと眺めている。ある日妖精が現れ、小瓶の水を飲ませれば死んだ人は生き返ることができると言って (Spo/Sav [Spo. Sav]) 消えた。女の方は瓶の水を飲ませて男の人を生き返らせることができたが (Expo [Exp]), 妖精にお礼を言うのを忘れていたので、妖精は怒り (Hos/Disg [Host]), 女の方の命を奪い (Harm), その命を瓶に水として蓄え、消えてしまった (Conc).”

\*

母親が、死んだわが子を、その死を信じられず、あるいは認めたくなく、あたかも生けるがごとく扱っているとされることは、まれにあります。本例もそのようなものの1つです。しかし「妖精が現れて……」の部分からは、この語り手らしい空想的な話になってゆきます。関係相をチェックしておくと、男の人 (息子) が死んだということから、Sep/Los [Sep] が、女の人 (母親) の追慕の念、および、妖精が死者を生き返らせる小瓶を与えるということから、Spo/Sav [Sup] が、妖精が母親の命を奪うということから、Harm [Harm. p] がチェックされません。関係相の面だけからも、この語り手におなじみの物語であろうと推察がつかますが、ここでの特殊な点は、

Spo/Sav [Sup] の内容が死者を甦らせることであること、および窮地にあった人が救われることで終わらずに、救われた人が、その忘恩のゆえに命を奪われるという不幸な結末がついたことです。前者は深い喪失の体験を示唆し、後者は忘恩に対する強い怨念を推測させます。

言い忘れていましたが、この絵では、2人の人物は母親と娘とされることが多いのに、この物語では母親と息子というまれな設定になっています。ここに語り手の男性同一化の傾向を読み取ることが可能です。

#### カード 19 の物語 [28" - 2'29"]

ある日、この船が航海に出て、しばらくは、別にその航海は続いたんだけど、ある日、嵐になって船が沈没して……その船乗りたちはバラバラになってしまうんだけど、それにあわせて、悪魔が来て、「命を助けてやる代わりに、これから生まれてくる男の子は、全部私に差し出さなさい。」という契約をしてその船乗りたちは助かるんだけど、ある1人の船乗りのところに男の子が生まれて……でその話を思い出したから、その赤ちゃんはずーっと女の子として育てられたんだけど、今度は、その悪魔が怪しがつて、現れてきて、その初めに生まれた男の子が、もうだいぶ大きくなっていて、その子は、ばれるといけなからってずーっと閉じ込められていたんだけど、で、ある日、出てきて、その悪魔を退治して、男の子として育つことができた。終わりです。退治したのは、その上の男の子だけ？ はい。

\*

要約：“船が航海中に嵐に遭い沈没し、ばらばらになった。そこに悪魔が来て、命を助けてやる (Spo/Sav [Spo. Sav]) 代わりに、これから生まれてくる男の子は全部私に差し出せと命じたので (Con/Coer [Cont. Coer]), そういう契約をして船乗りたちは助かった。やがてある船乗りにも男の子が生まれたが、契約を思い出して、その子は女の子として育てられることになった (Conc)。それを悪魔が怪しみ現れた (Expl [Sk. Sk]) ところに、成長した男の子が、閉じ込められていた (Conc) 場所から出てきて (Expo [Exp]), 悪魔を退治して (Harm) [晴れて] 男の子として育つことができた (Pos-F [S-pre]).”

\*

船が嵐の海を進んでいるところという絵の解し方はごくふつうのものです。船内の人々が安泰でなく、船が沈没して人々が海に放り出されてしまうのは、守られ方が弱く、安心感をもちにくいことを示唆しています。

多くの人の物語はこれぐらいのところまで終わりになるものですが、本例ではさらに展開していきます。しかし必然性はありません。その部分は語り手の独創ではなく、出来合いの物語からの借り物という感じですが、関係相をチェックしておきます。悪魔が船乗りを助けることは、Spo/Sav [Sup] に相当しますが、生まれてくる男の子を差し出すという条件をつけることは、Con/Coer [Cont. n] に相当します。生まれてきた男の子が女の子として育てられ、悪魔に見つからないように閉じ込められていた部分からは、Conc がチェックされ、ある日男の子としての姿を現すという部分からは、Expo [Exh. p] がチェックされます。悪魔を退治するという部分は言うまでもなく、Harm に相当します。

男の子が女の子として育てられるというところは、なかなか興味深いものがあります。語り手自身の性的同一性に関する深い疑いを表しているかのようです。物語では、世間で女の子として通っていた男の子は悪魔を退治して男であることを証明したわけですが、それは語り手の、実現不能な願望の表現ではないでしょうか。

なお、悪魔が条件つきで船乗りを助けるというところは、前のカード、18GFでの、妖精が忘恩に怒って、恩を授けた人を殺すという部分を思い起こさせます。そこでも、助ける側は一種の条件、つまり、恩に対する相応の礼を尽くすことという条件をつけていることが察せられるのです。そういう意味では、助けられた母親は、コントロールされていたということが出来ます。

#### カード 20 の物語 [13" - 1'38"]

この男の人は、ある人と待ち合わせをしていて……これはちょうど橋の下なんだけど、うーん、ずーっと約束の時間になっても、その相手は現れなくて、とうとう雨が降り出してきて、それでもその男の人は約束を守ろうとして、ずーっと立っていて、どんどん、川が溢れてきて、水かさが増してきて、それでもその男の人は待っていて、死んでしまって、周りの人には、死んでも約束を守ろうとするすごい人だったという噂が広まった。これで終わり

です。どんな相手なんだろうね。その待ってた人の。やっぱり、男の人で、この人と大体同じくらいの年の人で。どんくらいの人だと思う？ 30 ぐらいの。

\*

要約：“この男の人は橋の下である（30 歳ぐらいの男の）人を待っているが（Uni），約束の時間になっても相手は現れない（Sep/Los [Sep. Los]）。そのうち雨が降り出したが，男の人は待ち続ける。やがて川の水かさが増して溢れてきて，男の人は死んでしまった（Neg-F [S-des]）。周りには死んでも約束を守るすごい人だという噂が広まった（Expo [Exp]）。”

\*

絵のなかに人を認知し，彼が人と待ち合わせをしていると解することは，ごくありふれたことであり，待ち人は現れないが，約束を守っていつまでも待つとすることも，まれではありません。来ない相手を辛抱強く待つとすることは，関係相のチェック表の Uni に相当させることができるでしょう。結局相手は来ないということは Sep/Los [Sep] に相当し，死んでも約束を守ろうとするすごい人だという噂が広まったという部分は，Expo [Exh. p] に相当させることができます。水死するというには，Neg-F [S-des] に相当するのは明らかでしょう。

さて，水死するのを覚悟で，来ない相手を待つというのは単なる愛着・愛慕を超えていて，忠誠心というべきでしょう。語り手は，必然的でない過激な形で忠誠心を強調しています。そうせざるをえないほど信頼を裏切られる経験をしてきたということかもしれません。

場所が橋の下とされることは非常にまれです。川の増水による死はそれゆえの連想か，それともこれが先にあって，場所が橋の下に思えたのか定かではありません。しかし水死やその可能性が語られたのはこれで 4 回目です。水死が語り手にとって象徴的意味をもっているかもしれません。

カード 12BG の物語 [10" - 1'22"]

ある日雨が降って，この船は誰も持ち主がいなくて，どんどん押されて川に船が流れてしまったんだけど，それを取る人も乗る人もいなくて，どんどん進んでいって……その船には気持ちがあって，ずーっと誰も乗らないことを悲しがっていたんだけど，この船は木製だから，もう腐ってきてしまって，ある野原で，腐り果ててしまうんだけど，その上から草花が出てきて，きれいな花を咲かせて，見る人を楽しませて，その木の気持ちは，その花に伝わって，毎年美しく草花が咲いた。それで終わりです。

\*

要約：“持ち主がいらない船が，雨のために川に流れて，進んでいった。その船には気持ちがあって，ずーっと誰も乗ってくれないことを悲しがっていた（Sep/Los [Sep. Los]）。木製だからある野原で腐り果ててしまうが（Neg-F [S-des]），その上から草花がきれいな花を咲かせて見る人を楽しませた。木の気持ちは花に伝わり，毎年美しい花が咲いた（Expo [Exp]，Pos-F [S-pre]）。”

\*

持ち主のいない船が増水した川に流され，ある野原に漂着し，腐り果てるが，代わりに美しい草花を育てた，と要約できます。船は擬人化され，語り手の感情が移入されています。

船が，誰も乗ってくれないことを悲しんでいるという部分から Sep/Los [Sep] がチェックされ，腐り果ててしまうという部分から，Neg-F [S-des] がチェックされます。きれいな花を咲かせて，見る人を楽しませたという部分は Prov/Ser [Prov] および Pos-F [S-pre] に相当させます。

誰も乗ってくれないための船の悲しみは，語り手の，親しんでくれる人がいない悲しさ，寂しさをあらわしているのでしょう。

木製の船であるがゆえに腐ってきたという部分は，カード 15 での，甦った死者の身体の腐敗を思い起こさせます。腐敗のイメージは語り手の身体像と関係あるかもしれません。しかし腐敗は否定的意味ばかりでなく，良きものを育てるといった肯定的意味をもっているようです。最後の部分は，語り手の自己犠牲的，愛他的なところを示唆しています。

カード 16 の物語 [1'01" - 2'51"]

雪が降っていて.....ひとりの貧乏な女の子が、手袋を売りに街に出るんだけど、1枚も売れないで、その女の子はまた家に戻ってくるんだけど.....そこで、その冬を越すお金がなくて、ものすごく、一家心中するしかないところまでいったんだけど、諦めないでその女の子が手袋を売りに出したら、ある人が、その手袋を全部買ってきて、その冬を過ごすお金ができて、幸せに暮らしているんだけど、その女の子は、手袋を買ってくれた人に、お礼をしに行くと、その人は面白いお金持ちで、その女の子は、その、お金持ちの家に働きに出て、で.....それから、働きを得たからお金をもらえて、その女の子の家は、それでも貧しかったけれど、幸せに暮らすことができるようになった。お疲れ様でした。あーはい。

\*

要約：“ある貧乏な家の女の子が手袋を売りに街に出るが1枚も売れず (Sep/Los [Sep. Los]), 一家心中を考えるとところまでいったが、女の子は諦めず、手袋を売りに出た。ある人が手袋を全部買ってきて (Spo/Sav [Spo. Sav]), 冬を越すお金ができた。女の子は手袋を買ってくれた人の家にお礼に行き、その金持ちの家に雇われて働くことになり (Uni), 一家は幸せに暮らすことができた (Pos-F [S-pre]).”

\*

手袋が1つも売れないという不幸にあった少女が、ある人に手袋全部を買ってもらい、幸せに暮らしたという、関係相の Sep/Los [Sep] から関係相の Spo/Sav [Sup] に移行する、お決まりのパターンの物語です。

少女が、手袋を買ってくれた人にお礼に行くという部分は、カード 18GF での忘恩への言及を思い起こさせます。律儀さや忠誠心の高い価値づけが窺われます。

2 まとめの表

形式面のチェック表 (事例 B)

	特 徴	カード番号	計
1	教示の確認をたびたび行う	-	0
2	絵を見ての個人的印象や感情を表現する	-	0
3	絵に描かれているものを列挙したり、純客観的に記述したりする	-	0
4	絵のなかの人物についての性格描写や評価・批判をする	-	0
5	絵から連想される自分の過去や既存の小説や映画の内容について語る	-	0
6	1つの絵に対し、2つ以上の絵解きの可能性を示すが、どれも十分に展開させない	-	0
7	時間制限はないが、初発時間や反応時間が並外れて長い	4	1
8	自発的に物語を作り上げるのが困難で、検査者の質疑などの助けを借りなければならない	-	0
9	物語が適度の詳しさと具体性を備えておらず、観念的・抽象的で内容がわかりにくい	-	0
10	不必要なディテールがあったり、繰り返しがあったりして、物語が長たらしく、まとまりがない	-	0
11	笑いが多い	-	0
12	「.....ではないですね」とはじめてから否定形で語る	-	0
13	物語のどの部分が絵と対応するのかわかりにくい	4, 5, 6GF, 9GF, 10	5
14	人物への感情移入が乏しい	-	0
15	場所、時代、時間などへの言及が多い	-	0
16	絵を絵画 (写真) 作品とする	-	0
17	人物に名前をつける	-	0
18	会話体や独白体で演技的に物語作りを進める	-	0
19	[その他] 物語の恣意的な展開	1, 3BM, 4	3

関係相のチェック表 (事例B)

関係相のカテゴリー		当該の関係相が含まれる物語のカード番号	合計		
Expl	vs. Pas-F	12F, 19	2	4	21
		3BM, 5	2		
	Expo	4, 5, 8GF, 8BM, 12F, 13MF, 14, 15, 18GF, 19, 20, 12BG	12	17	
	vs. Conc	5, 13MF, 18GF, 19 <sup>*2</sup>	5		
Con/Coer	vs. Ask/Req	9GF, 11, 12F, 19	4	4	8
		-	0		
	Dec	-	0	0	
	vs. Gui	-	0		
Spo/Sav	Prov/Ser	6GF, 10, 11, 15, 17GF, 18GF, 19, 16	8	11	20
		10, 11, 12BG	3		
	vs. Harm	8BM, 9GF, 12F, 13MF, 17GF, 18GF, 19	7	9	
	vs. Dep	1, 8GF	2		
Like	vs. Hos/Disg	10	1	6	7
		3BM, 6GF, 8GF, 14, 18GF	5		
	Love	9GF	1	1	
	vs. LoL	-	0		
Uni	vs. Sep/Los	6GF, 9GF <sup>*2</sup> , 10, 17GF, 20, 16	7	13	20
		1, 3BM, 5, 6GF <sup>*2</sup> , 7GF, 8GF, 9GF, 10, 18GF, 20, 12BG, 16	13		
Pos-F	vs. Neg-F	3BM, 4, 8GF, 8BM, 10, 11, 12F, 13MF, 14, 17GF, 19, 12BG, 16	13	10	23
		1, 3BM, 5, 9GF, 10, 14, 15, 17GF, 20, 12BG	10		
		2, 4, 7GF			3

分析・解釈シート

(被検者：Bさん 性別：女性 年齢：14歳 職業：中学生)

絵 NO.	分析 (物語の形式的・内容的特徴)	解釈 (物語の特徴が意味するもの)
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>最初の主題と無関係で恣意的な展開。皆の期待に背く</li> <li>不自然さ、不合理さが目立つ</li> <li>バイオリンの上手な先生に習いたい</li> <li>破滅的結末</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他者との疎通性、共感性の大きな障害</li> <li>状況全体を明確にイメージする力が乏しい</li> <li>精神的な指導者不在とその希求</li> <li>自暴自棄的になる傾向</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>完全な反応失敗</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>要求水準の高すぎ？ 家族内葛藤の回避？</li> </ul>
3BM	<ul style="list-style-type: none"> <li>“問題の夫の下での妻の苦しみ”</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>不幸な結婚を嘆く母親を間近に見てきた。母親との過剰な同一化。母親を批判的にみて、母親への同調を保留することがない</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>長い初発時間</li> <li>絵解きのどの部分が絵と対応するのかわかりにくい</li> <li>無力な男性を女性が支えていると見ている？</li> <li>兄妹という関係設定</li> <li>サーカス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>心のなかの男性像はくじけやすい弱い存在</li> <li>異性愛排除の欲求？ “親不在の境遇での子どもたち同士のがんばり” が、語り手にとっての支配的テーマ？</li> <li>自己顕示欲求</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵と物語の対応が自明ではない</li> <li>驚愕する人物 = 家政婦への強い同一化</li> <li>警察に知らせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの人がもつ母親的人物の覗かれるという感じをもたない 母体験の乏しさ。現実の母親から、非情な主人に仕える召使的な存在というイメージを形成した</li> <li>暴露欲求とそれに対する罪悪感</li> </ul>
6GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵と物語の対応が不明</li> <li>絵は夫婦の言い争いの場面？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在の生活への注意の不足。現実適応の姿勢の弱さ</li> <li>気の強い女性像が優勢</li> </ul>



絵 NO.	分析 (物語の形式的・内容的特徴)	解釈 (物語の特徴が意味するもの)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家を飛び出し、戻らない</li> <li>・芝居見物 cf.4 (サーカス)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ “見る” 欲求が強い</li> </ul>
7GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・類を見ない絵解き</li> <li>・母と娘は「しゃべっている」だけ</li> <li>・母娘は一心同体であるかのよう</li> <li>・赤ん坊を手放した。双方気づかない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一般的な母娘関係のイメージないし概念がしっかり形成されていない</li> <li>・母親への同一化は異様に強く、母親と融合し、自己の独立性を獲得していない</li> <li>・無意識的な敵意。共犯関係</li> </ul>
8GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人物は画家</li> <li>・世間に知れ渡る cf.4</li> <li>・家を出て行く cf.6GF</li> <li>・男性画家のライバル視</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ “見る人” としての語り手</li> <li>・ 顕示欲求</li> <li>・ 気の強い女性</li> <li>・ 同胞抗争</li> </ul>
8BM	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵と物語の対応が、これまでよりはわかりやすい</li> <li>・ “切る” 側への強い同一化と手術であること</li> <li>・成功の物語</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・攻撃性に対して抑圧的でなく受容的。ただし受容に困難があった</li> <li>・自己向上欲や顕示欲が強い</li> </ul>
9GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵と物語の対応がわかりにくい</li> <li>・姉が妹を殺す：過激すぎる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の生活への注意が弱い</li> <li>・激しい同胞抗争。同胞に向けられた強い憎しみ</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・貧乏な暮らし</li> <li>・母親の死の導入</li> <li>・引き取ってくれた人と旅に出る：別の親代わりの大人の出現 cf.1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・貧乏に象徴されるものに苦しんできた</li> <li>・密着した関係にあった親からの自立の必要を感じている</li> <li>・家出願望</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まえの物語を受けている？</li> <li>・試練を乗り越えていく</li> <li>・旅人はこちら側にいる。竜は完全に擬人化されている：象徴的な内容</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親離れに希望がもてる</li> <li>・観念性の強さと現実遊離的傾向</li> </ul>
12F	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平凡な絵解き</li> <li>・魔女がとりついて不幸が起こる</li> <li>・ 「見破る」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・悪は外在的。自己内部の悪は自覚されず、外にあるとする。十分内省的でない</li> <li>・暴露の欲求</li> </ul>
13MF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容が乏しい</li> <li>・男性への強い同一化</li> <li>・犯行はばれるが、捕まらない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・弱い無力な男性像と同情心</li> <li>・暴露の欲求と不安</li> </ul>
14	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空を飛びたい</li> <li>・決行し、死ぬ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現実逃避願望</li> <li>・自殺願望</li> </ul>
15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・死者の身体的変化への言及</li> <li>・ 「悪さを続けて」 きた人物への強い同一化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体へのこだわり。身体は精神を拘束する何かと感じられている</li> <li>・強い怨念を抱いているが、身体的制約を感じている</li> </ul>
17GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人物は男性で、女性に助けられる</li> <li>・自殺がテーマになっている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・性的同一性の問題。自らと反対の性である男性への親近性と同一化傾向</li> <li>・自殺願望。ただし明るい見通し</li> </ul>
18GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わが子の死が信じられず、手放せない</li> <li>・死者の甦り：cf.15</li> <li>・母親の妖精に対する忘恩と妖精の怒りと報復</li> <li>・母と息子</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・母親との一体性と母親からの離脱に伴うアンビヴァレントな気持ち</li> <li>・女性たちの浅はかさと短絡的行為。同性嫌悪的</li> <li>・男性同一化</li> </ul>
19	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人々が海に放り出される</li> <li>・男の子が女の子として育てられる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・守られ方が弱く安心感をもちにくい</li> <li>・性的同一性に関する深い疑い。男性願望</li> </ul>

絵 NO.	分析 (物語の形式的・内容的特徴)	解釈 (物語の特徴が意味するもの)
20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水かさが増してきて待つ</li> <li>・橋の下という認知はまれ。水死またはその可能性への言及は4度目</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忠誠心の過度の強調。信頼を裏切られる経験を多くしてきた</li> <li>・水死のもつ象徴的意味</li> </ul>
12BG	<ul style="list-style-type: none"> <li>・船の擬人化：船への同一化</li> <li>・船の腐敗：15での死体の腐敗を連想させる</li> <li>・「木の気持ちは……」という最後の部分</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神的な指導者や親しんでくれる人がいない悲しさ、寂しさ</li> <li>・腐敗のイメージは身体像と関係あるかも。しかし、良きものを育てるといった肯定的意味をももつ</li> <li>・自己犠牲的、愛他的</li> </ul>
16	<ul style="list-style-type: none"> <li>・借り物のようだが、語り手に親しい空想のよう</li> </ul>	

### 3 総合所見

まず、Bさんの作った物語の形式面の特徴を見ていきましょう。Bさんは、一部の絵を除き、さほど困難を感じることもなく、自発的に物語を作っています。具体性も欠けてはいません。後述するようにむしろ具体的すぎるといえる場合もあります。これらのことから、Bさんの心的機能の粗大な障害はないといえます。しかし1つの絵(カード2)では、物語作りに失敗し、他の絵(カード4)では、初発時間が非常に長くなっています。これは、Bさんには、なんらかの適応上の弱点があることを示しています。言い換えれば、なにかコンプレックスがあって、それを刺激するようなものがあると、多かれ少なかれ混乱してしまうということです。

形式面により深く立ち入ると、まず、かなり多くのカードで、物語のどの部分が絵と対応しているのかわかりにくいことが目立ちます。次に、絵の場面の解釈は典型的なものである場合にも、物語の展開が、自然に予想されるものとは逸脱し、かなり突飛なものになりがちであることが注目されます。これら2点は相互に関連していると思われる。一般的に、語り手の注意は絵が表す場面の理解に集中し、そのみに終始する場合も少なくないのですが、Bさんは、そうした一般の傾向と異なり、絵に留まることが少なく、物語のヒントを得たら、すぐ絵から離れてしまうようなのです。絵から自然に期待されるのとは異なった展開をもった物語となることも、それゆえだと思われるのです。こうしたことは、現実適応上の問題を示唆しています。現実の今現在の状況に十分にかかわることなく、それから遊離し、観念が支配するからです。現実感覚の弱さと強い観念性を指摘しておきます。観念性は、Bさんの物語が、Bさんのまったくの独創ではなく、彼女がどこから仕入れたものに依拠していると感じられることが少なくないことにも示唆されています。

さて、物語の内容面に移ります。

物語の内容から浮かび上がってくるのは、Bさんの、他者とのかわりの主要な軸というより、その形成の基盤となる家庭生活の問題です。大雑把に言うと、Bさんの父母は幸せな結婚をしていません。Bさんは、夫との問題で苦しむ母親を見慣れていたようです。そういう母親と一体化しているBさんの像が強く浮かび上がってきます。そして、それがBさんの主要な問題となっているようなのです。

母親と一体化しているといっても、Bさんが母親を理想化して、そういう母親と強く同一化しているというわけではありません。母親は、感情的に激しく、自己中心的で、人への優しさに欠ける人のように推測されます。そういう、安心感を与えてくれる母親との同一化というより、むしろ母親自身不安で、母親の方からBさんにしがみつき、離さないという図が想像されます。だから、Bさんは、母親と強く一体化している一方、自分の独立性を奪う母親を憎んでいると推測されます。空想のなかで、母親殺しと家出を決行しているようです(カード10)。

他方父親はどうかというと、父親もBさんにとって精神的な支えになるような人ではなく、むしろ人から支えられなければならない人のようです。要するに、Bさんは、守り、支え、方向づけてくれる存在を家庭のなかに見出せなかったのです。親なしで生きていく辛さは相当なもので、Bさんの心底には、現実から逃れたい、死にたいという強い願望が存在するようです。水死に対するある種のこだわりが推測されますが、その意味は不明です。

しかしBさんは、どちらかという父親寄り、女性より男性を同一化の対象としているようです。Bさんの、性的同一性の問題は、カード19での、男の子が女の子として育てられるという物語にはっきり現れています。

Bさんの物語からは、Bさんの暴露をめぐる欲求や不安が感じ取れますが、大人（主に父母）の欺瞞や汚さを見ざるをえなかった経験や、そういう大人たちに対して自己を隠すという習性的態度が反映しているのでしょう。しかしBさんは自分を隠蔽するという消極的な演技だけでなく、自分を良く見せたいという積極的な顕示欲求をもっているようです。

Bさんの攻撃的欲求はかなり強く、希死念慮という形で自分に向けられるだけでなく、怨念という形で外に向けられてもいます。親に向けられるだけでなく、同胞にもかなり激しい形で向けられているのではないかと推測されます。

Bさんが、思春期やせ症の少女であることを思うと、興味深いのですが、Bさんには身体へのある種のとらわれが見て取れます。身体はBさんにとって、自己の制約となるものとしてあるようです。もし朽ち果てる身体がなかったら、どんなにいいかという思いもあるかもしれません（カード14, 15）。身体を捨て去ろうという願望を、自己の身体は他者の恵みにもなってくれるだろうという空想で、正当化しようとしているところもあります（カード12BG）

## 第12章 事例C

本章では、事例C（女性・20歳・大学生）におけるTAT反応を検討していきます。Cさんは、日常生活への適応においては顕著な問題が見あたらないため、神経症圏の人物と判断されます。また、Cさんは、フェニルケトン尿症の治療を受けており、17歳時のウェクスラー式知能検査の値は、FIQ・VIQ・PIQのいずれも100を上回っていました。<sup>[註1]</sup>

### 1 カードごとの検討

#### カード1の物語 [24" - 3'06"]

これ、あの白いのは何ですか。 どう見てもらってもいいですよ。 この子はもともと、何かこの子の境遇は何か.....バイオリンか何かやっててー、で、まあ、バイオリン見ながら、何か考え事してるみたいなの、何ていったらいいのかなー.....何か、将来バイオリンになるのかー、バイオリニストになるのか、それともこのまま、やめようかー、それとも、あーそれか、もうバイオリンなんかやめたいかどうしようか、なんて悩んでるか、そのどっちかにみえます。まあ、将来のことについていろいろ考えてるっていうかそういう.....ま、以前、の場面でいうとやっぱ、バイオリンか何かを先生について習っていたらしいですね。 これからはどうなるんですかね。 だから、ふた通りで.....この子に聞いてみないと分からないけれどーま、ひとつは、バイオリニストになりたいって、バイオリン眺めながら、ずっと自分でバイオリニストになった姿を想像しているかー。それとも、あんまり進まなくて、練習とかうまくいなくて、やめようかどうしようか悩んでる.....どっちかだと.....で、バイオリンなんかやめちゃって、別のほうに進もうかどうしようかって悩んでるとこですね。 だから将来、もしやめたとしたら、どっか他の業種とか、どっかほかに勤めるだろうって。 いいですか。 はい。

★

上の物語を要約し、同時にそれに認められる関係相の記号を括弧にくくって示してゆきます。

要約：“これまでバイオリンを先生について習ってきた（Gui）子が、バイオリニストになった将来の自分の姿を想像しているところ（Expo [Exp]）か、習うのをやめようかと悩んでいるところ。”

★

形式面では、言葉数が多いわりに、内容が乏しい感じです。これだけの内容を、かなり散漫に語っているわけです（形式面のチェックリストの9に記入）。しかも2つの解釈可能性を提示し、どちらにするか最後まで決めていませんね（形式面のチェック表の6に相当）。これらのことは、語り手が、現実生活において、自己の言動に責任をもって、ものごとに対処し、決断していく姿勢の弱さを示しているでしょう。「この子に聞いてみないとわからない」ということばは、それをとくによく表しています。このように、結末を絵の人物自身の考えに委ねることは、ときどき見られます。

あいまいな物語なので関係相はチェックしにくいですが、先生について習っていたという部分から Gui [Gui.

p] に登録し、自分がバイオリニストになった姿を想像しているという部分から Expo [Exh. p] に登録してもよいでしょう。

カード2の物語 [11" - 2'12"]

一番手前の女の人何か、まだ20歳ぐらいの学生の人で、ちょっと本持ってるから、で、この人の出身が、何か小さな農家みたいな感じで。で、この、この女の人はい今の農家の状況みたいなのをあんまり良く思っていない感じで。で、状況を良く思っていないもんだから、どっかの、まー、たとえばこの日本でいったら、地方の田舎で。で、東京行って勉強するみたい。で、こっから将来、この村をどうしていこうかって考えてる。……これからはどうなりますかね。たぶんねー、この人は、まあ勝手な想像だけどー、たぶん、まあ、とにかくね、町の農家に限らないけれど、町の行政か何かでー農村の状況なんかを改善していこうっていうそういう、改善していくかもしれない。……そういう仕事に就く。うん。あとは？ それくらい。この人たちは、女の人とつながりはありますか。まあー、ふた通りで、身内で関係があるか、近所の人かどっちかですね。どっち？ まあ、そのへんの人々かな……村人とか。

\*

要約：“農家出身の20歳ぐらいの女性が、農家の状況を良く思っておらず、それを改善する (Spo/Sav [Spo. Sav]) ために東京に行って勉強するみたい (Expo [Exp])。 (行政的に改善してゆく (Gui)。背景の男女は身内か近所の人 ( [Neut]))”

\*

手前の女性が都会に出て勉強するとされています。これ自体はよくあることですが、女性の動機が目立ちます。ふつうは、単純に農業するよりは学問したいという個人的動機が考えられているのですが、本例では、農村の状況改善という社会的目的が問題となっています。しかも都会で勉強してきて、町の行政に携わって農村の状況を改善するらしいので、関係相をチェックするなら、Gui [Gui. p] に相当させるのがふさわしく思われます。しかし Spo/Sav [Sup] にも括弧つきで登録しておきます。若い女性にしては、珍しい解釈だと言ってよいでしょう。語り手の社会問題への関心の高さを推測できます。ただ、これが、より身近な人間関係への関心の薄さと対になっていることも考えられます。その根拠は、語り手が、自発的には、背景の男女を手前の人物と関係づけなかったということです。多くの場合、背景の男女は、手前の女性の向学心に対して抵抗として立ち塞がるものですが、本例では、彼らは風景の一部にすぎないかのように、個別に扱われていません。語り手が、問われて、彼らを「そのへんの人々」にするとするところにも、それはうかがわれます。関係相のチェック表の [ N-R] としてチェックしておく必要があります。

カード3BMの物語 [7" - 2'28"]

あの、これベットか何かですか。どんなふうに見てもいいですよ。これ、前後関係つなげるのちょっと難しいな。まあ、漠然とは思うんだけど、ただ、何か悩みごとがあって、今、考えてる最中というふうに見えるけど、悩んでると両方ね。だから、もうやだーっていう感情と、これからどうしようっていう、そういうふうに。……

何かやなことがあったのかなー。えー、以前にね、以前そういうやなことがあって、今、こういう状態になっていて、どうしようっていう。こっから先はねー、ただ、この人の考え次第だっていう。考え次第。まあ、想像するんだったら、まあ、いつまでもこういう状態続かないだろうなっていう、何か行動起こすんじゃないかな。

何か行動起こす。以前、悩んだことで……たぶん解決策だと思います。解決策。えー、で、解決のための行動。たとえば？ この人に起こったことの行動だからね、たとえば、身内がどうしたとかで、そのあとでまあ自分がどう出ようか。どう出ようか。どういう態度をとったらいいのか。……その解決のための行動をするってことですか。はい。

\*

要約：“何か悩みごとがあって、やだーという感情 (に支配されている) のとこれからどうしようと考えているのと両方 (の内面)。 (解決のための行動を起こす。身内の行動にどういう態度をとったらいいのか考えて。)”

チェック表の関係相に相当するものはありません。

\*

要約するのがむずかしいほど、はっきりしない内容の絵解きなので、やはり形式面のチェックリストの6と9<sup>[註2]</sup>に記入しておきます。

人物は何かいやなことがあって悩んでいるようですが、いやなことは具体的にはされていません。ただ身内の間で起こったことらしいことがほのめかされているだけです。解決のための行動への言及はありますが、当然具体的にはなりえません。関係相は、やはり [ N-R ] とするしかありません。具体的な表象力の弱さ、観念論者的なところが推察されます。

ここでも2つの解釈可能性が示されていますが、前の物語と同様、あるいはいっそう2つの違いは微妙です。語り手は、もういやだという感情とこれからどうしようという考えとを分けて、別個にあつっていますが、これらは、同一人物の同一の瞬間に同居しうるものであると思われまます。したがって、語り手の心についての単純な考え方、割切り方を推測しておきます。また、「この人の考え次第」と言っていることには、やはり、自己の判断に責任を取るのを避ける傾向が見て取れます。

カード4の物語 [13" - 2'54"]

何かたぶんこの2人は夫婦で、何か意見出して、行動とろうとしてるときに、夫が、で、妻がちょっとその考えに反対で、何とか説得してその考えを改めさせるっていうか、ちょっと待ってとか、そんなふう言ってるような、言ってるようにみえる。奥さんのほうが言ってるんですか。えー、何か説得して考え改めさせるっていうか、夫の方に……で、こっから先はどうなるのかな……どっちかな……まあちょっと、それどうしようかっていうか、あの言ってる内容にもよるんだけど、どうしようかな。まず、夫は行動に出るかな、もちろん聞かずに。で、後で奥さんの方が、夫の行動とか様子を観察してて、で、その動きに合わせて、同調したり、意見を言ったり、そういう行動に発展していくんじゃないかと思えます。意見で、具体的にありますか。意見の内容ですか。あんまり細かいけど、何か事件があって、それが何かただならぬ事情っていうか、家庭には直接関係ないんだけど、この人の働いてる人の所で何かあって、それについて奥さんが補助っていうか、アドバイスしている、感じ。あとあんまり。…… いいですか。はい。

\*

要約：“夫が行動を起こそうとしているのを妻が夫の考えを改めさせようと説得している。夫は行動に出るが、妻は夫の行動や様子に合わせて同調したり、意見を言ったりしてゆく (Gui)。 (夫の働いているところで何か事件が起こった)”

\*

男の意志に対し女が対抗しているところという、絵の基本的な解釈は一般的なものですが、具体性は乏しいですね (形式面のチェック表の9に記入<sup>[註2]</sup>)。どんな事件が起こって、男がどんな行動に出ようとするのを、女がどんな気持ちから止めているのか、さっぱりわかりません。この絵は映画の一場面に見られやすいところがあり、それゆえに、男と女の典型的な場面、たとえば、男が争いに行くのを、女が男の身を案じて止めている、とか、男が別の女に気を移し、女のもとを去ろうとするのを、女が男にすがって止めている、とかとされることが多いのですが、本例では、事情が違います。本例は、上述の諸点については不明なままにされていますが、夫の行動に対する妻の対処の仕方は「観察してて、で、その動きに合わせて、同調したり、意見を言ったり」云々と、わりと詳しく述べられています。したがって関係相は、Gui [Gui. p] とチェックされます。妻の行動についてはかなり詳しく表象しているのですから、語り手を、いい加減で大雑把な人であるとすますわけにはゆきません。むしろ彼女は、知的に正確であろうとしすぎるのではないかと思われまます。先述の2つの解釈可能性の間での迷いも、そのためではないかという見方ができます。ただ知的分析的志向は、対象によって柔軟性をもたせられる必要があるのに、わが語り手はその点で、やや硬いと言わざるをえないのかもしれないかもしれません。物語作りという作業全般においても、あまり客観的、正確であろうとしすぎると、典型的な事態で済ませることができず、その結果物語の具体性は失われることになります。

## カード5の物語 [7" - 2'10"]

何かこれ……この女の人の方がもうおばあさんみたいで、孫もちのような。で、まあ自分の子どもは人の親になっていて、そんな境遇で。で、何かもう、今まで家にいたんだけど、子どもとか孫とか、親だとか、ちゃう、自分の子と孫がいたんだけど、何かある日覗いてみたらいなくなっちゃったっていう。その前に、何か家を出てく、出ていかないの話で、何かやりとりがあったみたいなんだけど、結局はもう出て行っちゃったっていう、そんな状態です。何かこう、こんなに部屋も花なんか飾ってあってきれいになっちゃって、もう誰もいなくなっちゃったっていう。それでこのおばあさんはちょっと、ああ、行っちゃったのかって感じで。この後はどんなんだろうな、まあ、このおばあさんはまた後で、やりとり、おばあさんの方からね……ちょっとこれは古いかな、時代が古いかな、まあ、誰かを通してりとかしてね、おじだとかおばだとか、自分の夫とかを通して、何か状況を見たり聞いたりして、知ってて、で、まあ、聞いて知ってて、普通に生活してるか、直接、自分の子どもや孫に会いに行ったりだとか、そういう行動をとるだろうと思う。

\*

要約：“ある日おばあさんの子どもと孫が家を出て行ってしまった。出てゆく、出てゆかないのやりとりがあったが、とうとう出ていき、誰もいなくなってしまうかという感じ (Sep/Los [Sep. Los])。誰かを通して子どもや孫の状況を知って (Expl [Sk. Sk])、彼らに会いに行く (Uni)。”

\*

この絵解きのもっとも特異な点は、部屋主の一時の不在でなく、永久的な不在を述べていることであり、他の特徴点は、人物を孫もちの老いた祖母にしていること、および部屋の主は1人だけではないらしいことです。語り手のこれまでの絵解きに比べるとずいぶん具体的である、いや、部屋主が出て行くまでの経緯への言及など、やけに具体的であるという感じをうけます。それで、語り手の個人的な何かかが投入されていることを思わせます。関係相をチェックするなら明らかに Sep/Los [Sep] に相当します。身内の問題はすでに 3BM でも示唆されていましたが、ここで問題の性質がより明確にされているとみなせます。それはそれとして重要な知見だとしても、TATの分析・解釈としては、個人的なもののストレートな反映自体の意味を考える必要があります。それは、率直さであるとともに、いわゆる防衛の弱さを意味していると筆者は解します。

## カード6GFの物語 [4" - 2'30"]

何かこの男の人は借金取り……で、あんまりいい役じゃないような気がするけど (笑)。何かの訪問客みたいですね、この男の人がね。で、誰かの夫人みたいな気がするんですね、この女の人。で、この人、夫じゃないんだよね、男性のほうが。とにかく外来者って感じで、で、何かこの女性の方のね、身内か何か、それか女性自身のこと、何か割り込んできたっていう感じ。あんまりいい役じゃないんだね。借金取りとかそういう類の感じに見えるんですね。何かあんまり、この女の人にとって、よからぬ、あんまりよくない話、聞かされるっていう。で、今この時点では、今、どうしようかって言い返せないんだけど、この女の人。で、この人の身内がね、夫とか友達とか、自分の両親とか、それに関わってるかな、として、まあ、未亡人でもいいかな、未亡人でもいいけども、まあ、後でどうにかするっていうか、今、この人から話を聞いているんだけど、今ここではあんまり派手なことやらないですね、女の人。で、一応ちょちょっと何かやりとりやって、で、この人結果的にはね、この場では一旦引き上げるんだけど、また後でどっかで一芝居ありそうだっていう。そんな感じです。この場はこれで。ええ、で、別の日に、別の場所で何かありそうだって感じ。まあ、そんな感じかな。

\*

要約：“借金取りの類 (Dep) の男性が、女性の身内が彼女自身のことと割り込んできて、よくない話をきかされている (追及の趣があるので Expl [Sk. Sk])。ここでは言い返せず、話をきくだけに終わるが、あとで何か一芝居ありそう。”

\*

やはり具体性に欠けます (形式面のチェック表の9に記入<sup>[註2]</sup>) が、女性が一種の搾取に遭っているという解釈です。男性が女性の秘密を握っていて、その弱みにつけ込んで金を脅し取るという絵解きがときどき生じますが、それと同類のものですね。関係相は、Depとしてチェックされます。これのもっとも単純な解釈は、語り手が男

性に搾取者のイメージをもっているということです。そこからさらに、そういう男性に同一化する語り手は自身、搾取する - 搾取されるという軸で人間関係を見がちであるという解釈が生じます。この仮説は、これ以降のカードで確認されたり、退けられたりする可能性があります。それはともかく、語り手は、年配の男性、あるいは男性一般に対し、ふつうの親しい関係やエロ的な関係を想像しにくいのかもかもしれません。

カード 7GF の物語 [7" - 2'25"]

何か、これ中年のおばさんかな、おばさんか何かお手伝いさんかにみえるんだけども。で、これはね、雇っている家庭の娘さんって感じするんですね、女の子が。で、本読んで聞かせてみたいんだけど、何か女の子があまり興味ないっていうかそんな感じで。で、これは、ちょっとあんまりあれだね、何か教育でもさせられてるのかな。教育？ ええ、この女の子をね。将来何か責任のあるようなすごいことやるための教育受けてみたいんだけど。この女の子自身はその気がないっていうか、やだっていうかね。要するにそのへんの普通の女の子でいたいっていうか。だから、この女の子はお守りしてるみたいだけど.....本物の赤ちゃんかな、これ、抱いてるの.....何かこの女の子は別のことを考えてるんですね。あの周囲とはぜんぜん違うことを考えていて、で、どうせ、同じことをやるにしても、もっと別の方向行きたいなって考えてるんですね。この女の子は、ちょっと話が飛躍しちゃうんだけど、だいぶ時間が経ってもうこの子が成人くらいになって、もう周囲から見れば期待を裏切られたって感じになって、もう別の道歩んじやうっていうか、そういったところです。周りはそうでもない。周りはたとえば、大学教授にさせたいとかね。させたいんだけども、女の子としては、もっと別の職業に就きたいとかね。モデルさんとかそんなのに.....そんな感じ。

\*

要約：“雇われたお手伝いの女性と雇い主の娘で、娘は、将来何か責任のあるすごいことをさせるための——大学教授にさせるための——教育をうけている (Con/Coer [Cont. Coer], Gui) が、娘本人はその気がなく、普通の女の子でいたい。将来別の道を歩む、モデルになる (Expo [Exp]) とか。”

多言を費やしている割には内容の乏しい物語です。やはり形式面のチェック表の 10 に記入します。

\*

女の子が、教育が目的で、雇われた女性に本を読み聞かせられているが、それに興味がなく、しっかり聞いていない、という場面解釈です。この限りでは、ごくふつうの絵解きです。関係相は、Gui [Gui. p] としてチェックされます。しかし、「責任のあるようなすごいことをやるための教育」というあたりから、あれ、ふつうでないな、という感じがしだし、終わりの部分の「大学教授にさせたいとかね」以下で、それが確認されます。これは親の意思でしょうね。したがって関係相の Con/Coer [Cont. p] をチェックしておくべきでしょう。そのような意思で教育がなされることはあるでしょうし、それが特別に問題であるというわけでもありませんが、この絵の絵解きではまず語られることはないことなので、その意味を考えてみるだけのことはあります。少女に将来の大学教授の役割が期待されることが語り手には違和感を与えないということは、それが、少女に同一化している語り手が親しんでいる空想内容を表わしているか、実際に親から期待されていることを意味しているでしょう。いずれにせよ、語り手は知的に優越しているという意識や欲求を抱いていると思われる。

しかし最後に少女は、周囲の期待を裏切ってモデルになるかもしれないという部分は、知的なものより美的なもの追求を選ぶ可能性を示唆しています。モデルは自分の美しさや個性を他者の目にさらすものであり、関係相 Expo [Exh. p] に記入しておきます (とはいえ、物語の最後にほんの少し表出されたただけなのですが)。

カード 8GF の物語 [8" - 1'25"]

何か物思いに耽ってるのかな、この人が。何かこの人の境遇っていうかね、何か、すごい何かあの、別に平穩無事に暮らしてるって感じで。もうだいぶ何か平穩な日々を送ってるって感じがするんですね。で、悩みもあんまりなさそうだね..... (笑) 何か.....で、何かね、前の時間も後の時間も平穩で大して変わらなくて。で、生活の中の 1 コマって感じがするんですね。物思いにふけってるって感じで.....そのくらいかな。平穩、何の変わりもなくって感じで、だからいつも通りね、ごく普通にね、こう、これから日が暮れて夕方になれば、普通に食事作ったりす

るだろうし、夜になったら寝て、明日朝起きたら食事の仕度してって感じで、平々凡々の暮らししてって感じで  
すね。これから。 かもしれませんね。

\*

要約：“平穩無事に暮らしている女性が物思いに耽っている。夕方になれば食事を作り、夜には寝て、翌朝には食  
事を作るといった平々凡々の暮らし。”

\*

チェック表の関係相に相当するものではありません。

はじめ「境遇」とか「すごい」とかのことが出てきたので、日常性の枠を越えた話が展開するのと思った  
ら、平凡な暮らしをしている女性の描写で、拍子抜けするような感じがします。ここでの「すごい」は、平穩さの強調  
なのです。平穩、平穩無事、平々凡々といったことばの積み重ねもそれを表しています。この絵から、日々の生  
活の合間のもの思いが連想されることはまれではありません。むしろそれが普通のことですが、なんということの  
ない日常生活をふつうに描写しているのと、平穩さを強調するのは、意味が違っても言えます。後者は、平穩さ  
を希求していること、あるいは平穩でないことの期待を示唆している可能性があります。この語り手の場合には、  
今のところでは、どちらか判断がつかねます。

なお画外の人物の導入もなく、関係相はチェックしえません。チェック表の [ N-R ] に記入します。

カード 9GF の物語 [37" - 3'08"]

ちょっと難しいな、これ。どうも手前の人がお手伝いさんみたい。召使っていうかそんな感じがする。で、向こ  
う側の、左側の人、何かあの雇いの人。雇いの家族の中の1人って感じで。で、何か、自分の今までの境遇  
とかが嫌になったみたいで。で、何か逃げ出してるみたいに見えるね。んー。で、ウエイトレスじゃないわ、召  
使のうちの1人が、まだ他にもたくさんいるんだけどそのうちの1人がね、あの、ついてるって感じで、この  
雇いの家族の中の1人にね、もう同調して、行動を共にしてるって感じ。普段から仲良かったみたいでね、こ  
の2人。あの雇いとかね、雇い雇われの関係なんだけれど、もともと気が合うみたいで、たとえばこの人の年代か  
らすると結婚適齢期みたいなんだけれど、何かあの、そのやり方っていうか気に入らなくて、何か嫌な人と一緒  
にさせられそうとか、もう、結婚自体が嫌なのか、まあそんな感じで。で、もう飛び出しちゃった感じなのね。も  
うその家族からも離れたって感じで。で、以前にこの人と、この人が、召使の1人と話しやすかった感じで、  
そういうことをこの人に話してみたいで、この召使に。じゃ、もうそういうことだったら私も一緒についてきま  
しょうかということになって、で、一緒に脱走してるところかな、これは。じゃ、こっちも一緒に脱走して  
る？ そう一緒にね。で、こっから先どうなるんだろうね。何か、察するところ大自然みたいだから……これ結局、  
連れ戻されちゃうのかな、これは。もう結局見つかって、また家族に引き戻される。で、この人クビになっちゃう  
かなあと思う…… (笑)。まあ、そんな感じです。

\*

要約：“多くの召使を雇う家の女性が、家族の結婚のさせ方が気に食わず、家から逃げ出し (Con/Coer [Cont.  
Coer], Sep/Los [Sep. Los]), 事情を知らされていた1人の仲の良い (Like) 召使が、それに同調して付  
き添っている。結局見つかかり (Expo [Exp]), 連れ戻され、召使は首になる (Neg-F [S-des]).

\*

かなり長い物語ですが、まず関係相をチェックしていきましょう。

良家のお嬢さんが、結婚を強要されるなど、束縛の強い家庭から飛び出して行くところからは、  
Con/Coer [Cont. p] と Sep/Los [Sep] がチェックされ、お嬢さんと仲の良い召使が同調して付き従っている  
ところからは、Spo/Sav [Sup] と Uni がチェックされます。このようなチェックによっておのずから物語が  
要約された感じがします。

語り手自身が親の強い支配・統制を感じていることは、まず間違いありません。多くの場合、物語の中心にな  
るのは召使の方ですが、本例ではお嬢さんが中心人物であることも、語り手の彼女への強い同一化を感じさせ、強  
い統制からの脱出願望が語り手のものであることを確信させるのです。さて2人を雇う側と雇われる側とするこ  
ろに、身分によって人間関係を認識する傾向が窺えます。地位、身分に敏感であると言っても同じことです。



ところで、右の女性をお嬢さんの意向に同調し、従う腹心の召使とすることは、ある意味でお嬢さんが召使を自分の統制下においていることであり、語り手自身、相手を自分の意志で完全に縛る、ひとつ間違えば暴君になる支配欲の強い女性であるかもしれないという推測も可能です。

カード 10 の物語 [12" - 1'58"]

何か戦時中の時のことみたいですね。……何かこの境遇は戦時中みたいで。何らかの事情で、また、この2人夫婦なのね、で、ちょっとまあ、夫の方が別に徴兵じゃないんだけども、何らかの形でちょっと旅とか出なくちゃいけないくなって、そこの別れって感じがするんですね。別れの場面って感じで。何か兵隊に取られるのとちょっと違うんじゃないかと。でもまあ、戦場に行くわけじゃないんだけども、それでもあの、あんまりよくない、えらそうな所へ行くから、まあちょっと、奥さんの方がまあ夫の身を案じてるっていう感じで。……でね、一応、旅に出て夫の方は一応帰ってくるんだけども、でもちょっと怪我かなんかしてるんですね。で、もう、戦場じゃないけれども、何か流れ弾が当たったりなんかして。別に兵隊なわけじゃないんだけどね、あの、流れ弾に当たったりすることもあり得るから、たとえば軍医だとかね。傷ついて、ちょっと片腕ぐらいは失くすかな。それでもまた、まあ何とか戻って来れたっていう気がしますね。はい、あといいですか。ええ。

\*

要約：“戦時中に夫が旅に出るとい別れの場面 (Sep/Los [Sep. Los])。夫は兵隊にとられて戦場に行くわけではない。軍医で、流れ弾に当たって、片腕ぐらい失くす (Dep) かもしれないが、なんとか戻って来られた (Uni)。”

\*

夫婦が別れを惜んでいるところという、ごくふつうの場面解釈です。まず Sep/Los [Sep] がチェックされません。異性愛に対する不信や斜に構えた態度は窺われません。

読んでゆくうちに気づくのは、語り手が、夫は徴兵されるのではないこと、兵隊として戦場に行くわけではないことを強調していることです。あとの方で、軍医として出て行くということがほのめかされ、語り手は、夫が単なる一兵卒でないということを言おうとしたのだと了解されました。語り手が地位や身分を重視することの新たな証拠です。

夫についての「ちょっと片腕ぐらい失くすかな」という部分からは、関係相の Dep がチェックされますが、あまりにも無造作に発せられたことばという感じがして、奪うことや奪われることに関しての一種の鈍感さが推測されます。

カード 11 の物語 [20" - 2'32"]

ちょっとした暴動みたいですね……何か、何か、場所はあの、ある国のお城みたいで、で兵隊と民衆っていうか、民衆が衝突しているみたい……あの、農民の方が城の方へ押しかけて行って、門番の兵士がね、あの……何か阻止してるっていうか、そんな感じじゃないですかね、今。何か革命だとか訴えだとかね、そんな、何か文句言いに行くっていうかそんな感じで。で、結局……で何か想像なんだけれども、兵士のうちの1人が何かわりと話がわかる人がいて、で、その人に一度、ちょっと、最初のうちは他の兵士と農民がもみ合いになっているんだけど、あの、ここでちょっと余計だけど、言い忘れたけど、百姓とかね、もうたった1人みたいですね。1人？ 1人だけ、もう何か多分この人ね、今の情勢っていうか、生活が苦しいのを見かねて、文句言いに行っただけ……で1人で行ったもんだから、こんなふうにな数人の兵士ともみ合いになっちゃうんだけど、その兵士のなかの数人のうちの1人が、まあ、わりと話がわかる気前のいい人で、最初もみ合いなんだけど、そのうちなんだかんだあって、あるやりとりがあって、理由を聞くことになるんですね、その話のわかる兵士が。で、一応結果的には、一応その話を聞こうじゃないかっていうことになって、一応あの城を通すことになるわけですね。で、まあ、そっから先はどうなるかわからんけども……とにかくまあ、少なくとも王のところまでは行くんじゃないかと思えます。あといいですか。はい。

\*

要約：“ある国の農民が、生活の苦しさに城に押しかけ、門番の兵士が阻止している (Sep/Los [Sep. Los])。(こ

こで少し新たな限定が入る。) 農民がたった1人で文句を言いに行つて (Expo [Exp]), 数人の兵士ともみ合いになつたが (Harm), もののわかる兵士が1人いて, 話を聞いてくれることになり, 城に通され, 王のところまで行くことになつた(Uni)。”

\*

この絵の絵解きとしては非常に珍しいものです。どこが珍しいかという点, 大自然のなかの人間的な, あまりに人間的な争いの状況を語っている点です。わたしは, こうした場合, 語り手の人間関係についての過度の関心, ときにはパラノイア的と言えるに至るほどの他者の行動や態度の過度の意味づけを推測するのですが, 本例は, 争いの規模と性格, およびその描写の詳しさにおいて群を抜いています。

人間的世界が述べられているので, 関係相もチェックされえます。農民と兵士が争っていることから, Harmがチェックされます。農民の1人が掛け合いにゆくと, 話のわかる兵士が話を聞いてくれることになつたという部分は, Uniに相当させてよいでしょう。

争いは支配される者の支配する側に対する反乱です。カード9GFで明らかにされた, 彼女自身の親による統制に対する反発が込められていることは明らかです。話のわかる兵士が1人いたという部分も, カード9GFの物語との類似性を思わせます。しかしここでは, 親への反抗心が農民の反乱という大規模な形で表現されています。それにも意味があるはずですが, 語り手は観念性が強く, 個人的な問題が社会的問題にすりかわりがちであるといえるでしょう。

#### カード12Fの物語 [20" - 1'42"]

何か背後霊があるっていう感じですね。背後霊? このおばあさんの方がね。この人は実際に存在している人で, この後の人は幻覚っていう感じですね。幻覚? ええ, 幻覚で実際には存在しない亡霊みたいな……何かあの, この人自身, 一見, 善人面してるけれどもね, 何か行いがあの, よく, 行いが悪いもんだから, そのうちこうなるんじゃないかなっていうような。こっちの人みたいに。ええ, それかね, 何かあの, これまでのね, あの, 何ていうのかな, もう, 報いっていうのかな, これまでの報いで, この人に, この亡霊か何かに取り憑かれて, この後で何か, あの, よくないことが, 呪われたみたいになるんじゃないかっていう, そんな感じですね。もうそこまでですね, これは。

\*

要約: “この人(左)は善人面しているけど, 行いが悪いので, そのうちこの亡霊みたいになる (Expo [Exp])。

あるいは, もうこれまでの報いで, 亡霊に取り憑かれて (Con/Coer [Cont. Coer]), 呪われる, よくないことが起こる (Harm)。”

\*

少し一貫性に欠ける絵解きです。絵の老婆を他方の人物の背後霊とする場合には, たいして守護霊を見ているのですが, 本例ではそうではありません。それは, 左の人物の悪い面を具現化した存在です。しかし後半では, それは, そういう存在ではなく, 左の人の悪行を罰するために取り憑く霊に変わっています。一貫しているのは, 左の人物は, 善人面しているけれども, 本当は悪い人間であるということです。そこに“暴き”がみとめられますが, それは物語中の人物によるものでなく, 語り手自身によるものです。それゆえ関係相チェック表のExpl [Disc. n]に相当させるのは, 少し無理があります。この種の物語はまれではなく, 語り手の一種の人間不信, 疑い深さ表わしているという仮説を筆者はもっています。ちなみに, 老婆を左の人物の悪い心を具現化したものとみなす物語には2種類あるということに注意を喚起しておきます。ひとつは, 客観的, 中立的に, 人間誰しもの心に潜む悪を表したものとして, 左の人物を悪人とはしないものであり, 他は, 左の人物は善人に見せかけているけど, 本当は右の老婆の姿で表されるような邪悪な心の人間であるとするものです。本例は言うまでもなく後者で, 後者からは, 上述のように, 他者の二面性に対する敏感さを窺わせるのですが, 同時に本人の二面性をも表している可能性があります。

物語の結末は, 取り憑いた亡霊によってよくないことが起きるとされていて, Harmがチェックされます。<sup>[註3]</sup>

カード 13MF の物語 [24" - 1'35"]

この人、何か愛人関係ってというような感じがする。愛人関係みたいな感じがして。で、その愛人がね、こっちはもう男性の方は、妻とか妻子とかもってるんだけど、どっか他のところで愛人作っちゃったって感じ。で、その愛人がどうも死んじゃったみたいなんですよね。で、それがこれまでのいきさつで、この後どうなるのかな。まあ、この人の場合ね、愛人が死んでも、家族には帰らずに、1人で、もう妻子のことは無視しちゃって、何か自分で勝手に、酒とね、あんまり、ギャンブルだとかあんまりよくないことをやりそうですよね。そういったところでね。ちょうど死んじゃったとこ。そう、死んだ場面ですね。もう、無節操で、無節操紳士って感じで。

\*

要約：“ 妻子のある男性の愛人が死んだが (Sep/Los [Sep. Los]), 家族のもとには帰らず、酒とかギャンブルにふける (Neg-F [S-des]). ”

\*

妻子がいるのに愛人をつくり、愛人の死後も妻子を無視し、自分勝手に放埒に生きる無節操な男が描写されており、語り手の、その男に対する侮蔑が直接的に伝わってきます。

愛人が死んだというところからは、Sep/Los [Sep] がチェックされますが、その種の多くの物語と違って、男性の女性の死に対する嘆きが語られておりません。愛人の死後も妻子を無視して酒やギャンブルにふけるというところから、Neg-F [S-des] がチェックされます。男性は、とことんダメな人間にされています。優しい情愛を欠いた、自己中心的な存在というのが、語り手にとっての支配的な男性像かもしれません。

カード 14 の物語 [15" - 3'12"]

どうも、この男の人がずーっと何か、あの、誰の作品だったか忘れたけど、考える人の像の人みたいで、もう、いろいろ人生とかいろいろなことを思索とかやってるんだけどね、外をある日、窓開けて見て、今、現在みたいに、窓を開けて外をじっと見てるんですね。それとも何か、周囲の状況とかね。何か.....何って言えばいいのかな.....何か周囲はあんまり良くない状況みたいで、今の状況がどういふふうになってるのかずーっと観察してるっていうか、見てる、こう、ずっと見てるんですね。で、この人、ちょっと感受性強いもんだから、情勢自体、あんまりよくないわけなんです。この人のね。いえ、この人は関係なくても、社会の方がね。周りが。ええ、で、この人はどうすればいいのかとか、どうあるべきとか、憂いてるっていうか。憂いてる。ええ、何か、あんまり明るい方向にはちょっと望めないなって感じで。何か、何ていうのかな、すっごい、ソクラテスみたいな人。何か深刻.....きれいに言ってしまうと深刻なんだけども、で、こっから先はね、この人の境遇自体は変わらないんですね。誰とも関わってなくて、何かあの、今でいうとお坊さんみたいなね。鎌倉時代でいう、鎌倉時代が何かちょっと忘れたけれど、世俗を離れたお坊さんって感じみたいな人ですね、人間性っていうか、キャラクターとしては。で、この先、この人自体の境遇は変わらないんだけど、まあ、社会の情勢、風潮自体はどんどん変わっていくっていうか、そんなとこですね。この人は変わらない。ええ、今も昔もずーっと.....で、情勢自体が変わっていく。ただこの人、何にもせずに一生、見たり聞いたりしてるんだけど、ずっと動かない。行動には出さないっていう。

\*

要約：“ ソクラテスみたいな人、鎌倉時代の世俗を離れたお坊さんみたいな人が、今の社会状況を観察していて (Expl [Sk. Sk]), 情勢がよくないので、どうすればいいのかが憂いている (Spo/Sav [Spo. Sav])。この先、この人の境遇は変わらない、見たり聞いたりするだけで行動しないが、社会情勢はどんどん変わってゆく。”

\*

要約の量に比べると、もとの物語は長すぎます。形式面のチェックリストの 10 に登録しておきましょう。

この絵では、ふつうあまり長い物語は作られないものなのですが、わが語り手は例外的に長い話を展開しています。いわゆる社会派の人物は、語り手のこれまでの物語に何回か登場しましたが、この物語でより詳しく特徴づけられるに至りました。彼は、行動を起こさず、社会の情勢を憂いつつ静観している思索者のようです。個人に対する直接的援護の行動・態度が問題になっているのではないので、関係相はチェックしにくいですが、Spo/Sav [Sup] に相当させておきます。物語の人物は、ソクラテスのような、世俗の人間をはるかに凌駕した高みにいる人間です。そのような人間への強い同一化が認められる語り手に、高い、否、現実感覚を疑いたくなるほど高く持

ち上げられた自己像を推測できます。

カード15の物語 [19" - 2'08"]

何か政治家とか、政治家と関わってた人みたいですね、その人。たとえば、関わっていた人が、たぶん、どっちかっていうと、気が合っていた人っていうか、方針が一緒っていうかね、わりと個人的にも仲の良かった政治家と関係もってた人なんだけども、相手の政治家が何かの人が死んだんだと思う。で、今ここで佇んでるって感じ。たとえば、時代としては、ロシア革命みたいなもので、どうしても反対運動してる人は処刑されたりするでしょう。ちょうどそんな場面ですね、これは。今、これはこのお墓参りですね。で、この人は直接、政治には参加、関係はしてるんだけど、参加してないから、まあ、政治には参加してない。他の政治家とはあんまり関係ないわけだから、たぶん今の日本でいうとね、記者、新聞記者みたいな感じですね。で、ある1人の政治家と個人的にも、何かわりと、気が合って、いろんな話も聞けて、それが革命が何かで殺されちゃったもんだから、そのお墓参り。で、この話はこれで終わっちゃうかもしんない。この人はこの人でまた新聞界の人として、やることあるだろうし、まあ、あとは、政治の情勢とか何かを見守っていただけだとか思ってるところです。

\*

要約：“政治記者が、革命のなかで処刑されて死んだ (Con/Coer [Cont. Coer], Harm, Sep/Los [Sep. Los]), 個人的に仲の良かった (Like) 政治家の墓を参っている (Prov/Ser [Spl. Serv])。このあと、新聞界の人としてやることはやり、あとは政治の情勢を見守ってゆく (Expl [Sk. Sk]) だけだと思っている。”

\*

関係相としては、Sep/Los [Sep], Harm および Prov/Ser [Prov] がチェックされます。

この絵解きに限らず、わが語り手の絵解きには、若い女性からはめったに出て来ないような社会情勢や政治の世界のことが登場していますね。語り手の関心領域が、一般の女性と比べてかなり異なっていること、むしろ男性よりに偏っていることが推察されます。絵の人物は新聞記者で、政治とは直接的には関わっていないとされていて、前の物語の人物を思い起こさせます。また、彼が、気の合う親しい人をもっていることは、カード9GFや11の物語での“唯一の理解者”を思い起こさせます。彼はその人の墓を参って忠誠心を示しています。語り手自身、ごく少数の人との忠誠を誓い合った交際を支えに生きている、あるいはそういう願望をもっているのではないかと推測されます。

カード17GFの物語 [24" - 3'55"]

下の方に何か、これは奴隷制が残ってたような。いや、社会の背景としてはね、まだ奴隷制が残っていた、健在のような情勢で。まあ下の舟から数人、誰かが荷物降ろしてるでしょう、どうもこれ、一応従業員なんだけど、まだ奴隷制のような扱いを受けていて、で、今、立ってる人がいるでしょう、立ってる人がたぶん頭っていうのかな。その組の中の頭か。この人？ ええ、この立ってる人。で、これが何かまだ、あの従業員がね、従業員っていうか、あの労働者が、まだ奴隷みたいな扱いを受けてた、そういう時代なのね。で、まあ、もっともね、この橋の上にいる人とこの人とは、状況が違うわけですね。一切関係ない。だけど、何ていったらいいのかな..... [15"] で、この人は何か全然、境遇が違うんだけど、この人はこの人で、この従業員さんと似たような目に遭って、で、そのことを思い悩んで、今、ここで橋の上で考えごとをしてるんですね。で、この人の家としては、わりと良さそうな家の人なんだけど。で、それでも必ずしも裕福だからそれで別にいいわけじゃないから、また何か、裕福なら裕福でね、この人まだたぶん若そうな人で、たぶん女の人でね、で、また家庭内のことでごたごたあって、で、そのことで悩んで、で、この頃まだ親のほうが強いから、勢力っていうか、で、今、ここで悩んで、で、今、ここで橋の下を見下ろしているわけなんだけども、まあ、そのうち時間がたてば、この人は去っちゃう。橋の上の人。そう。で、こっちの人も船降ろし終わっちゃうって、で、もし倉庫があれば、またどっか行っちゃうだろうし、ま、誰もいなくなるみたいです。場所としてはね。で、まあ、この従業員の人は、ブタ箱みたいな宿舎に帰されるだろうし、で、この人はこの人で、この人はね、たぶん帰らないんじゃないかな。帰らない？ うん、家にね、帰らなくて。で、どっか、少なくとも陽が落ちるでしょ、まあ、この場からは去るけど、たぶんどっかの街角かどっかにいると思う。まあ、そんなところです。

\*

要約：“ 奴隷制が残っている社会で、船から荷物を降ろしている従業員が、組の頭に奴隷みたいな扱いを受けている (Con/Coer [Cont. Coer])。橋の上の人は下の人とは全然境遇が違うが、家で、親の勢力が強いので従業員と似たような目に遭っていて、悩んでいる。やがて従業員はブタ箱みたいな宿舎に帰され、橋の上の人は、家に帰らず、街角にいる (Sep/Los [Sep. Los])。”

\*

橋の上の女性と下の「従業員」がなんら関連づけられていないので、 [N-R] に記入しておきます。

さて、この絵で奴隷制が連想されることはまれではありません。その場合しばしば橋の上の人は下の人々となんらかの形で関係づけられます。たとえば、強制労働させられている人々のなかに彼女の身内の人がいて、その人を憐れんでいるとか、奴隷を使役している人が彼女の近親者であるために、密かに胸を痛めているとかされるのです。奴隷制を認知しながら橋の上の人のことがそれと無関係な人として語られることはまれなのですが、本例はそのまれな一例です。これまで社会情勢に関心をもった人を物語に登場させてきたわが語り手を思うと少し意外です。彼女は、橋の上の人を、奴隷とは境遇の違う、裕福な家庭の人であるとしています。ここには、凡俗と一線を画したいという気持ち、あるいは、地位や身分へのこだわりが示唆されています。カード 10 の物語での「軍医」が思い起こされます。語り手は、橋の上の人は、奴隷たちと身分は異なるけれども、彼女の悩みは彼らのものと同形だとします。つまり、彼女も、立場が上の者の支配に苦しんでいるというわけです。一般的に奴隷制を認知すること自体、強制へのなにがしかの敏感さを示しているのですが、わが語り手の場合はその程度がかなりのものだと言わざるをえません。彼女の社会的関心も、非常に個人的なことから発している可能性が多いにあります。

物語の最後の部分で、橋の上の人は家には帰らず、街角にいるとしているのは、家からの脱出願望の強さを表わしているようで、注目に値します。

カード 18GF の物語 [33" - 3'57"]

まずこの人たちの関係はよくわからないんだけど、何かどうもこの人、後ろ側向いてる人がね、どうも体の具合が普段から悪いっていうか、何かの持病が何かもっててね、ま、不治の病って感じで。で、その人が、発作か何か起こして、この人が様子見てるわけです、この人がね。で、これ以前からもう持病がひどくて、この人も持病のことで悩んでたんですね。医者とか、そういう話してるんだけど、あんまりいい医者がいなくて、どうしようかって悩んで、以前から何回も何回もあってっていう、それがまたここで起こったっていう……まあ、同じことが続くかな、これ。ま、ただ医者とか、いい医者とかずっとこの後も見つからないんだけど、まあ、どっかへやられるかな、この人が。どっか違う場所に移されるかな……で、まあ、他のどうも、これ、ある街、街みたいなお話で、で、きっと、もうちょっと、田舎の方へ、自然の多い田舎の方へ行って、で、そこでまあ、一生を過ごすかな。

こっちの人が？ こっちの人が。まあ、何とか暮らしてるっていう感じかな。で、その後はね、どうなるかな。まあ、そこには自然がたくさんあるからね、にわとりだとか、牛だとか。で、まあその自然のおかげでね、まあ、牛とか猫だとか、この人はよくわからないんだけど、で、牛とか猫とかに接触してるうちにね、だいたい何とかわかってきて、その周囲の人たちもいい人とか、あの、優しく接触してくれるもんだから、少しずつわかってきて、周囲のこととかね。何か、この人自閉症か何かかな。まあ、それと似たような感じだったんだけど、まあその病気もね、持病だというふうに、どうもこの前と関係があって、で、それがね、動物たちと接触したりして、自然だとかね、周囲の環境と接触していくことで、だんだん、少しずつ良くなっていくんじゃないかと思います。そんなとこ。…… この人たちの関係は……最初わからないって。そう、だから身内だとかね。知人かもしれないし、あんまりはつきりしませんね。

\*

要約：“ 医者にかかっても治らない持病をもった人がまた発作を起こして、この人 (こちら向きの人) が様子を見ている。良い医者が見つからないので、田舎に移され、そこで自然、牛や猫の動物、良い人たちと接触するなかで (Spo/Sav [Spo. Sav]), 自閉症がすこしずつ良くなっていく (Pos-F [S-pre])。”

\*

かなり散漫な話し方で、冗長になっています。やはり形式面のチェックリスト 10 に記入せざるをえません。

さて、この絵解きの最大の特徴であり、かつ問題点は、2人の人物の関係を不明なままにしていることです。この絵では、2人の関係が不明ないし不確定のままにされることはまずありません。介抱や攻撃という切実な場面が連想されやすいこの絵では、それは当然のこととも言えるでしょう。関係を明確にし、そして、介抱する人の方を中心にした物語を展開するのがこの絵の課題であると言えるのですが、本例はそのどちらも果たしていないのです。

2人の関係はしばしば母親と娘とされ、病弱の娘を抱えた母親の悲しみが語られます。介抱する人を母親とするのはごく自然のことなのに、わが語り手がそうしなかったのはなぜでしょう。また、介抱する人の悩みや悲しみにほとんど触れず、もっぱら病める人のことを語ることになってしまったことも注目されます。少なくとも、ここから言えることは、語り手が、自分を養育してくれる人、主には母親に同一化し、その心情に共感することが困難であるということ、子としての自己中心的な観点を離れることが困難であるということです。物語のなかの「自閉症」の人が、「自然」に接するなかで、いろいろなことがわかっていくというのは、なかなか意味深です。語り手にも、社会情勢や政治といった観念的な事柄にかかずらうばかりでなく、母なる自然に接し、自らのなかの自然性を開発することも重要だと思ふ面があるのでしょう。

#### カード19の物語 [20" - 1'15"]

何か霊界みたいですね。霊界？ 霊界。で、その霊界の中の、どっちかっていうと、人間世界に近いところで、近い次元で。で、この2つがね、何か丸っこい、家みたいな感じですね。で、これが家だとすると、これ全部が外なんですね。全部が外？ ええ、まあ、あんまり、これは.....これは今までもずっとこんな状態だったし、もやーっとした感じで。で、こっから先も変わらないんじゃないかと思ひます、何も。同じ状態がずーっと続いている.....それだけです。

\*

要約：“ 霊界の人間世界に近い次元で、家が2つある。この状態はこれからもずーっと続いてゆく。”

家や船を認知し、内部の人々に同一化して物語を展開するというのが、この絵でのふつうの振舞い方ですが、それに照らすと本例は、ほとんど失敗反応です ( [ ] )。

\*

家を認知していますが、ふつつ家や船の窓とされるところに認知しています。そのような丸い家が霊界にあるということですが、それで何を伝えようとしているのか不明です。大雪のなかの一軒家、嵐の海に行く船など、自然のなかの家や船を見るのではなく、霊界の家を見たということは、自然からの隔たりと観念的傾向の強さを思わせます。人物は登場していないので、関係相はチェックされえません。チェック表の [ ] に記入しておきます。

#### カード20の物語 [13" - 2'52"]

何か、犬みたい.....犬の顔みたいに見えるんだけど、ここがね。何かの、街のいかにもゴミ捨て場っていうか、下町のね。何か一番、あんまり汚いところみたいで、何かほら、レストランか何か食堂のゴミ捨て場みたいな所あるでしょ。ちょうどそんな場所なんですね、これは。で、街燈みたいのが立っていて、まあ、この犬がね、何かちょっとゴミあさったり何かするのかな。何かこれ、時の流れはあんまりないですね。ただ、時々レストランの従業員がちょっとゴミ捨てのためにここへ出てくるっていうね、何かちょっと暗いっていうのかな。ちょっと貧しい貧民街っていうかスラムっていうか、そんな感じがしますね。で、まあ、こっから先も考えちゃうな、これ。ただちょっとひどくなっていくかな、これは。犬はどうしますか。まあ、犬も時間がたてばどっか他のところへ行っちゃうかな。それか、住みついているかな.....まあ住みついでちゃうことにしようかな。で、他の犬が来たりして、まあ、そのうちに群れ作っちゃう。野犬みたいな感じですね。犬はどのへん？ このへん。こっちむいて、耳たれて。..... 1匹だけ？ 最初はね。そのうち他の1匹、2匹集まってきて、野良犬の集団となって野犬の群れができちゃう。この場所だけでなく、街全体もひとつのスラム街になってますね。もっと悪くなって荒れ放題になりますね。

\*

要約：“ 下町の一番汚いところ、食堂のゴミ捨て場みたいな所で、犬がゴミをあさっている (犬は見捨てられた犬とみなして Sep/Los [Sep. Los])。貧民街、スラムの感じ。犬はここに住みついで、他の犬も集まってき

て、野良犬の群れができる (Uni)。街全体がスラム街で、もっと荒れ放題になってゆく (Neg-F [S-des])。 ”

\*

この絵では、ふつう街灯の下に佇む人が認知されるものですが、語り手は、人のゲシュタルトの一部に犬の顔を認知しています。その犬が、スラムの汚いゴミ捨て場で食べ物をあさっているとされます。語り手は犬に同一化しているわけであり、犬に関して関係相をチェックすると、まず Sep/Los [Sep] がチェックされます。犬は飼い主の家を自ら見捨てたのか、あるいは見捨てられたのか、どちらかでしょう。その他に関係相はチェックしにくいのですが、仲間が集まってくるというところに Uni を、集団で街を荒らすというところに、Harm をチェックしてよいかもしれません。これまでの物語を考慮に入れると、いずれも語り手にとってポテンシャルの高い関係相とみなされます。

さて、語り手は、ゴミ捨て場やゴミをあさる犬の行動に嫌悪を抱いているとしても、生き生きと想像しているわけで、その同一化はかなり強いと言えます。語り手が意識しているかどうかはともかく、彼女自身の一面を表していると見てよいでしょう。カード 14 では、高みの極致にある自己像が示唆されていましたが、ここではそれと対極の落ちるところまで落ちた、底辺にある自分の像が示唆されています。おそらく語り手の自己像はきわめて不安定で、両極の間を往復しているのでしょう。ところで、犬は憐れな犬のはずですが、語り手が犬を憐れんでいる様子はありません。犬はその場に住みつき、他の犬と一緒に野犬の群れを作り、街を荒れ放題にします。ふてぶてしく居直った、挑戦的かつ破壊的な存在というイメージがあります。これも語り手の自己像の一部であろうと思われる。

#### カード 8BM の物語 [22" - 2'01"]

これね、まだ一番手前的人是はまだ若くて、で、どうも医学生なわけですね。で、医学生ってことはまだ先生じゃないわけで、手伝いで。で、今の医師のやり方っていうか、医療に不満もってて、この人は。患者に対する扱いとかにどうも問題があるって、どうもこの人は批判的に思っているんですね。で、また、その以前からそう思ってただけど、今回のこの場面でもまたね、患者に対して手術やってるんですけども。で、ちょっとあんまりよくないもんだから、今、この時点でもね。あの医学があんまり進歩してないもんだから、患者のね、助かる率は少ないわけですね。で、また、ここ、もうあんまりよくない医療体制でね、またこういうことやってると思ってる。で、ま、今、以前やってることがまたここで繰り返されてるんですね、また。で、この人、将来医学生を卒業すると、もっとあのね、新しい進歩的なことを研究し始めると思うんですね。で、まあ、ワントンポ医学を進歩させるんじゃないかと思えます。

\*

要約：“患者の扱い方など、今の医療に不満をもっている若い医学生が、今回の手術にも、またしてもこんなことをしていると批判している (患者のためを思っていることから Spo/Sav [Spo. Sav])。彼は卒業後新しい進歩的なことを研究し始め、医学を「ワントンポ」(ワンステップ) 進歩させる (Expo [Exp])。 ”

\*

手前の人物を医者志望の青年とすることはよくあります。しかし、彼が心に抱いていることが、立派な医者になって多くの人を救いたいという達成願望でも、反対の、医者になることへの躊躇でもなく、現在の医療体制に対する批判や不満であることはまれです。これによって関係相 Con/Coer [Cont. p] をチェックしてもよいかもしれません。物語の医学生は卒業後医学を進歩させるということで、彼には非常に高い野心が付与されているわけです。わたしたちは、すでに語り手の誇大的な自己像を推測してきましたが、ここでもまたそれを確認した思いです。

語り手は、患者に対する扱いの問題とか患者が助かる率の少なさを口にしていて関係相 Spo/Sav [Sup] がチェックされますが、絵のなかの患者の苦痛に思いを致している感じはあまりしません。直接的な共感性より観念性が支配的であることが、このようなところにも察せられます。

#### カード 16 の物語 [1" - 37"]

えっ！ 真っ白？ え？ .....これから誰か描くんでしょ、絵が。 ..... 何でも浮かぶことがあれば。 まあ、これから誰か、画家の手に渡って、絵を描くと思う。 画家がこれから。 いや、画家に限らずね、漫画家とかがこれか

ら、絵を描いていくと思う。だから、これは以前はただの紙だった。

\*

「絵を描いてゆく」ことは自己表現であり、Expo [Exp] に該当させえます。

\*

カードの白色からの単純な連想にすぎません。ものごとの始原の連想と言えますが、抽象度は低いものです。

カード 12BG の物語 [19" - 2'29"]

もう、ここは人をあまり寄せつけない、ジャングルじゃないけど、もう人を寄せつけない、寄りつけない大自然の1コマって感じですね。その1つの場所ね。で、一度はね、人間が探検に来たんだけども、どうも失敗したらしいんですね。これ、たぶん舟だと思うんですけど。で、失敗して、舟だけが……で、たぶん探検に行った人たちは、たぶんここで命を落としたんだと思うけど……まあ、自然の恐ろしさっていうか……自然のほうがやっぱり強かったって感じで。で、今の時点では、その人間たちがやった舟だけが残ってるんだけども、もう人間が来ることはこれから先少ないんだと思います。で、たまにまたね、自然関係者とか来たりするんだけども、以前来たのはね、この舟を使ったのが調査団、開発のための調査隊か密猟者のどっちかだったと思うんですね。で、今度あとは、逆に、環境保護関係の人なんです、今度来るのは。まあ、調査のためにやってきたって感じで、で、まあ、この辺にやってきて、偶然、この舟みたいなやつを見つけたっていう感じ。まあ、そんなところです。

\*

要約：“人を寄せつけない大自然のなかに、かつて人間が探検に来たが (Expl [Sk. Sk]), 失敗し、ここで命を落とし (Neg-F [S-des]), 船だけが残った。以前来たのは開発目的の調査隊か密猟者だったが、今度ここに来たのは環境保護団体で、調査が目的。偶然この船を見つけた (Pas-F [H. Sk]).”

\*

ここでの物語の分析の際注目すべきことは、絵の自然のなかの場所をどのような場所にしているかということです。絵には人間が描かれていません。カード 19 のように、人間を内部に収容する家や船を思わせるものもありません。人間の存在を思わせるのは、1艘の小船だけです。それには人は乗っていないので、画面内はまったくの無人ということになります。そういう無人の場から物語をつくるには、人を導入する必要があります。それは、絵の場所への人のかかわり方を述べることで、あるいは、同じことですが、絵の場所が人にとってもつ意味を言うことにほかなりません。こうして、たとえば、絵の場所が、子どもや家族連れで賑わう遊び場、くつろぎの場にされたり、かつては人で賑わっていたが、今はすたれた場所にされたり、今まで誰も足を踏み入れたことのない場所にされたりするのです。

ところで、場所と人との関係は相互的なものですから、たとえば、人がくつろぎに出かける場とは、そういう人を受け入れてくれる場ということになります。こうしてある意味で場所の擬人化が生じているわけです。わたしたちは知らず知らず場所を擬人化し、同一化していると言えます。こうした視点から、この絵での物語を見ていくのも有益と考えます。

本例をこの視点から見ると、どうなるでしょう。絵の自然は、ジャングルのような「人を寄せつけない」自然です。探検隊すらそこで命を落としたような恐ろしい場所です。すでにことば遣いに、自然の擬人化が感じられますね。したがって関係相 Sep/Los [Sep] と Harm をチェックすることができます。語り手は、そういう自然に同一化しているわけで、そこに彼女自身の自己像が反映されているとみなすことができます。彼女は、安易な人の接近を許さない人なのでしょう。とくに、何かを彼女から得るために接近してくる人には警戒的なのでしょう。興味深いのは、今后来る人があるにしても、それは環境を保護するために来るのだとしていることです。これらの部分から、関係相 Dep と Spo/Sav [Sup] がチェックされます。さらに、調査隊が偶然船を見つけたというところから、Pas-F [Disc. p] を、探検隊が命を落としたという部分から Neg-F [S-des] をチェックすることが可能です。



2 まとめの表

形式面のチェック表 (事例 C)

	特 徴	カード番号	計
1	教示の確認をたびたび行う	-	0
2	絵を見ての個人的印象や感情を表現する	-	0
3	絵に描かれているものを列挙したり, 純客観的に記述したりする	-	0
4	絵のなかの人物についての性格描写や評価・批判をする	-	0
5	絵から連想される自分の過去や既存の小説や映画の内容について語る	-	0
6	1つの絵に対し, 2つ以上の絵解きの可能性を示すが, どれも十分に展開させない	1, 3BM	2
7	時間制限はないが, 初発時間や反応時間が並外れて長い	-	0
8	自発的に物語を作り上げるのが困難で, 検査者の質疑などの助けを借りなければならない	-	0
9	物語が適度の詳しさと具体性を備えておらず, 観念的・抽象的で内容がわかりにくい	1, 3BM, 4, 6GF	4
10	不必要なディテールがあったり, 繰り返しがあったりして, 物語が長たらしく, まとまりがない	7GF, 14, 18GF	3
11	笑が多い	-	0
12	「.....ではないですね」とはじめてから否定形で語る	-	0
13	物語のどの部分が絵と対応するのかわかりにくい	-	0
14	人物への感情移入が乏しい	-	0
15	場所, 時代, 時間などへの言及が多い	-	0
16	絵を絵画 (写真) 作品とする	-	0
17	人物に名前をつける	-	0
18	会話体や独白体で演技的に物語作りを進める	-	0
19	[その他]	-	0

関係相のチェック表 (事例 C)

関係相のカテゴリー	当該の関係相が含まれる物語のカード番号	合 計		
Expl	5, 6GF, 14, 15, 12BG	5	6	14
vs. Pas-F	12BG	1		
Expo	1, 2, 7GF, 9GF, 11, 12F, 8BM, 16	8	8	
vs. Conc	-	0		
Con/Coer	7GF, 9GF, 12F, 15, 17GF, 8BM	6	6	10
vs. Ask/Req	-	0		
Dec	-	0	4	
vs. Gui	1, 2, 4, 7GF	4		
Spo/Sav	2, 9GF, 14, 18GF, 8BM, 12BG	6	7	15
Prov/Ser	15	1		
vs. Harm	11, 12F, 15, 20, 12BG	5	8	
vs. Dep	6GF, 10, 12BG	3		
Like	9GF, 15	2	2	2
vs. Hos/Disg	-	0		
Love	-	0	0	
vs. LoL	-	0		
Uni	5, 9GF, 10, 11, 20	5	9	14
vs. Sep/Los	5, 9GF, 10, 11, 13MF, 15, 17GF, 20, 12BG	4		
Pos-F	18GF	1	4	5
vs. Neg-F	9GF, 13MF, 20, 12BG	3		
	2, 3BM, 8GF, 17GF, 19			5

分析・解釈シート

(被検者：Cさん 性別：女性 年齢：20歳 職業：大学生)

絵 NO.	分析 (物語の形式的・内容的特徴)	解釈 (物語の特徴が意味するもの)
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・散漫な語り。2つの解釈可能性を示し、決めない</li> <li>・2つの解釈は、実は同じ状態で交錯する2つの考えにすぎず、別の事態ではない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己の言動に責任をもって物事に対処し、決断していく姿勢が弱い</li> <li>・人の心の複雑さについての認識が乏しい</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農村の状況改善という社会的目的</li> <li>・自発的には後景の男女と前景の女性とを関係づけていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会問題への関心の高さ</li> <li>・より身近な人間関係への関心の低さ</li> </ul>
3BM	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はっきりしない内容</li> <li>・本来切り離せない思い・感情を別個のものとして扱い、2つの解釈可能性としている</li> <li>・「この人の考え次第」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な表象力の弱さ。観念論者的</li> <li>・心についての単純な考え方や割り切り方</li> <li>・自己の判断に責任を取るのを避ける</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体性に欠ける。しかし妻の行動については詳しく表象している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正確で詳しくあろうとする知的分析的志向</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これ以前のものに比べ非常に具体的・内容の特徴点：部屋主の永久的不在、孫もちの祖母、部屋主は複数</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人的なものの投入。率直さと防衛の弱さ</li> </ul>
6GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・女性が男性に搾取されている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性に搾取者のイメージをもつ。年配の男性、あるいは男性一般に対し、親しみやエロスの関係を想像しにくい。搾取する - 搾取されるという軸で人間関係を見がち</li> </ul>
7GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「すごいことをやるための教育」を受けている、「大学教授にさせ」たい少女への同一化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己についての誇大的イメージ</li> </ul>
8GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平穏さの強調</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平穏さのつまらなさ、平穏でないことの期待</li> </ul>
9GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雇う人と雇われる人</li> <li>・家から脱出するお嬢さん中心の物語</li> <li>・絶対同調する腹心の召使</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地位や身分によって人間関係を捉える傾向・地位や身分に敏感</li> <li>・親から支配され、束縛されているという強い思い</li> <li>・語り手自身、相手を自分の意志で縛る、暴君になりかねない支配欲の強い人</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごく普通の場面解釈</li> <li>・徴兵されるのではなく、軍医として戦場に行く</li> <li>・「片腕ぐらいいは失くすかな」といういとも無造作なものいい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異性愛に対する不信や斜に構えた態度は窺われない</li> <li>・地位や身分を重視する人</li> <li>・情性を欠いた攻撃性</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大自然のなかに人間的な争いを見ている</li> <li>・社会的な不平等を巡る争い。たった1人で抗議に向かう農民への強い同一化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間関係についての過度の関心。パラノイア的な他者の行動・態度の意味づけ</li> <li>・差別的待遇に敏感。正義感の表れと同時に根深い人間不信</li> </ul>
12F	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一貫性を欠く</li> <li>・左の人物は、善人面しているけれどほんとうは悪い人間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間不信。疑い深さ。本人自身の二面性</li> </ul>
13MF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分勝手に無節操な男性の描写</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性に対する過酷なまでの厳しい見方</li> </ul>
14	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一般的傾向に反して、例外的に長い物語の展開</li> <li>・人物への強い同一化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現実感覚を疑いたくなるほどの誇大的自己像</li> </ul>
15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会情勢や政治の世界が登場</li> <li>・忠誠を尽くす新聞記者</li> <li>cf. 9GF, 11での“唯一の理解者”</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関心領域が一般の女性と比べてかなり異なっている。むしろ男性よりに偏っている</li> <li>・ごく少数の人との忠誠を誓い合った交際を支えに生きている。パラノイアとの親近性</li> </ul>
17GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・橋の上の人は裕福な家庭の人</li> <li>・奴隷の認知。親の支配に苦しむ女性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地位や身分へのこだわり cf. 10の「軍医」</li> <li>・強制への感受性。社会的関心も個人的なことから発して</li> </ul>

絵 NO.	分析 (物語の形式的・内容的特徴)	解釈 (物語の特徴が意味するもの)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家に帰らず、街角にいる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いる可能性</li> <li>・衝動的な行動化の傾向</li> </ul>
18GF	<ul style="list-style-type: none"> <li>・散漫で冗長</li> <li>・2人の関係は不明なまま。母娘にしていない。もっぱら病める人について語る</li> <li>・「自閉症」の人が、「自然に接するなかで云々」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分を養育してくれる人 (主には母親) に同一化し、その心情に共感することが困難である。子としての自己中心的な観点を離れることが困難。</li> <li>・語り手自身、母なる自然に接し、自らの中の自然性を開発することが重要だと思ふ面もある</li> </ul>
19	<ul style="list-style-type: none"> <li>・失敗反応に近い</li> <li>・霊界の家</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然からの隔たりと観念的傾向の強さ</li> </ul>
20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非常に特異な絵解き。無残</li> <li>・ゴミ捨て場である犬</li> <li>・野犬が群れをつくって住みつき街を荒れ放題にする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語り手の内界のすさみ</li> <li>・底辺にある自分の像。高みと底辺を往復する不安定な自己像</li> <li>・居直った破壊的な自己像</li> </ul>
8BM	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医療体制批判。医学を進歩させる</li> <li>・患者の苦痛に思いを致していない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誇大的な自己像</li> <li>・共感性は乏しい</li> </ul>
16		
12BG	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「人を寄せつけない」自然</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・容易に人の接近を許さない人。何かを自分から得るために接近してくる人には警戒的</li> </ul>

### 3 総合所見

Cさんの物語は概して散漫、冗長で、具体性に欠けます。また、2つの解釈可能性を示し、どちらかに決定しないでおくということも見られます。こうした特徴から、Cさんは、ものごとや状況を細部まで具体的に表象することは得意でなく、むしろ知的、観念的に捉えようとする傾向が強いとみなされます。これは、客観的で、正確であろうとする姿勢にも通じますが、TATの課題においては、かえって、不鮮明さや不決断を招きます。なぜなら、TATの課題においては、事実に基づく判断は不可能で、自らが感ずるままに進むしかないので、もし正しさや客観性にこだわりだしたら、細部まで具体的に明快な物語を提示することなどできなくなるでしょう。しかし他方、知的、観念的態度は、逆に、物事に対し決然と対処することから逃げる方策ともなります。Cさんにも、そうした知性化を思わせる、自己の判断に責任を負うことを避けようとする傾向が認められます。

Cさんの知的、観念的傾向は、さらに彼女の関心領域と密接に結びついています。いくつかの物語の内容から、彼女は、一般の若い女性には珍しく、社会問題への関心が深いことが窺われます。世界情勢や社会的問題は、遠くから論評している限り、まさに観念の世界のことで、観念論者に好まれる話題と言ってよいでしょう。しかし他方、これと引き換えに、Cさんには、身近な人間への共感性の乏しさや自然性からの隔たりといったものが窺われます。これらのことは、Cさんを、女性の側というよりむしろ男性よりに位置づけていると言えるでしょう。そこに彼女の性的同一性の問題も示唆されています。

Cさんの対人的態度は決して親和的なものとは言えません。むしろ不信と疑いに彩られていると言えるでしょう。Cさんは、社会的な差別、搾取し、される関係、支配・強制し、される関係に敏感に反応します。このことは、Cさんがもっぱら受身的に被害を受ける側に回っているということの意味しているのではなく、そういう次元ないし軸で人間関係を捉える傾向があるということで、ある場合には、彼女自身が、能動的に加害者側に回ることも含んでいます。ともかくCさんは、ある意味で人間関係に強い関心を持ち、他者の行動や態度を必要以上に否定的に意味づける傾向があるのではないかと考えられます。そしてその根底にあるのが、人間不信や疑いではないかと思われるのです。Cさんは他者の二面性に対して敏感ですが、これもその表れでしょう。二面性をもたない、自分の意思に完全に同調してくれるごく少数の人のみと交際し、そのほかの人々は容易に寄せ付けないところがあるのではないのでしょうか。

Cさんは、自分についてはかなり誇大的なイメージを抱いているように思われます。それは現実感覚を疑いたく

なるほど高く価値づけられているようにさえ思えます。しかし他方、Cさんは、落ちるところまで落ちた、言わば底辺の自己像をもっているようです。そういう自己像をもって、居直って、ふてぶてしく生きていくところもあるようです。彼女の自己像は、そうした非現実的な両極の間を揺れ動いているとみなせます。Cさんが自分を高く位置づけようとしているところは、身分や地位への敏感さにも表れています。凡俗と一線を画した地位・身分への憧れが窺われます。

さて、Cさんの家族像およびそれに由来する男性像や女性像についてですが、まず男性については、Cさんは、非常に厳しい見方をしていると言えます。身勝手な利己主義者というイメージがあるようです。年配の男性や男性一般に対し、親愛の情にもとづく関係やエロスの関係をもつことは、彼女の想像の埒外にあるのではないのでしょうか。父体験がよくなかったのかもしれない。

他方母親についても、Cさんが良好な像を抱いているようには思えません。しかしまた、否定的な像も示唆されていません。あるいはCさんは、子としての自己中心的な視点を離れて、母親を対象化することができていないのかもしれない。

異性愛についてはとくに不自信や斜に構えたところは窺われませんが、先述のように性的同一性に揺らぎがあるように思われるので、自らの経験としてはまだ遠いものであるでしょう。

### 第13章 事例D

本章では、事例D（女性・29歳）におけるTAT反応を検討していきます。Dさんは、ある病院で患者としてお会いした人物です。にこやかで、ほっそりとした少女のような風貌・容姿が印象的でした。また、家族構成は両親と姉と妹の5人とのことで、「家族皆、少食。もっと若い頃はやせ願望をもっていたけれど、今は太りたい」と語っていました。<sup>[註1]</sup>

#### 1 カードごとの検討

##### カード1の物語 [7" - 1'12"]

うーんと、今、この人がどう思っているか、ですね。うん。で、これバイオリンですよ、バイオリンを習っているんだけど、ちょっと行き詰って自分でうまく弾けなくて、今後どうしようかって悩んでいるような……感じがします うん……行き詰った？ はい。うん、これからどうなりますか。これから……でもやっぱり思い直して、もう1回練習を始めて、このバイオリンが好きになるんじゃないかなって、そんな気がします。そのくらいですか。はい。

\*

要約するまでもないような簡素な物語ですが、要約しつつ、関係相をチェックしていきます。

要約：“バイオリンを習っているが、行き詰まって、うまく弾けなくなり、今後どうしようかと悩んでいる。(思い直して練習を始め、バイオリンが好きになる(Like)。)”

\*

課題についての質問があり、さらに、バイオリンがバイオリンであることの確認を求める発言がありますが、問題視するほどのことはありません。内容は、男の子の悩みを、バイオリンをうまく弾けない悩みとする、ごくありふれたものです。結末もよくある種類のもので、このカードではしばしば親や先生が導入され、彼らと少年とのかわりが述べられるのですが、この物語にはその部分はありません。それで、関係相チェック表の [ のN-R] に記入するしかありませんが、こうしたことはこのカードではしばしば見られ、とくに問題にすることもありません。親のことは述べられていませんが、親にバイオリンを与えられ、習わされていることは間違いのないでしょう。言い換えれば、語り手は子どもに習い事をさせることがごく自然なこととしてある環境に育ったということです。ここから、子どもの教育を考えるほど、子どもに愛情と期待を注ぐ親に育てられたということが推測されます。

##### カード2の物語 [25" - 2'09"]

この女性が、こういう、何っていうかのんびりした、そういう所に、心を癒すために、何かちょっとやっぱり、

心配事っていうか、あの、何か落ち込んでこういう所に、訪れて、風景を見ているっていう感じがします。今後どうなっていくんでしょうね.....何かこの本がね、本っていうか、ここに詩を書いている。この風景を見てね、詩を書いたりして自分の今の気持ちを表したりして、数日経って家に帰っていくっていう.....心を癒すために、のんびりしたいためにここに訪れたっていう感じ。どんなことがあったんでしょうね、前。何か失恋したような感じ(笑)。..... はい。

\*

要約：“(失恋して (Sep/Los [Sep. Los])) 落ち込んだ心を癒すためにのんびりしたところを訪れた。風景を見て、詩を書いたり、自分の気持ちを表わしたりして (Expo [Exp]), 数日後帰ってゆく。”

\*

後景の男女への言及はなく、したがって手前の女性と彼らとの関係も不明なので、 [N-R] に登録します。

前景の女性は悩める心を抱えてのんびりした田園にやって来て、詩を書いて心を癒すようです。後景の男女への言及はなく、したがって関係相も不明です。ただ、質疑によって、女性の悩みは失恋のゆえであることがわかります。したがって、関係相チェック表の Sep/Los [ Sep, iv Love] に登録されえますが、質疑後に付加されたものであるため、その点を留意しておく必要があるでしょう。むしろ [ N-R] に該当させるのがよりふさわしく、そちらにも登録します。これはこのカードではまれなことであり、心に留めておく必要があります。この物語の特異性について以下に少し詳しく説明します。

女性がよその土地からやってきたとするのは、前景の女性と後景の異質性を感じ取ったがゆえの、しばしば見られるその処理の仕方を表します。心を癒しに来たとするのは、女性の表情が憂いを含んだように見えたからでしょうね。これも特異なことではありません。しばしば女性は悩んでいるとされます。ただ、女性の悩みの原因は、絵に描かれた状況のなかに求められるのがふつうです。たとえば、女性は都会に出て学問を続けたいが、親に反対されて悩んでいるとか、都会から赴任してきた先生が農村の人たちに受け入れられず悩んでいるとか、後景の男性を思慕しているが、後景の女性の存在のゆえに近づけないで悩んでいるとか。このように、女性の悩みは、彼女の意図、願望に対し、後景の人(たち)が障害として立ち塞がっているがゆえに生じたこととされるものなのです。転じて、わが語り手の物語を見ればどうでしょう。女性の悩みは後景と何のかかわりがないことは明瞭です。

物語の内容自体は、ありそうなこととして誰にでもよく理解できるものなのですが、このカードでそのような物語が作られるのはまれであることから、語り手にとって、画中の女性の心情や行動は、現実生活のなかで生じる可能性がかなり高いものであることが推察されるのです。語り手は、現実生活で何か挫折があると、内閉し、現実の状況から遠ざかる傾向があるのでしょうか。なお、失恋が「落ち込み」の原因であるとされたことは、語り手における異性愛の高い価値付けを示唆しています。

カード 3BM の物語 [11" - 42"]

最初は何か悲しいことでもあって泣いているのかなと思ったんですけど、単なる、女性、主婦が、疲れてうたた寝してるって思います。ここでぐっすり寝て、ある時間過ぎたらはっと目が覚めて、こんなことしてたわっていう感じで、でまた、普通の生活に戻る.....そんなことです。 はい。

\*

要約：“主婦がうたた寝し、ぐっすり寝て、目が覚めたら、「こんなことをしてたわ」(Pas-F [H. Sk]) と普通の生活に戻る。”

\*

悲嘆と疲労という2つの絵解きが示されています。どちらもこのカードでしばしば見受けられるものです。というより、ほとんどすべての物語が、これらのどちらかに属すると言えます。ただ、出現頻度は、悲嘆という解釈のほうが勝ります。2つの絵解きの間で迷う人もいますが、わが語り手は、そういうことはなく、一方に決めています。ただ展開は弱く、画外の人物の導入もありません。したがってチェック表には [ N-R] に記入するしかありません。悲嘆を選んだ方が、人物導入の可能性は高いのですが、語り手が、疲労によるうたた寝を選んだのは、彼女の関係性の乏しさを示唆しているのかもしれませんが。それはともかく、11秒という初発時間を考えれば、迷った末の選択というより、悲嘆に傾いているという解釈は、浮かぶと同時にすぐ退けられたという感があります。こ

ここにこの物語の特徴を見出せるでしょう。悲しみや悩みといった否定的な感情・内的状態は回避される傾向が推測できます。これは、前のカードと推察したことと通じていますね。

カード4の物語 [9" - 1'27"]

この2人は恋人同士で、で、この人が振られるっていうか、そうですね、で、あの、行かないでっていうのを振り切って、行こうとしているところ。で、別れちゃう感じです。女の人が捨てられちゃうっていう感じかな……そんなところ。男の人はどっか目的があるんですか、行く場所とか。場所ですか。……別に……妻子ある人とかそんなんじゃないかってお互い独身で、ただ、誰のところに行くっていうんじゃないかって、この人がこの女性を捨てて行っちゃうっていう。…… はい。

\*

要約：“恋人同士で、男の人は、女の人が行かないでと頼む(Ask/Req [Ask. Req]) のを振り切って、行ってしまい、別れてしまう (Sep/Los [Sep. Los])。 (互いに独身であり、妻子のところに戻るとかいうのではない。) ”

\*

男性が女性を捨てて出て行ってしまおうという物語です。チェック表の Sep/Los [ Sep] に記入されます。男性が女性のもとを去って行く先が、「妻子ある人とかそんなんじゃない」と、はじめから否定形で語っているので、形式面のチェック表の12に記入されます。これは、男性が倫理的責任感から女性のもとを去るのではないこと、ただもう女性に魅力を感じなくなったから去るのだということをはっきり伝えようとしていると受け止められます。ここには、男性の非情さへの思いと語り手自身の女性としての魅力に関する劣等感が推察されます。

異性愛の破綻を見たということは、語り手の異性愛への強い関心を示唆します。カード2での女性の「失恋」が思い起こされます。

カード5の物語 [15" - 1'47"]

何か、この人がある子どもの母親で、で、その子どもの部屋を覗いて、それで……子どもが、何してるのかな、何かちょっと驚いて、子どもに……勉強してるかと思って覗いたんですけど、何してるのかな、それは今ちょっとパツと浮かんでこないんですけど、何か自分が期待している通りじゃなかったの、はっと驚いているところ、親っていう感じがする。……子どもは何か居眠りしてるのかな。息子？ 娘？ 息子ですね。男の子。いくつぐらい？ うんと……思春期、中学生くらいかしら。それでどうなるかな？ この母親は、でも何も言わずに、そっと閉めて、まあ何もなかったようなふりをして、そのまま放っておく、ここを立ち去っていく。それぐらい？ はい。

\*

要約：“母親が、子どもが勉強しているかと思って部屋を覗いたら、子どもは自分が期待していた通り勉強してなかったの、驚いている (Pas-F [H. Sk])。居眠りをしていたのかもしれない。(中学生の男の子。子どもには、何も言わず、戸を閉めて、何もなかったように立ち去る (Conc)。)”<sup>註2)</sup>

\*

母親が子どもが勉強しているかどうか見に来たら、子どもは勉強してなかったという絵解きです。しばしば見かけられるものです。だから、あまり強調することはできませんが、監視・監督的な面の勝った母親像を推測してよいでしょう。しかしチェック表の Con/Coer [ i Cont. p] に記入するには根拠が弱すぎます。それよりも、母親が予想外のものを見て驚いているという部分はチェック表の Pas-F [ i Disc. n] に記入するに十分な根拠です。母親は何を見たのでしょうか。居眠りをしているのを見たが無害なものにされていますが、もっと衝撃的なものを想像したのに、防衛が働いて、すぐそれを退けたという可能性もあります。子どもに何も言わず、そっと閉めて立ち去る——Concに相当します——というディテイルにも、一種の防衛、否認の傾向が推測されます。

カード6GFの物語 [8" - 1'15"]

この2人はまったくの他人同士で、場所は、レストランか何か、喫茶店かそういう感じのところ、で、この人

が、この女性が美しいので後ろから声をかけて、それにハッとしている所。でも、この女性は男性の言葉に乗らずに、そのまま断って、で、この男性は立ち去る。男性は何か言った？ .....「おひとりですか、僕と付き合ってください」とか「お茶でも飲みませんか」とか。..... 以上ですか、はい。

\*

要約：“ レストランか喫茶店かで、女性が美しいので、他人である男性が声をかけて、女性はハッとした (Pas-F [H. Sk])。 (男性は、お茶に誘ったり、交際を申し込んだが (Love, Ask/Req)) が、女性は断り、男性は立ち去る (Sep/Los [Sep. Los])。 ”

\*

男性は女性に誘惑的に接近するが、女性は断るという絵解きです。このカードでは男性が女性に接近する意図が問題になるのですが、この物語では、それは性的な誘惑であるということです。したがって関係相のチェック表の Love [ iv Love] に記入されます。しかし女性は「そのまま断る」のであり、Sep/Los [ Sep] にも登録されます。このような関係相はこのカードではしばしば見られるものであり、とくに強調するわけにもいきませんが、語り手は異性愛、異性関係に強い関心をもつ人だとは言えるでしょう。同じことをカード2でも4でも指摘しえました。したがってこの仮説はかなり確実性をもっているといえます。

女性が誘いを断るというのは、むしろふつうの結末です。適度の警戒心や自制心をもっているということでしょう。

#### カード 7GF の物語 [17" - 2'04"]

この2人も親子で、で、何か、この女の子は、やっぱり、何か、心に不安か何か悩み事があって、で、ものも言わず.....で、これ私、お人形に見えるんですけど、お人形を抱いたまま、母親の言葉にもあまり耳を傾けずに、そっぽ向いて、で、ちょっと何か.....人間関係がうまくいかないもんだから、あんまり人としゃべりたくなくて、人じゃないこういうものを可愛がってるっていう感じがします。で、一生懸命、お母さんが話しかけても、そっぽ向いちゃって、あまり答えてくれなくて、で、お母さんが困ってる感じ。..... この後何か。 この後は、でもだんだんと、一生懸命ね、お母さんが、説得じゃないけど、そういうのにもめげずに一生懸命話しかけて、だんだん時が解決して、だんだんと皆としゃべれるようになって、この子も明るくなっていくっていう、そんな感じがします。

\*

要約：“ 母と子で、女の子は、母親に話しかけられてもそっぽ向いて、答えない (Sep/Los [Sep. Los])。女の子は、人間関係がうまくいかないから、人としゃべりたくなく (Conc)、人形を可愛がっている (Like)。 (しかし、母親がめげずに話しかけていると、女の子は、人としゃべれるようになって、明るくなってゆく (Uni, Pos-F [S-pre])。 ) ”

\*

2人を母と娘とすることも、少女が他方の女性の話しかけに応じていないという見方も、ごくふつうのことです。というより、後者は、このカードの要請ですらあります。基本的な設定はこのように語り手に固有の特徴はありませんので、次の段階として、母親が娘に話しかける動機や少女が話しかけに応じない理由を問題にしてみましょう。

母親は、娘をなんとか教え導こうとしていると判断され、チェック表の Gui [ iii Gui. p] に記入されます。娘がそういう話しかけに応じないのは、「人間関係がうまくいかない」から、人としゃべりたくないからだとされています。これは、ふつうのこととは言えません。「友達とうまくいかない」ならまだしも、「人間関係がうまくいかない」というのは子どもにはそぐわない感じがします。さらに、特定の個人との関係の問題にとどまらず、人間一般との関係に般化し、人としゃべること自体がいやになり、人じゃない人形を可愛がっているというのは、子どもにあるまじき人間嫌いというべきでしょう。それゆえ、ここには語り手の自分自身の人間嫌いの投影があるとみなせませす。心を閉ざす - 開けるという人間関係の側面は、語り手にとって非常に重要な一側面であると推察されます。

#### カード 8BM の物語 [25" - 2'22"]

何か、殺人事件みたいな.....感じがするんですけど.....この3人が、話し合っただけで、この2人は、

実際に殺人を手がけているんですけど、この人は、やっぱり悪いことをしたっていうか、これにかかわりたくないっていうか、そういう気持ちがあって、でも、ここの場所において、困ったって……で、この人は、これを見たく、こういう現場を見たくなくて、そっと、他を向いて、でもどうしようって困ってる。こんなふうになっちゃって。で、でも自首できずに逃げちゃう感じかな。でもいずれは皆捕まって、(不明)するんじゃないかな。3人組なわけね。3人組で、実際に手がけたのはこの2人で、この人は手を下さなかったんですけど、一応、この殺人に関しては、ま、共犯者っていう感じですね。何で殺したんでしょうね。金銭的な問題、お金欲しさか、何か。お金がらみ、お金がからんでいる。いいですか？ はい。

\*

要約：“3人が話し合って殺人を企て (Harm), 2人 (後景) は実際に殺人を手がけているが、この人 (手前) は、かかわりたくなくなって、現場を見るのもいやで、そっぽ向いて困っている (Pas-F [H. SK])。自首できずに逃げるが (Conc, Sep/Los [Sep. Los]), 結局皆捕まる (Con/Coer [Cont. Coer])。 (金がらみ (Dep) の殺人)”

\*

これは、なかなか興味深い絵解きです。関係相のチェック表の Harm [ i Harm] および Dep [ ii Dep] に記入されるのですが、手前の人物は、加害と強奪にかかわりたくなく、逃げ出すとされている部分が興味深いのです。これと同系の物語として、医者志望の青年が、手術に立ち会って、こわくなり、医者になるのをやめようかと思っているとするものがあります。どちらも、恐ろしいもの、おぞましいものから目をそらすという自我の防衛的態度を表していると思われます。しかし、この物語では、手術場面でなく加害場面が問題になっており、語り手自身の強い攻撃衝動ともを奪う衝動をも読み取ることができるわけです。語り手は、強い攻撃衝動を抱きながら、それに臆し、防衛的に否認しようとすると言えるでしょう。なお、自首できずに捕まり、罪を認めるらしいあたりは、Expo [Exh. n] に相当させうるでしょう。

カード 8GF の物語 [8" - 58"]

最初はぼーっと何かを考えて外を見てるような感じがしたんですけど、単なる絵のモデルさんにも見えませんでした。……それくらいですね。今、モデルをやってる？ モデルをして、で、こちらに絵描いてる人がいて。いいですか？ はい。

\*

要約は不要でしょう。モデルをしていることは、Expo [Exp] に該当します。

\*

絵の受け取り方が途中で変わっていったことが示されています。最初の解釈と2番目の違いは、人目を意識しない自己の世界への没入と人目を意識して外界に対し構えていることの違いといえます。もっとも「モデルをしながら物思いにふけっている」とする人もいるわけで、両者は相容れないわけではありませんが、一応このように区別することができます。関係相の観点からは、後者は、チェック表の Expo [ iii Exh. p] に該当します。頻度の上では前者が後者、すなわち「モデルをしている」とするものを圧倒しています。つまり、後者は少数派で、それゆえにそれ自体の意味づけが可能で、私は、そのものずばり、对人的に構えやすいことや自己露出的な態度を推測します。

ところで、モデルをやっていると見ることには、画中の女性が美人と見えたことも寄与している可能性があります。そういう根拠を口にする人もいるからです。このことが何を意味するかは、一概には言えませんが、容貌の美しさに関するコンプレックスが存在する可能性はあるでしょう。これと、上述の自己露出的傾向は矛盾しません。ただ自己露出傾向は潜在的であると思われます。

カード 9GF の物語 [11" - 1'46"]

この女性は何か悪いことをして、そこからパッと立ち去ってるところを、この女性が、まったく赤の他人じゃないと思いますけど、うーん、関係ないのかな、友達程度かな、で、ちょうどここ……木の上に登っているように見えるんですけどね、この人が。ここで座って、ただぼーっとして何かをしていて、血相変えて走ってるところを出



くわした、そういう場面に見えます。この人は別にそれを、それについてこの人に何かを言う訳でもなく、他人にこうだったと言うわけでもなく、別にそっとしておくんですけど、でも、それでも、その事件が大きくなって、で、結局、この人がそういう犯人として捕まってしまうっていう。…… 何か犯罪を？ そうですね、やっぱり何か犯罪を、殺したのかな、誰かを。…… この人は自分の胸にしまっておく。はい。

\*

要約：“女性が何か悪いこと（殺人 (Harm)) をして、現場を立ち去るために血相を変えて走っている (Conc) のに、木に登ってぼーとしていた女性が出くわした (Pas-F [H. Sk])。この女性は、このこと（殺人事件）について本人になにかを言いもしないし、他人に話すこともなく、そっとしておく (Conc) が、事件を起こした女性は、犯人として捕まる (Con/Coer [Cont. Coer])。 ”

\*

語り手が、木の側にいて目撃する女性の方により強く同一化しているのは明らかですね。語り手はその女性になっているわけで、その女性に付与された気持ちや振る舞いはすべて語り手自身の一部を表しているとみなされます。まずこういう基本的な前提から何が言えるかをみていきましょう。

木の側の女性は、他方の女性の悪い行為をたまたま目撃するのですが、それを人に伝えることもなく、自分ひとりの胸の内にしまっておきます。ここから、語り手について、他人の秘密を覗き見てしまっても、秘密を秘密として保持し、その人の不利になるようなことはしない人であるということができそうです。そして同じような解釈が、カード5の物語の母親の振る舞いからも導き出せることに気づかされます。

しかしこのようにいうだけでは、この物語に含まれるものを、汲みつくしたとは言えません。もう少し深く分析・解釈する必要があります。

まずこの物語に含まれる関係相をチェックしましょう。木の側の女性が他方の女性の悪い行為を目撃するという部分は、関係相のチェックリストの Pas-F [ i Disc. n] に該当し、見たことを人に伝えることもなく、自分ひとりの胸の内にしまっておくという部分は、Conc [ ii, Conc] に該当します。他方の女性が殺人を犯したという部分は、Harm [ i Harm] としてチェックされます。

さて、木の側の女性が他方の女性の悪い行為を見てしまうのは偶然のこととされていますが、それは言うなれば意図せざるスパイ行為です。そこに語り手の悪意を含んだ暴露の欲求を読み取ることが可能です。そして、わざわざ、見たことを他人に伝えないとすることに、ばらしたい欲求を読み取ることができます。さらに、他方の女性が殺人を犯して逃げるとされていることは、潜在的であれ、語り手自身に強い攻撃・破壊衝動が存在するとみなせません。

このように、この物語は、最初に述べたように、善意の人を表わすのではなく、語り手の相当激しい敵意に満ちた内界の動きを伝えるものとみなされうのです。

すでに気づかれていることですが、上に述べた事柄は、すでにこれまでの物語の分析・解釈においても示唆されていました。このように、複数の異なる物語の個別的な分析・解釈が同じものを浮き彫りにすることは、その分析・解釈の正しさを証するものだと言ってよいでしょう。

#### カード10の物語 [10" - 1'47"]

この2人が夫婦で、で、この男性が、別れちゃうシーンだと思うんです。別れる前、前日。さみしい、さみしいっていう表情をしてるようにみえるんですけど、何で離れちゃうのかなあ。何か理由があって……どっか行かなければならないっていうふうで、離れ離れになる前日に、別れを惜しんでいるっていうか、そんなふうに見えます。でも数年たって、また帰ってくる、という。…… どんな理由で？ 何か、仕事、この人が船乗りか何かで、そういう仕事の理由で、別に悪い理由じゃなくて、やむを得ずしなければならないっていう、そういうような理由で離れ離れになっちゃう。いくつぐらい？ 40から45ぐらい。はい。

\*

要約：“夫婦で、男性が何か理由があってどこかに行かねばならなくなり、前日に別れを惜しんでいる (Sep/Los [Sep. Los])。 (船乗りか何か仕事のために離れ離れになるのであって、「悪い理由」からではない。)”

\*

夫婦の別離の場面とする、ごくふつうの絵解きです。チェック表では、Sep/Los [ Sep] に該当します。夫が家を離れる理由も、仕事であって、特別なものではありません。この物語からは、語り手は、男女の間の信頼と愛情の関係を信じることができ、それに対し特別な懐疑心はもっていないと言えるでしょう。ただ、離れる理由が「別に悪い理由じゃなくって」と、はじめから否定形で言っていることが、注目されます(形式面のチェック表の12に記入)。このようなことは、すでに別のカードでも認められ、語り手に特徴的なこととみなしてもよいでしょう。ここでの「悪い理由」は明らかではありませんが、これまでの物語から、一方が他方を捨てるなどの事態も考えられます。そのような事態に対する恐れが表われているのかもしれない。

カード11の物語 [18" - 1'30"]

何か戦争の場面に見えますね。ここに人がわーっと、原爆か何かみたいだね、落ちて、それを、頭抱えて、数人で逃げてるような感じがします。でも結局、この人たちは、亡くなってしまうのでー、こっちの方、火が噴いているように見えるんですけど、焼かれて死んじゃう。ここらへんが火ね。はい……そんなところ。

\*

要約：“戦争の場面で、原爆かなにか落ちてきて (Harm)、数人が頭を抱えて逃げている。結局その人たちは火に焼かれて死んでしまう(Neg-F [S-des])。 ”

\*

「逃げている」とありますが、身を隠すためではないので、Concには登録しません。

非常に悲惨な、否、悲惨すぎる状況が描写されているというのが第一印象です。敵の攻撃によって人々が死ぬということから、チェック表の Harm [ i Harm] に記入されえますが、それだけでは十分にこの物語の特色を表わせません。このカードでは、人や動物がなんらかの危難に遭っているという物語が作られることは多いのですが、原爆が落ちて、人々が焼かれて死ぬという絵解きはまずありません。そもそも戦争を連想することがまれです。戦争は人災で、原爆も人工物です。このカードの絵はまさに人間界や人工物から遠い、自然の世界を描いています。人や動物が遭遇する危難も、自然がもたらすものです。たとえば竜のような怪物が襲ってくるか、崖が崩れるとか、断崖絶壁の難所を通り抜けなければならないとか。こうした危難が悲惨な結果をもたらすこともあります。この物語の悲惨さは、それら以上です。語り手は、もちろんそういう悲惨な状況を恐れているのですが、すべてのものを破壊し尽くす原爆の連想は、自らの内に凄まじい破壊衝動(迫害対象)が存在してこそそのものと言わざるをえないでしょう。

カード12Fの物語 [14" - 1'28"]

何かピカソか何かそういう人の、ちょっと変わった表現をする人の絵画ですね。そんなふうに見えます。何か、これ、これが死神か何か、そういうふうを表現した絵じゃないですか……そんなところ。……死神が右で、この人は？ 女性なんですけど、女性に、やっぱ死神がついて……この人は病気ですよね。そういうところを表現した誰かの有名な人の絵です。

\*

要約：“ピカソのような、変わった表現をする人による死神を表現した絵 (Expo [Exp])。(病気の人に死神がついているところ (Con/Coer [Cont. Coer], Harm) を表現した有名な人の絵。)”

\*

カードの絵を絵画作品としているので、形式面のチェック表の16に記入されます。カードの絵を絵画作品とすることの意味についてはすでに第3章第2節で考察を試みましたが、改めて検討してみましょう。「変わった表現をする人の絵」と言っていることから、語り手には、絵が現実の人間関係にはありえない位置関係やその他のものを表わしていると思え、特別な意図をもって描かれた絵画作品としたようです。したがって、まず語り手の現実性や常識性が絵を絵画作品とさせる要因とみなせません。ところで、これは同時に、作者の意図を問題にすることでもあります。語り手自身が、絵画制作の経験があるか、あるいは、一般に創作というものに関心があるか、あるいはもっと一般的に、人の意図をあれこれ忖度(そんたく)しがちな人であるか、という推測が働きます。さらに、絵画作品であるということは、それなりの評価を得て、人の目にさらされるもの、あるいは、人の目にさらされるに

耐えるだけの評価を得たものであることを意味し、そこに、語り手の評価や自己顕示の精神を推測することが可能です。TAT では、絵の状況に入り込んで、それぞれの人になることが要請されているのに、語り手は、その要請を忘れ、評価に転じてしまっているのです。もともと、評価的態度が優勢であること、また、評価は当然自分にも及び、自己顕示ないし自己隠蔽の傾向に影響することが推測されるわけです。

さて、絵画作品とされたことで、本来の絵解きはきわめて貧弱ですが、ないわけではありません。病気の人に死神がついているということで、関係相のチェック表の Harm [ i Harm] が該当するでしょう。この関係相はこれまでもしばしば認められているので、語り手のかなり明白な特徴を表わしているだろうという推測が強化されます。

#### カード 13MF の物語 [12" - 1'07"]

この男女は不倫で、不倫の恋をして、これは一夜を共にした朝。で、それからこの人が出勤するところ。……でも別に何も起きずに、こういうことをたびたび重ねるんじゃないかな。この人の、手をこうやってるのは、何っというのかなあ、ああ眠たい、これから会社に行くぞっていう、そんな感じがします。そんな暗いイメージじゃないです。

\*

要約：“男女は不倫の恋をしていて、一夜を共にした (Love, Uni) 朝、男性は眠たいが会社に出勤する。何も起こらずに同じことを重ねてゆく。暗いイメージではない。”

\*

男女が一夜を明かして、翌朝男性が会社に行くという内容で、関係相のチェック表では、Love [ iv Love] に該当させられます。この種の物語はありふれたものであり、さらに、語り手に固有の特徴的なディテイルもほとんどありません。不倫の関係とするのも、しばしばあることです。この物語から語り手について言えることは、異性愛についての特別な抑圧的傾向はないというぐらいのことでしょう。

最後の「そんなに暗いイメージじゃないです」という、語り手に特徴的な、はじめから否定形で語ることとして、形式面のチェック表 12 に記入されますが、「暗いイメージ」がどんな状況を表わすのかわかりません。しかしこれまでの物語から、男女関係の見捨てる、見捨てないといった葛藤である可能性はあります。

#### カード 14 の物語 [7" - 47"]

何か屋根裏かどっかみたいなところから、狭いちっちゃな部屋から、朝この男性が起きて、それから扉を開いて、ああ朝だ！って。絵は暗いですけど、朝を見て、気分爽快で明るい感じです。以上ですか。はい。

\*

要約は不要でしょう。関係相というほどのものも認められません。

\*

朝起き抜けに、外の晴天を見て、今日も一日がんばるぞ、と思っているとする、ごく単純な絵解きです。別の人物が導入されることもなく、チェック表の [ N-R] に記入されます。しばしば見られる絵解きであり、問題を含んでいるとは言えませんが、少なくとも、複雑で内省的な心性は感じさせません。ただ、人物の居る部屋が、屋根裏のような、狭い小さな部屋とされていることに、語り手の若干の閉塞感が感じ取れなくもありません。

#### カード 15 の物語 [6" - 53"]

この男性は何か犯罪を犯して……何か死刑台か何かに立たされているような。で、罪を、何ていうのかな、罪を反省してるんですけど、もう手遅れで、死刑にされる、という感じ。周りのものは、その人の？ 私は何かお墓に見えたんですけど。だから、この人は死んで、死刑になって、地獄みたいなのに落ちちゃう。お墓に立ってる？ お墓のところ。実際にお墓にいる？ じゃなくて、実際じゃなくて、お墓が、みんなこうお墓に見えるんですけど、そういう所に、今から死刑を宣告されて、死刑にされる前でこういう所にこの人が行くだっていう、空想みたいなもの。この人のね、なるほど。男の人、女の人？ 男の人です。どんな犯罪？ 人を殺した。

\*

要約：“男性は犯罪（殺人（Harm））を犯して死刑台に立たされ、罪を反省しているが（Expo [Exp]）、もう手遅れで、死刑に処され（Con/Coer [Cont. Coer], Harm）、地獄に落ちてしまう（Neg-F [S-des]）。（死刑にされる前、こういうところに行くのだと、墓を空想している。）”

\*

罪（殺人）を犯した男が、反省しているが、手遅れで、死刑を宣告され、これから行く地獄を空想している、と要約される物語です。まず関係相をチェックしてみましょう。死刑を宣告され、これから死刑に処されるということは、それぞれ Con/Coer [ i Cont. n] と Harm [ i Harm] に該当します。男が殺人を犯したということは、Harm [ i Harm] に該当します。これらのチェックからしてすでに、語り手の破壊的空想の傾向が印象づけられます。

この絵から、罪人の悔悟や刑罰が連想されるのはふつうのことですが、「死刑の宣告」は、しばしばあることではありません。これは、過酷な超自我的人物像の存在ゆえに生じた連想でしょう。「罪を反省しているんですけど、もう手遅れ」という部分にも仮借ない超自我像が感じ取られます。

犯した罪は人殺しで、これはこの絵の物語ではふつうのことですが、語り手のこれまでの物語に見られた殺害空想と一致しています。

#### カード 17GF の物語 [8" - 1'21"]

この女性がこの人たちに追われて、で、こういう、橋に見えるんですけどね、こういう所に、追いやられ、逃げてるうちに、ここに追いやられて、この人たちが上に上がってくる。どうしようって、上から見てるところです。で、下が川になって、でもこの人は飛び降りずに、こっちの方に逃げていく、どこまでもどこまでも逃げていく。

なぜ追われているの？ これも何か戦争で、で、たまたまこの人が、こう、いたもんだから、敵が押しかけてくる。男の人ですか、女の人ですか？ 上の人ですか、女の人に見えます、若い女性。いいですか。はい。

\*

要約：“（若い）女性（橋の上）がこの人たち（橋の下の男性たち）に追われて（Harm）、逃げている（Conc）うちに、ここに追いやられた。男たちが上がってくるのを見て、どうしようと思っている。川には飛び降りず、こっちの方にどこまでもどこまでも逃げて行く。（戦争で、この女性がたまたまいたから敵が押しかけてきた。）”

\*

この物語に認められる関係相は、チェック表の Harm [ i Harm] に該当します。しかし、この物語は、このようなチェックだけでは捉えきれない問題を含んでいるとみなされます。なぜなら、これはきわめて特異な、語り手に固有の物語と言ってよいものだからです。橋の上の人物が逃げているとされることはありますが、たいていは過酷な強制労働から逃げているのであって、橋の下の男たちに追跡されて逃げているわけではありません。この物語では、男たちはまさしく迫害者であり、下から上がってくる彼らに今にも捕らえられそうな女性の切迫感がこちらに伝わってきます。すでに私たちは別のカードの物語で語り手の厳しい懲罰者像ないし迫害者像の存在を推測してきましたが、この物語はそうした仮説をはっきり支持するものです。語り手の迫害不安は、尋常なレベルをはるかに越えて強いのではないかと思わざるをえません。

#### カード 18GF の物語

[このカード以降の TAT 反応は録音不良のため、検査時のメモをもとに記しました。]

この2人は親子で、この男の子かな、が病気で、で、今、息を引き取って、で、母親が、悲しんでるところ。いくつぐらいの男の子ですか、息子さん。15、6歳。急な病気かそれとも。今まで病気だった、白血病とか。

\*

要約は不要でしょう。息子が死んだということは、Sep/Los [Sep. Los] に該当します。

\*

母親が息子を病気で失うという悲劇的な物語で、関係相のチェック表の Sep/Los [ Sep] に該当します。一方の人物が他方を介抱しているという見方は通常のものですが、介抱されている人の死への言及はそうあることで

はありません。語り手は、詳しくは表現していませんが、息子に先立たれた母親の悲しみにも、白血病で若死にする息子の哀れさにも思いを致していることでしょう。

ところで、このような状況が語られる場合、親への受動的攻撃性が仮定される場合があります。子としての自分の死によって親を悲しませることに、一種の攻撃性を見て取ることは可能です。語り手にも、そうした親への攻撃性が存在するのかもしれませんが。2人の人物を、母親と娘とされることが多いこの絵で、母親と息子としているのは、母親と娘では、自分と母親との関係が連想されるので、それを回避したということかもしれません。ただ私は、それよりは、語り手が、容赦なく人を襲い消滅させる死というものへ囚われていることを強く感じます。

#### カード 19 の物語

これが機関車か何かかなあ……そしたら、ここ雪のところを走りにくそうに走ってる……そのくらい。…… 機関車が走りにくそうに走ってる？ はい。これ、雪が積もっちゃって……状況が悪いときに、一生懸命走ってる。

\*

これも要約不要です。関係相と認められるものも含んでいません。(しいていえば、Expo [Exp] でしょうか。<sup>[註3]</sup>)

\*

画面中央のゲシュタルトは多くの場合家か船とみなされるので、語り手が「機関車」としているのは注意を引きます。家である場合は言うまでもなく、船である場合でも、環境の力(吹雪、嵐、荒波)に対し能動的に対処するというより、受動的に翻弄されているような趣があるものですが、この物語は若干違います。重量感と力感に溢れる機関車は、走りにくいのに一生懸命走っています。そのように認知したとき、語り手のなかに何かしらの体感が呼び起こされていたことでしょう。語り手は、悪い状況でもめげずにがんばらねばならないという、刻苦精励型の人ではないかと思われれます。なお、機関車の擬人化は感じ取られませんが、他の人物が導入されることはなく、したがって関係相のチェック表では、 [ N-R] に記入せざるをえません。

#### カード 20 の物語

夜……街灯……これが何かオウムみたいな鳥、が止まってる街灯……そんなふうに見えます。これがどっかの家から逃げ出して、夜、ここに来て迷ってる……そんな感じ。頭？ これで(人のゲシュタルトの肩の部分を目指す)、これが羽(胸・腕の部分)、口がこっち(肩口)。

\*

要約：“オウムみたいな鳥がどこかの家から逃げ出して (Sep/Los [Sep. Los], Con/Coer [Cont. Coer], Conc), 夜街灯に止まって迷っている。”

\*

たいていの人が、街灯の下に佇む人(男性)を認知するこのカードで、語り手は、その部分に人でなくオウムを認知しています。「家から逃げ出した」というところに (Sep/Los [ Sep]), オウムの擬人化と語り手のオウムへの同一化を感じ取られますが、導入された人も動物もなく、本来はチェック表の [ N-R] のみに該当します。

語り手は街灯を認知しているのになぜ人を認知しえなかったのか。この問いに対する確かな答えはありませんが、夜の街灯が自然に呼び起こす状況のイメージや情緒へのある種の縁遠さを仮定することはできます。人気のない夜の闇に灯る街灯は、それ自体孤独な存在の象徴とも言え、欠落感やそれを埋め合わせる願望を呼び覚まします。それで、何かを喪失した人や誰かを待つ人が認知されやすいのだと思われれます。

この物語でのオウムは、家から逃げ出してきて、行く当てもなく路頭に迷っています。もしこれがオウムでなく、人だったら、ふつうの絵解きです。ねぐらを失った人が認知されることはしばしばあります。ですから、語り手の情緒の世界は、多くの人とそう違わないと言うべきかもしれません。ただ、逃げ出してきたオウムの方が人間よりもっと頼りなげな存在であり、オウムに同一化してその不安感に思いを致している語り手に、無力感や自己卑小感を推測しえます。なお、家から逃げ出したとする部分には、関係相としてはチェックを控えましたが、家の束縛から逃れたいという語り手の願いが反映している可能性はありうるでしょう。

カード 12BG の物語

冬、雪が降って、雪が木に積もって、さらさらした雪で、氷が張って、水も流れなくなり、舟が、凍ったところにのぼってきて……冬の風景。また春が来て、雪が解け、川、舟が自然に流れてく。

\*

要約不要でしょう。関係相も認められません。

\*

この物語には人物は全然登場していないので、関係相はチェック表の [ N-R] に該当させざるをえません。そもそもこの絵には人がまったく描かれていない（まれに絵の一部を人や動物と誤認する人はいる）ので、人物なしの状況描写も珍しくはないのですが、人物を導入しないと物語になりにくいということもあり、多くの人が人物を導入します。また人物を導入しなくても、船や木を擬人化して物語を作る人もいますし、さらに、絵の情景全体が語り手の自己を表しているとみなされる場合もあります。こうしたことを考慮すると、この物語は、物足りないという印象を否めません。しかも、描写された情景は、一面凍りついた冬の情景です。これと反対の、花咲き、鳥歌うのどかな春の情景を見る人も少なからずいるなかで、水が凍りつき、凝固した情景を思い浮かべるのは、語り手の、まさに凍りつき、流動性を失った現在の内的状態を象徴的に表しているとみなせます。ただ、やがて春が到来し、またすべてが流動しだすという物語の結末部分には救いがあります。良い予後を示唆しているとみなせます。

2 まとめの表

以下に、記入済みの形式面のチェック表と関係相のチェック表を掲げておきます。<sup>[註4]</sup>

それらを参考にしつつ、所見をまとめます。

形式面のチェック表（事例 D）

	特 徴	カード番号	計
1	教示の確認をたびたび行う	-	0
2	絵を見ての個人的印象や感情を表現する	-	0
3	絵に描かれているものを列挙したり、純客観的に記述したりする	-	0
4	絵のなかの人物についての性格描写や評価・批判をする	-	0
5	絵から連想される自分の過去や既存の小説や映画の内容について語る	-	0
6	1つの絵に対し、2つ以上の絵解きの可能性を示すが、どれも十分に展開させない	-	0
7	時間制限はないが、初発時間や反応時間が並外れて長い	-	0
8	自発的に物語を作り上げるのが困難で、検査者の質疑などの助けを借りなければならない	-	0
9	物語が適度の詳しさと具体性を備えておらず、観念的・抽象的で内容がわかりにくい	-	0
10	不必要なディテールがあったり、繰り返しがあったりして、物語が長たらしく、まとまりがない	-	0
11	笑いが多い	-	0
12	「……ではないですね」とはじめてから否定形で語る	4, 10, 13MF	3
13	物語のどの部分が絵と対応するのかわかりにくい	-	0
14	人物への感情移入が乏しい	-	0
15	場所、時代、時間などへの言及が多い	-	0
16	絵を絵画（写真）作品とする	12F	1
17	人物に名前をつける	-	0
18	会話体や独白体で演技的に物語作りを進める	-	0
19	[その他]	-	0

関係相のチェック表 (事例 D)

関係相のカテゴリー	当該の関係相が含まれる物語のカード番号	合 計		
Expl	-	0	5	17
vs. Pas-F	3BM, 5, 6GF, 8BM, 9GF	5		
Expo	2, 8BM, 8GF, 12F, 15	5	12	
vs. Conc	5, 7GF, 8BM, 9GF <sup>*2</sup> , 17GF, 20	7		
Con/Coer	8BM, 9GF, 12F, 15, 20	5	7	8
vs. Ask/Req	4, 6GF	2		
Dec	-	0	1	
vs. Gui	7GF	1		
Spo/Sav	-	0	0	8
Prov/Ser	-	0		
vs. Harm	8BM, 9GF, 11, 12F, 15 <sup>*2</sup> , 17GF	7	8	
vs. Dep	8BM	1		
Like	1, 7GF	2	2	4
vs. Hos/Disg	-	0		
Love	6GF, 13MF	2	2	
vs. LoL		0		
Uni	7GF, 13MF		2	10
vs. Sep/Los	2, 4, 6GF, 7GF, 8BM, 10, 18GF, 20		8	
Pos-F	7GF		1	3
vs. Neg-F	11,15		2	
	1, 2, 3BM, 14, 19, 20, 12BG			7

### 3 総合所見<sup>[註4]</sup>

#### 文献

- Freud, S. 1915 Triebe und Triebchicksale. In Studienausgabe, Bd. III. S. Fischer Verlag. Frankfurt. 7 Aufl, 1989.
- Kloper, B. & Davidson, H. H. 1962 The Rorschach Technique: an introductory manual. Harcourt, Brace & World. [河合隼雄訳 (1964) 『ロールシャッハ・テクニク入門』ダイヤモンド社]
- Murray, H. A. 1943 Thematic Apperception Test manual. Cambridge: Harvard University Press.
- Rapaport, D., Gill, M. M. & Schafer, R. 1968 Diagnostic psychological testing (Revised ed.). New York: International Universities Press.
- Rorschach, H. 1921 Psychodiagnostik. Verlag Hans Huber. Bern. [鈴木睦夫訳 (1998) 『新・完訳 精神診断学』金子書房]

#### 註

はじめに

- 1 : 遺稿の準備資料においては、10例 (男女各5例) を構想していたことが確認されている。ある程度の体裁が整っている4例を採用した。
- 2 : 新たに「構成の一覧」を作成して挿入。

第1部  
第1章

## 第2章

### 第3章

- 1：遺稿では、第1節の内容のみで第3章が構成されていた。しかしながら、きわめて短い文章であったため、次章の「形式面の解釈」を第2節として加えて、第3章を再構成した。第1節と第2節の項目は一致していないものもある。第1節の末尾に掲載した表は、第3部のために準備していたと思われる資料を用いた（内容としては第1節の項目に対応している）。なお、第3章の表題は、「物語の具体的な現れ方」であったが、「物語作りの形式面」に改めた。
- 2：遺稿では「形式面」という表題であったが、「形式面の諸特徴」と一部補足した。
- 3：表題が存在しなかったため、新設。
- 4：遺稿では「自発性」という表題であったが、「自発性に欠けることについて」と一部補足した。
- 5：遺稿では「細部の具体性」という表題であったが、「細部の具体性が乏しいことについて」と一部補足した。
- 6：表題が存在しなかったため、新設。
- 7：遺稿における表題の後ろに「ことについて」と一部補足した。
- 8：遺稿には、なんら記述なし。

### 第4章

- 1：遺稿では「物語の人物に託された思い、感情、態度、行動などは、すべて語り手自身のものです。」という表題であった。

### 第5章

- 1：表題が存在しなかったため、新設。なお、以降の節の番号がなかったため追加した（本章内）。
- 2：表題が存在しなかったため、新設。
- 3：表題のみ掲げられており、本文は存在していない。しかしながら、「絵解き」でない」と覚え書きらしきものが記されていた。

### 第6章

- 1：遺稿では「優れて内容的なテストである。ロールシャッハ・テストが内容より形式重視になったのと対照的に」と記されていたものを修正した。
- 2：3つ前の段落に記されていたが、前後の内容を考慮してこの位置に移動した。
- 3：この位置に、「問診する医師とレントゲン技師：検査技師が問診医の言に左右されるようでは頼りない」と覚え書きらしきものが記されていた。

## 第2部

### 第7章

- 1：遺稿における関係相の体系や記号は、第8章以前と第9章以降との間で、いくつかの点で異なっていた。本稿では、本章と第8章で示された内容を基準にして表記していく。
- 2：遺稿には、なんら記述なし。

### 第8章

- 1：表題が存在しなかったため、新設。なお、以降の節についても同様（本章内）。
- 2：遺稿における表題に「カテゴリー」の表記を補った。
- 3：表題が存在しなかったため、新設。
- 4：遺稿における表題に「カテゴリー」の表記を補い、副題を追加した。
- 5：遺稿には記述がなかったが、本章における関係相の一覧表と対応させるために、新設した（本文なし）。

### 第9章

- 1：表題が存在しなかったため、新設。
- 2：実際には、第7章と第8章で登場した記号（関係相）のすべてについては、とりあげられていない。意味の考察がなされていない箇所もある。また、記号の表記方法は、第7章と第8章で示されたものに統一したが、括弧内にもともの表記を残すことにした。
- 3：節が設定されていなかったため、新設。以降の節についても同様（本章内）。
- 4：遺稿には、なんら記述なし。
- 5：第7章と第8章におけるUniの定義よりも狭いものとなっている。
- 6：表題に記号を補った。



7 : 例示に番号を補った。

### 第3部

1 : 「はじめに」の註1を参照のこと。

2 : 記号の表記方法は、第7章と第8章で示されたものに統一したが、括弧内にもととの表記を残すことにした。また、研究室等に残っていた紙の資料(遺稿の準備資料)の中から、「形式面のチェック表」と「各カードにおける関係相の記号化」が見つかったので、それらを付録として掲載することにした(いずれも著者による手書きの草稿である)。後者については、TAT 所見を書くための用紙を転用して書かれたものと推測される。

### 第10章

1 : 遺稿の準備資料における情報をもとに作成。

2 : カード名の横に示した [ ] 内の数字は、初発時間および反応時間を表す。反応における 内のことばは、テストターの発言を表す。本章以降も同様。

3 : 他の箇所との一貫性を確保する観点からは Exp よりも Disc のほうが適切と考えられるが、ここではそのままの状態を残した。

### 第11章

1 : 遺稿の準備資料における情報をもとに作成。

2 : 遺稿に基づいて、この事例においてのみ「19 (物語の恣意的な展開)」を設けた。

3 : 遺稿の準備資料における情報(手書きの表)も考慮して追加。

### 第12章

1 : 遺稿の準備資料における情報をもとに作成。

2 : 遺稿の準備資料における情報(手書きの表)も考慮して追加。

3 : 遺稿の準備資料における情報(手書きの表)では、Harm ではなく、Host が記述されていた。しかしながら、そこには波線やチェックマークも付されており、なんらかの検討課題が含まれていることが示唆される。

### 第13章

1 : 遺稿の準備資料における情報をもとに作成。

2 : 「cf. 3BM 活動強迫」との覚え書きらしきものが記されていた。

3 : 「しいていえば」の意を受けて、集計上は Expo を算入しないことにした。

4 : 遺稿の中に「分析・解釈シート」および「総合所見」の文章は存在せず、遺稿の準備資料においても該当する内容を見つかることが出来なかった。

事例 A

特徴	カード場番号	計
1 教示の確認をたびたび行う。		
2 絵を見ての個人的印象や感情を表現する。		
3 絵に描かれているものを列挙したり、純客観的に記述したりする。		
4 絵のなかの人物についての性格描写や評価・批判をする。		
5 絵から連想される自分の過去の経験や既存の小説や映画の内容について語る。		
6 1つの絵に対し、2つ以上の絵解きの可能性を示すが、どれも十分に展開させない。		
7 時間制限はないが、初発時間や反応時間が並外れて長い。		
8 自発的に物語を作り上げるのが困難で、検査者の質疑などの助けを借りなければならぬ。		
9 物語が適度の詳しさと具体性を備えておらず、観念的・抽象的で内容がわかりにくい。		
10 不必要なディテイルがあったり、繰り返しがあったりして、物語が長たらく、まとまりがない。		
11 笑いが多い		
12 「・・・ではない」とはじめてから否定形で語る。		
13 物語のどの部分が絵と対応するのかわかりにくい。		
14 人物への感情移入が乏しい。		
15 場所、時代、時間などへの言及が多い。		
16 絵を絵画(写真)作品とする。		
17 人物に名前をつける。		
18 会話体や独白体で演技的に物語作りを進める。		

付録

T A T 所見

被検査者	事例 A	報告者
1.	Cont. Coer / Exp / Sep. Los / Uni	
2	Love / Exp / Sep. Los	
3BM	Cont. Coer / Sep. Los / Sep. Los	
4	Love / Sk. Sk / Sep. Los	
5.	Cont. Coer / H. Sk	
6BM	H. Sk / Sp. Saw	
7BM	Dep / Harm / Neut	
8BM	Sp. <del>Saw</del> / Exp	
9BM	Cont. Coer / Neut	
10.	Cont. Coer / Conc / Love / Sep. Los	
11.	Exp / <del>S</del> pre Const. Opt	
12M	Host / Harm / Conc	
13MF	Sp. <del>Saw</del> / H. Sk	
14	Exp	
15	Sep. Los / Harm / S-des-Deat. Res	
19BM	Exp / Uni	
18BM	Harm / Cont. Coer / Dep / Exp	
19.	Crui / Exp / Uni	
20	Sk. Sk / S-des-Deat. Res	
96F	Host / Harm / Sk. Sk / Conc	
125G	Exp. / <del>S</del> pre Const. Opt	

R: 16

事例 B

特 徴	カード場番号	計
1 教示の確認をたびたび行う。		
2 絵を見ての個人的印象や感情を表現する。		
3 絵に描かれているものを列挙したり、純客観的に記述したりする。		
4 絵のなかの人物についての性格描写や評価・批判をする。		
5 絵から連想される自分の過去の経験や既存の小説や映画の内容について語る。		
6 1つの絵に対し、2つ以上の絵解きの可能性を示すが、どれも十分に展開させない。	4	
7 時間制限はないが、初発時間や反応時間が並外れて長い。		
8 自発的に物語を作り上げるのが困難で、検査者の質問などの助けを借りなければならぬ。		
9 物語が適度の詳しさと具体性を備えておらず、観念的・抽象的で内容がわかりにくい。		
10 不必要なディテールがあったり、繰り返しがあったりして、物語が長たしく、まとまりがない。		
11 笑いが多い		
12 「・・・ではない」とはじめてから否定形で語る。		
13 物語のどの部分が絵と対応するのかわかりにくい。	95, 96-	
14 人物への感情移入が乏しい。		
15 場所、時代、時間などへの言及が多い。		
16 絵を絵画(写真) 作品とする。		
17 人物に名前をつける。		
18 会話体や独白体で演技的に物語作りを進める。		
19 物語の進め方(内容)	1, 38M, 4	

T A T 所見

被検査者 事例 B

報告者 \_\_\_\_\_

- 1 Sep. Los / Dep / S-des Dent. Pes
- 2 IX: Oeth
- 3BM Host / Sep. Los / S-des / H. Sk / S-pre Const. Opt
- 4 Exp / ~~Const. Opt~~ / Neut
- 5 Conc / H. Sk / ~~Sep. Los~~ / S-des Dent. Pes
- 6GF Uni / Host / Sep. Los / Spo. Saw / Sep - Los
- 7GF Sep / Los / Neut
- 8GF Exp. / Dep / Host / Sep. Los / S-pre Const. Opt
- 8BM Harm / Exp / S-pre Const. Opt
- 9GF Uni / Sep. Los / Cont. Coer / Leave / Harm / Uni / S-des Dest. Pes
- 10 Scho / Uni / Spo. Saw / Sep. Los / Spl. Saw / S-pre Const. Opt
- 11 Cont. Coer / Spo. Saw / Spl. Saw / S-pre Const. Opt
- 12F Cont. Coer / Harm / Exp / S. Sk / S-pre Const. Opt
- 13GF Harm / Conc / Exp / S-pre Const. Opt
- 14 Exp / Host / S-pre Const. Opt
- 15 Exp / ~~S-des~~ / Spo. Saw
- 17GF Harm / Spo. Saw / Uni / S-pre Const. Opt
- 18GF Sep. Los / Spo. Saw / Exp / Host / Harm / Conc
- 19 Spo. Saw / Cont. Coer / Conc / S. Sk / Conc / Exp / Harm / S-pre Const. Opt
- 20 Uni / Sep. Los / ~~S-des~~ / Exp
- 12BF Sep. Los / ~~S-des~~ / Exp / S-pre Const. Opt
- 16 Sep. Los / Spo. Saw / Uni / S-pre Const. Opt

R: tk

事例 C

特 徴	カード場番号	計
1 教示の確認をたびたび行う。		
2 絵を見ての個人的印象や感情を表現する。		
3 絵に描かれているものを列挙したり、純客観的に記述したりする。		
4 絵のなかの人物についての性格描写や評価・批判をする。		
5 絵から連想される自分の過去の経験や既存の小説や映画の内容について語る。		
6 1つの絵に対し、2つ以上の絵解きの可能性を示すが、どれも十分に展開させない。	1, 3BM	
7 時間制限はないが、初発時間や反応時間が並外れて長い。		
8 自発的に物語を作り上げるのが困難で、検査者の質疑などの助けを借りなければならぬ。		
9 物語が適度の詳しさと具体性を備えておらず、観念的・抽象的内容がわかりにくい。	4, 3BM, 4, 6GF	
10 不必要なディテイルがあったり、繰り返しがあったりして、物語が長たらく、まとまりがない。	18GF, 4	
11 笑が多い		
12 「・・・ではない」とはじめてから否定形で語る。		
13 物語のどの部分が絵と対応するのかわかりにくい。		
14 人物への感情移入が乏しい。		
15 場所、時代、時間などへの言及が多い。		
16 絵を絵画(写真)作品とする。		
17 人物に名前をつける。		
18 会話体や独白体で演技的に物語作りを進める。		

T A T 所見

被検査者 事例 C

報告者

- 1 Gwi / Exp.
  - 2 Spc. Saw / Exp / Gwi / Neut
  - 3 BM Fel
  - 4 Gwi
  5. Sep. Los / Sk. Sk / Uni
  - 6GF Dep / Sk. Sk
  - 7GF Cont. Coer / Gwi / Exp
  - 8GF Fel
  - 9GF Cont. Coer / Sep. Los / Like / Uni / Exp / ~~Exp~~ <sup>Dist. Pes</sup>
  - 10 Sep. Los / Dep / Uni
  - 11 Sep. Los / Exp / Harm / Uni
  - 12F Exp. / Cont. Coer / ~~Harm~~
  - 13MF Sep. Los / ~~Spc. Saw~~ <sup>Dist. Pes</sup>
  - 14 Sk. Sk / Spc. Saw
  - 15 Cont. Coer / Harm / Sep. Los / Spl. Sens / Sk. Sk.
  - 16GF Cont. Coer / Sep. Los / N-R
  - 18GF Spc. Saw / ~~Spc. Saw~~ <sup>Cont. Opt</sup>
  - 19 IX
  - 20 Sep. Los / Uni / ~~Spc. Saw~~ <sup>Dist. Pes</sup>
  - 3BM Spc. Saw / Exp.
  - 16 Exp.
  - 12-14 Sk. Sk. / ~~Spc. Saw~~ <sup>Dist. Pes</sup> / H. Sk
- Ri Fel

事例 D

特 徴	カード番号	計
1 指示の確認をたびたび行う。		
2 絵を見ての個人的印象や感情を表現する。		
3 絵に描かれているものを列挙したり、純客観的に記述したりする。		
4 絵のなかの人物についての性格描写や評価・批判をする。		
5 絵から連想される自分の過去の経験や既存の小説や映画の内容について語る。		
6 1つの絵に対し、2つ以上の絵解きの可能性を示すが、どれも十分に展開させない。		
7 時間制限はないが、初発時間や反応時間が並外れて長い。		
8 自発的に物語を作り上げるのが困難で、検査者の質疑などの助けを借りなければならぬ。		
9 物語が適度の詳しさと具体性を備えておらず、観念的・抽象的で内容がわかりにくい。		
10 不必要なディテイルがあったり、繰り返しがあったりして、物語が長たらく、まとまりがない。		
11 笑いが多い		
12 「・・・ではない」とはじめから否定形で語る。	00010, 124F	
13 物語のどの部分が絵と対応するのかわかりにくい。		
14 人物への感情移入が乏しい。		
15 場所、時代、時間などへの言及が多い。		
16 絵を絵画(写真)作品とする。	12F, #	
17 人物に名前をつける。		
18 会話体や独白体で演技的に物語作りを進める。		

T A T 所 見

被検査者 事例 D

報告者 \_\_\_\_\_

1. Like
2. Sep. Los / Exp / N-R
- 3 BM H. Sk
- 4 Ask. Reg / Sep. Los
5. H. Sk / Conc
- 6 GF H. Sk / Love / Ask. Reg / Sep. Los
- 7 GF Sep. Los / Conc / Like / Uni / ~~the~~ **Conc. Opt**
- 8 GF Exp
- 8 BM Harm / H. Sk / Conc / Sep. Los / **Conc. Coer / Dep**
- 9 GF Conc / Harm / H. Sk / Conc / **Conc. Coer**
10. Sep. Los
11. Harm / ~~S. des~~ **Deat. Pes**
- 12 F Exp / **Conc. Coer / Harm**
- 13 MF Love / Uni
- 14 ~~tel~~
15. Harm / Exp / **Conc. Coer / Harm / S. des Deat. Pes**
- 16 GF Harm / Conc /
- 18 GF Sep. Los.
- 19 ~~Exp~~
- 20 Sep. Los / **Conc. Coer / Conc**
- 12 GF tel

R: 16